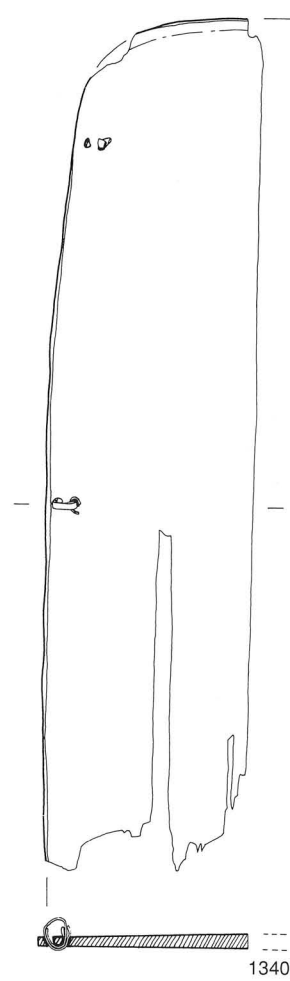
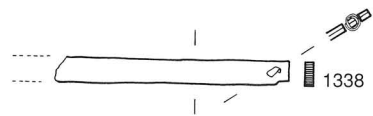
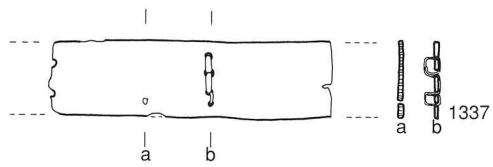
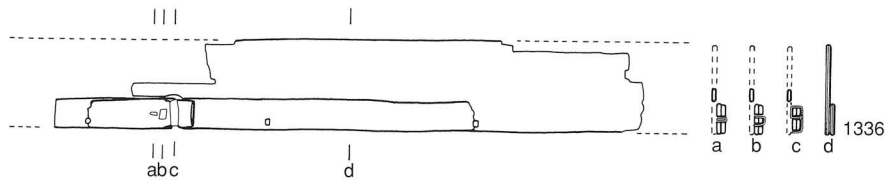
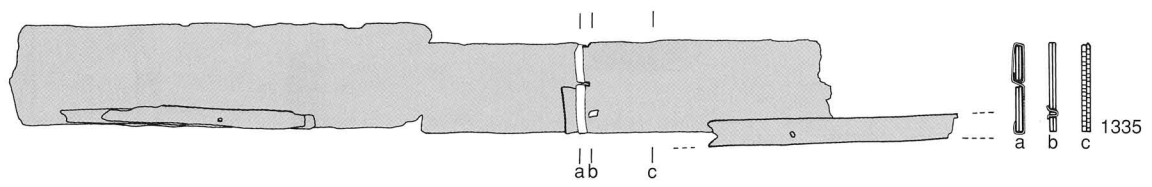
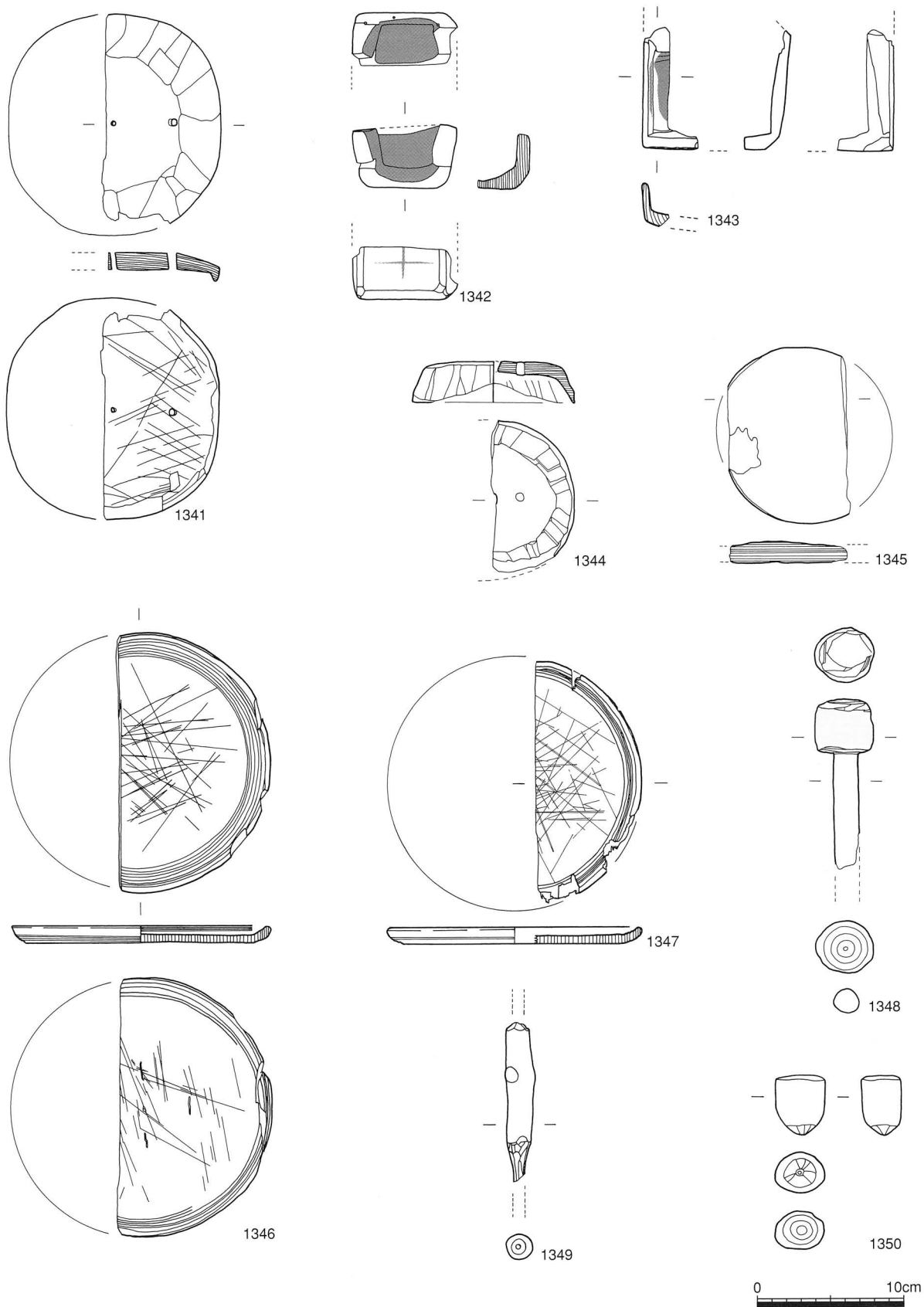


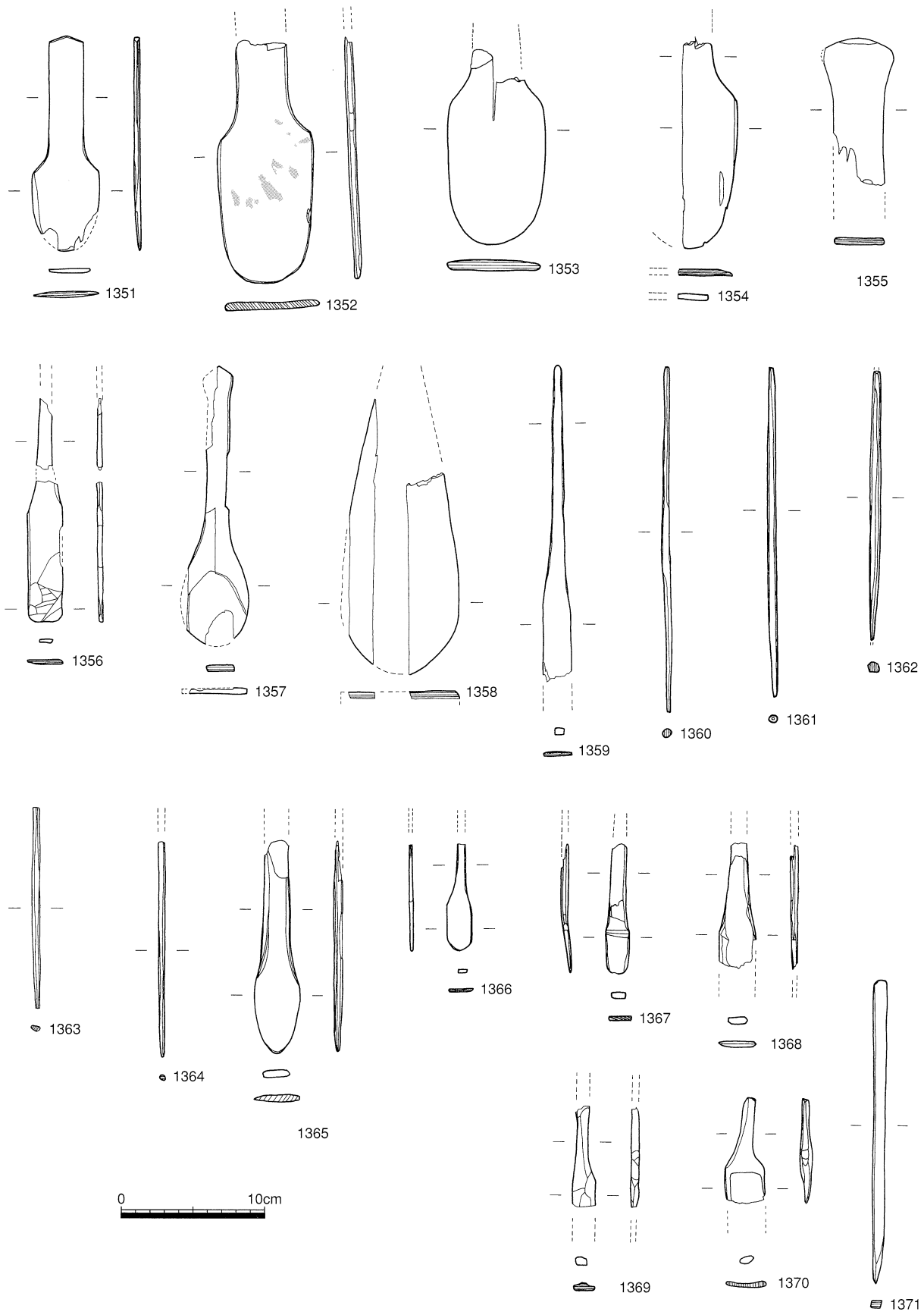
第343图 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（容器）（4）



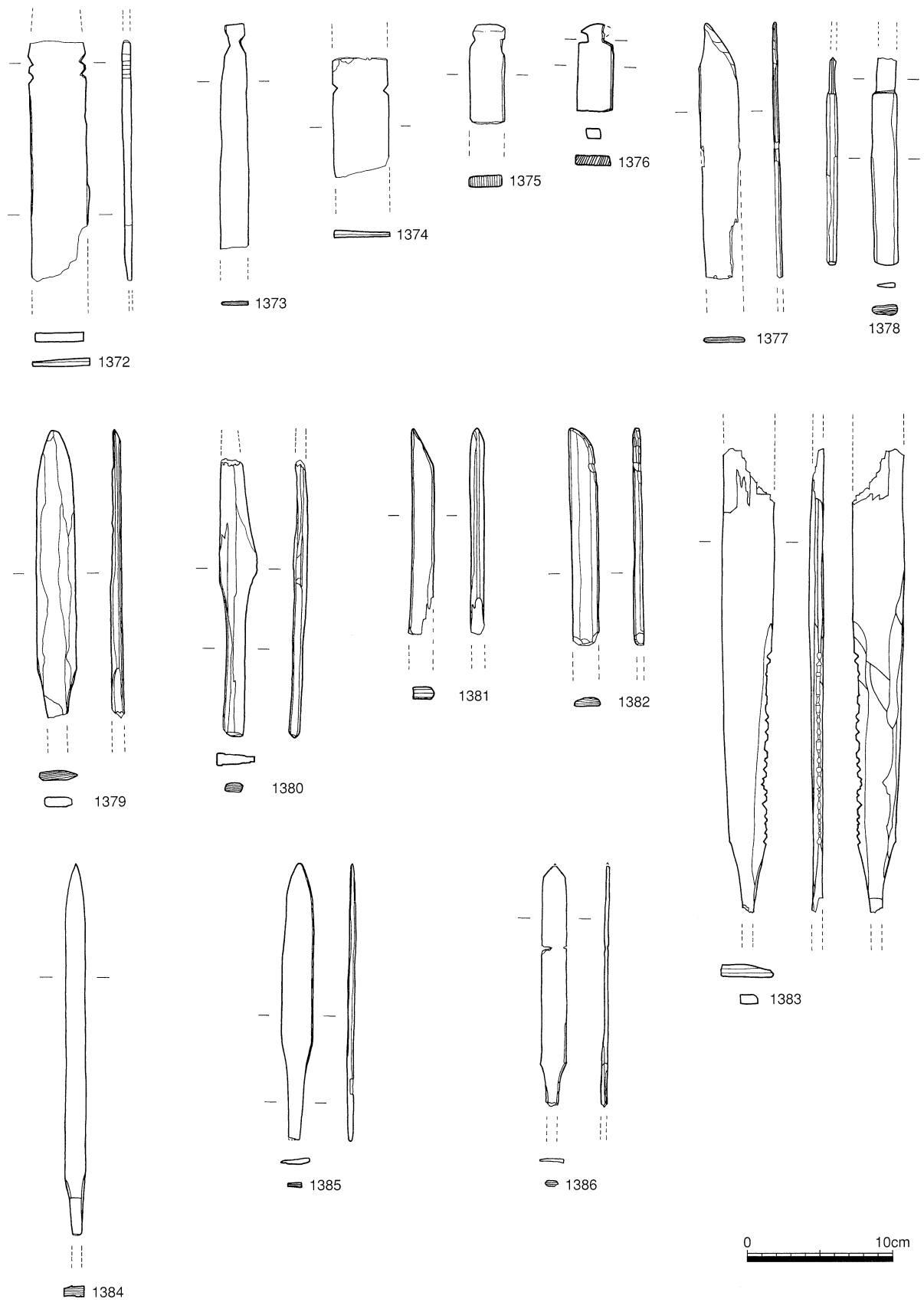
第344図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（容器）（5）



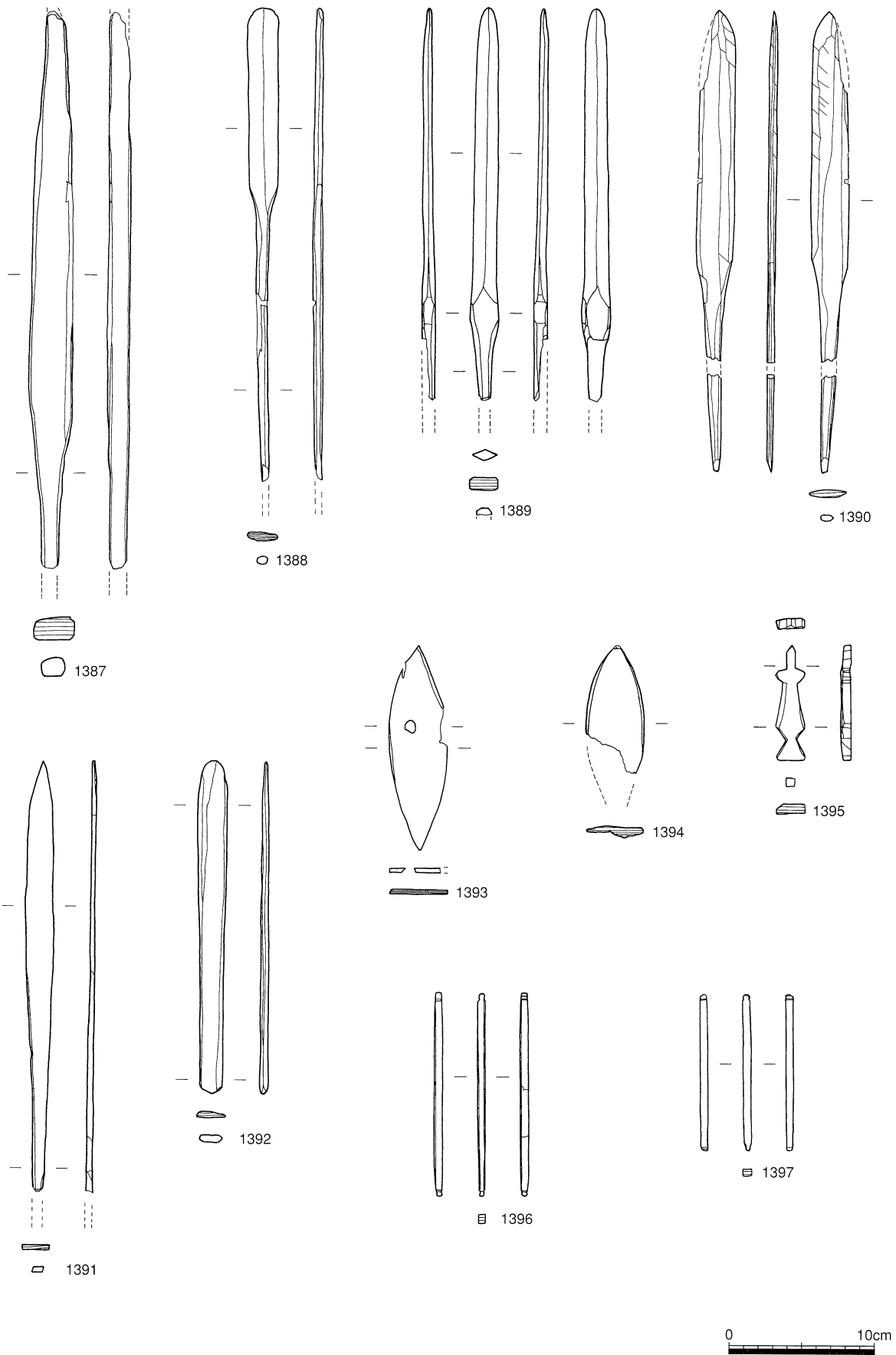
第345図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（容器）（6）



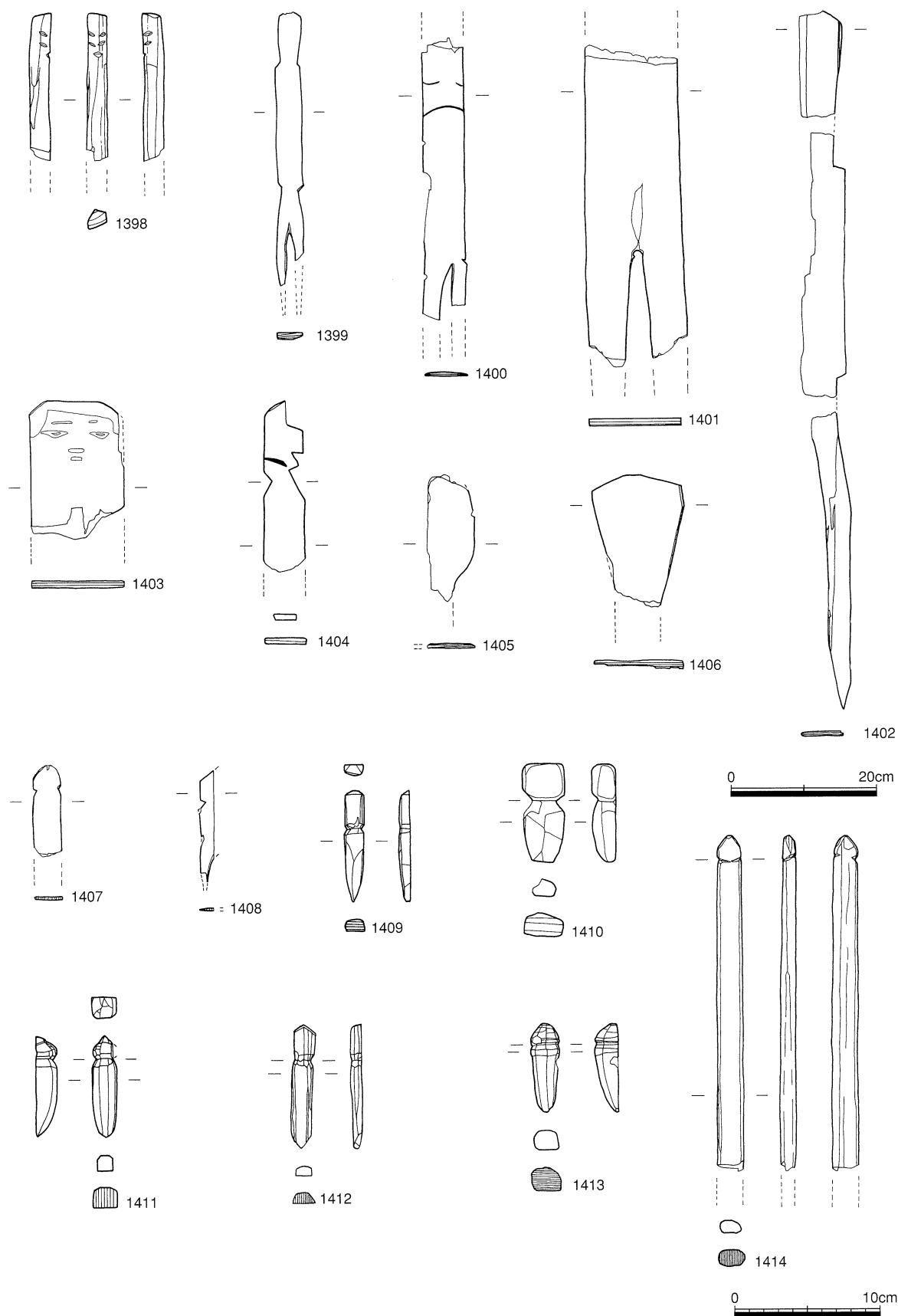
第346図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（食器具）



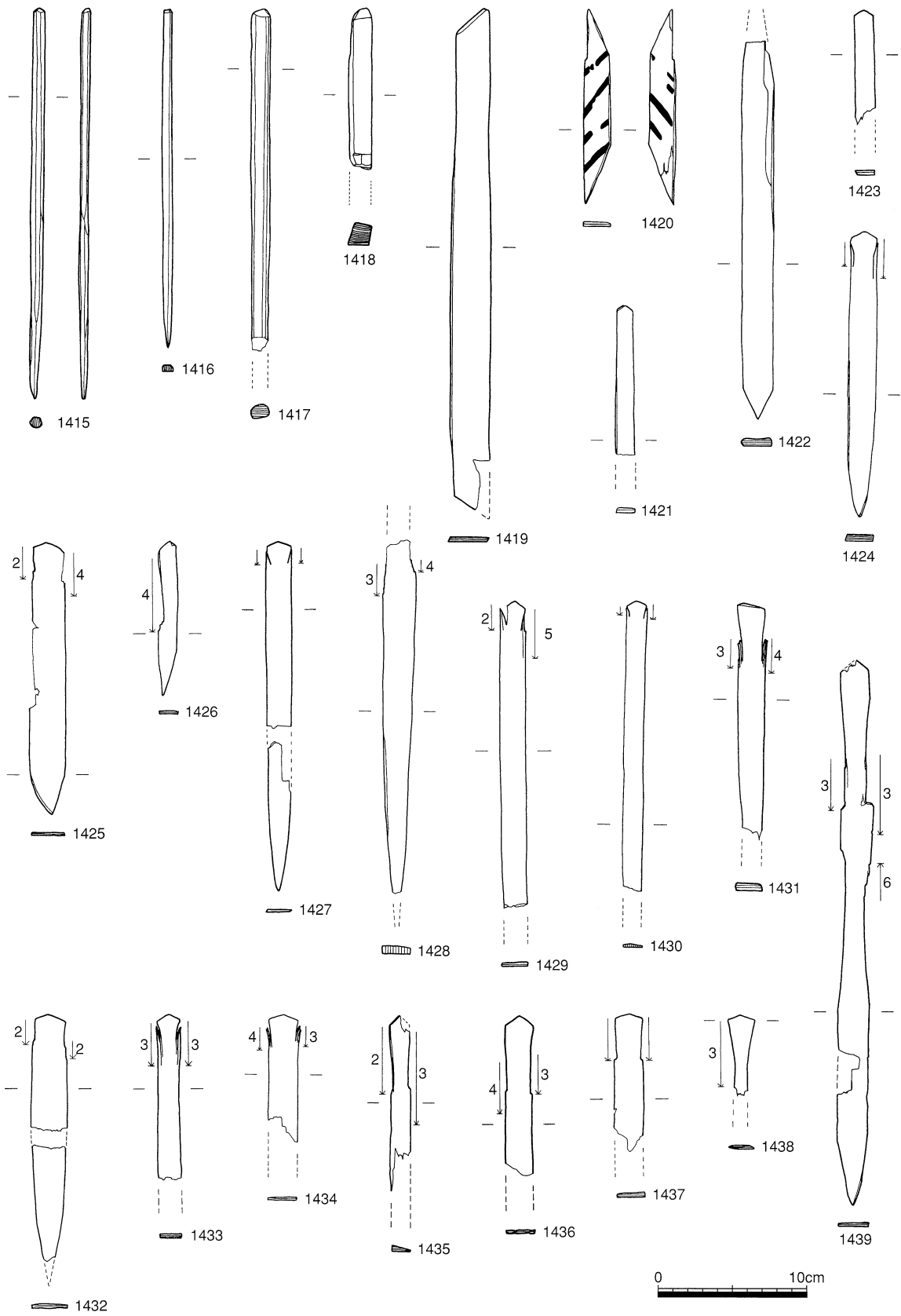
第347図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（文房具・祭祀具）



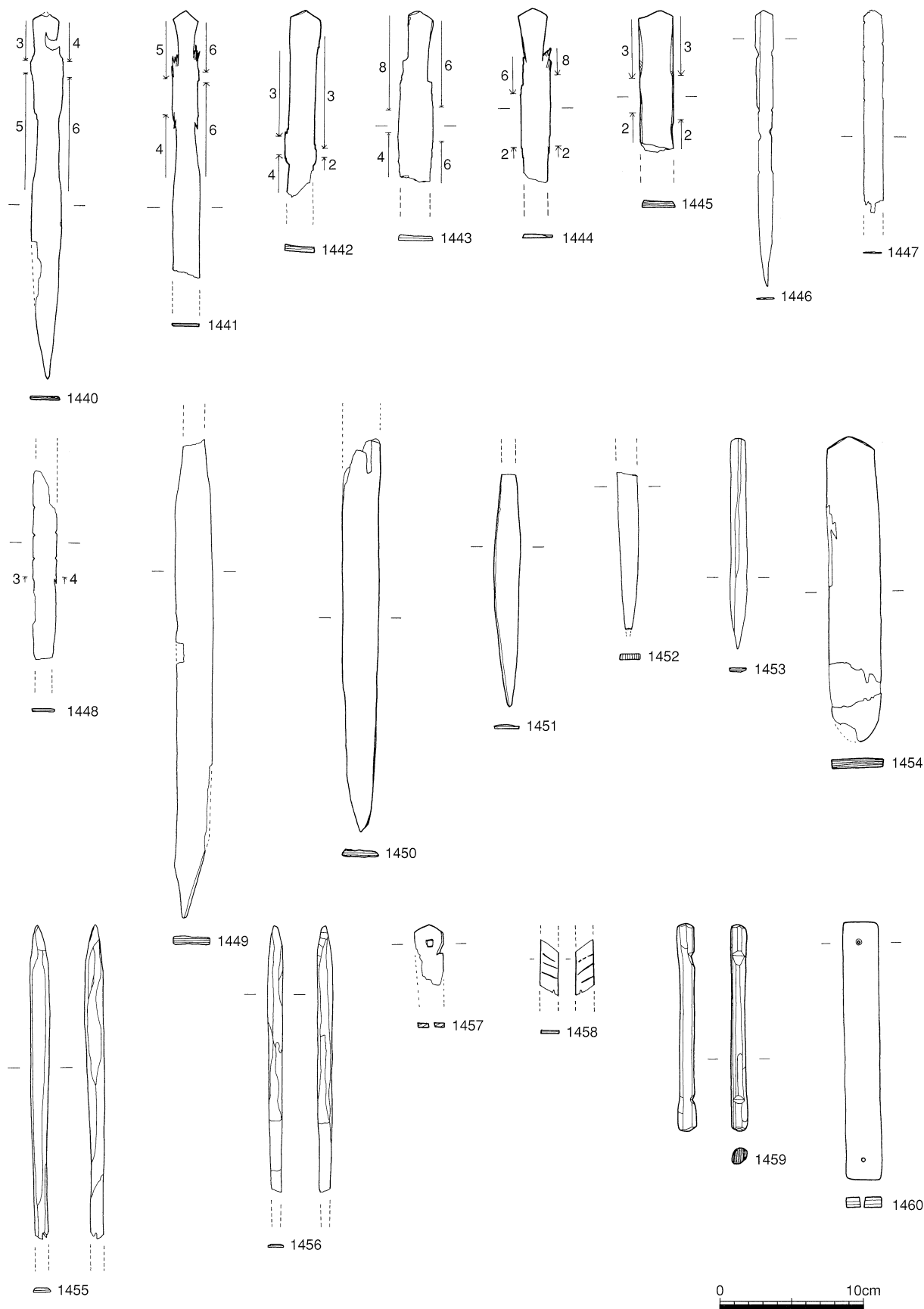
第348図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（祭祀具）（1）



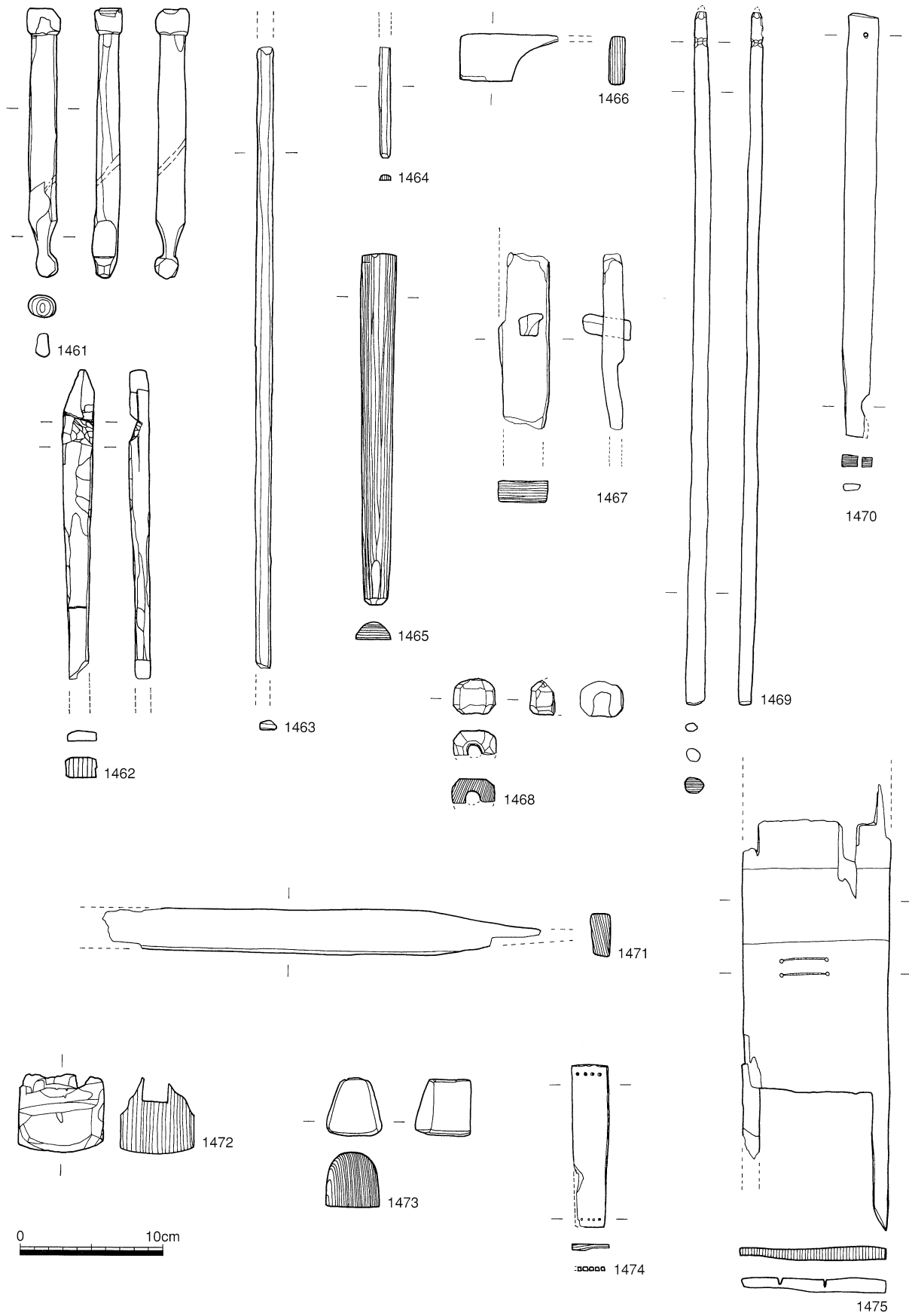
第349图 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（祭祀具）（2）



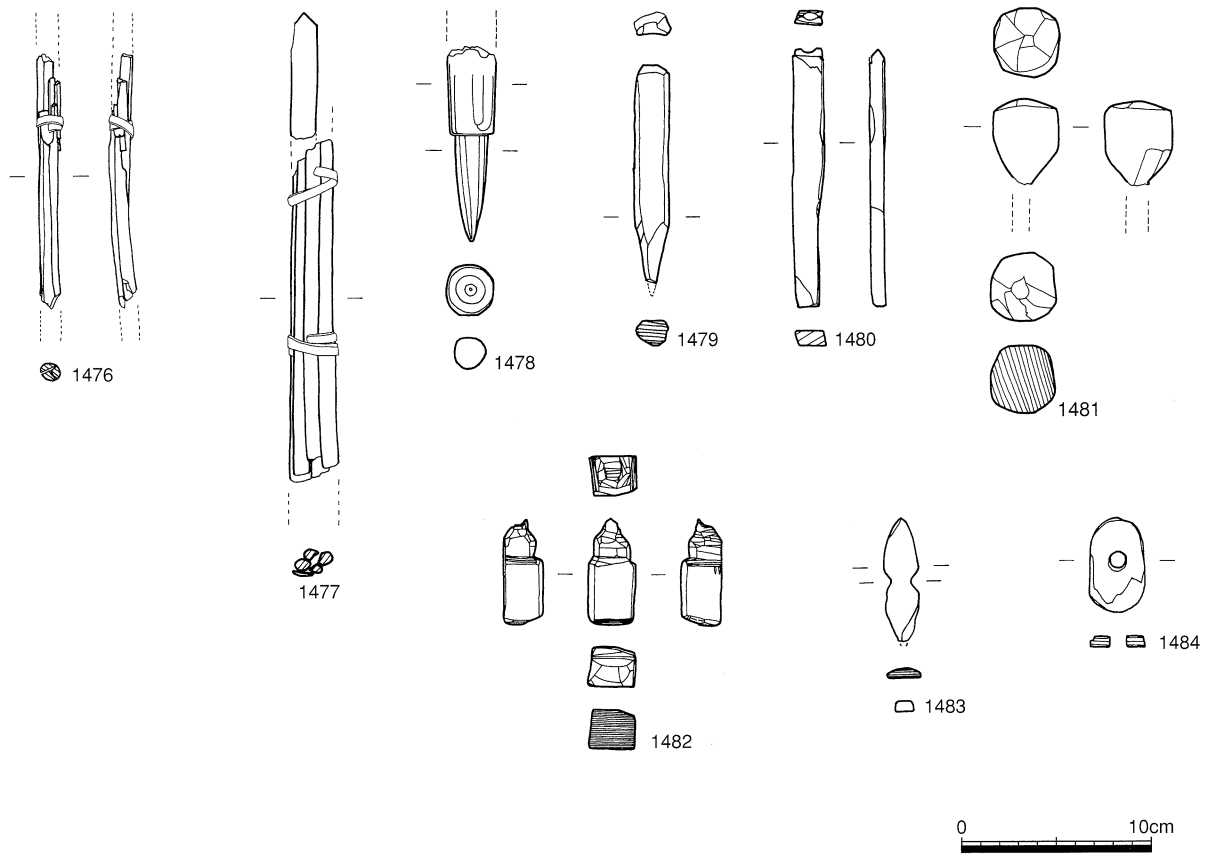
第350図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（祭祀具）（3）



第351図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（祭祀具・雑具）



第352図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（雑具・部材）

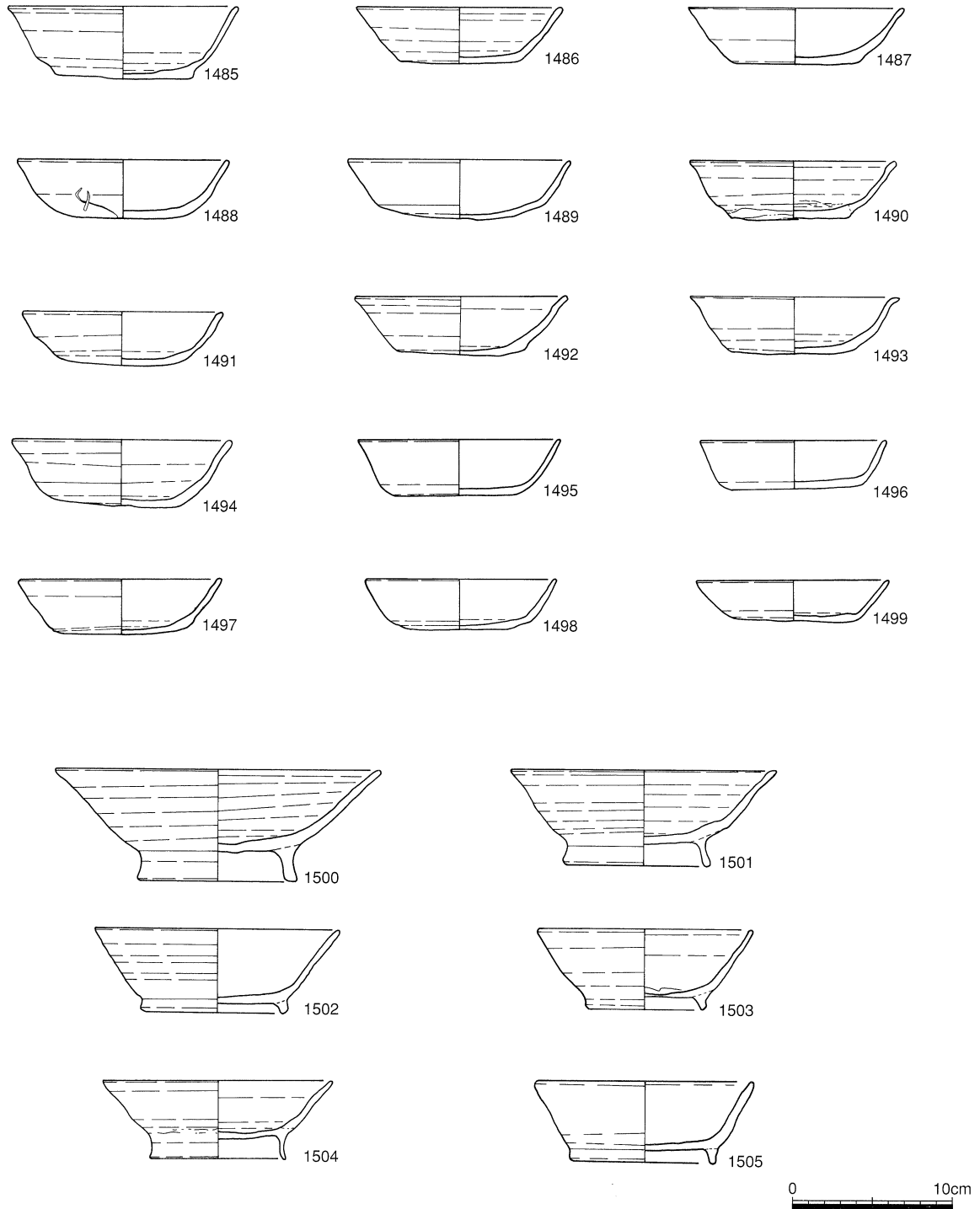


第353図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土木製品（部材・建築部材・用途不明）

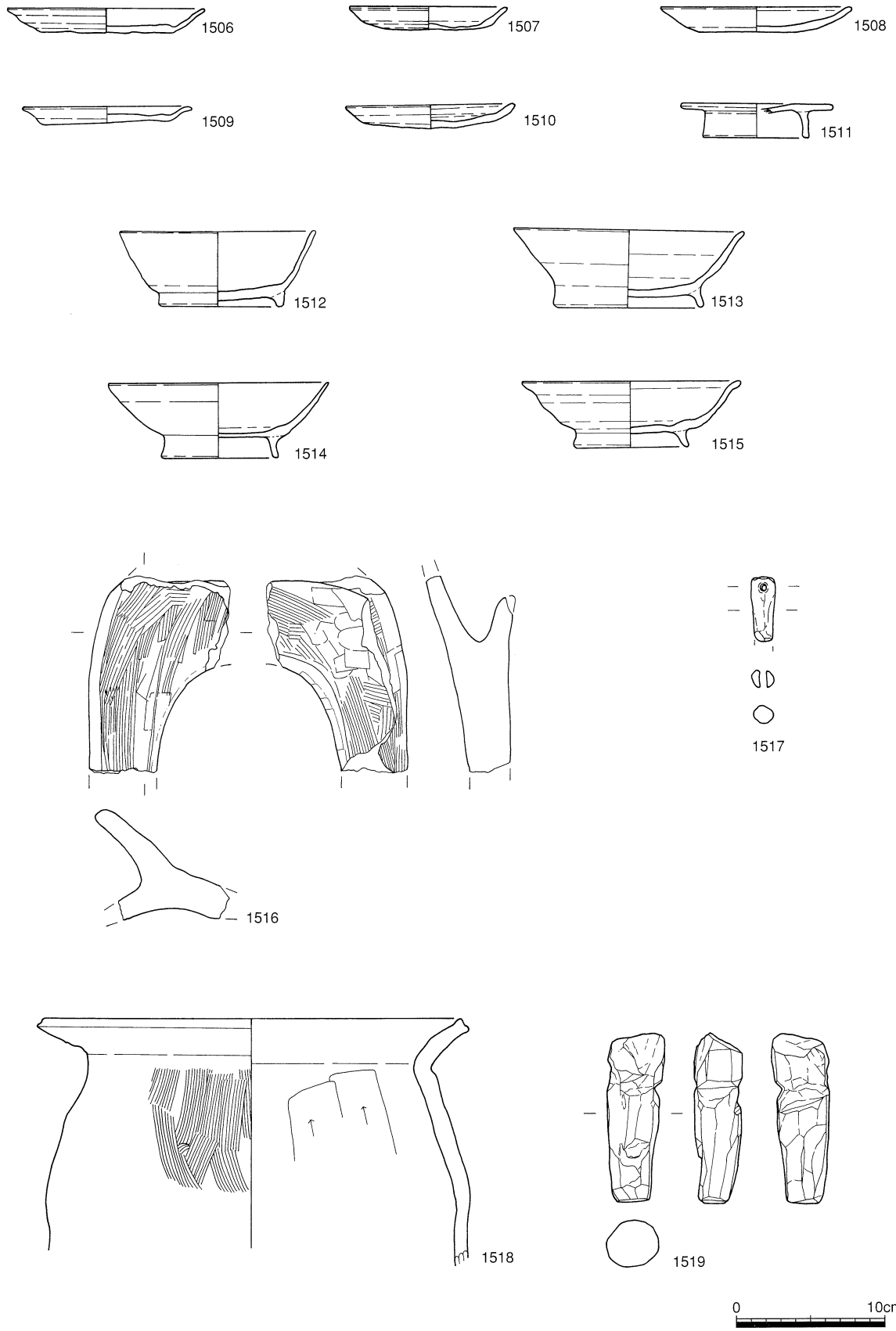
自然流路（SR3001）Ⅲ層出土遺物（第335～356図）

木製品は239点を図化した。1246は楔である。1247～1251は馬鍬である。1252、1256、1257は木錘である。1253は農具の横槌である。柄尻を有頭状に削り出している。1254、1255は編棒である。1258は紡輪である。1259は紡織具の中筒である。1260～1265は糸巻横木、糸巻杵木である。1266～1269は織機である。1270は木製の鏝である。1271は鳴鑼である。中心より上は三角形、下は四角形に削り、中心に3カ所穿孔がある。1272～1290は檜扇である。1274、1277、1280、1283、1286はいずれも要が残存している。1291～1295は刻歯式横櫓である。1296、1297は留針である。1298は服飾具の連齒下駄である。右足用で傷みがはげしい。1299～1301は円形曲物の底板と側板、籬が残存したものである。1302は柄杓である。1303～1330は円形曲物の蓋板である。1319、1323、1325、1329は内面に漆が残存している。1331～1333は円形曲物の蓋板である。1331は中央につまみを取り付けたと思われる孔が残存している。1334～1337は曲物の側板である。1338は曲物の籬である。1339、1340は楕円形曲物の底板である。1341は剝物の蓋である。1342、1343は槽である。1344は剝物の蓋である。木釘孔が2ヶ所残存しており、内面は横方向に工具幅2.1cm以上の削り痕がある。1345は蓋である。1346、1347は挽物である。1348～1350は栓である。1351～1359は杓子である。1352は表裏ともに漆が塗布されている。1360～1364は箸である。1365～1370は匙である。1371は刺串である。1377、1378、1380～1383は刀形である。1383は鋸歯付刀形である。刀剣の形をした材の側面に鋸歯を刻んだものである。1379、1389、1392～1395は剣形である。1395は着柄の剣を象徴的にかたどったものと考えられる。1384～1386、1388、1390、1391は鏝形である。1387は矛形である。1396、1397は紡織具形である。1398は円筒状人形である。1399～1403、1405～1408は祭

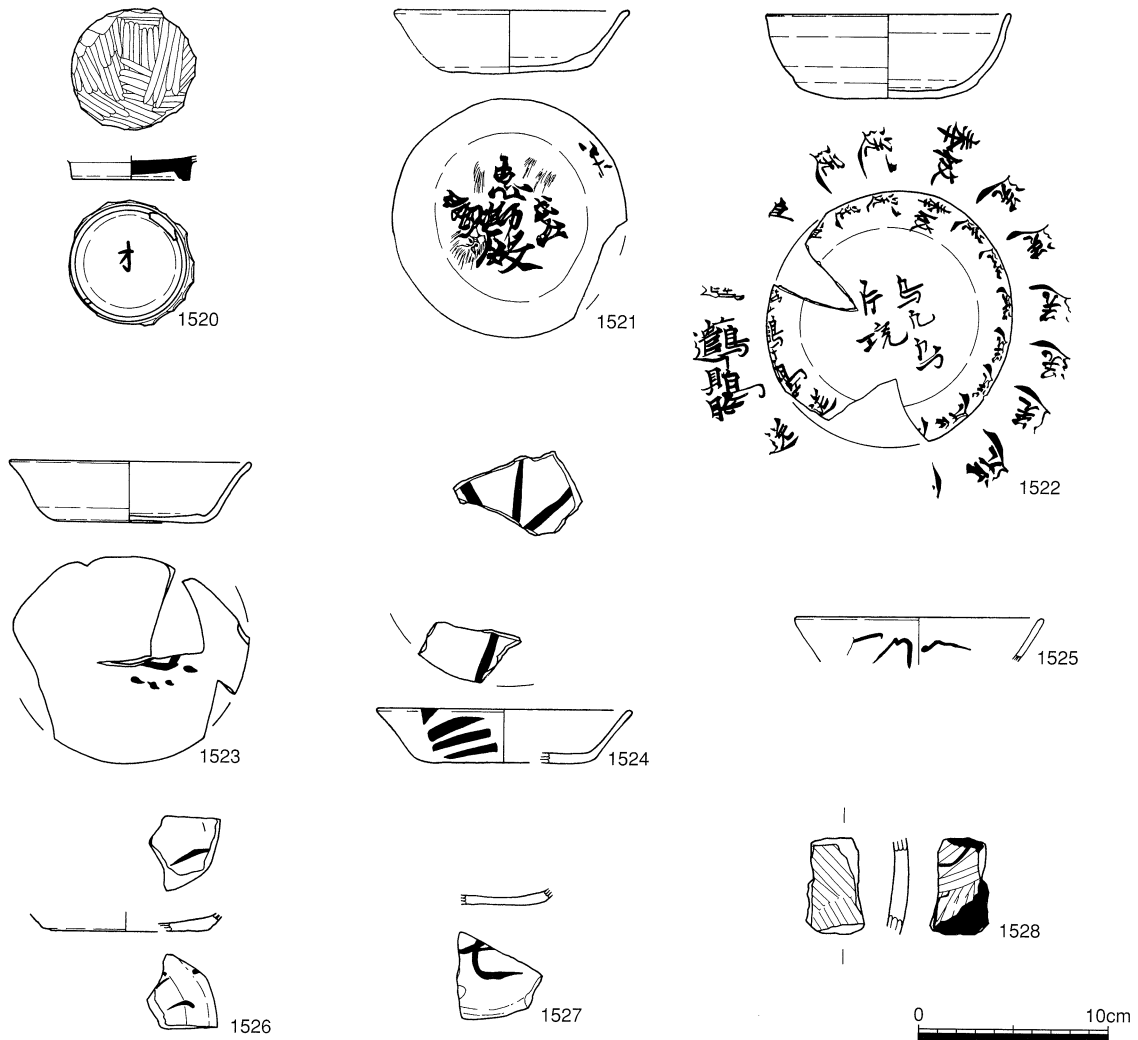
祀具の正面全身人形である。1404は側面全身人形である。やや厚めの板に三角形の抉りによって首、顎、口を成形し、横顔を表現したもの。1409～1412は立体人形である。1413、1414は陽物形である。1415～1418は棒状祭祀具である。1419～1458は斎串である。1420、1458は両面に線状の墨書がある。1459～1461は把手である。1463、1464は籌木である。1476、1477は複数の棒状木製品に樺皮を巻き付けて束ねたものである。1478、1481は栓である。1480は籌木である。土器、土製品は43点を図化した。1485～1487、1489～1499、1505は土師器の杯である。1500～1504は土師器の椀である。1506～1511は土師器の皿である。



第354図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土遺物（1）



第355图 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土遺物（2）



第356図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅲ層出土遺物（3）

る。1512～1515は土師器の椀である。1516は竈の一部である。1517は土製品の土錘である。1518は土師器の甕である。1519は温石である。1520～1528は墨書土器である。1520は緑釉陶器の椀の底部外面に「方」と墨書する。1521は土師器の杯の底部外面中央に「恵師殿」と人物画、脇に「盞」、体部外面に「斗」を墨書する。人物画は獣の様な形相で、手足を表現した墨痕もある。1522は土師器の杯の底部外面に「鳥凡□片埴」、体部外面に「送送送送送送奉攸送送□、□、□、鳥遣□□□□」と墨書する。1523～1525は土師器の杯に墨痕が見えるが、判読はできない。1526、1527は土師器の小破片に文字の一部が見える。1528は土師器の甕に墨痕があり、人面墨書土器の可能性はある。

自然流路（SR3001）Ⅳ層出土遺物（第357～362図）

木製品は40点を図化した。1529は檜扇である。1530は天秤棒の端部である。1531～1535は円形曲物の底板である。1531は片面中央に「述」と刻書される。1534は表面に漆が塗布されている。1536、1537は方形曲物の底板である。1538は箸である。1541、1542は刀形である。1543、1544は紡織具形である。1545、1546は円筒状人形である。1547は正面全身人形である。肩、腰、膝部分に抉り有り。顔や衣服を墨書で表現する。1548、1549は馬形である。1550は棒状祭祀具である。1551～1564は斎串である。1565は把手

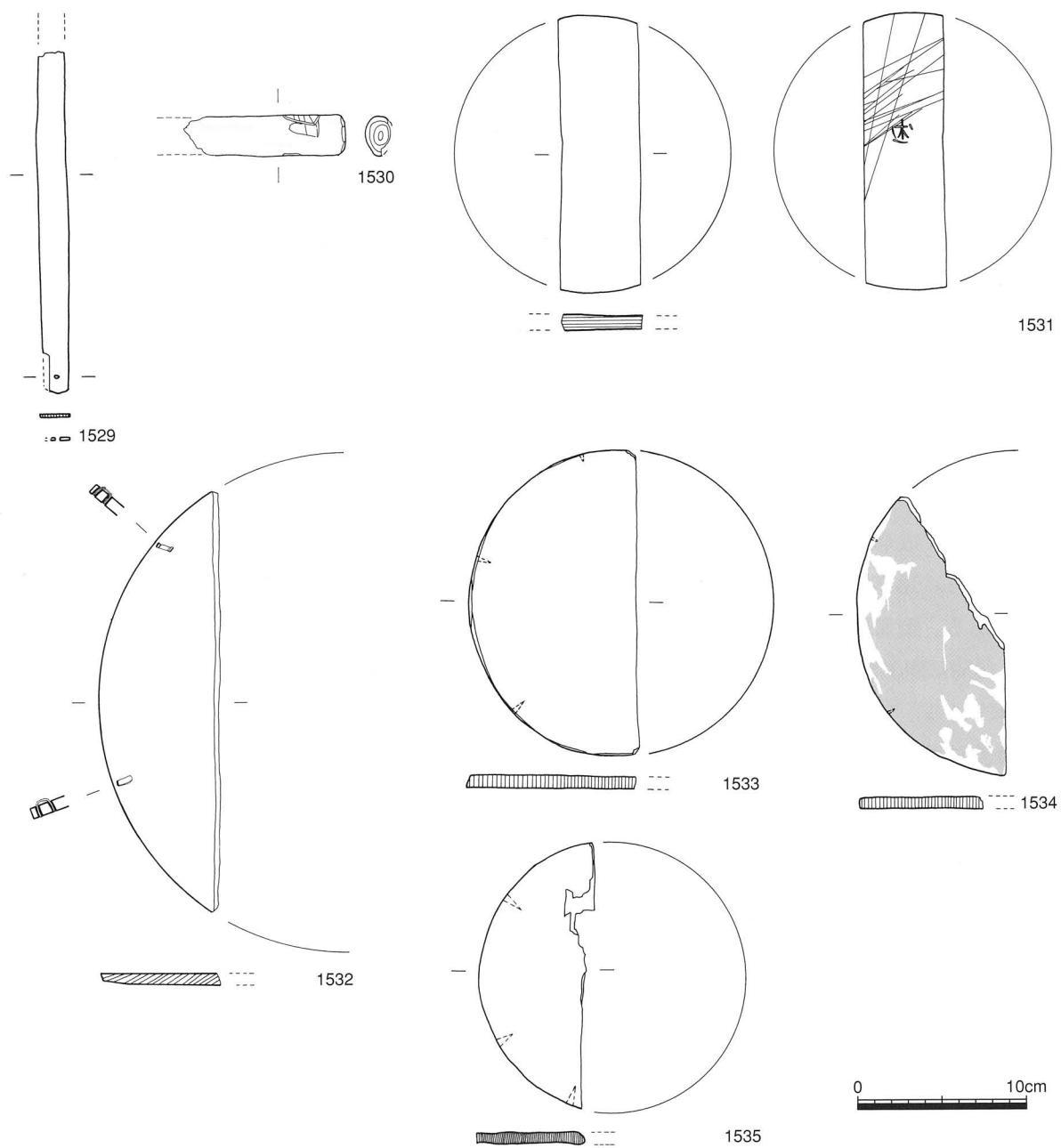
である。土器は16点を図化した。1569は須恵器の杯である。1570は須恵器の高杯である。1571～1577は土師器の杯である。1578は土師器の高杯である。1579は土師器の皿である。1580は土師器の甕である。1581は黒色土器 A 類の椀である。1582は刻書土器である。土師器の杯の内面に九字に近い刻書がある。1583は墨書土器である。小破片に「上□」と墨書する。1584は土師器の甕の把手である。内面が空洞である。

自然流路 (SR3001) V層出土遺物 (第357、363～383図)

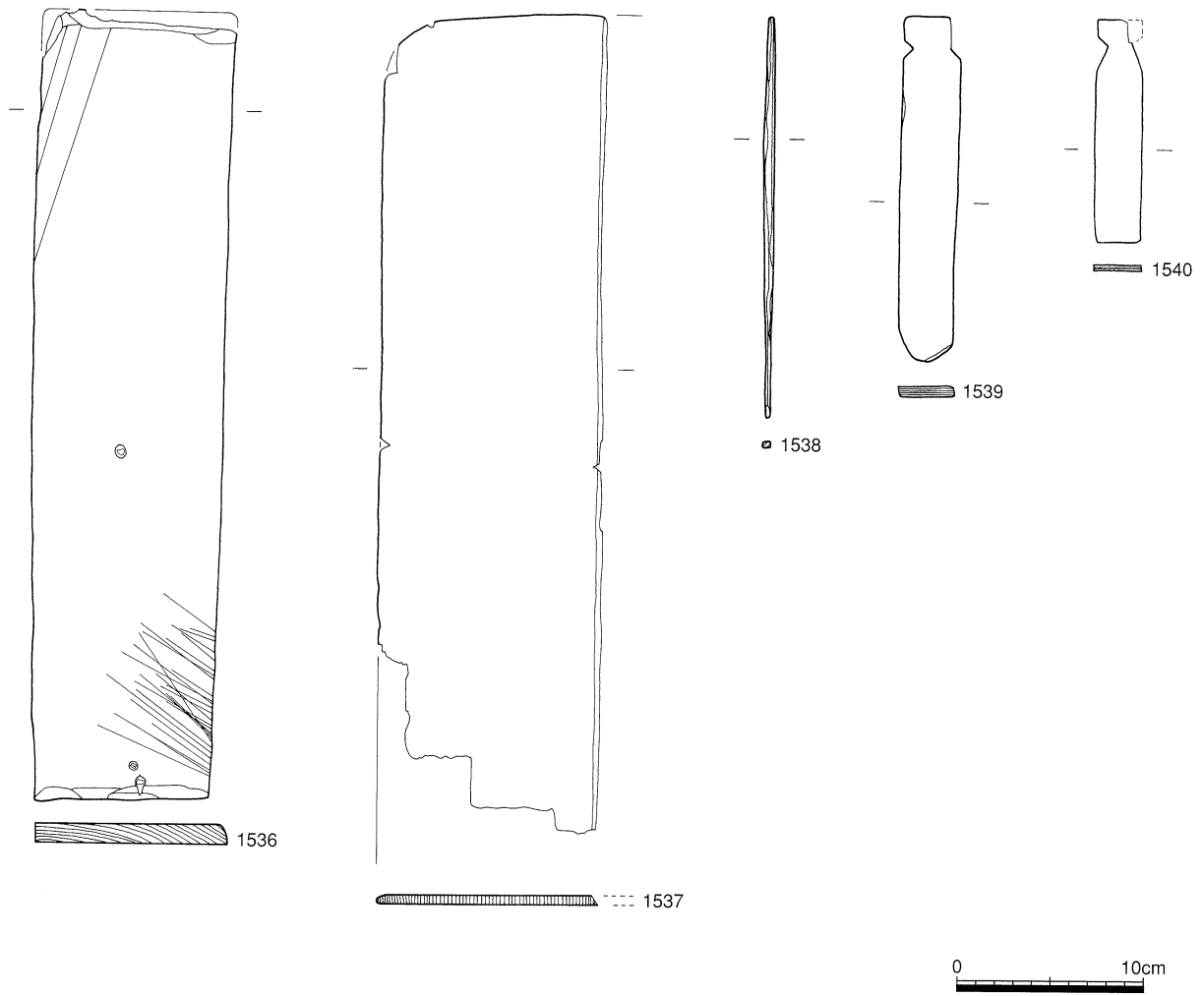
木製品は263点を図化した。1585は工具の鑿柄である。茎を焼き込んで挿入した痕跡がある。1586は木釘である。1587は篋である。1588は田下駄の一部である。1589は柄である。1590は農具の横槌である。柄の部分で7角形に削っている。1591は編棒である。1592～1597は木錘である。1598は農具の鎌柄である。柄尻に山形の突起と上部に装着孔がある。1599、1601～1604は糸巻横木である。1600は糸巻杵木である。1606は丸木弓である。1607、1608は刻歯式横櫛である。1609～1630、1632は円形曲物の底板である。1628は表面に焼き印がある。1631、1633は円形曲物の蓋板である。1633は、中央につまみを取り付けたと思われる穿孔がある。1634～1636は方形または楕円形曲物の底板である。1635には側板のための溝が彫られている。他の製品に転用された可能性がある。1637は曲物の籬である。1638、1639は方形曲物の側板である。1641は柄杓である。全体に漆が塗布されている。1642は栓状木器である。塔状になるように立体的に成形している。蓋板のつまみの可能性がある。1643は栓である。1644は刳物である。1645は把手である。1646は挽物である。1647は箸である。1648は杓子である。1649は匙である。1653は遊戯具の琴である。頭部に3カ所の集弦孔と、尾部に3突起の櫛形を成形している。1654～1658は紡織具形である。1659は鋸歯付剣形である。1660は剣形である。下端に小さな横木を組合せて鐔としている。1661は刀子形である。1662～1673は円筒状人形である。1674、1676～1678は正面全身人形である。1678は墨書により女性の髪、眉、目、鼻、口を表現している。1675は側面全身人形である。上下部を細く成形し、左上に墨で横顔を描いている。1679は陽物形である。1680～1684は馬形である。1685、1686は祭祀具の鳥形である。1685は薄板の表面を削って頭と胴体を表現している。1687～1713は舟形である。1714～1723は棒状祭祀具である。1724～1822は齋串である。1740、1741は線状の墨痕が両面にある。1823は塔形木製品で仏具と考えられる。1824は雑具の自在である。1849は建築部材か。土器は12点を図化した。1850、1851は須恵器の杯である。1852は須恵器の壺である。1853～1858土師器の杯である。1857は内面の口縁部に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文が施される。1859は土師器の甕である。1860、1861は墨書土器である。1860は土師器の杯の底部外面に「方」と墨書する。1861は土師器の杯の底部内面に縦2本、横3本の線が墨書されている。九字を簡略化したものの可能性がある。

自然流路 (SR3001) 出土遺物 (第384図)

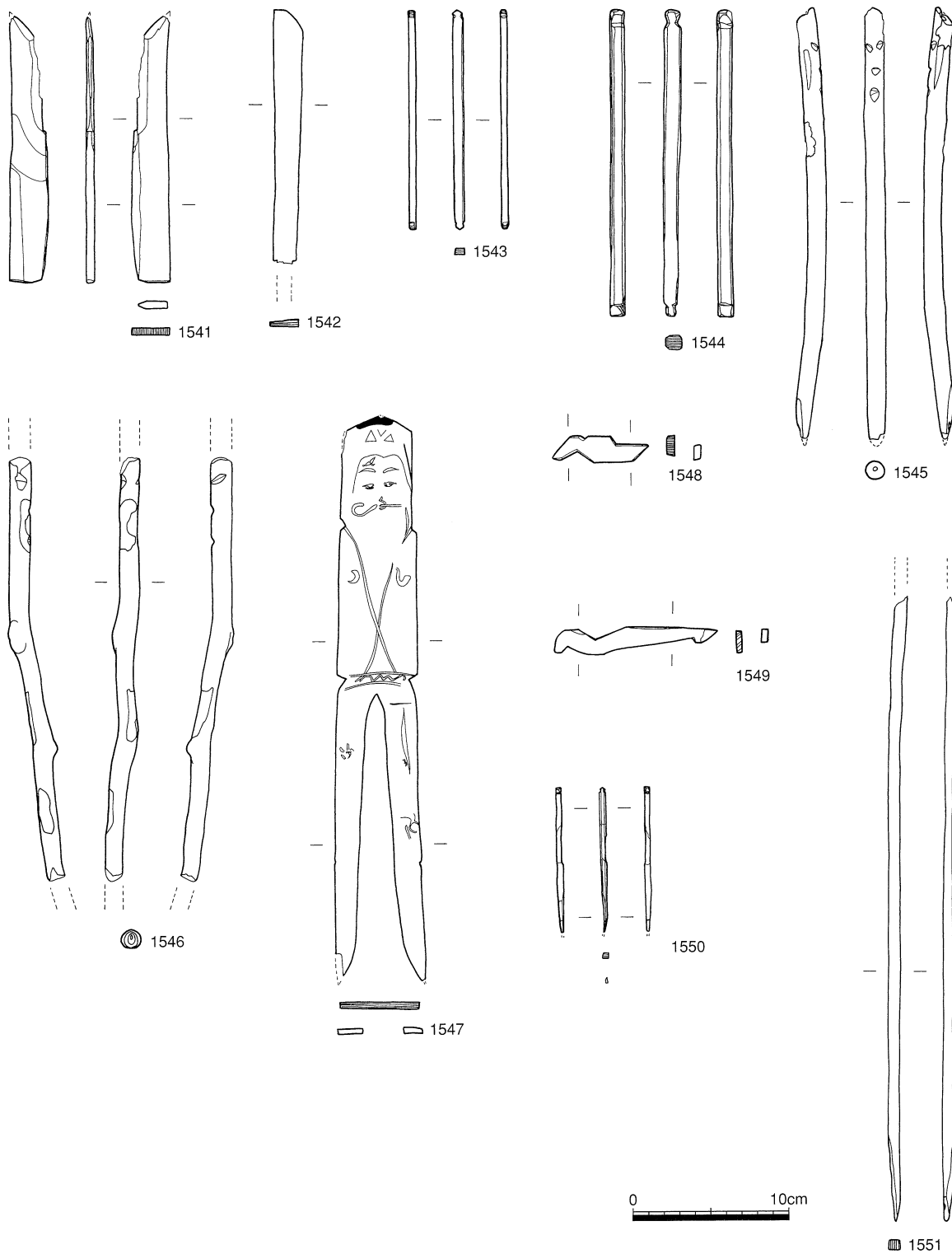
木製品は8点を図化した。1862は下駄である。1863は箸である。1864は刀形である。1378と類似している。1865、1866は円筒状人形である。1867は齋串である。1868は馬形である。土器は2点を図化した。1870は須恵器の壺である。1871は土師器の杯蓋である。内面に螺旋状暗文が施される。



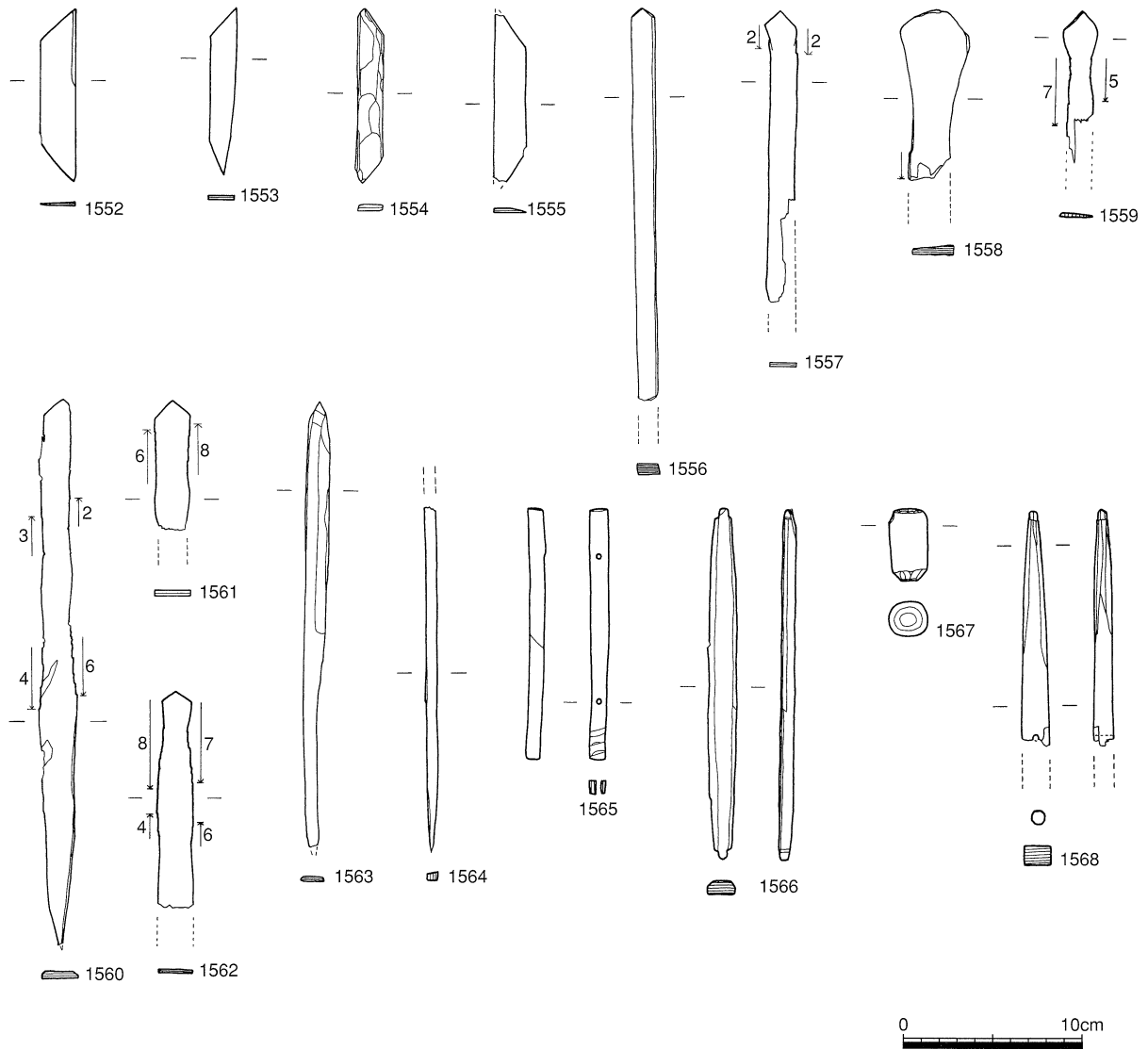
第358図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅳ層出土木製品（服飾具・運搬具・容器）



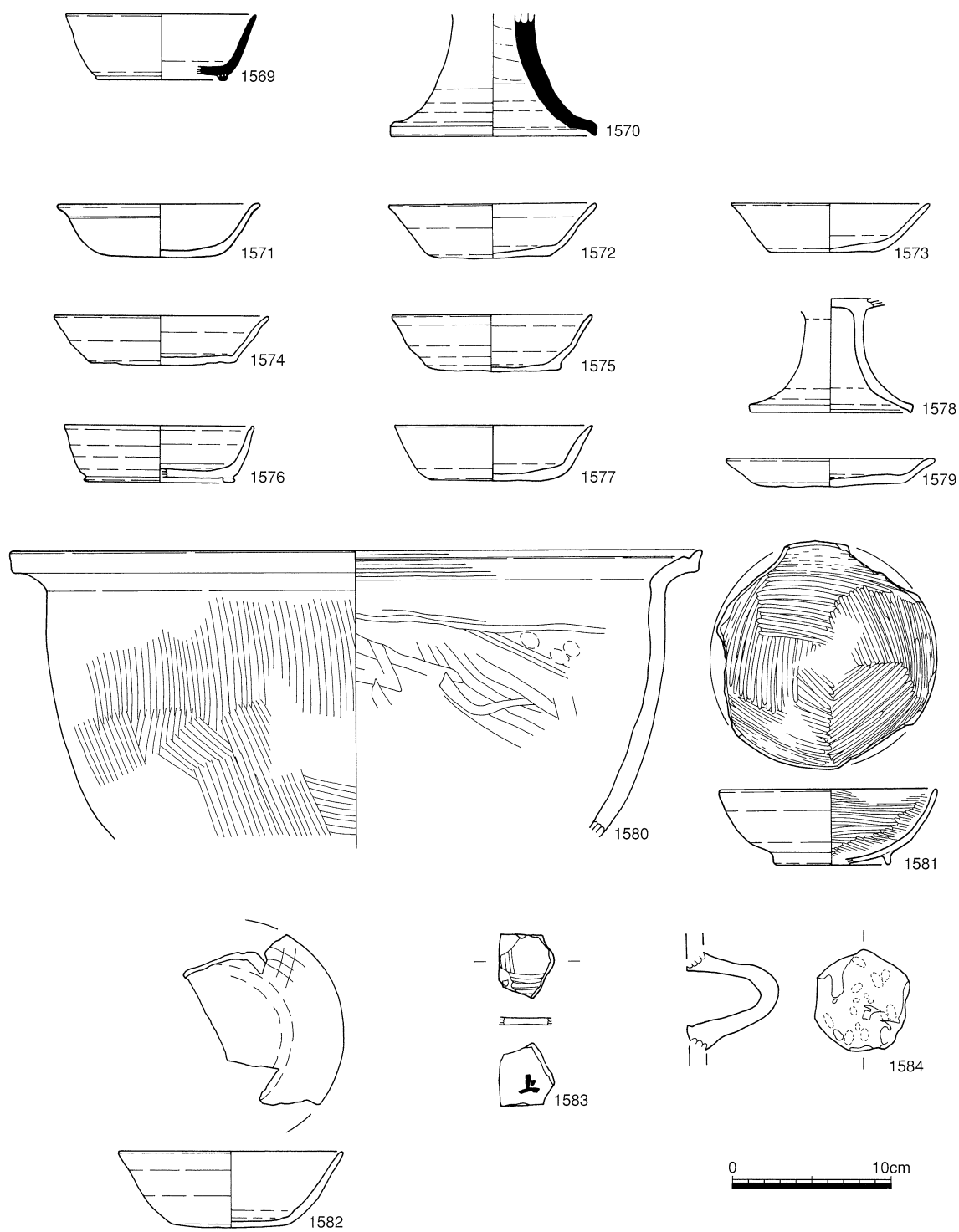
第359図 南区（2005年度2区）SR3001IV層出土木製品（容器・食事具・文房具）



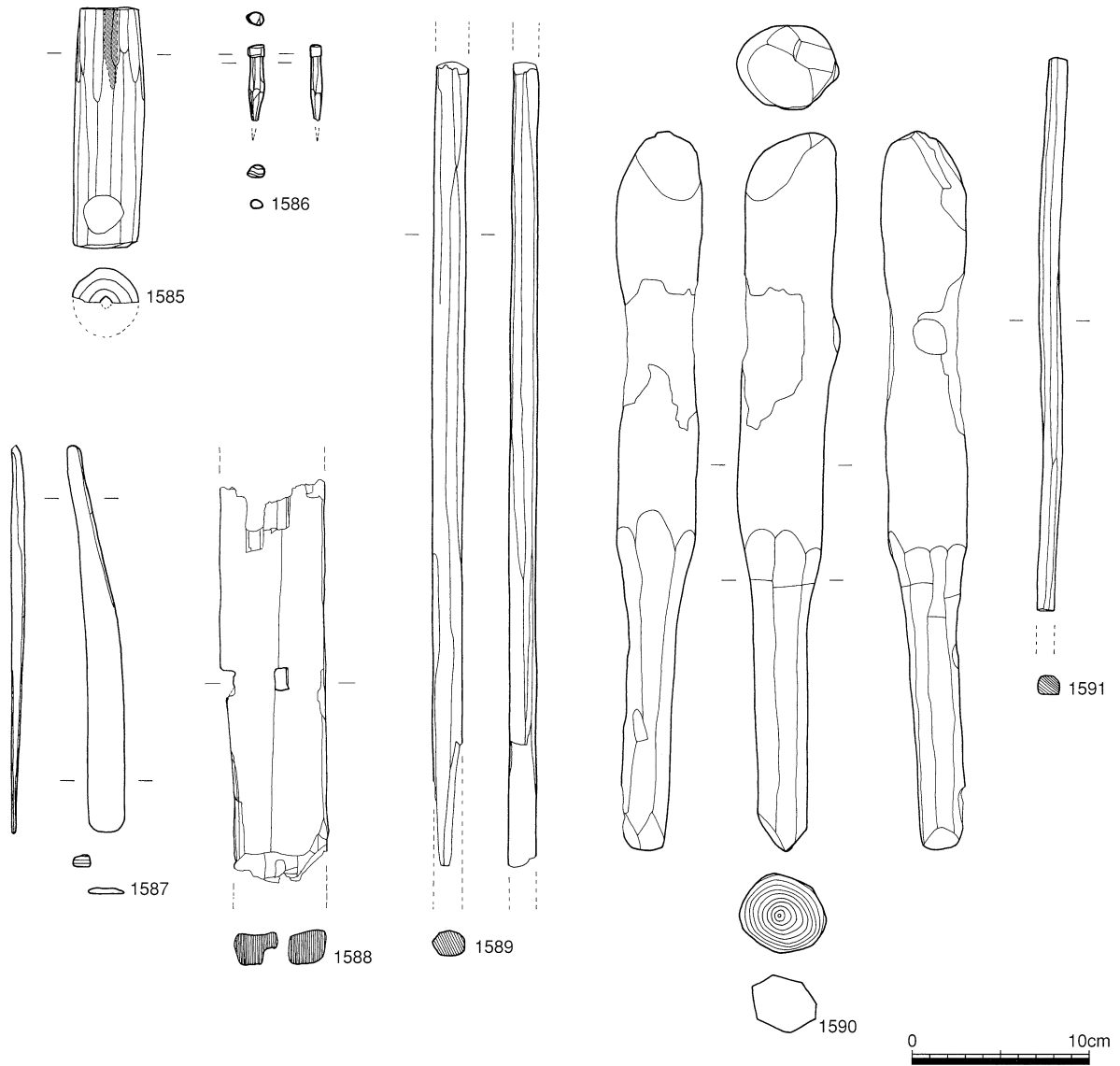
第360图 南区（2005年度2区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）



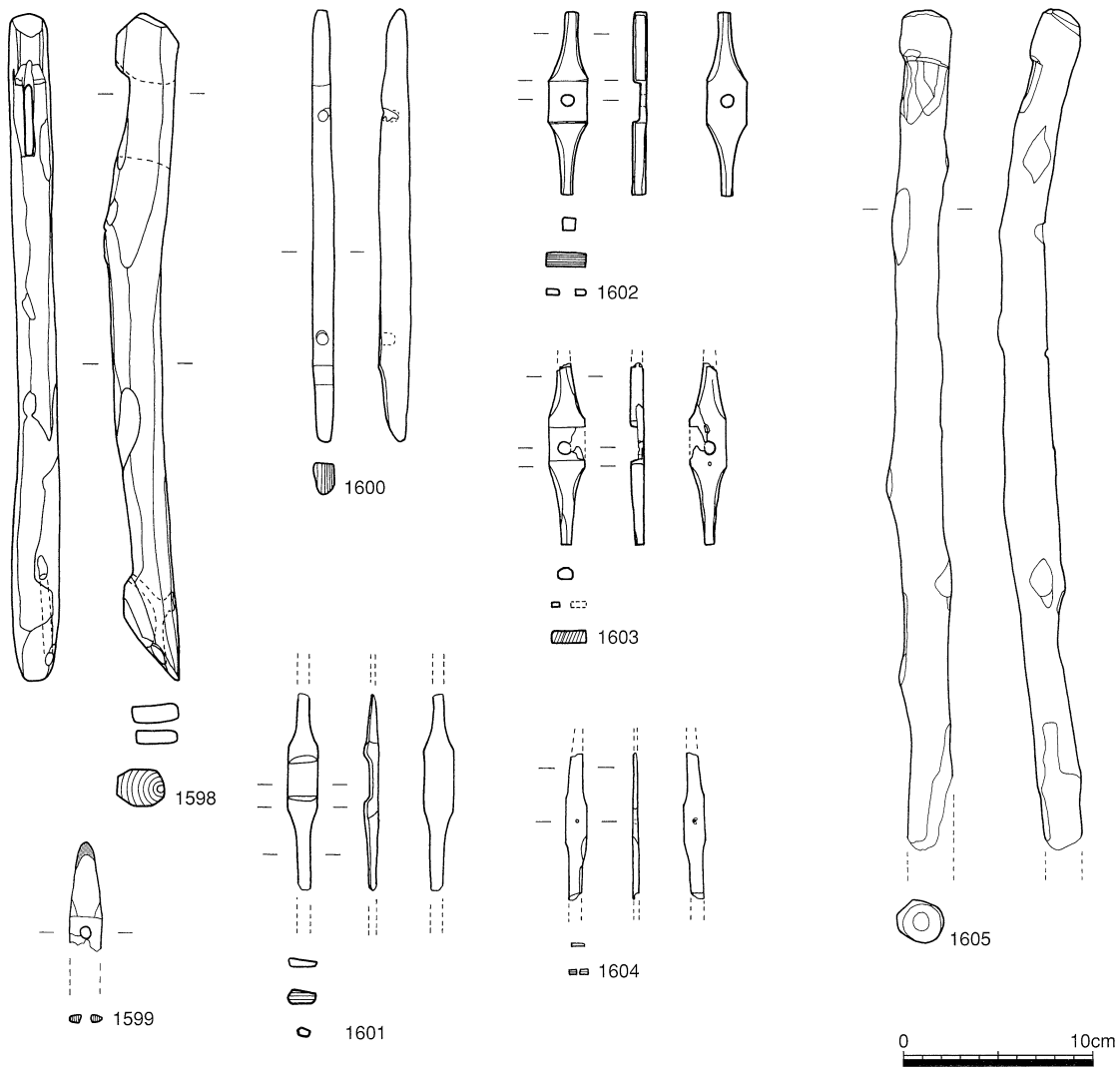
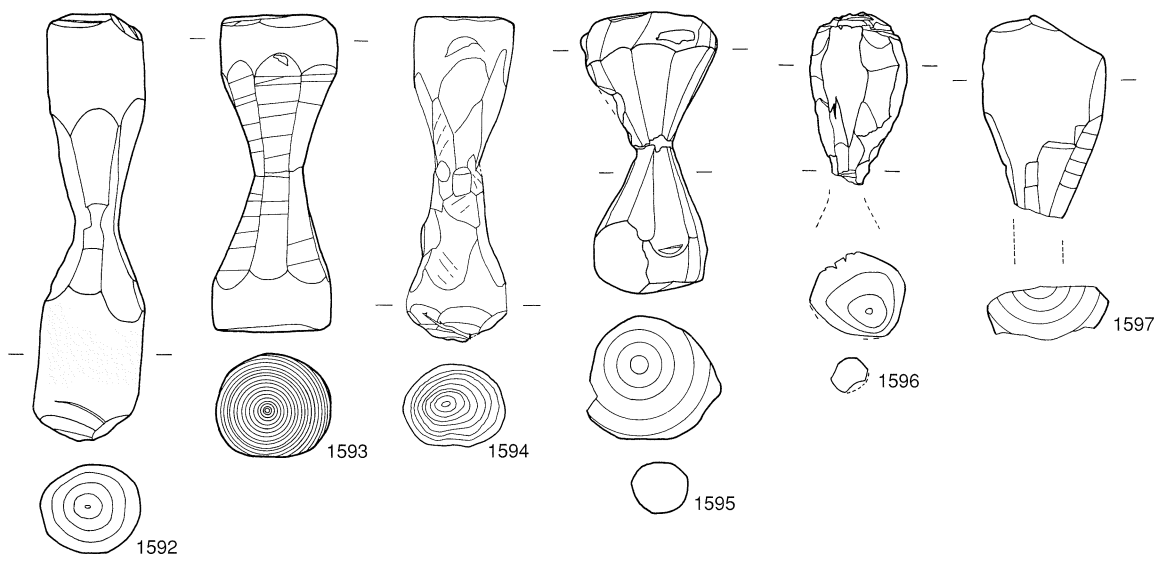
第361図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅳ層出土木製品（祭祀具・雑具・部材）



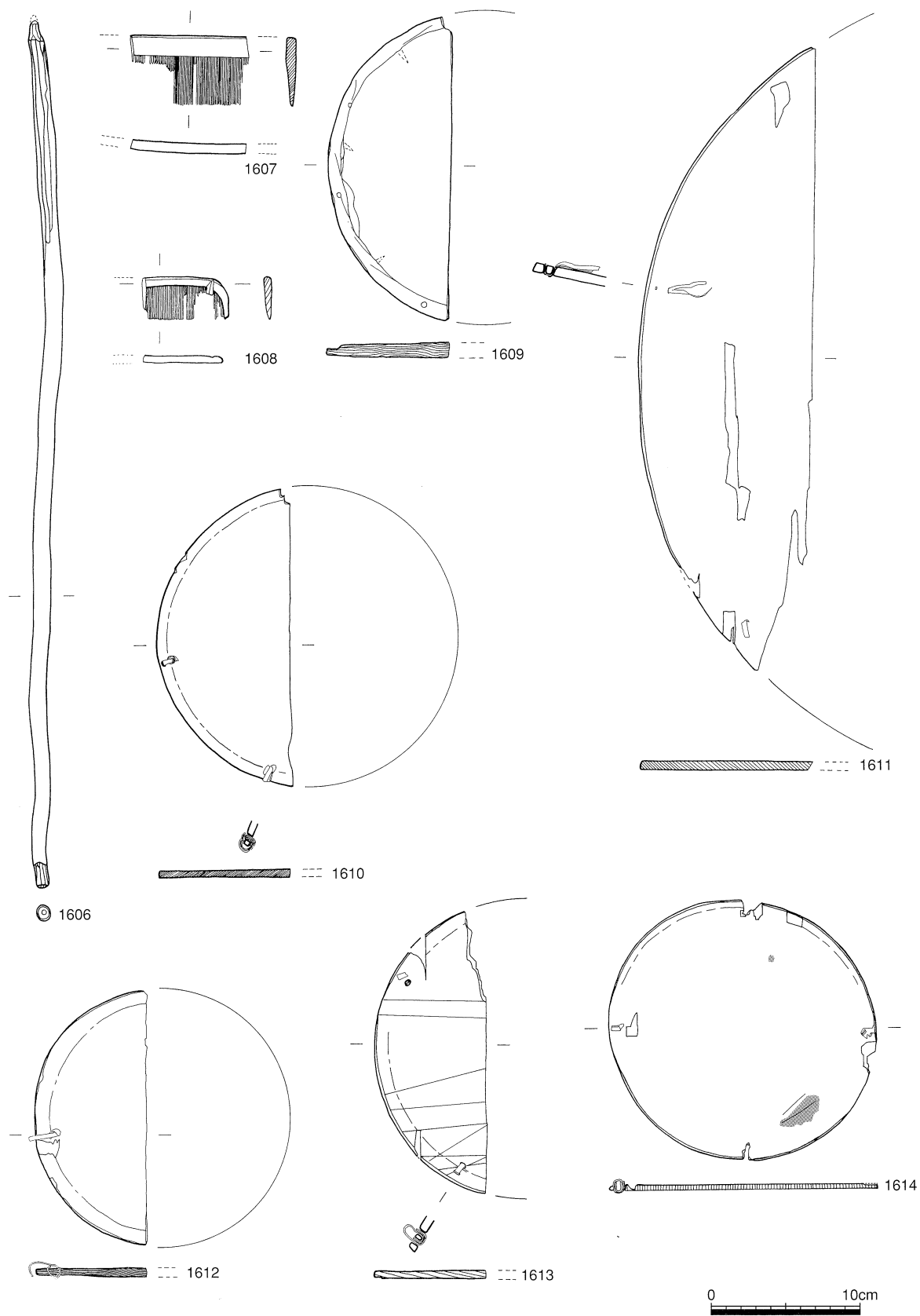
第362图 南区（2005年度2区）SR3001Ⅳ層出土遺物



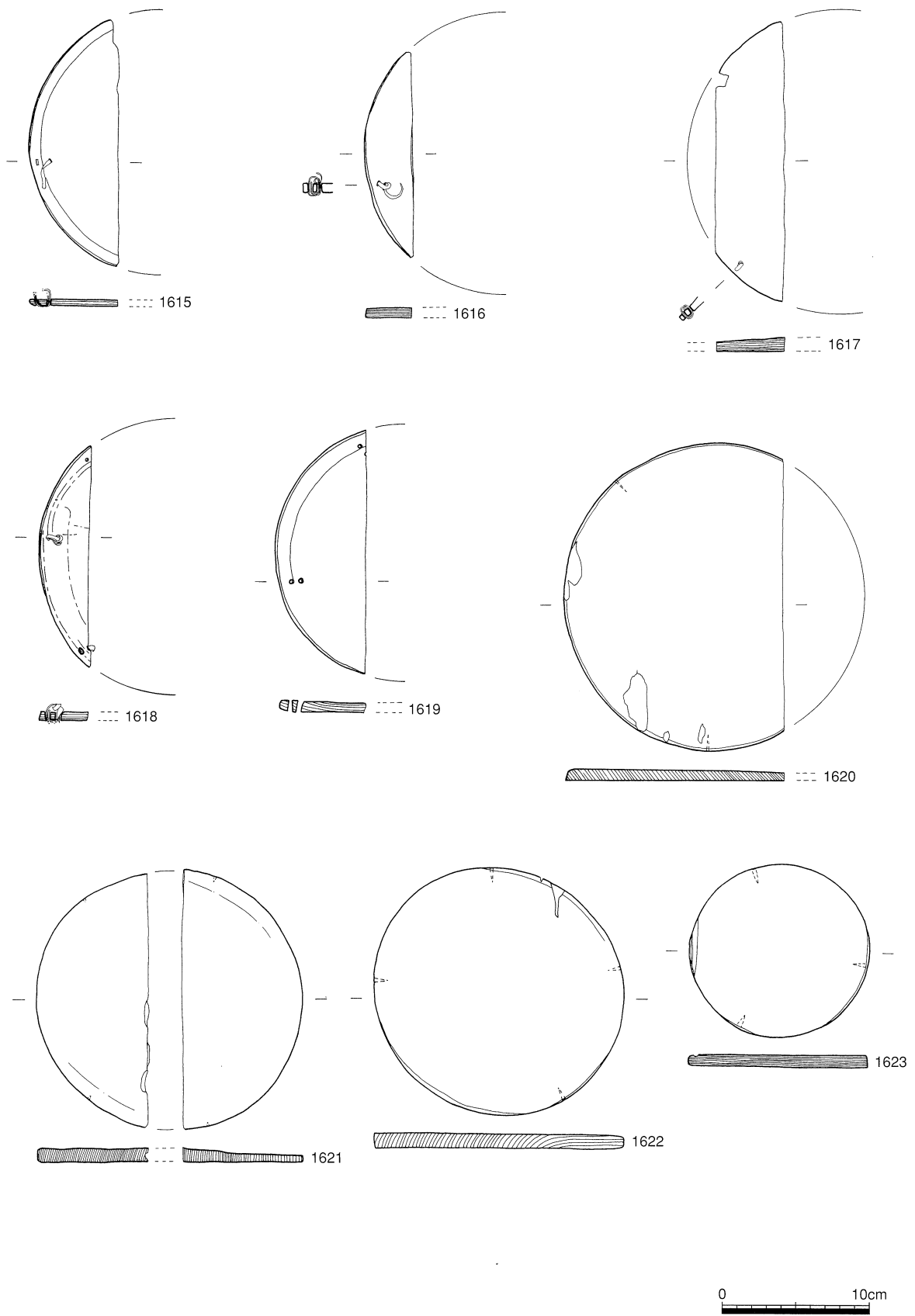
第363図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（工具・農具）



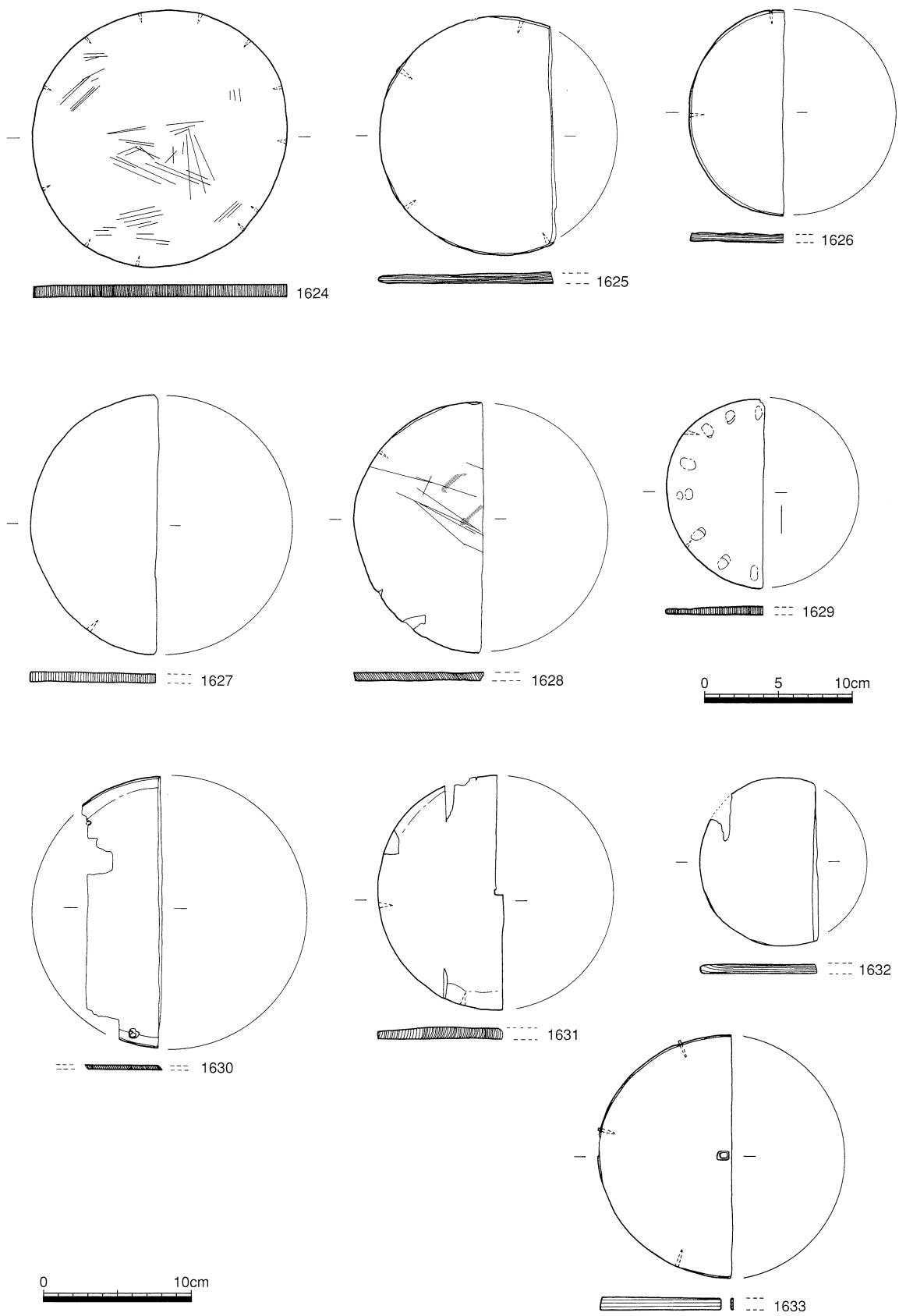
第364図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（農具・紡織具）



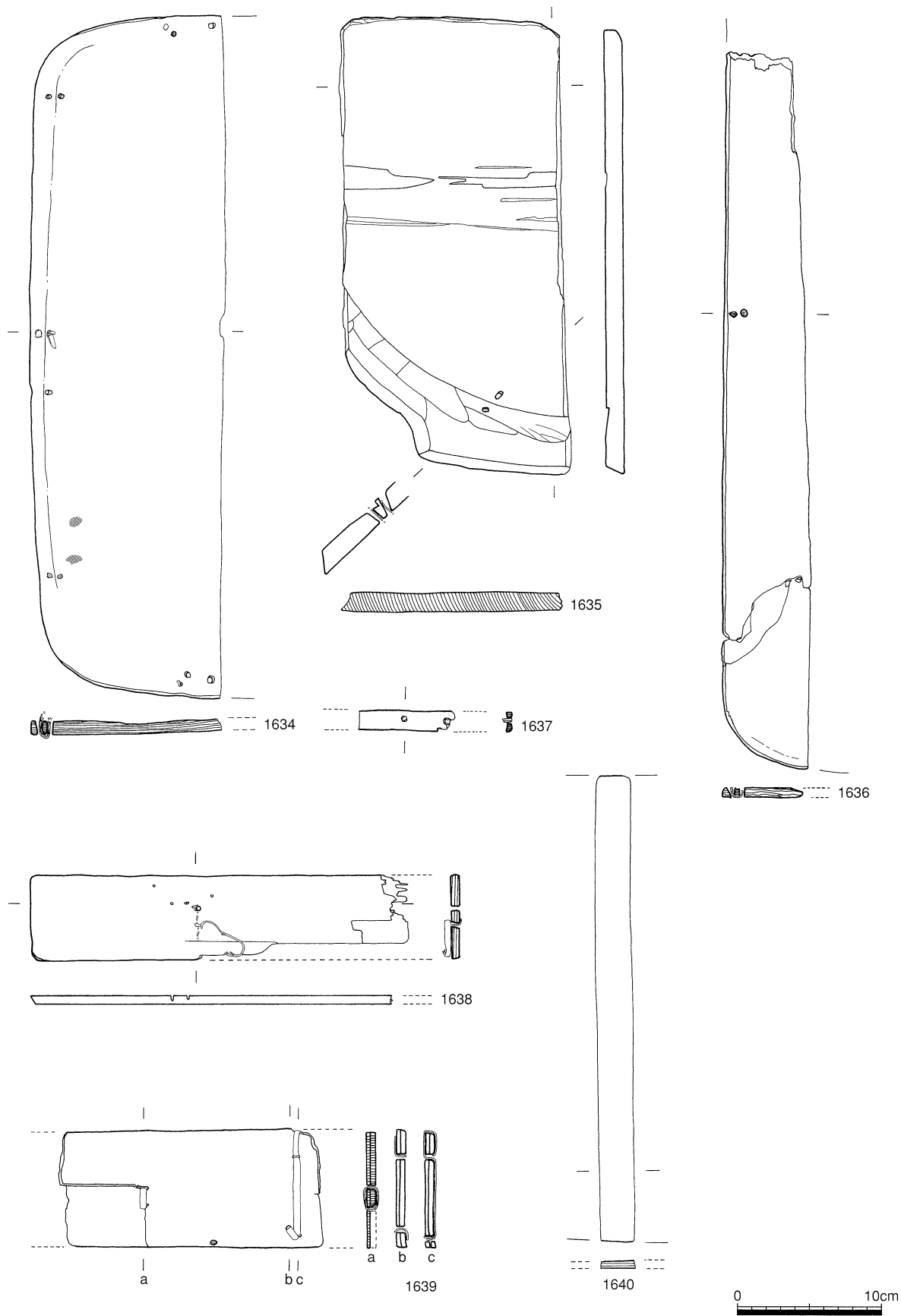
第365図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（服飾具・武器・容器）



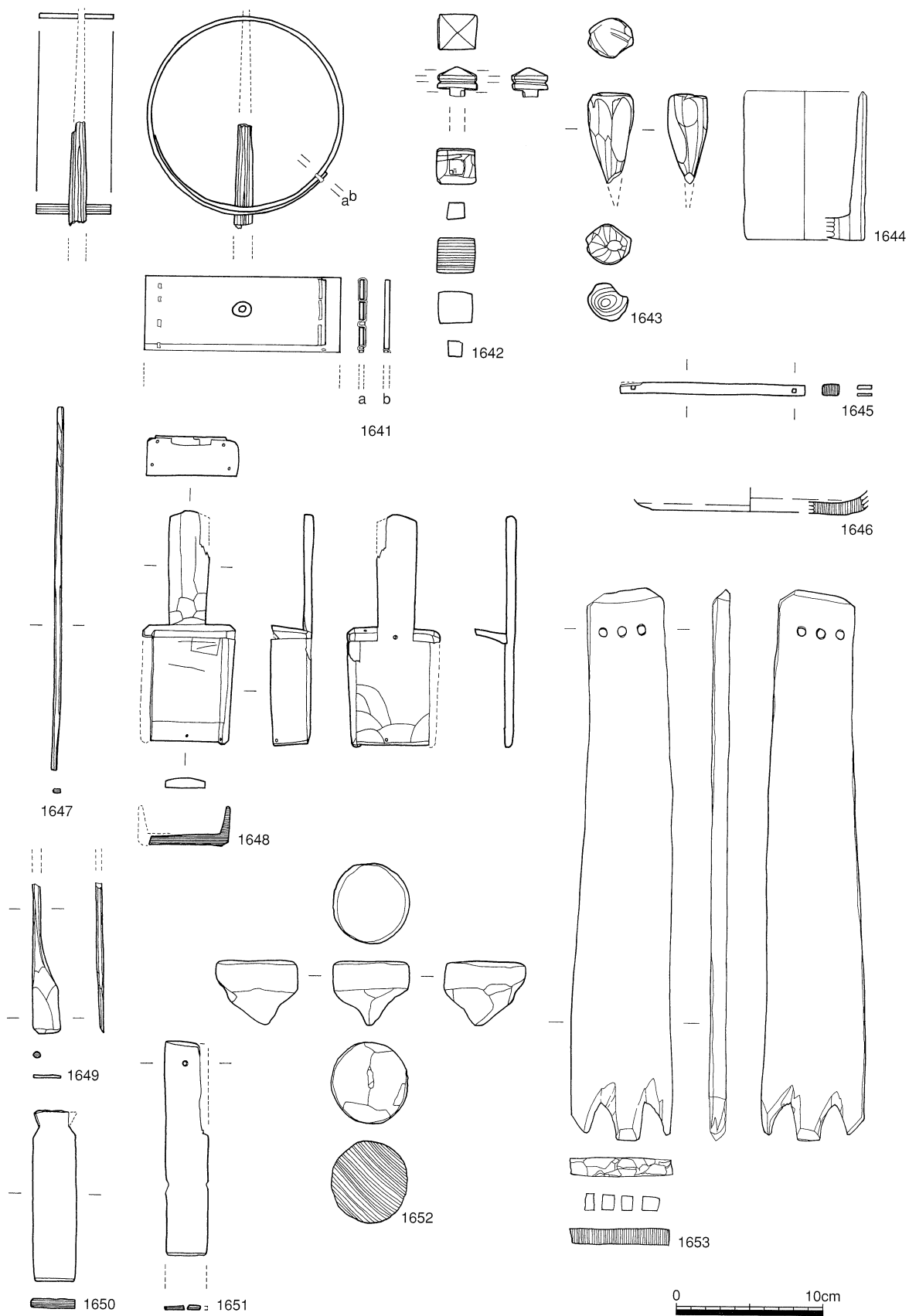
第366図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（容器）（1）



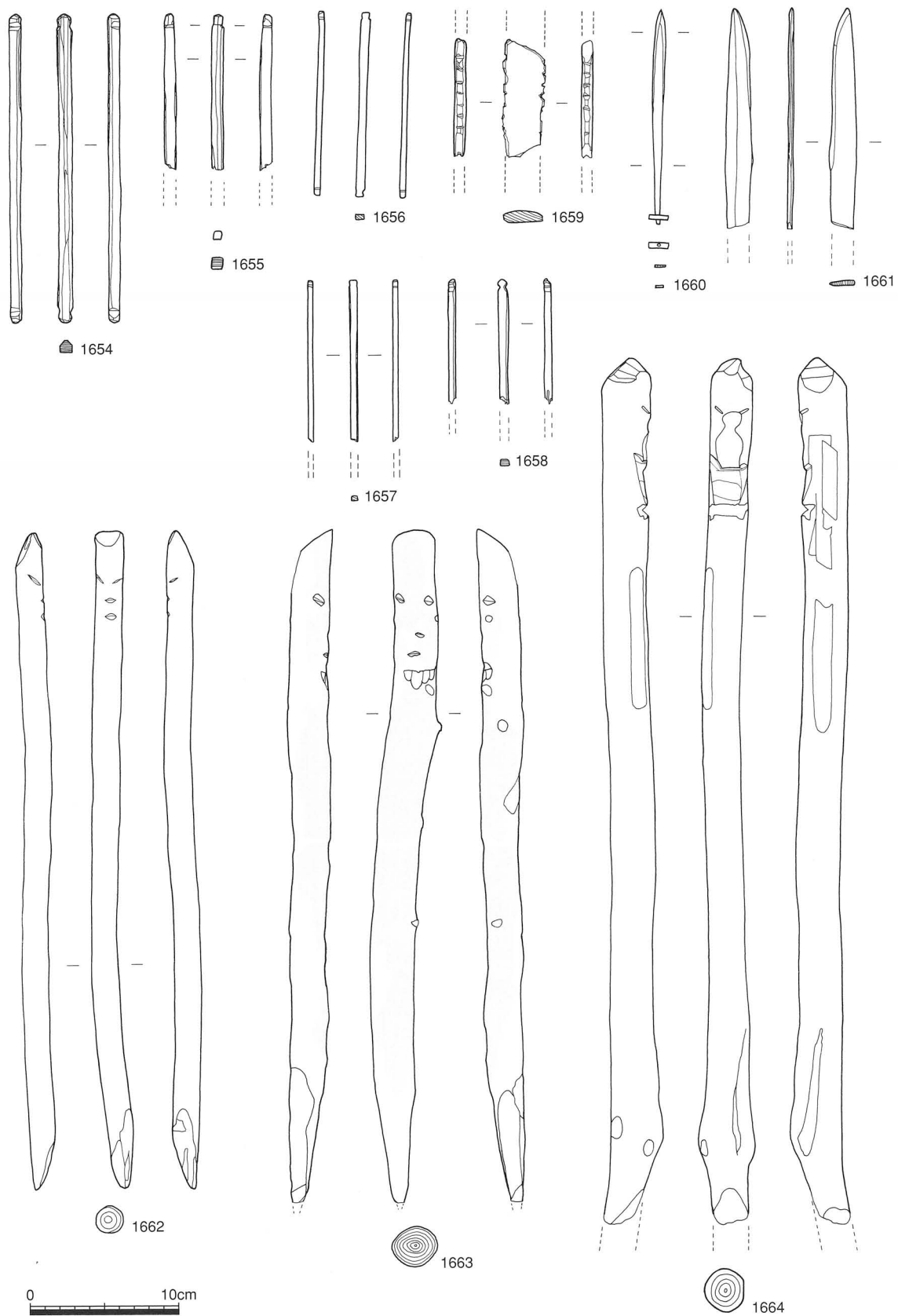
第367図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（容器）（2）



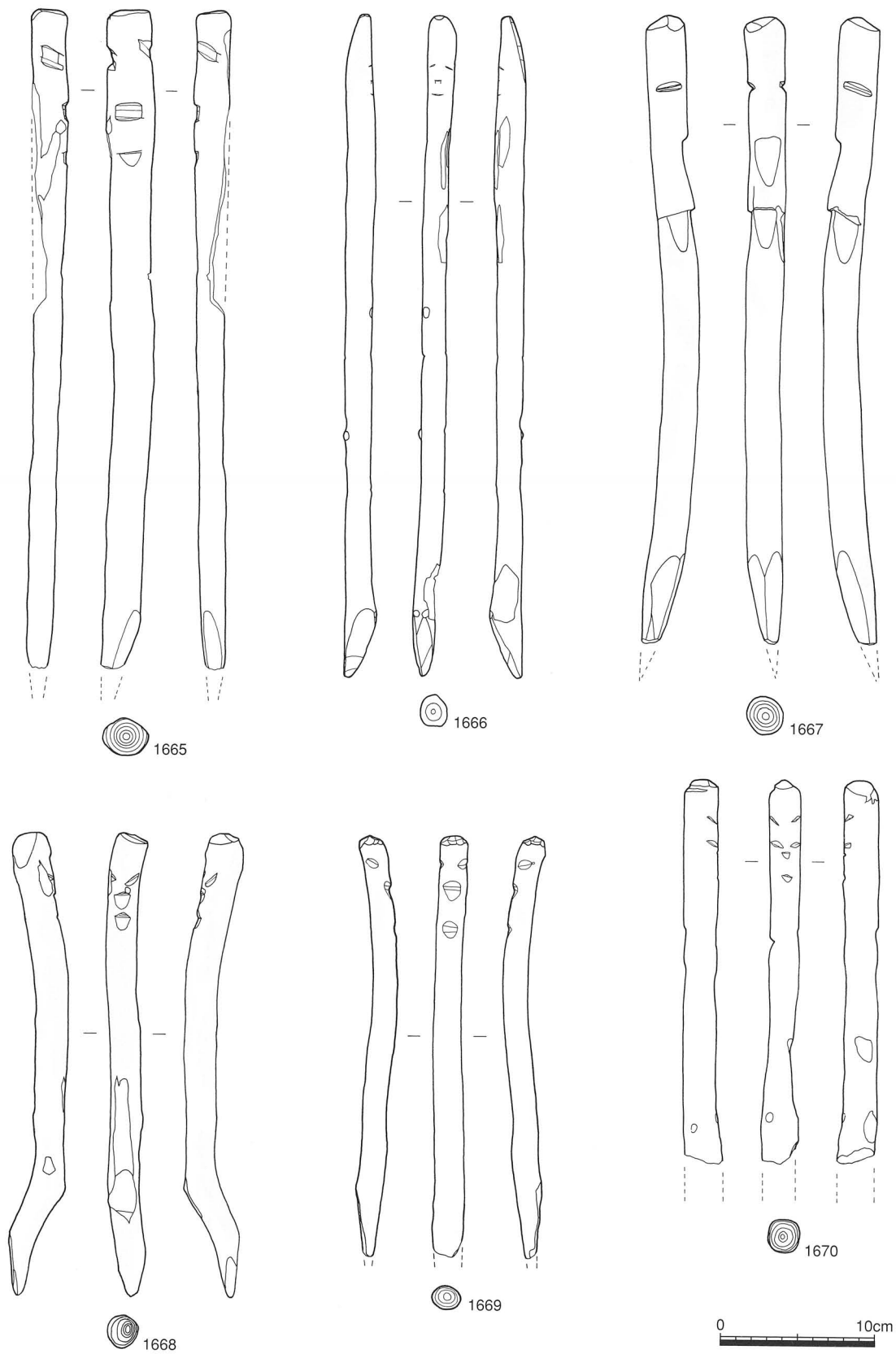
第368図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（容器）（3）



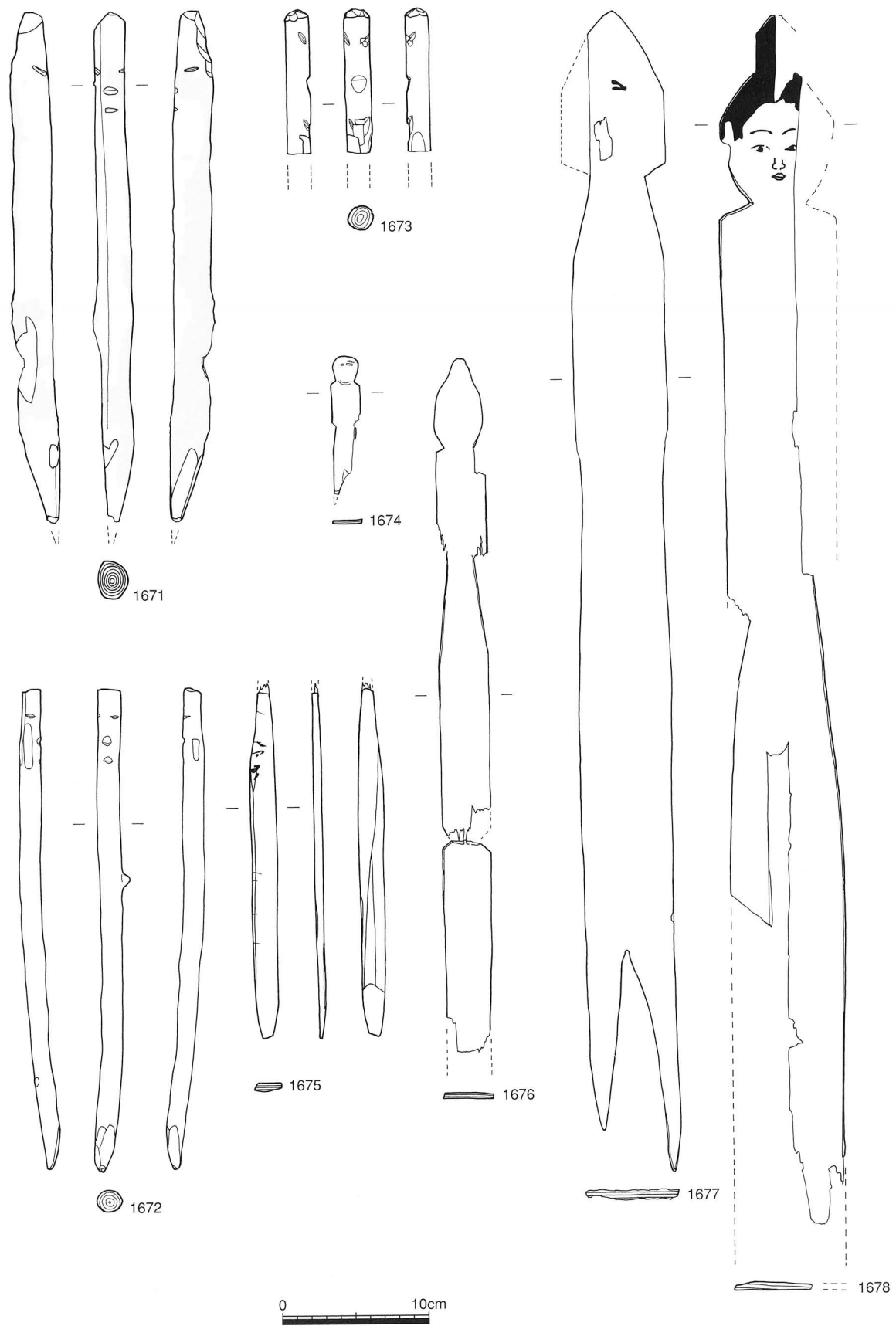
第369図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（容器・食事具・文房具・遊戯具）



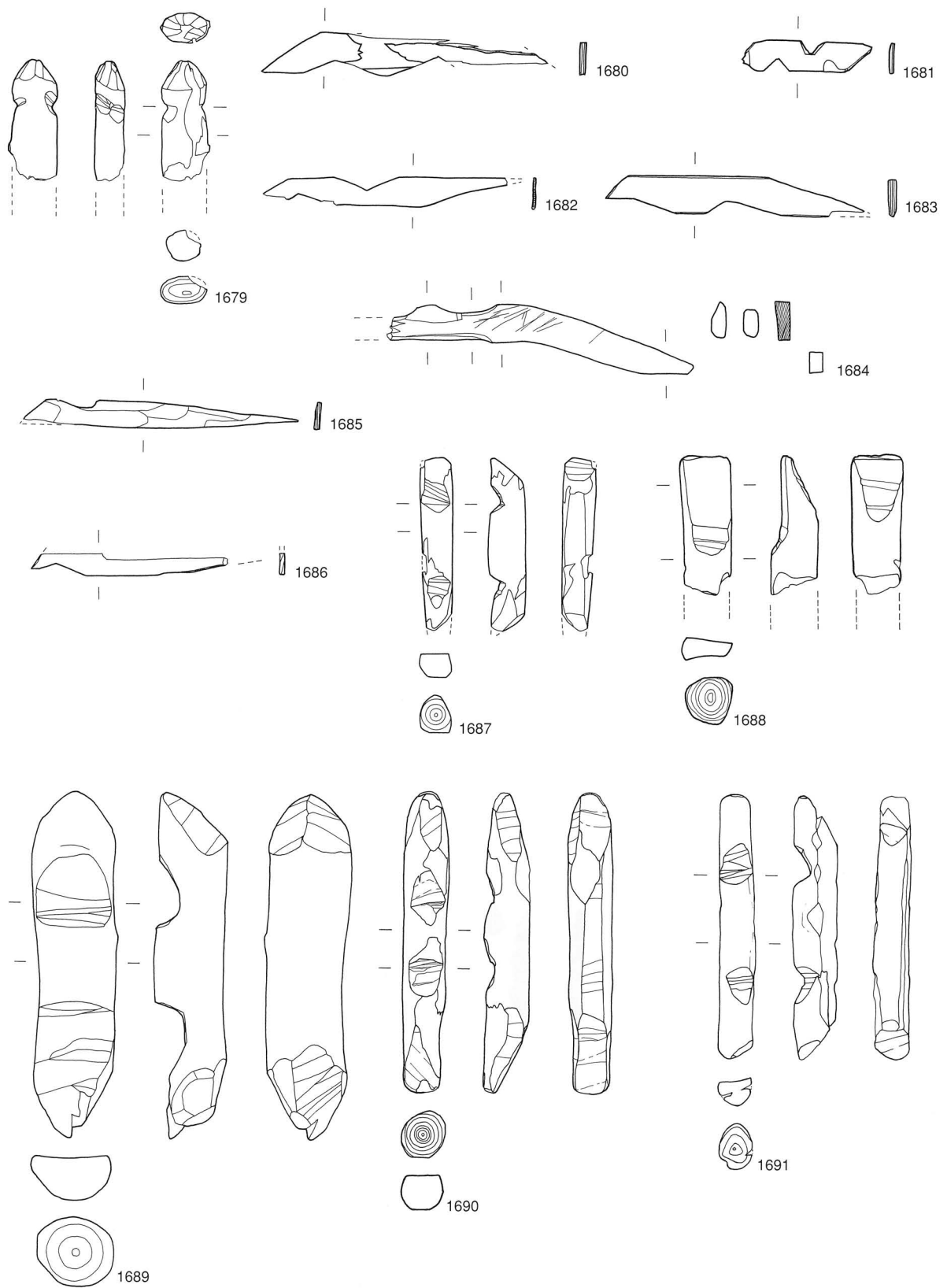
第370図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（1）



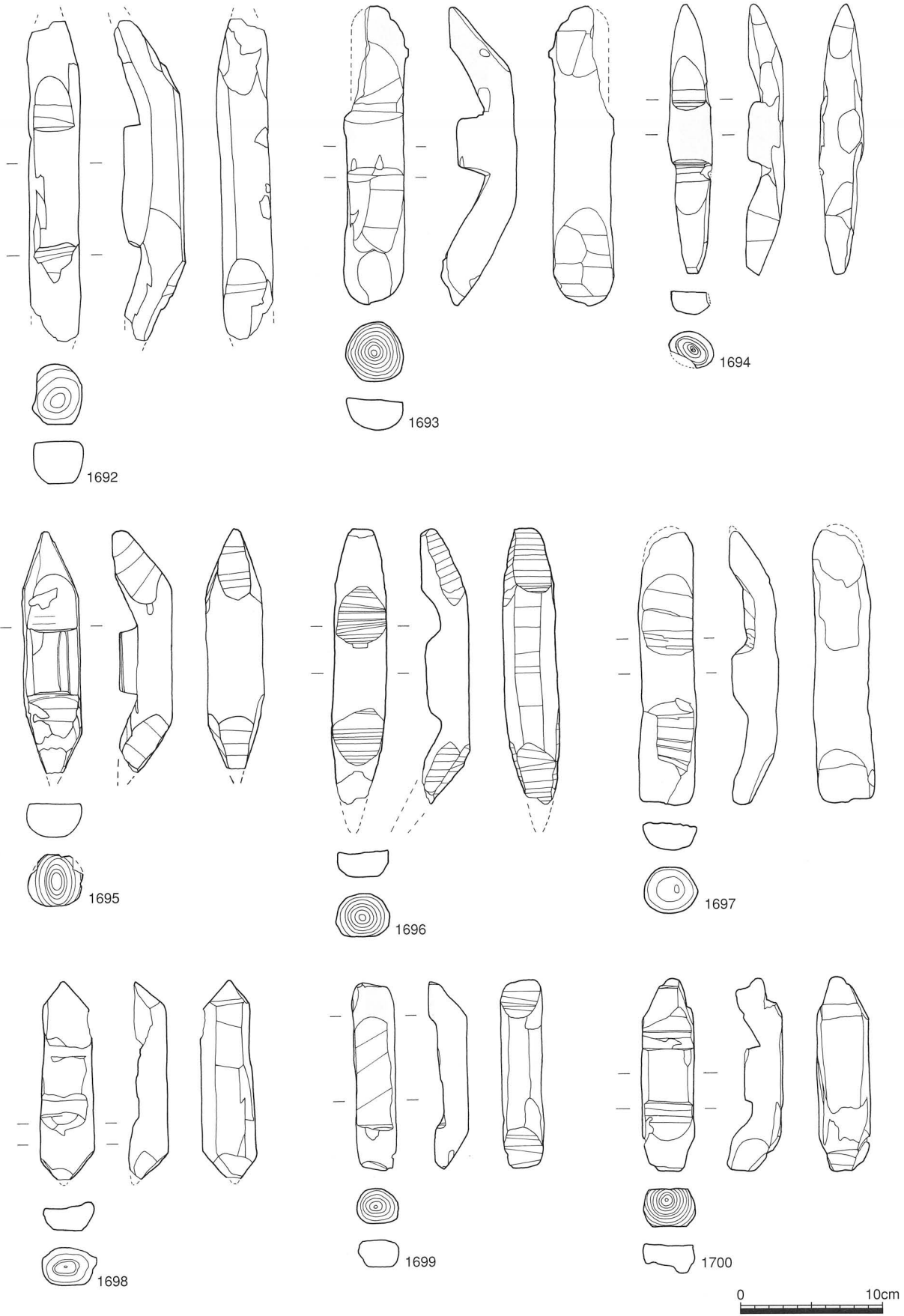
第371図 南区（2005年度2区）SR3001Ⅴ層出土木製品（祭祀具）（2）



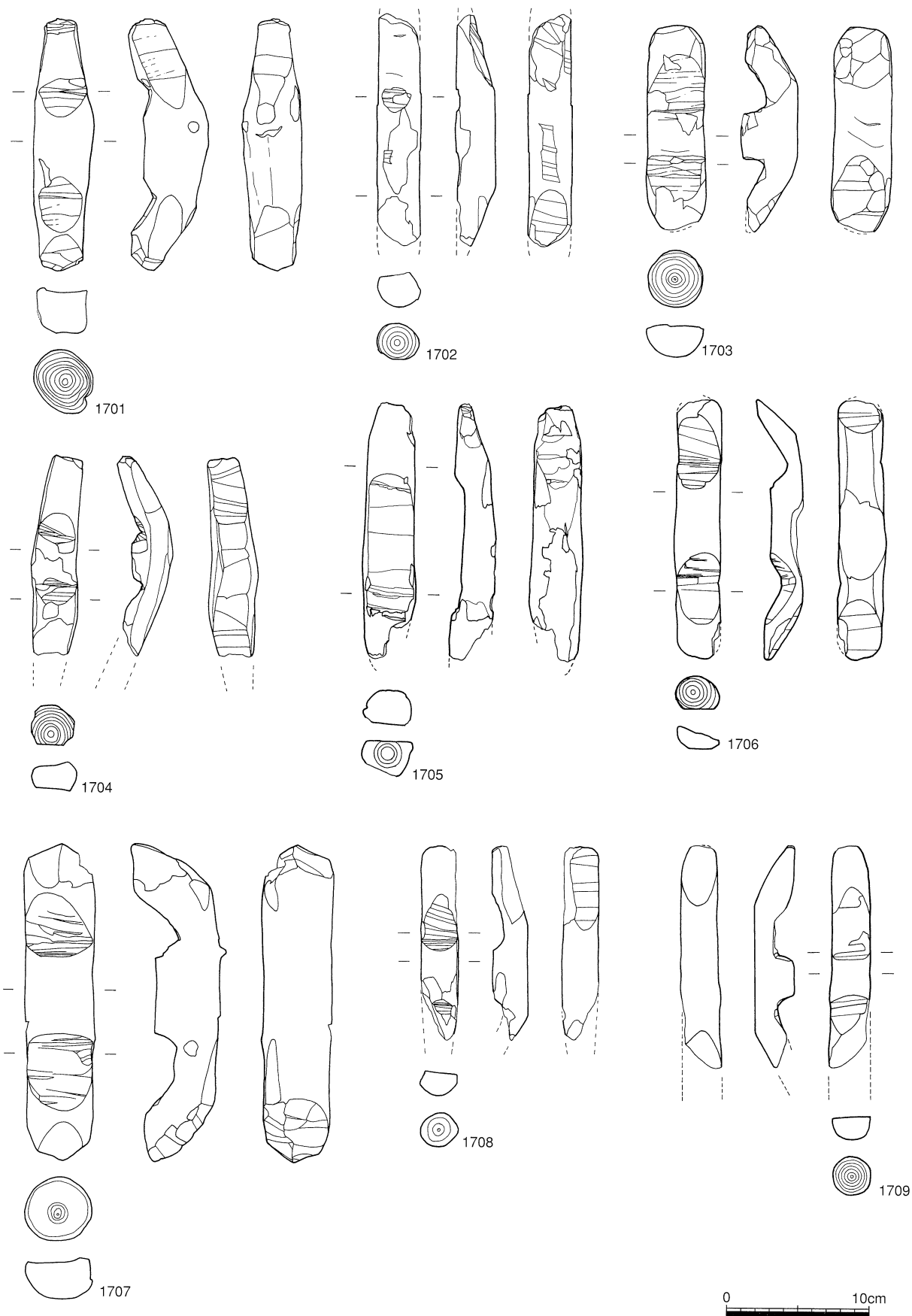
第372図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（3）



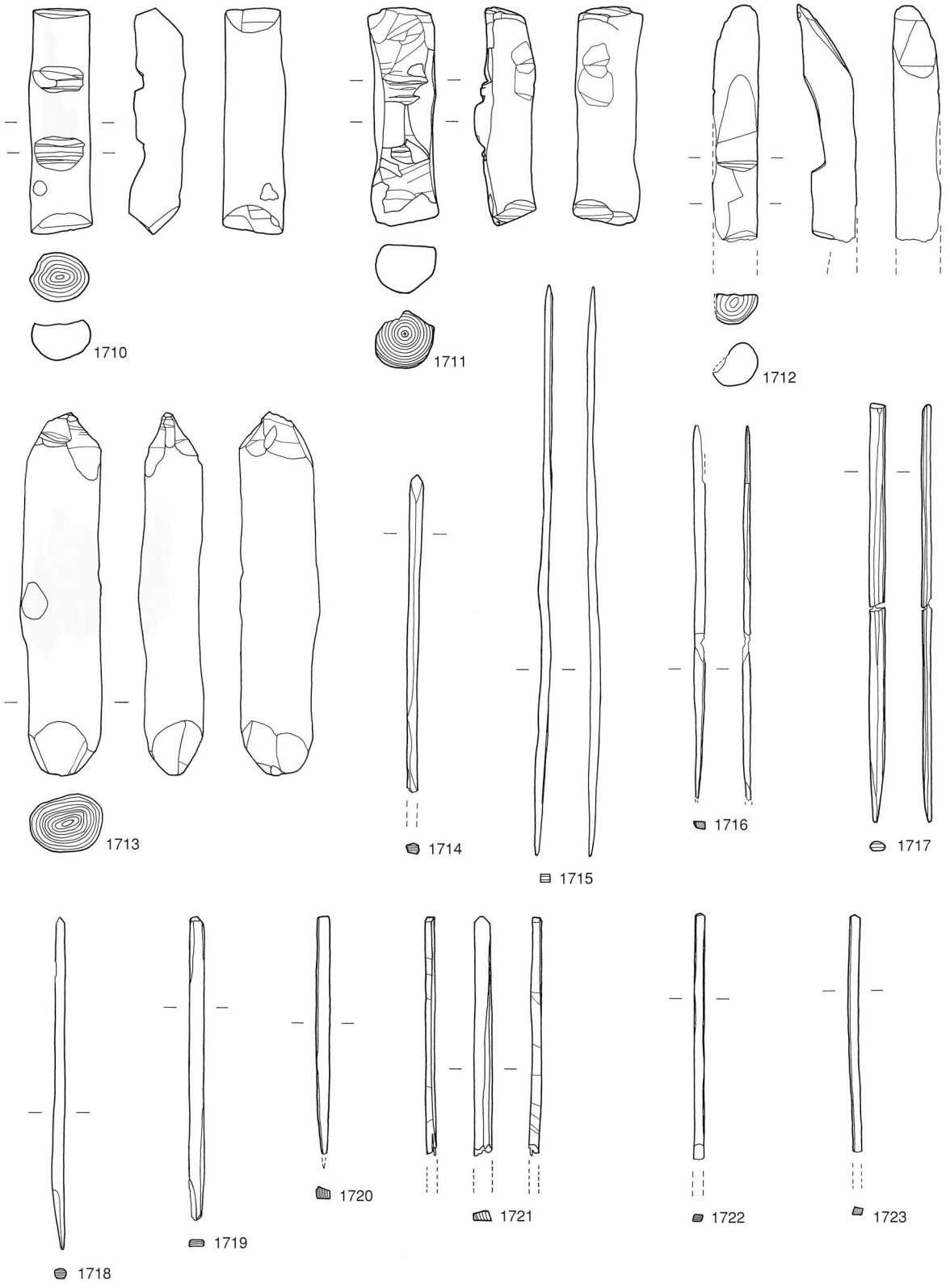
第373図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（4）



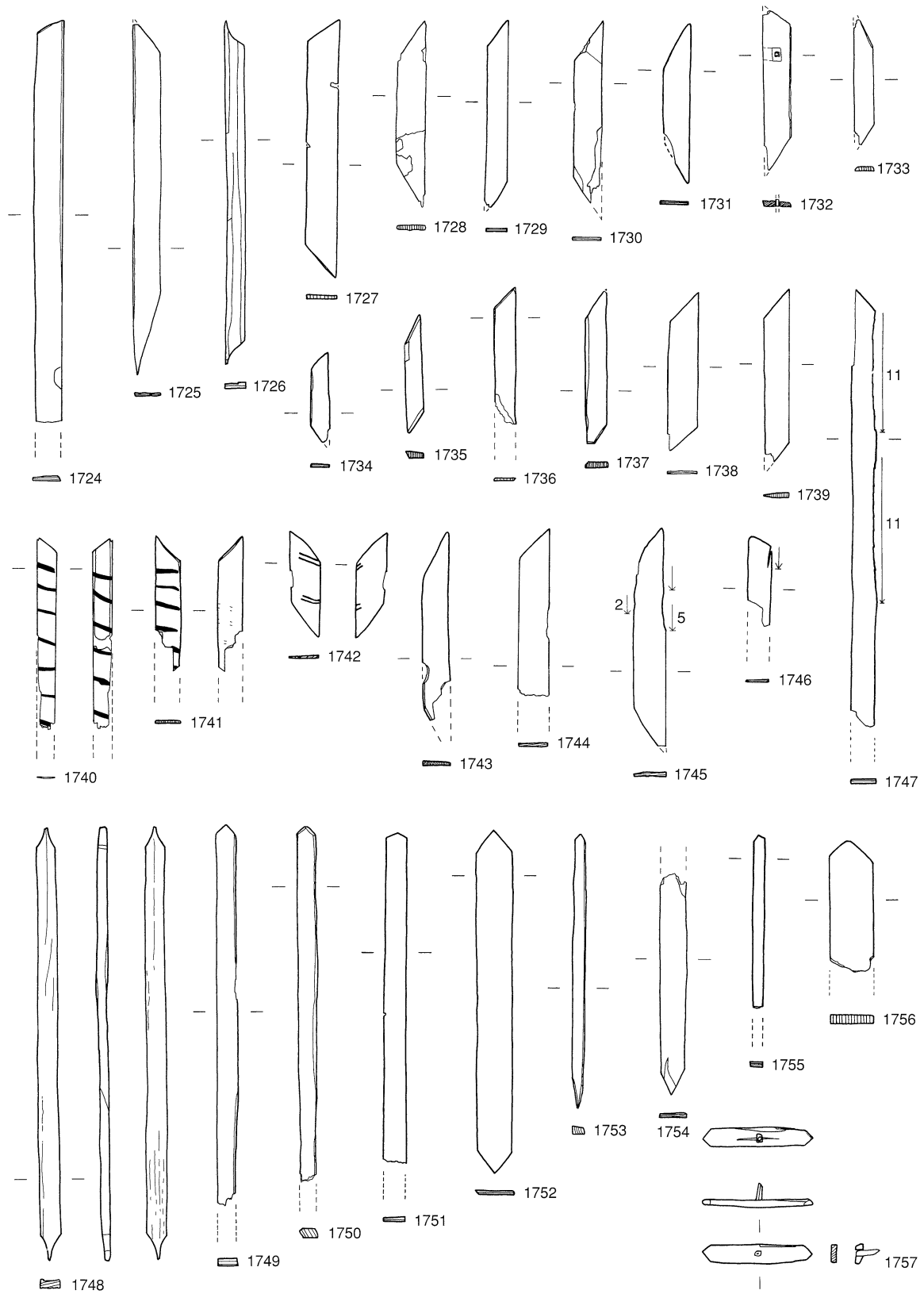
第374図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（5）



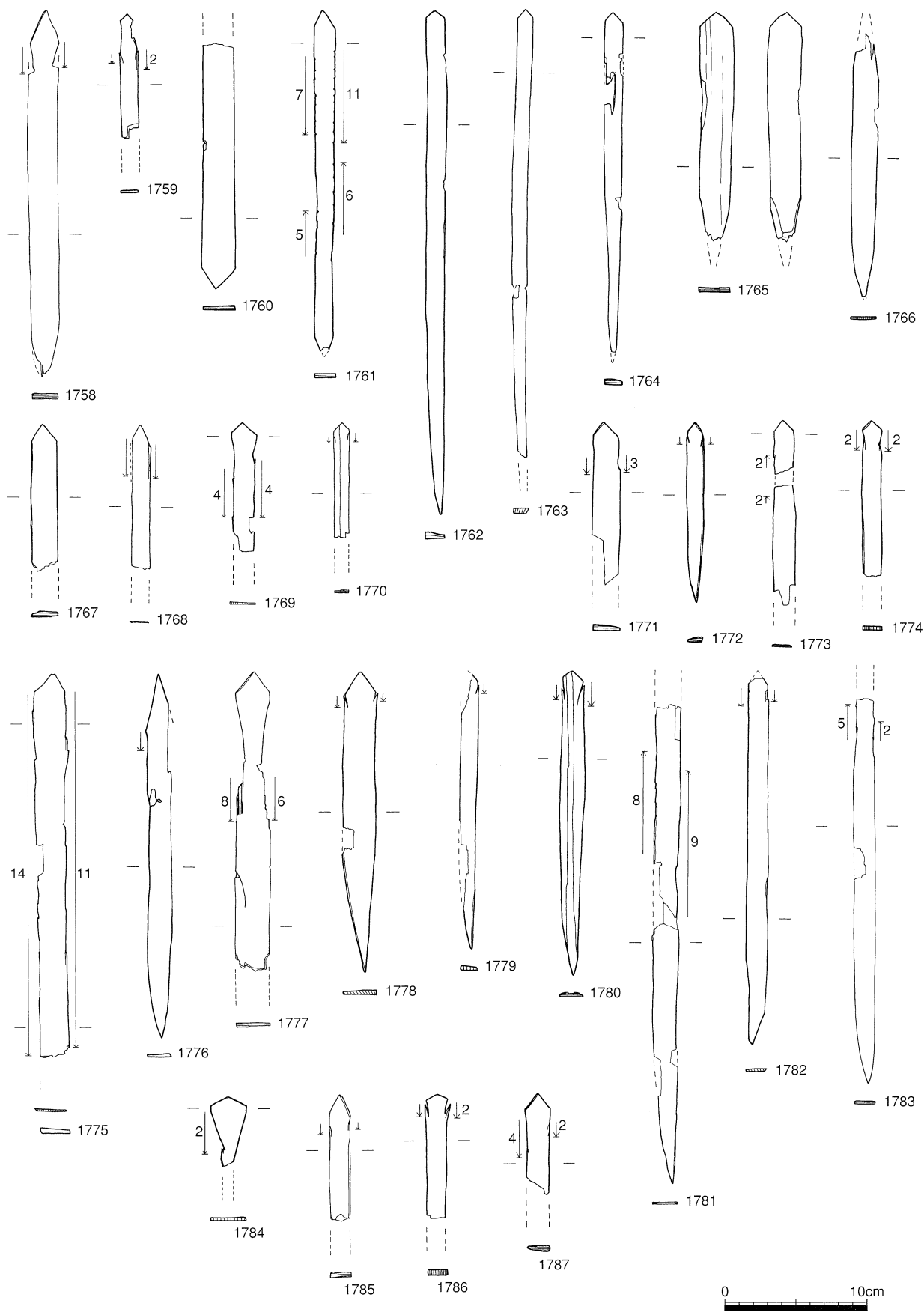
第375図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（6）



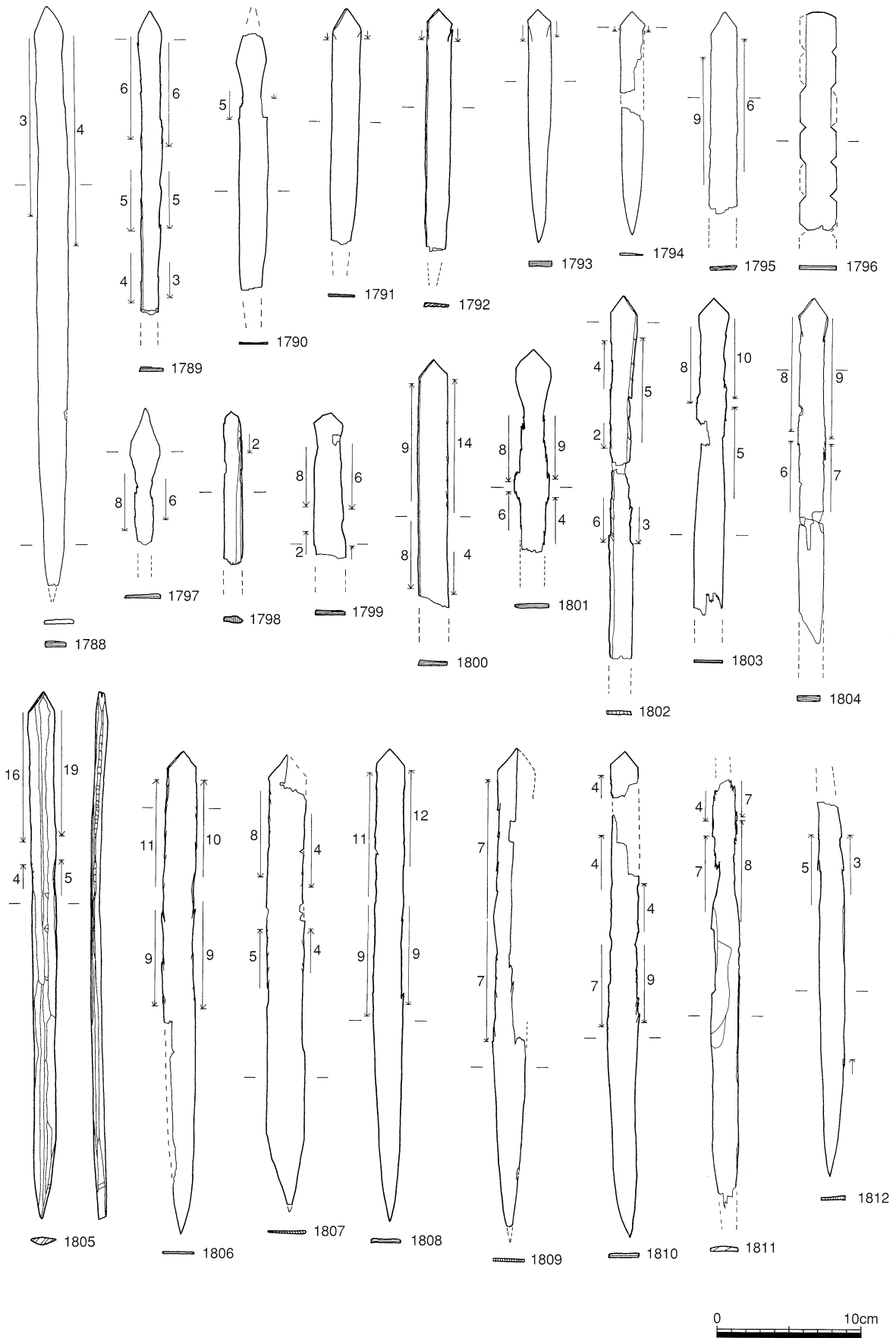
第376図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（7）



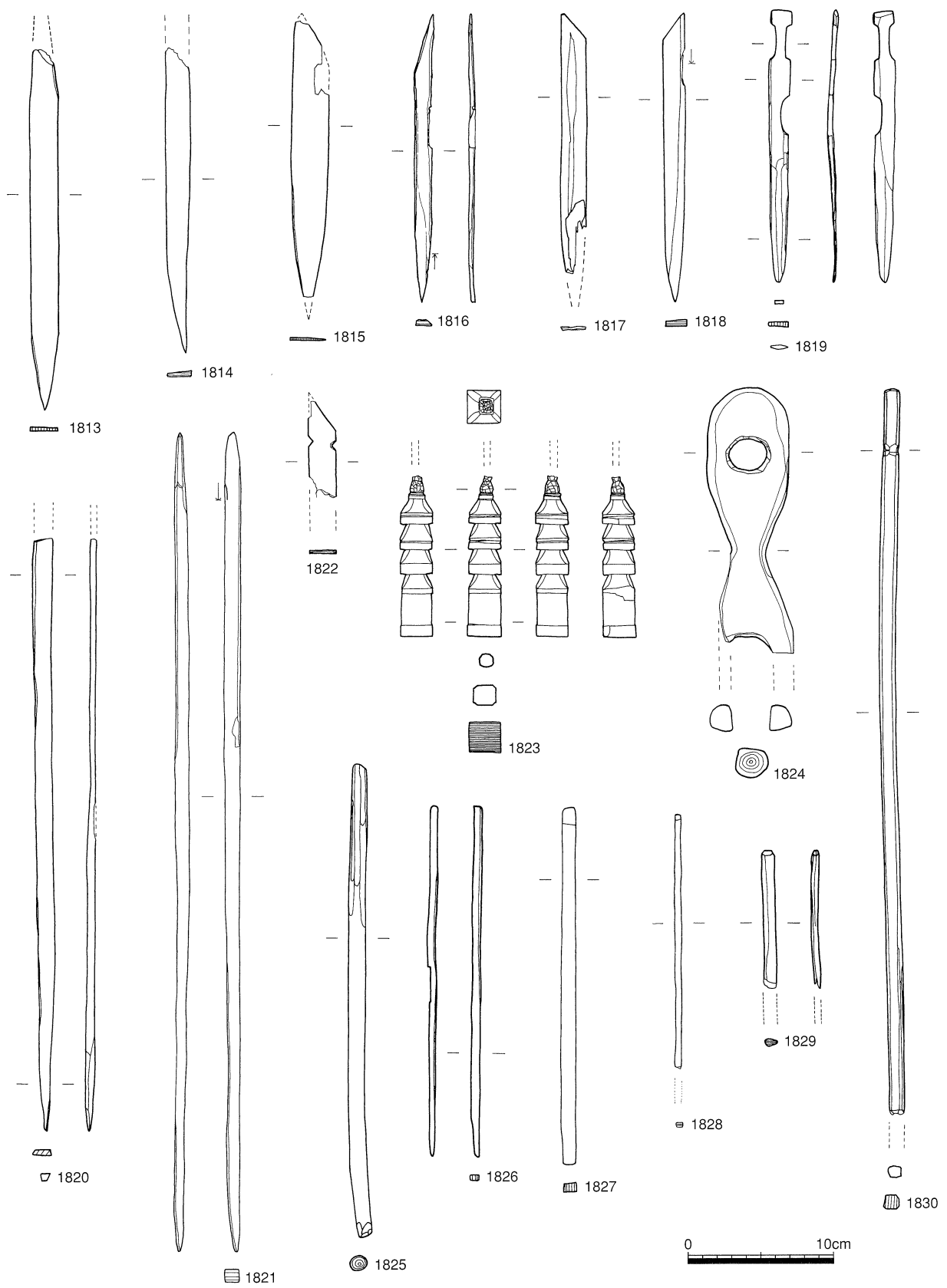
第377図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（8）



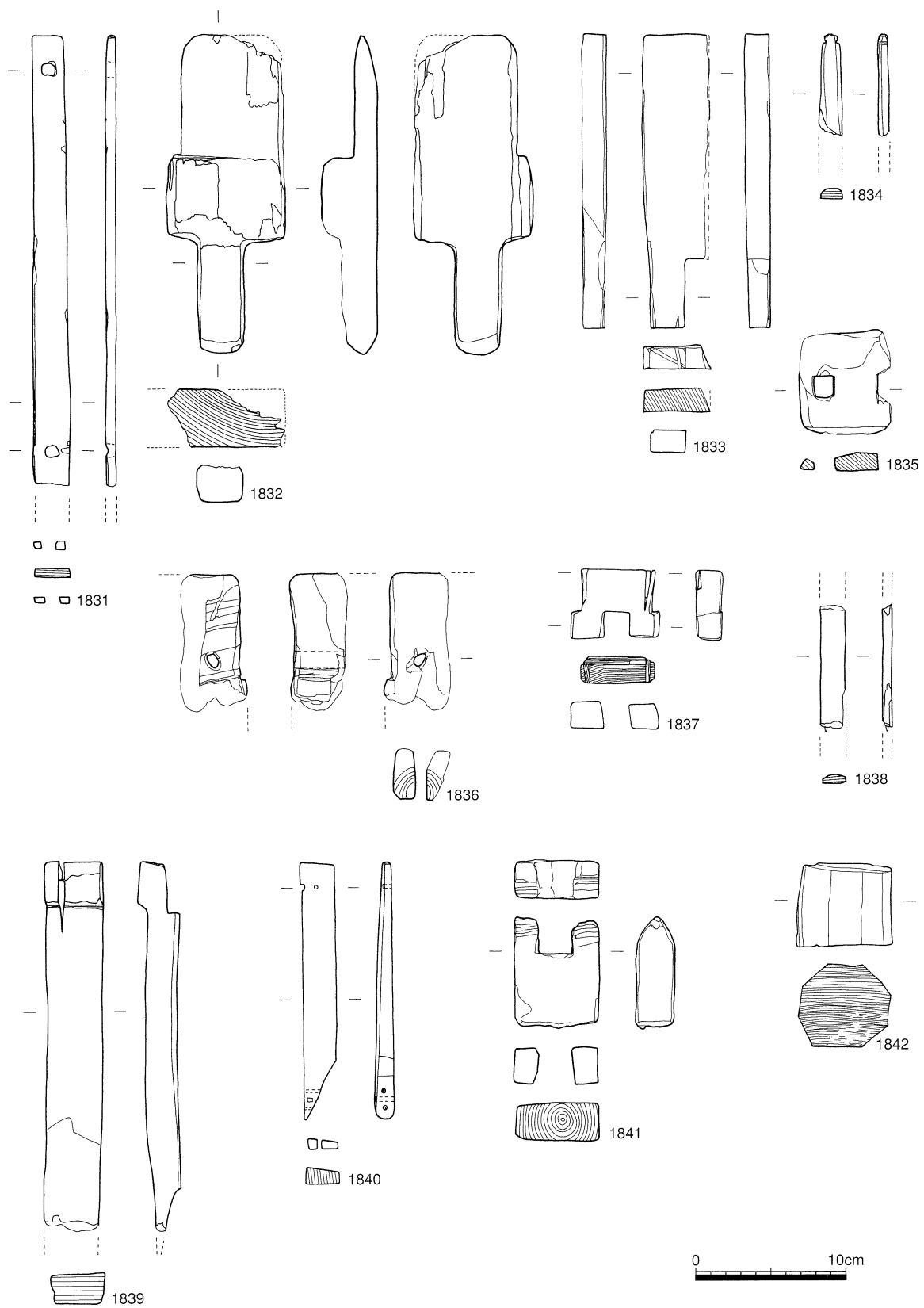
第378図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（9）



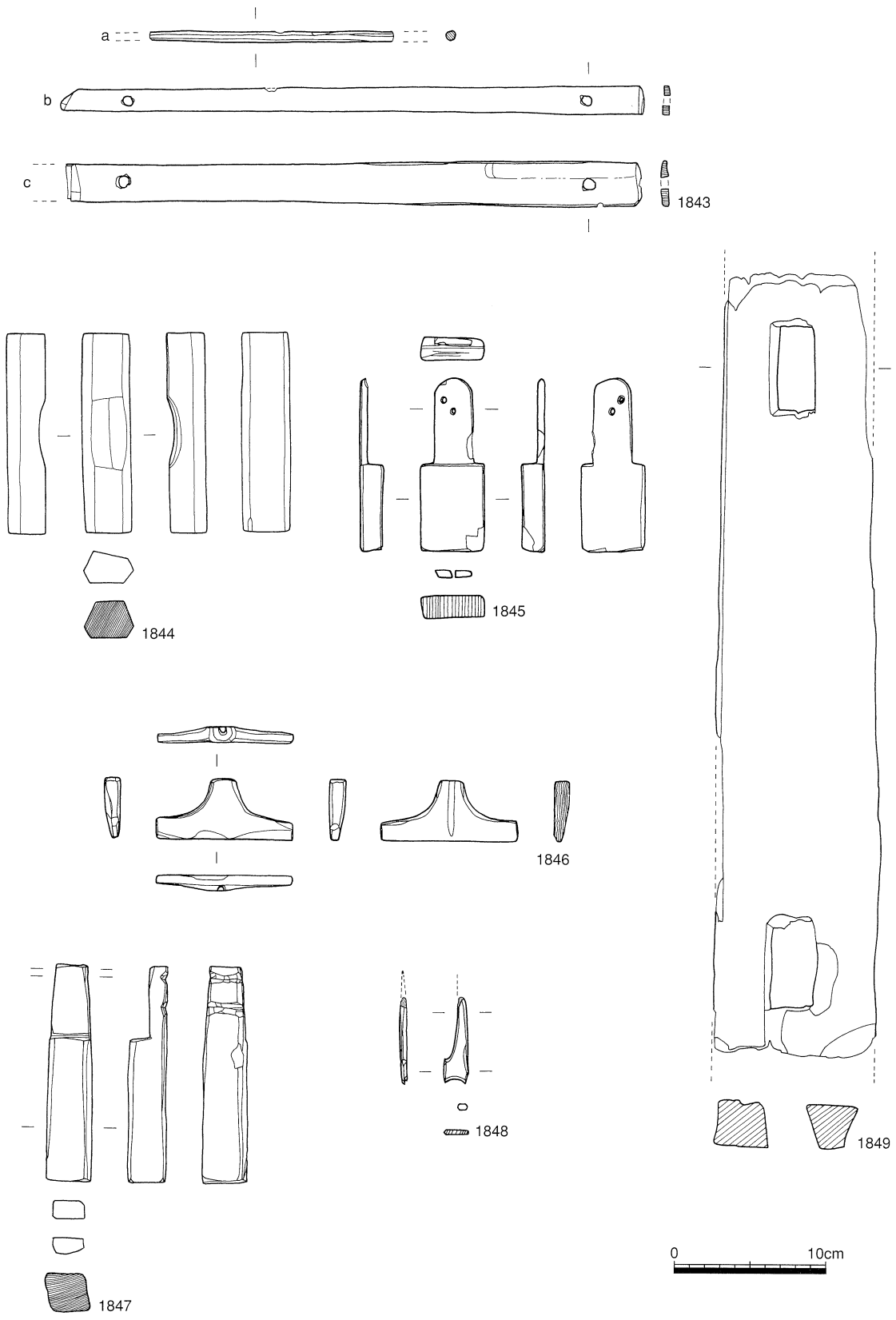
第379図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（10）



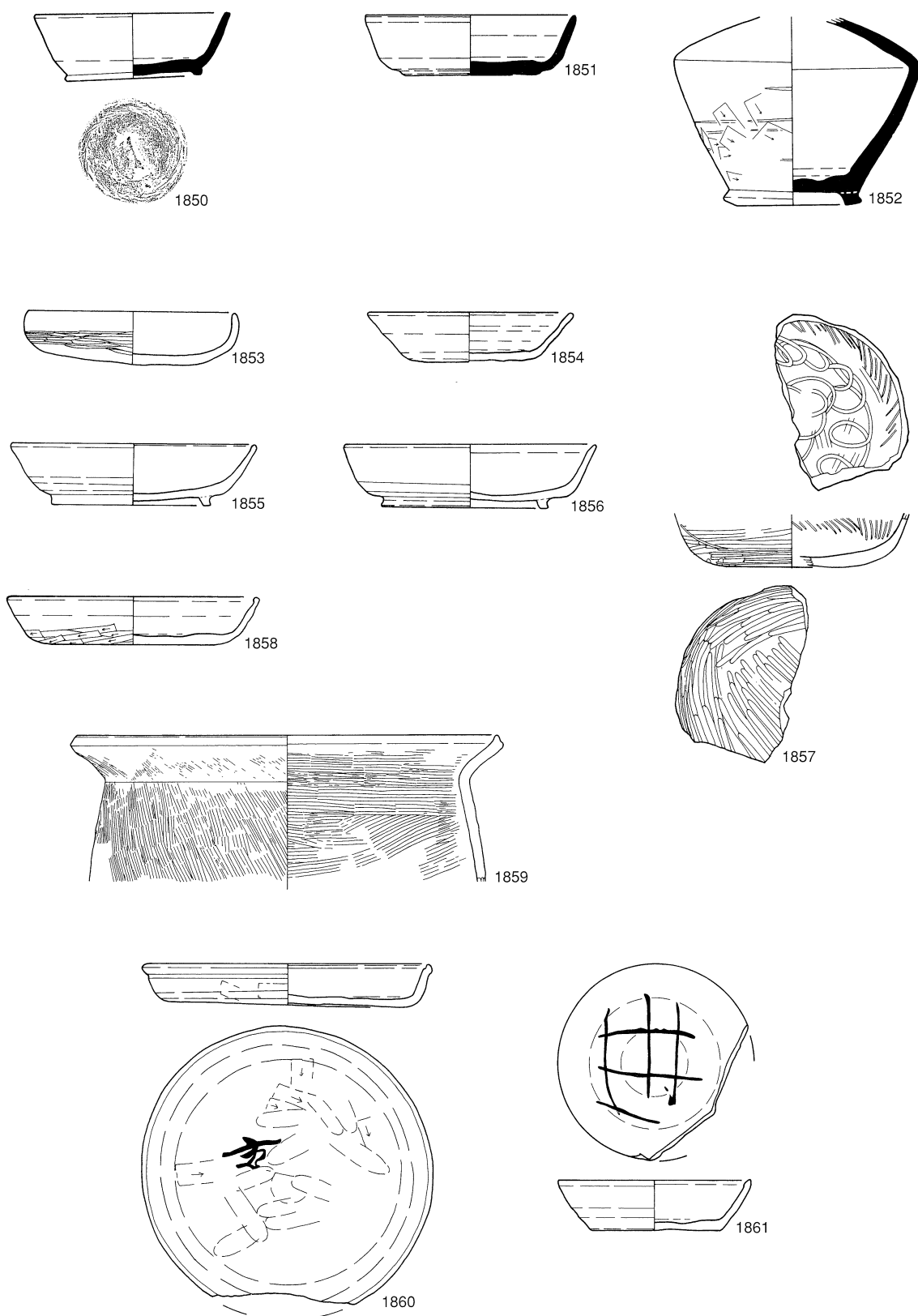
第380図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（祭祀具・雑具・部材）



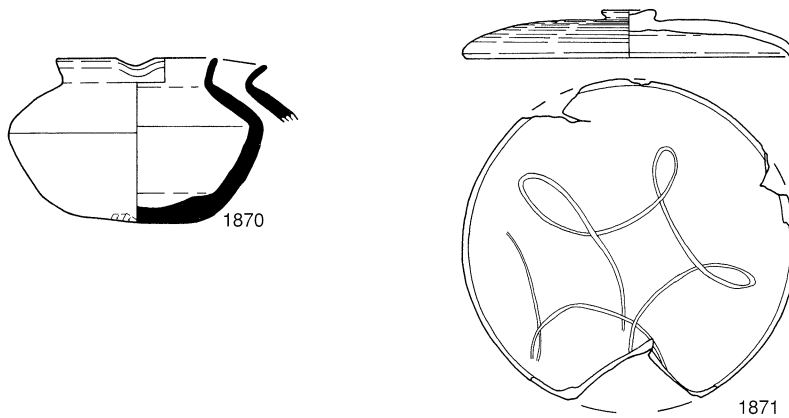
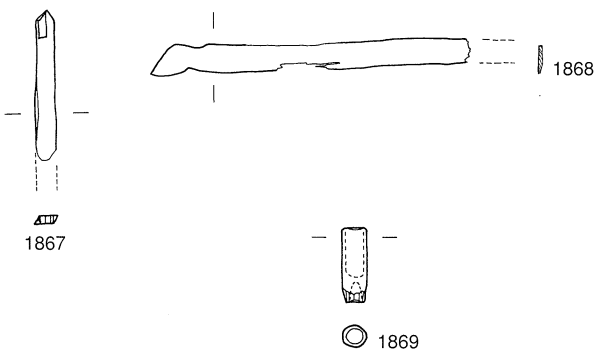
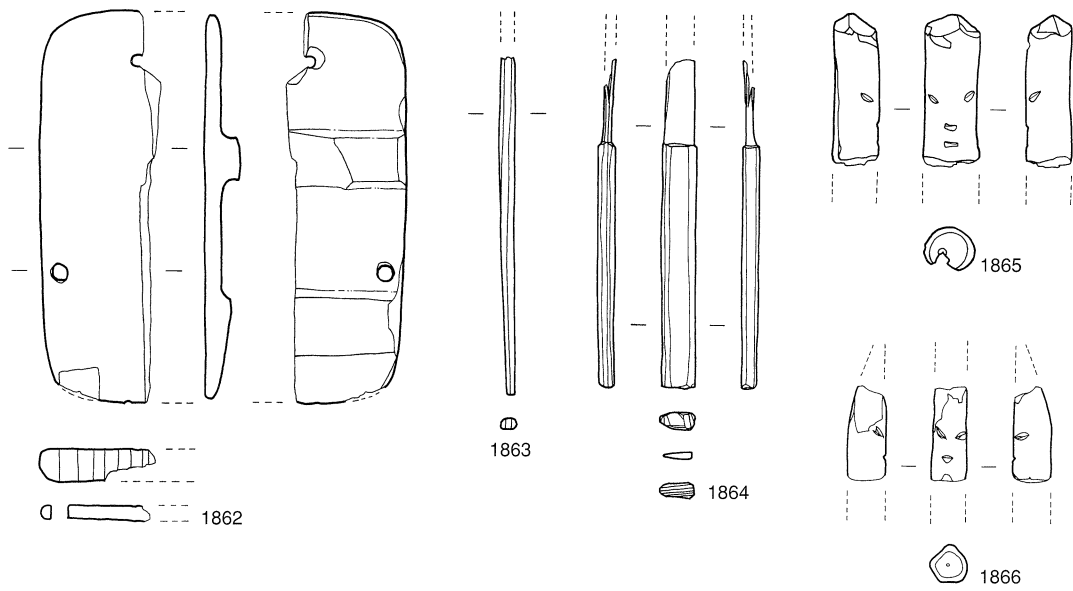
第381図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（部材）



第382図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土木製品（用途不明・建築部材）

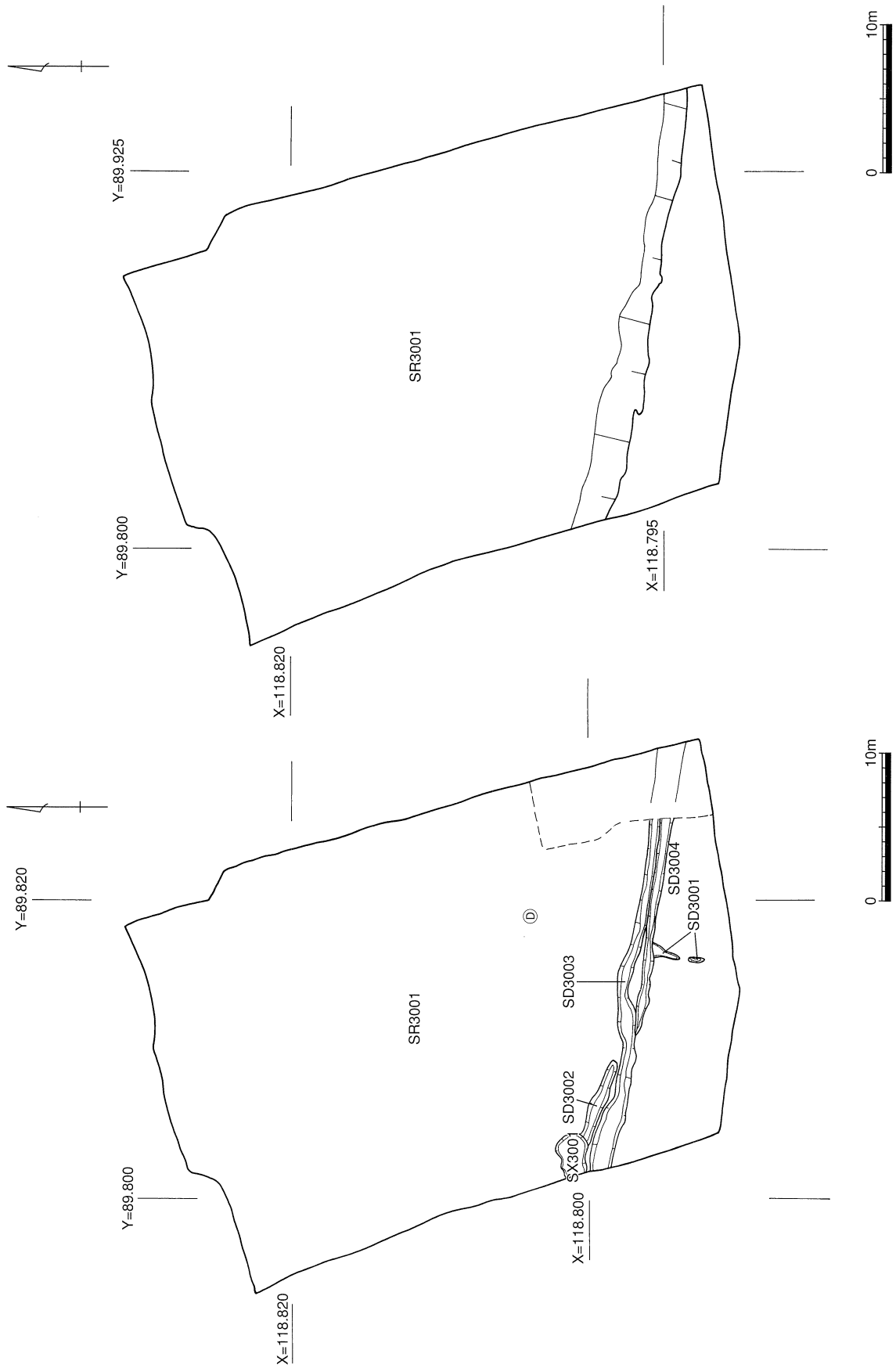


第383図 南区（2005年度2区）SR3001V層出土遺物

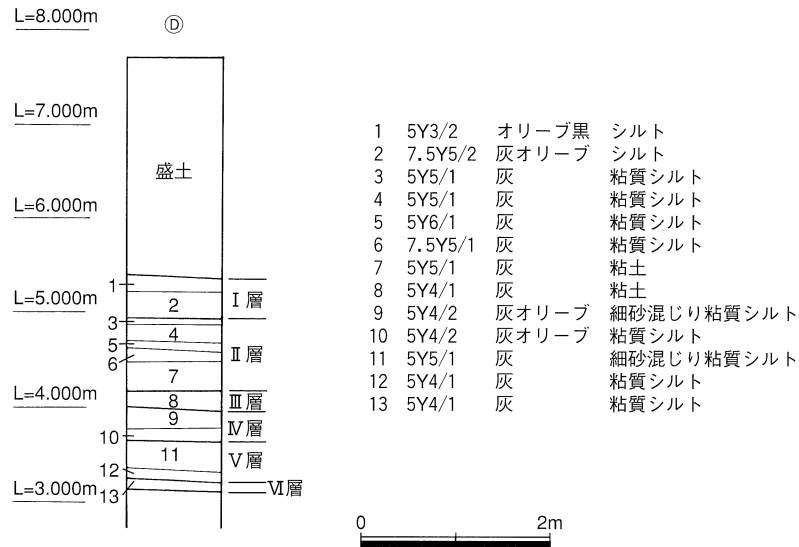


第384図 南区（2005年度2区）SR3001出土遺物

(27) 2004年度 1区



第385図 南区 (2004年度 1区) 第3遺構面 調査区遺構平面図



第386図 南区（2004年度1区）土層柱状図

溝（SD3001）（第387図）

位置

大グリッド Loc.F-1、中グリッド γ 、 δ -IV、小グリッド S、T-4 に位置する。

規模と形状

検出長3.40m、最大幅0.80m、最大深度0.06m の溝である。

土層

遺構の堆積土は暗灰黄色を呈する粘質シルトによる単一層である。

溝（SD3002）（第387図）

位置

大グリッド Loc.F-1、中グリッド γ 、 δ -IV、小グリッド T、A-1、2 に位置する。

規模と形状

検出長5.60m、最大幅0.65m、最大深度0.17m の溝である。N-70°-W を軸とした直線状を呈する。

土層

遺構の堆積土は灰オリーブ色を呈するシルトによる単一層である。

溝（SD3003）（第388図）

位置

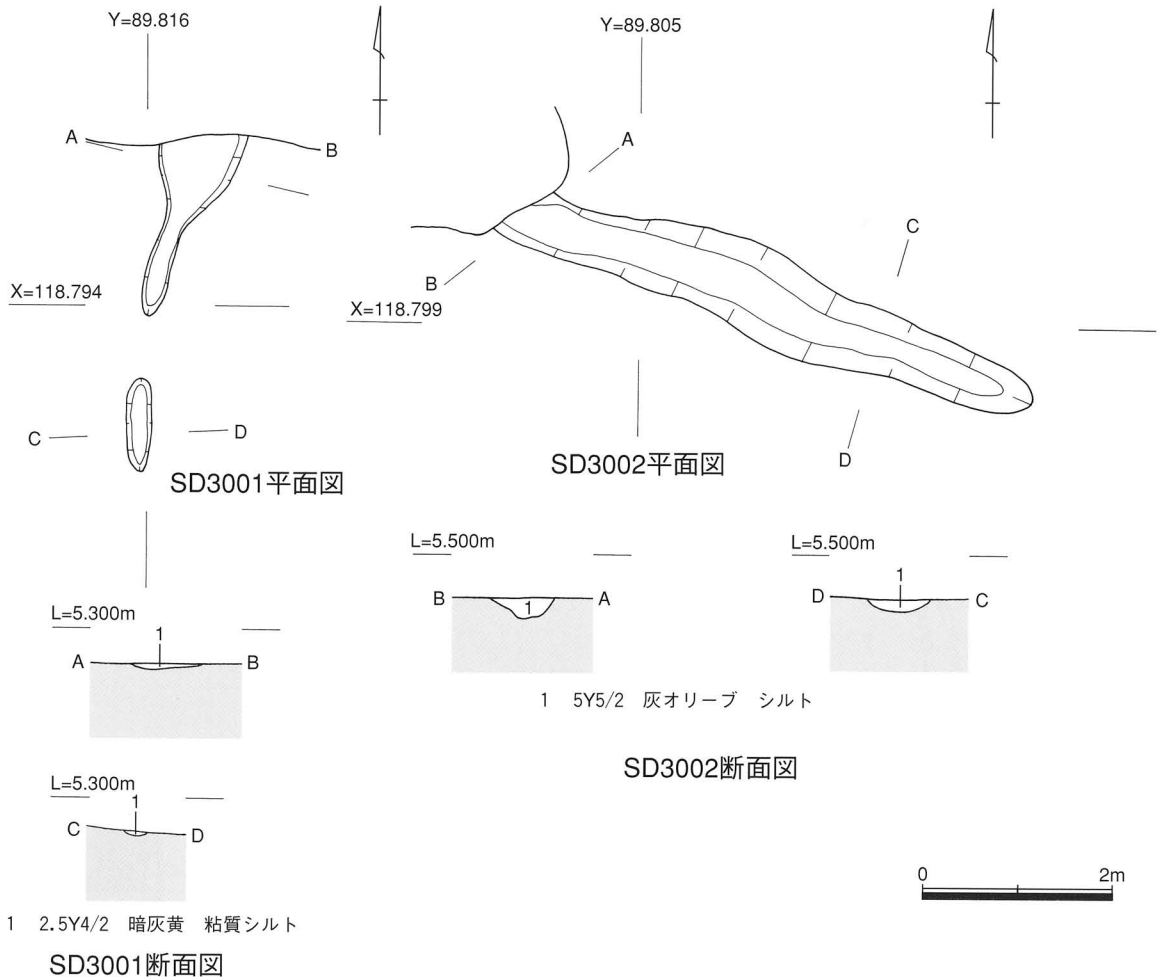
大グリッド Loc.F-1、中グリッド γ -IV、小グリッド T-1～5 に位置する。

規模と形状

検出長23.52m、最大幅0.95m、最大深度0.05m の溝である。N-81°-W を軸に、やや蛇行して掘られている。

土層

遺構の堆積土は暗灰黄色を呈するシルトによる単一層である。



第387図 南区 (2004年度1区) SD3001・SD3002平・断面図

溝 (SD3004) (第388図)

位置

大グリッド Loc.F-1、中グリッド γ -IV、小グリッド S、T-3~5 に位置する。

規模と形状

検出長15.20m、最大幅0.60m、最大深度0.15m の溝である。N-82°-W を軸とした直線状を呈する。

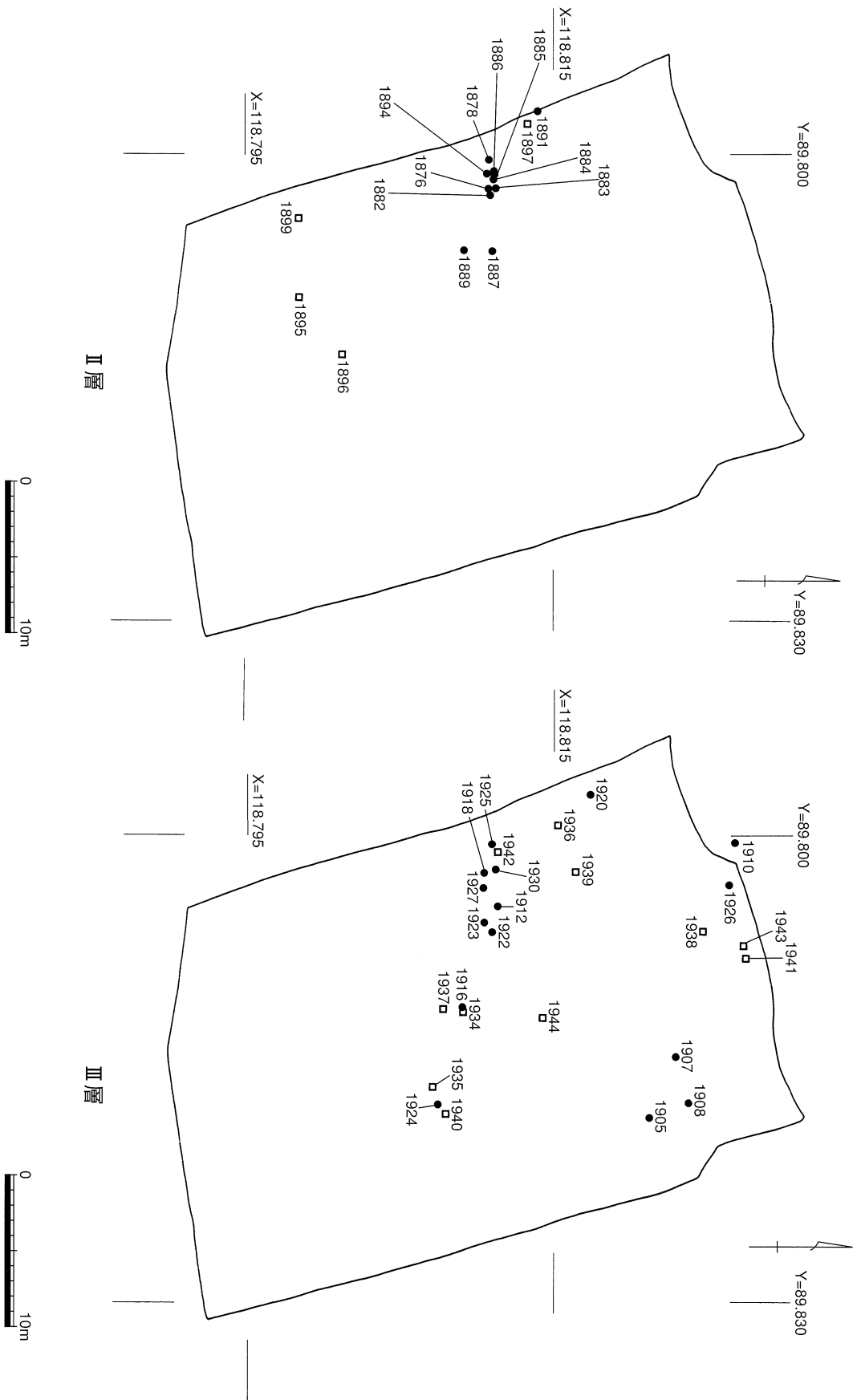
土層

A-B は黄灰色を呈する粘質シルトによる単一層である。

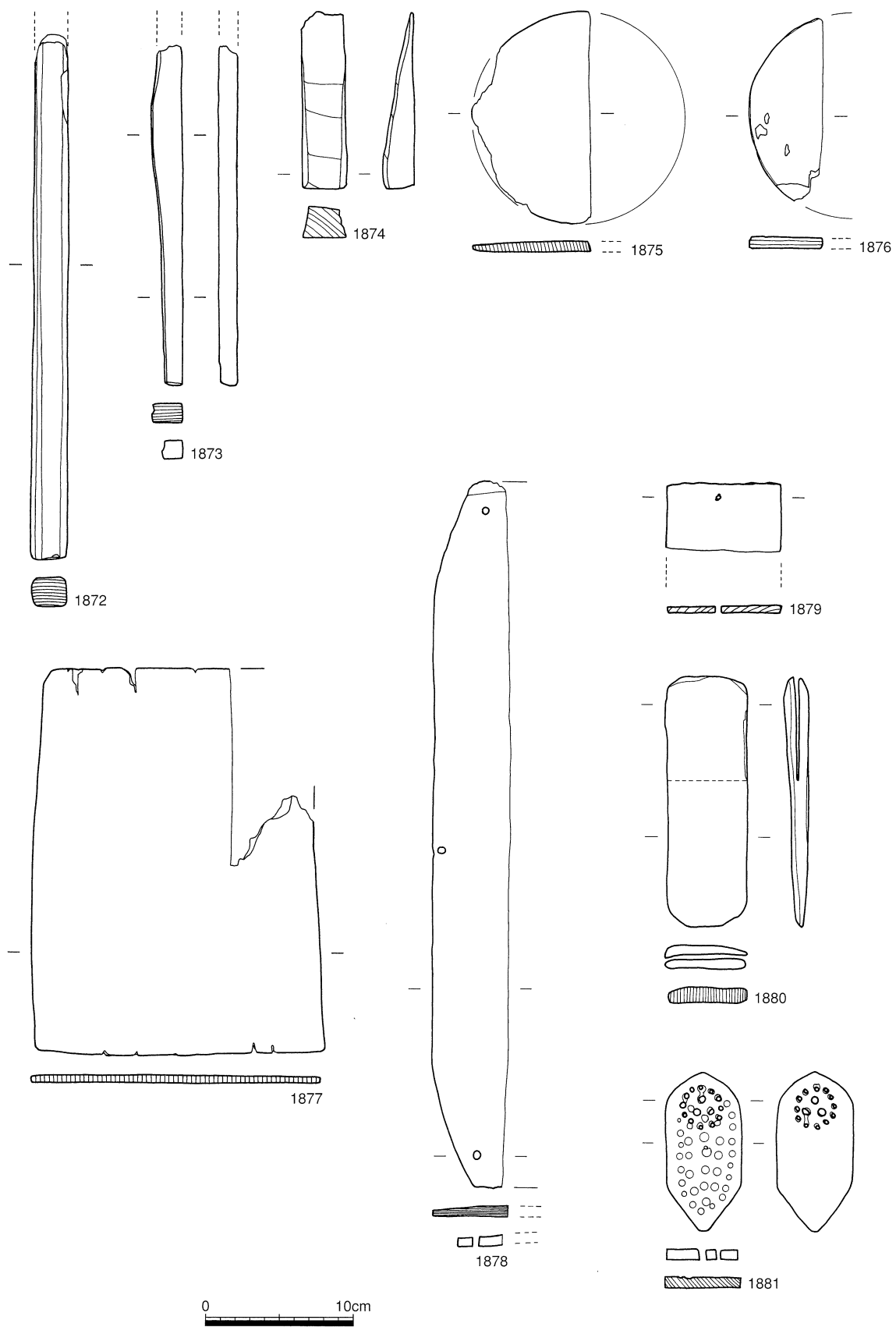
C-D は暗灰黄色を呈するシルトによる単一層である。



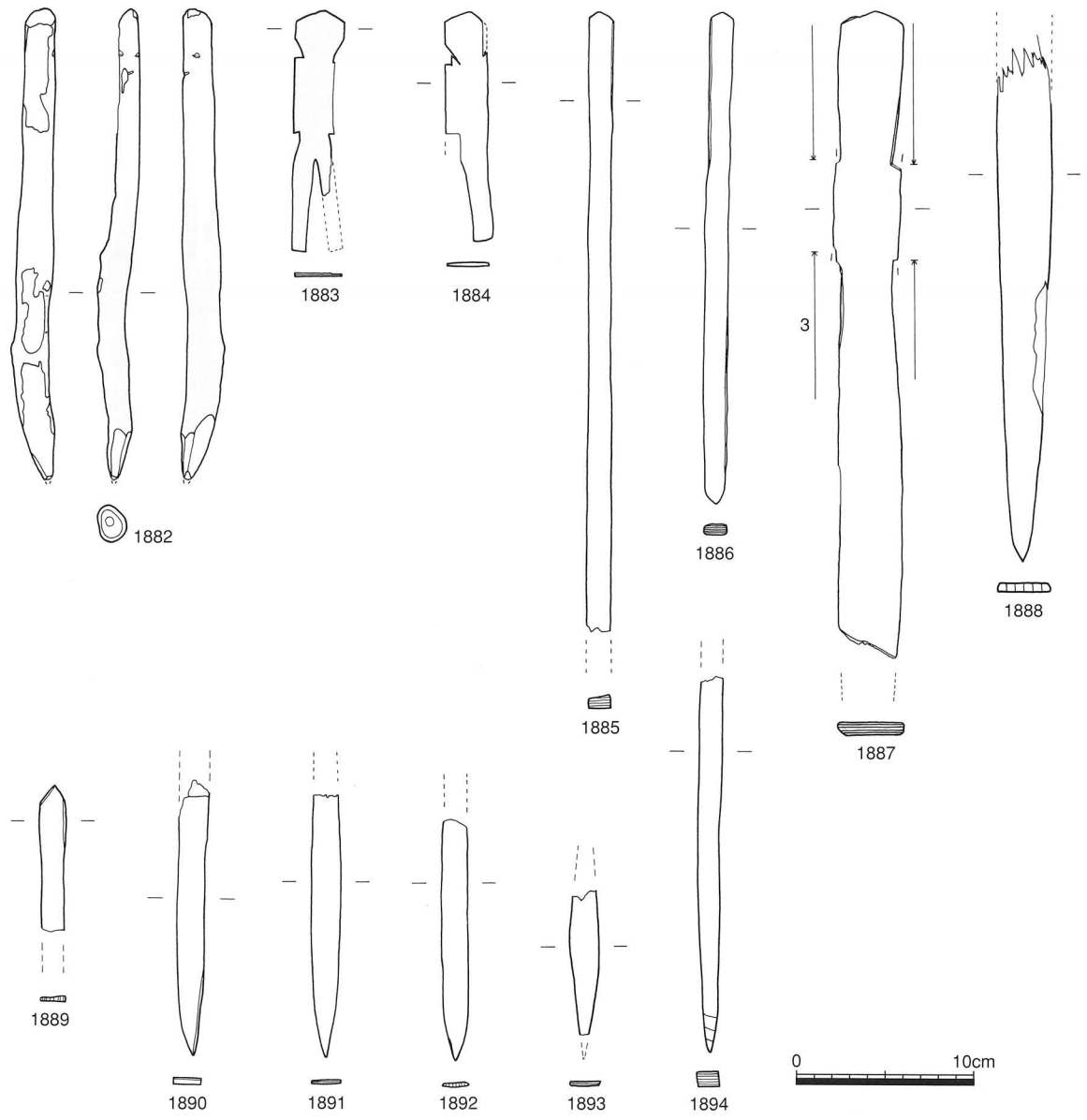
第388図 南区(2004年度1区) SD3003・SD3004平・断面図



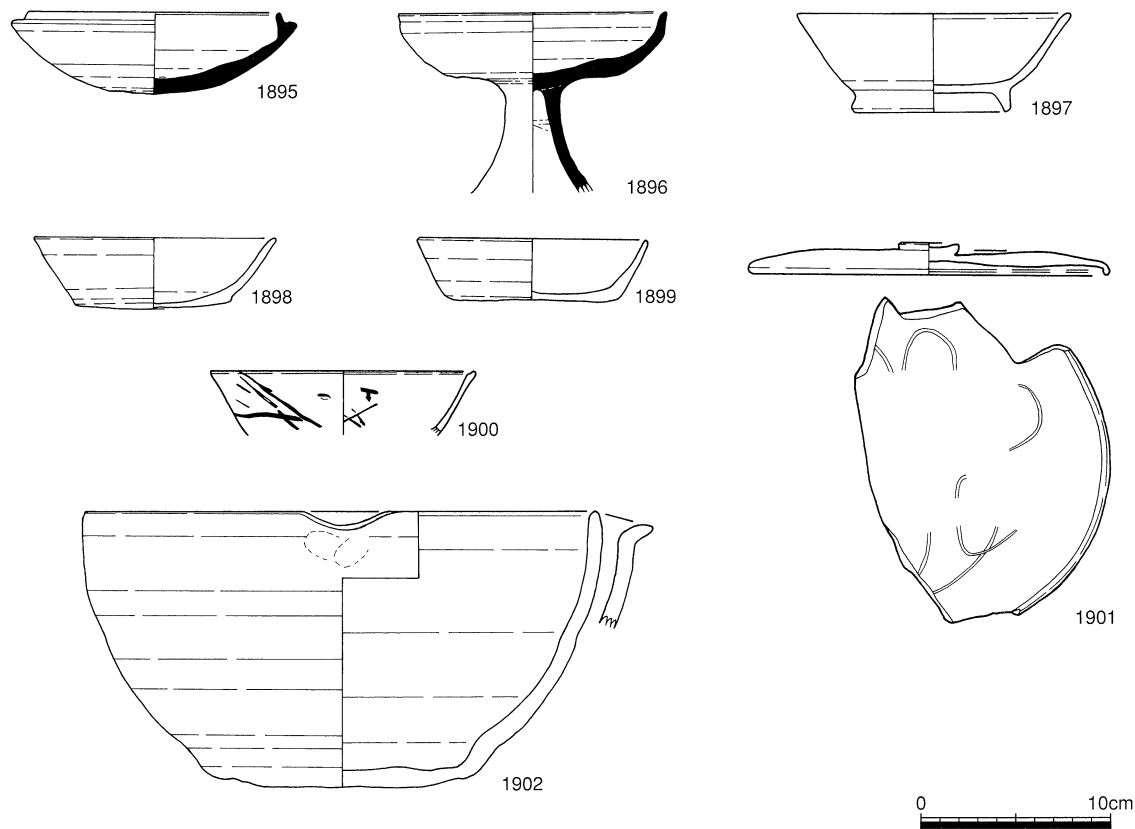
第389図 南区(2004年度1区)SR3001 II層・III層遺物出土状況ドット図



第390図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅱ層出土木製品（工具・用途不明）



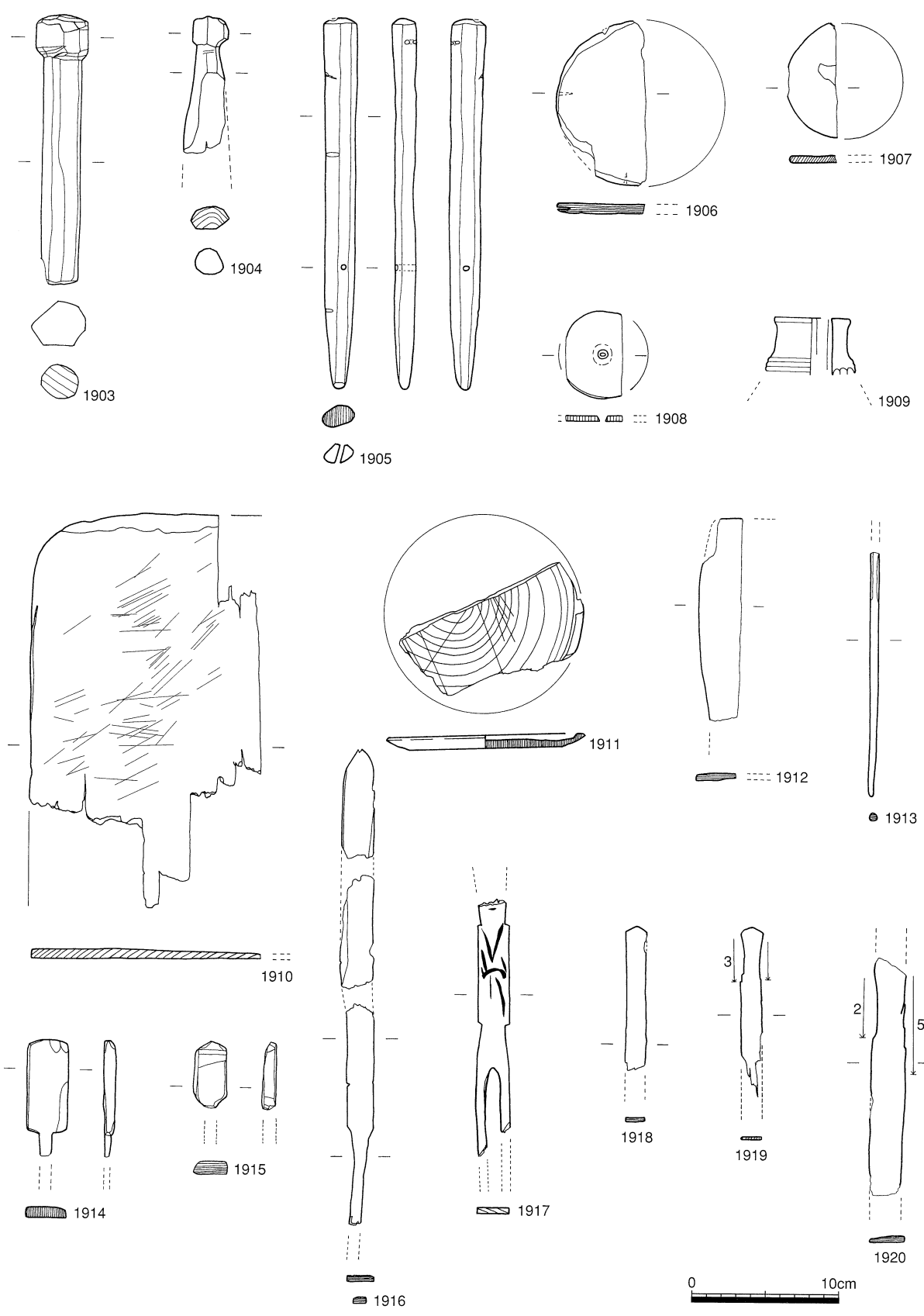
第391図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅱ層出土木製品（祭祀具）



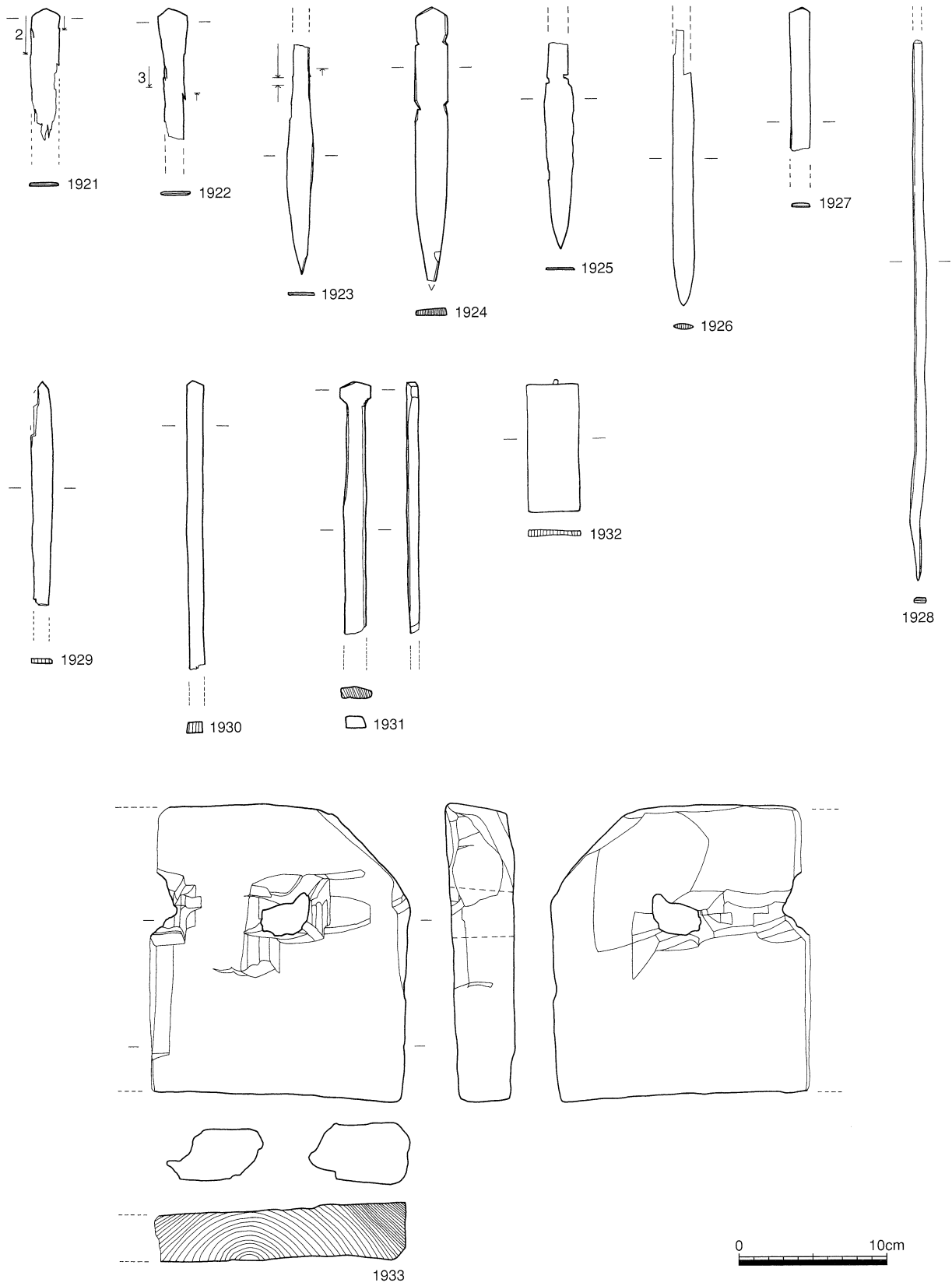
第392図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅱ層出土遺物

自然流路（SR3001）Ⅱ層出土遺物（第389～392図）

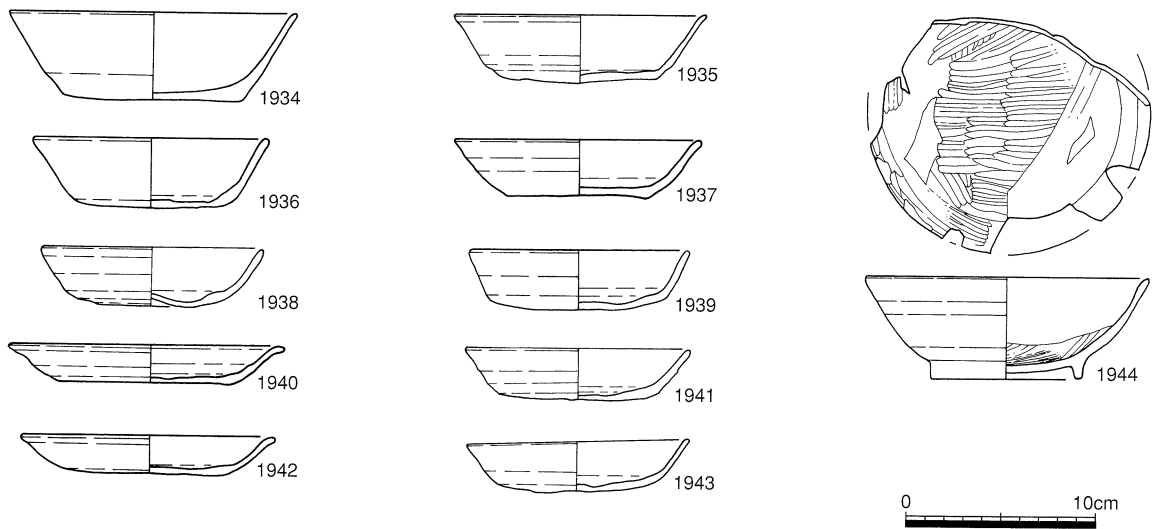
木製品は23点を図化した。1874は楔である。1875、1876は円形曲物の底板である。1877は方形曲物の底板である。1878は楕円形曲物の底板である。1882は円筒状人形である。1883、1884は正面全身人形である。樹皮のような素材で作られている。1885～1894は斎串である。土器は8点を図化した。1895は須恵器の杯身である。1896は須恵器の高杯である。1897は土師器の椀である。1898、1899は土師器の杯である。1900は墨書土器である。土師器の椀の内外面に墨書の線が数本見える。1901は土師器の杯蓋である。内面に螺旋状暗文が施される。1902は陶器の捏鉢である。



第393図 南区(2004年度1区)SR3001Ⅲ層出土木製品(工具・農具・容器・食事具・文房具・祭祀具)



第394図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅲ層出土木製品（祭祀具・部材）



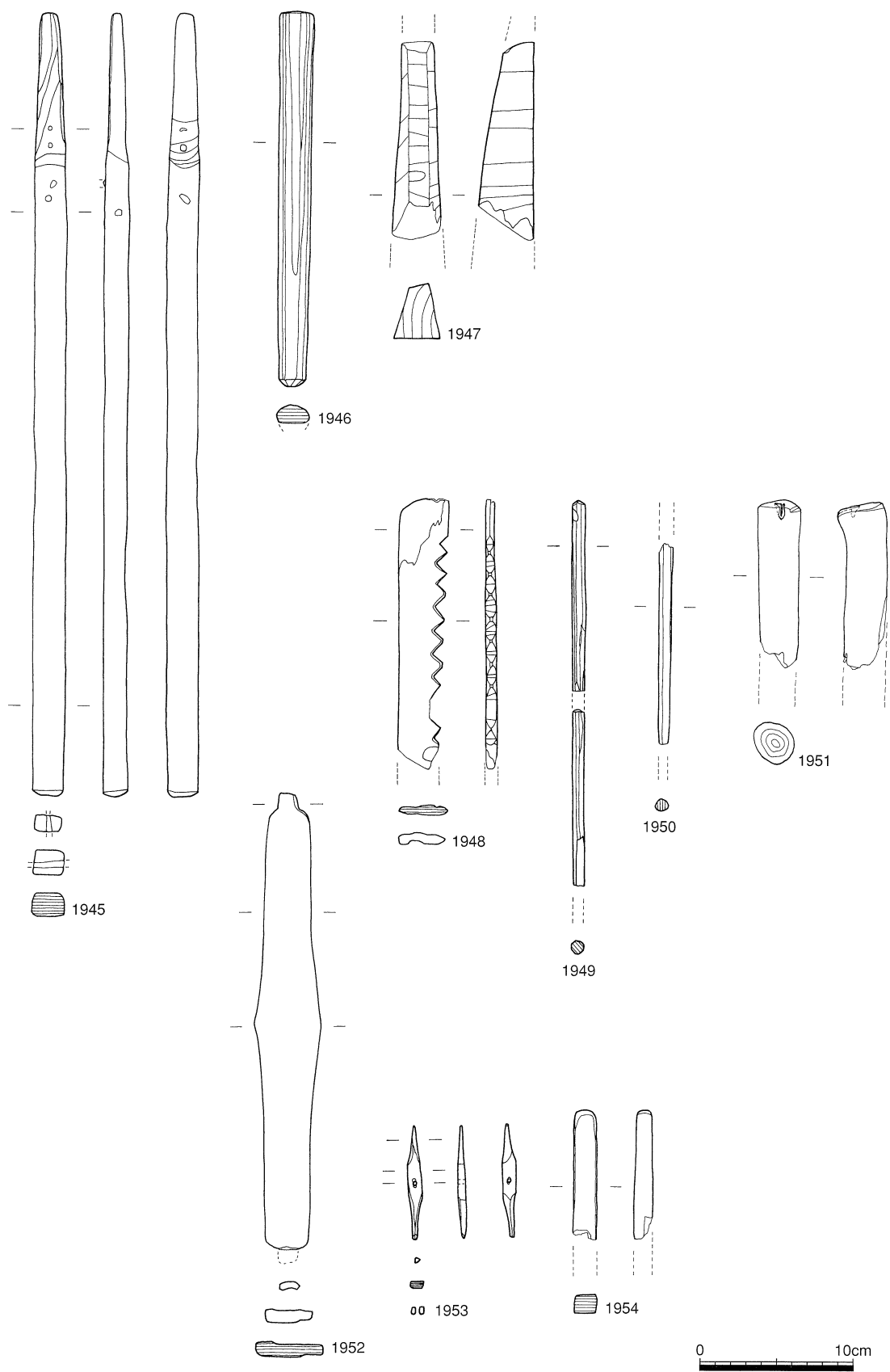
第395図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅲ層出土遺物

自然流路（SR3001）Ⅲ層出土遺物（第389、393～395図）

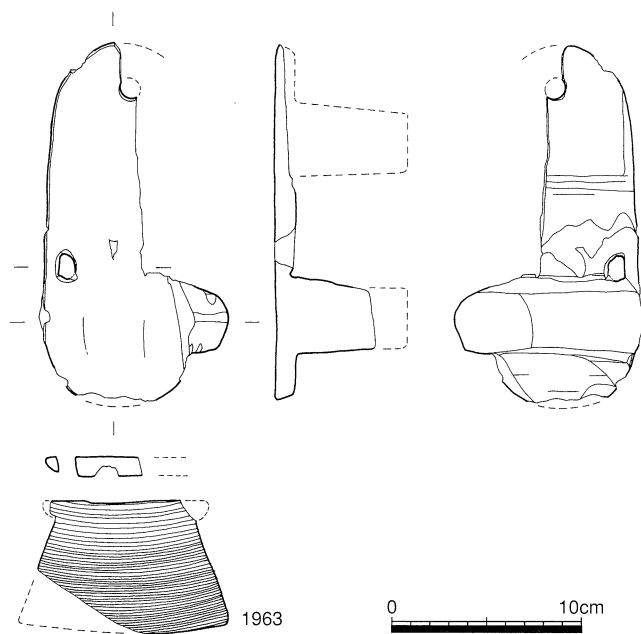
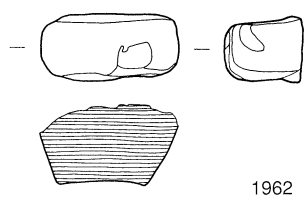
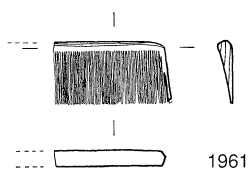
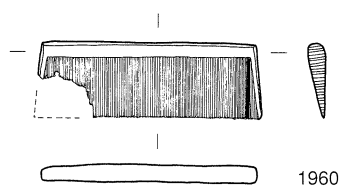
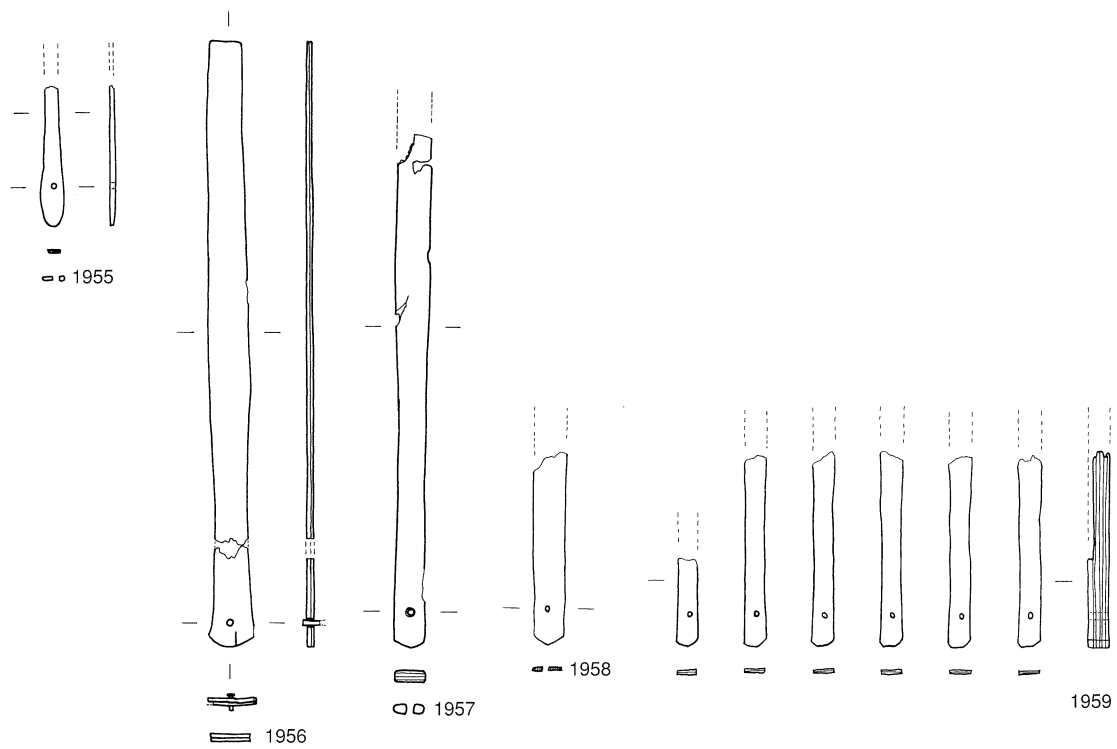
木製品は21点を図化した。1903は木釘か。1905は馬鍬である。1906、1907は円形曲物の底板である。1908は円形曲物の蓋板である。1910は方形曲物の底板である。1911は挽物である。1913は箸である。1914、1915は題籤軸の題籤部分である。1916は刀形である。1917は正面全身人形である。頭部は欠損しているが、墨書で口、着物を表現している。1918～1929は齋串である。1933は部材である。厚手の板を粗く削り、2ヶ所に穿孔を入れて組み合わせたものか。土器は11点を図化した。1934～1939、1941、1943は土師器の杯である。1940、1942は土師器の皿である。1942、1943は内面に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。1944は黒色土器 A 類の椀である。



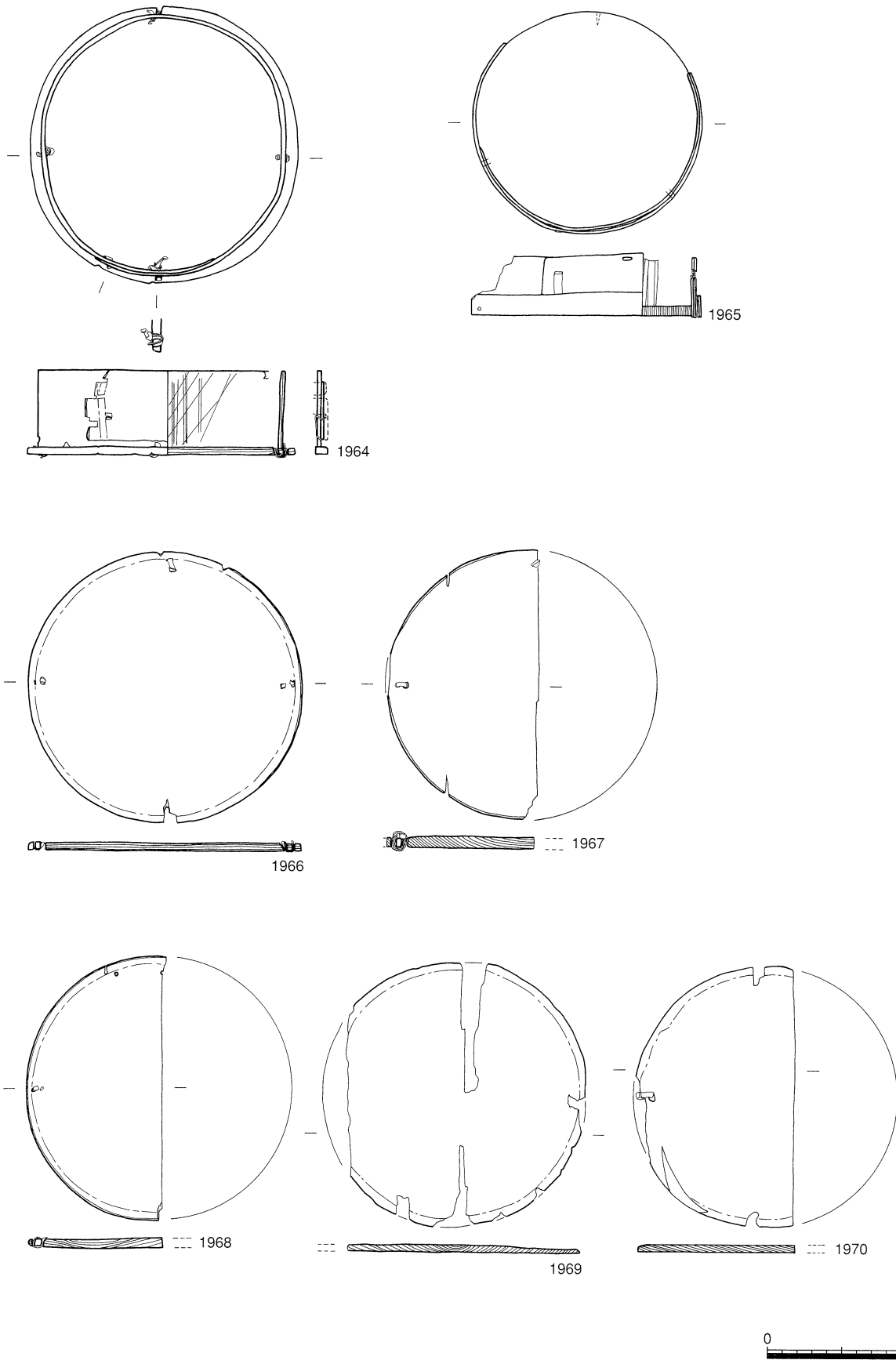
第396図 南区(2004年度1区)SR3001IV層・V層遺物出土状況ドット図



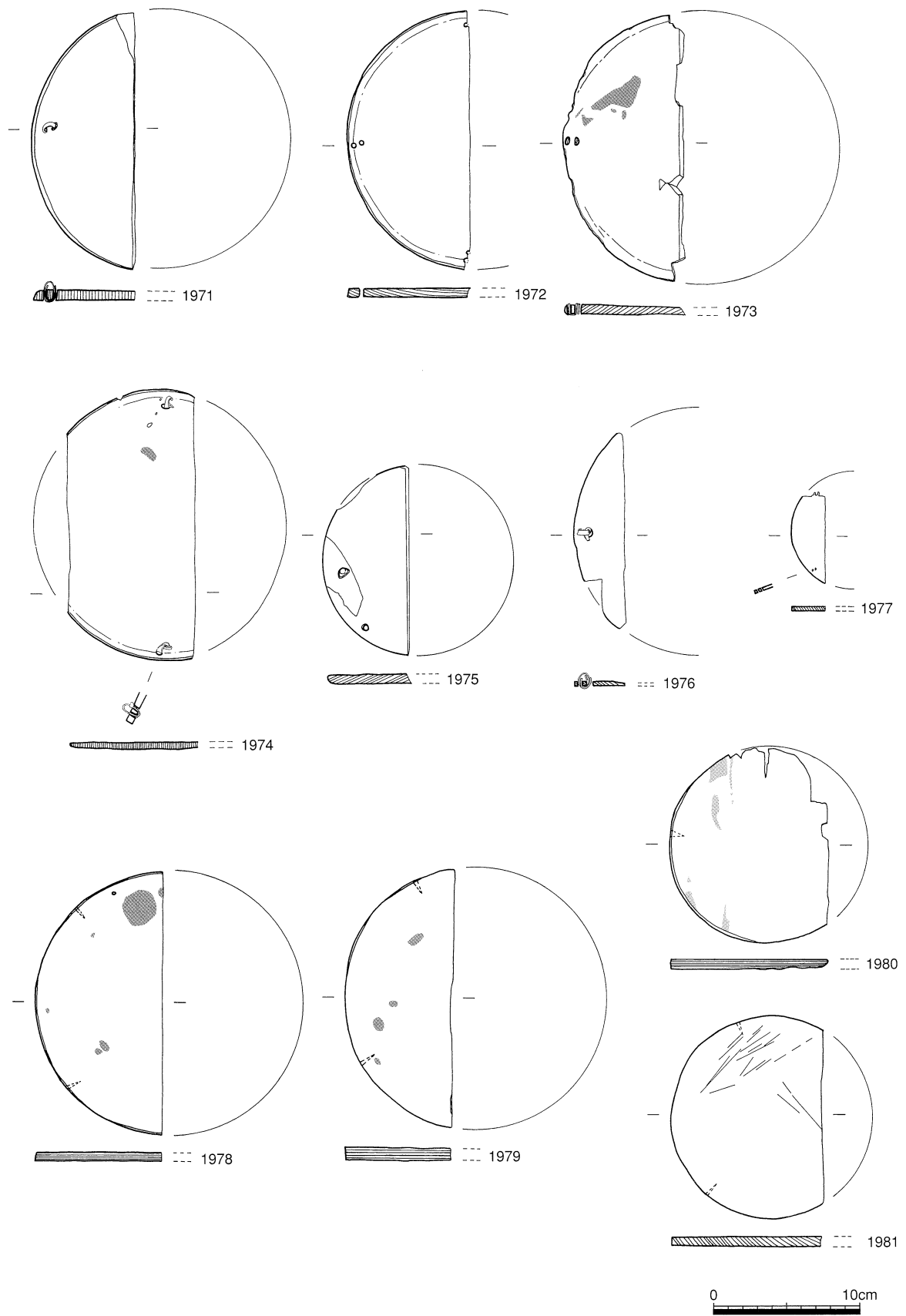
第397図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅳ層出土木製品（工具・農具・紡織具）



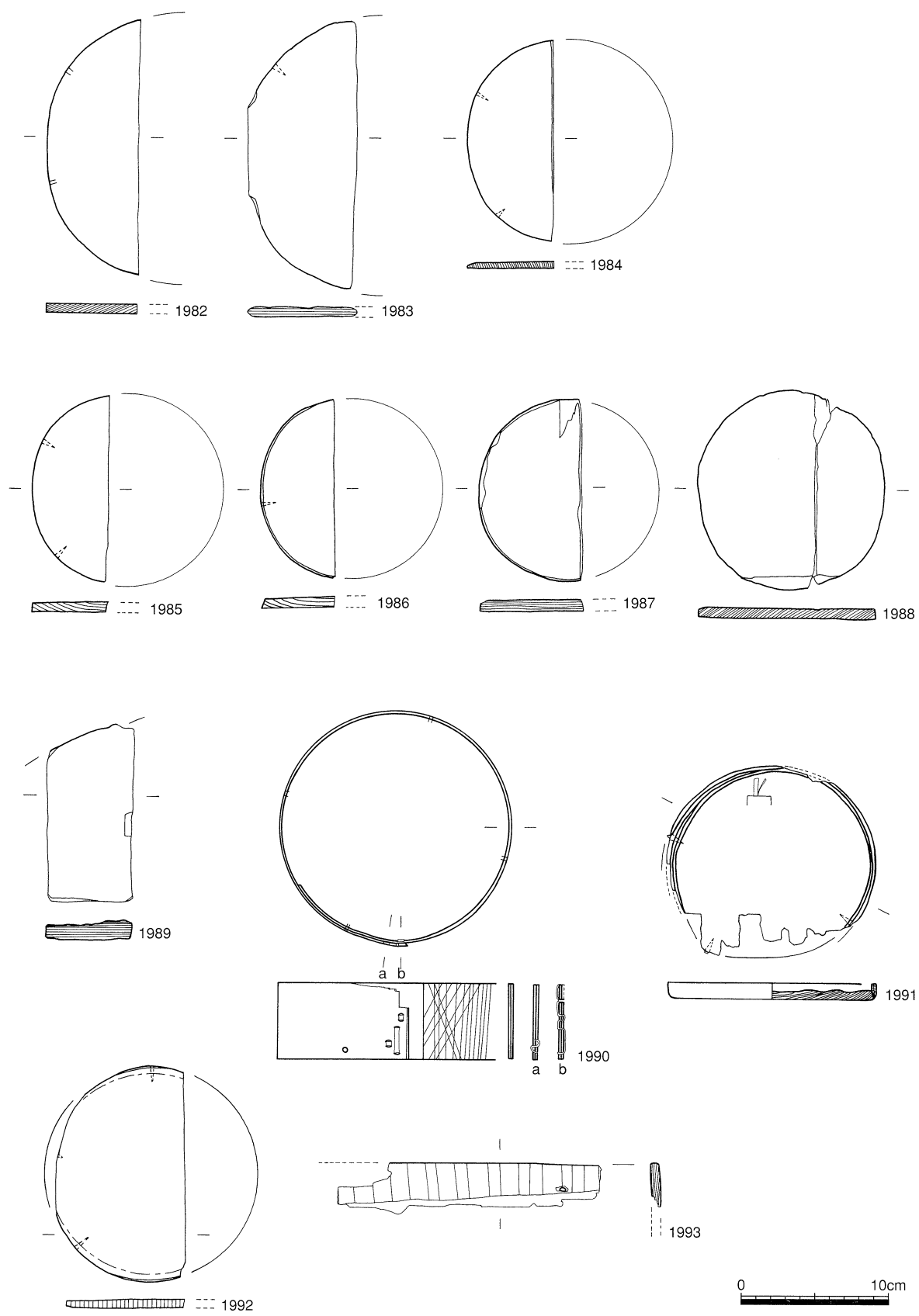
第398図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（服飾具）



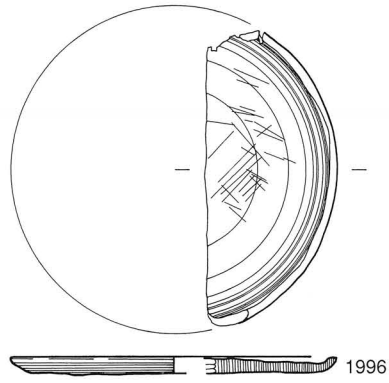
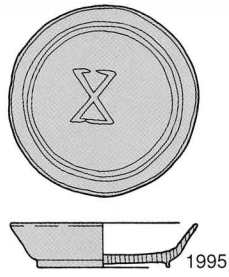
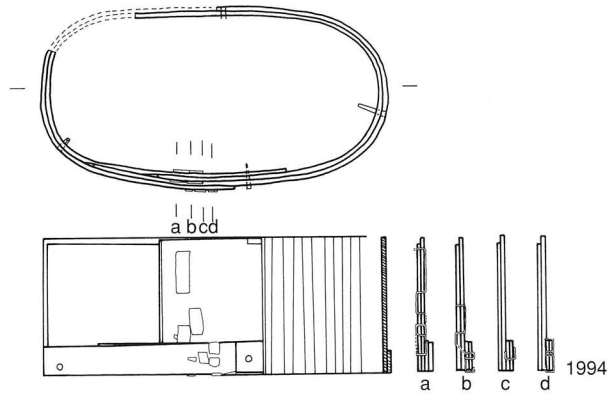
第399図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅳ層出土木製品（容器）（1）



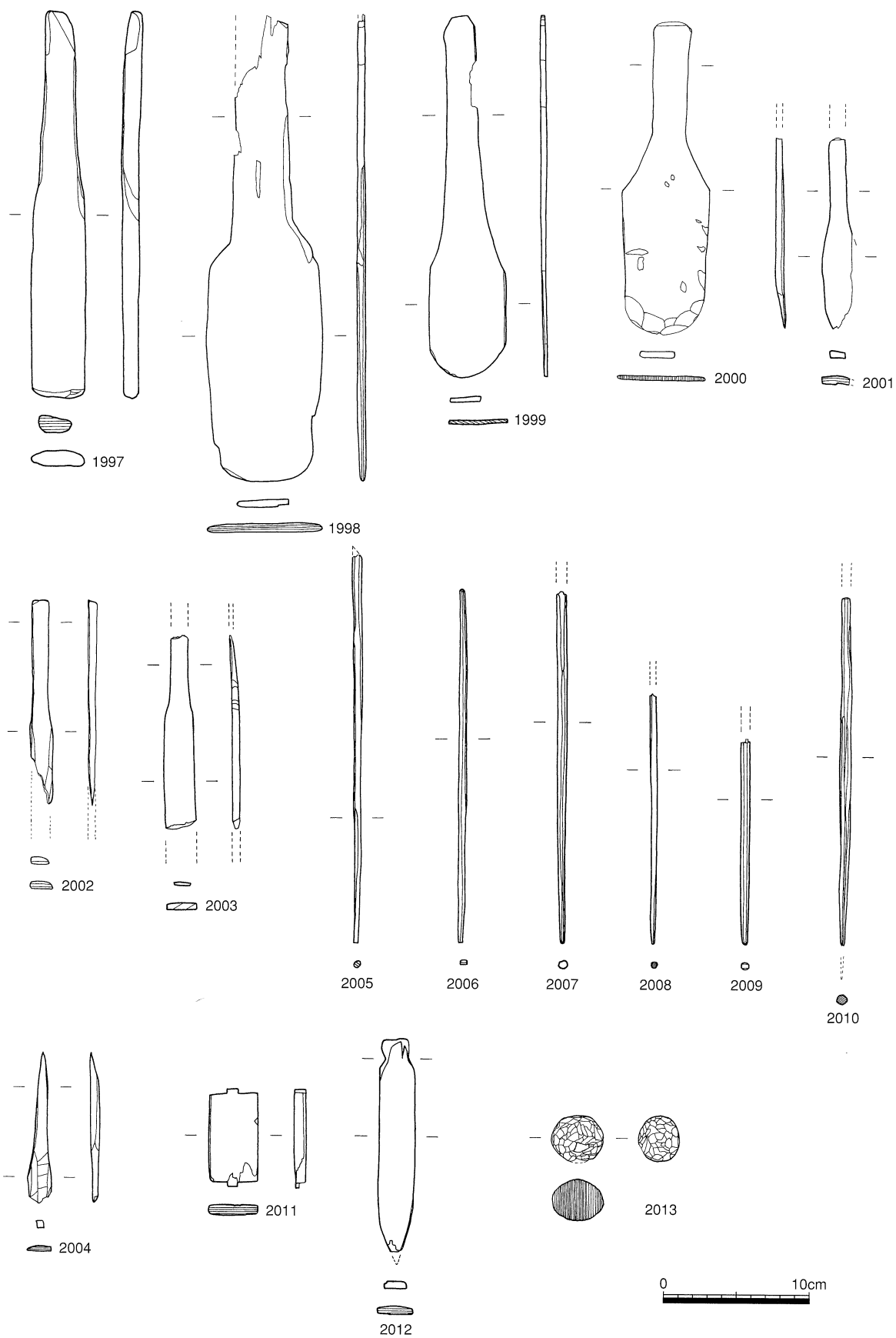
第400図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（容器）（2）



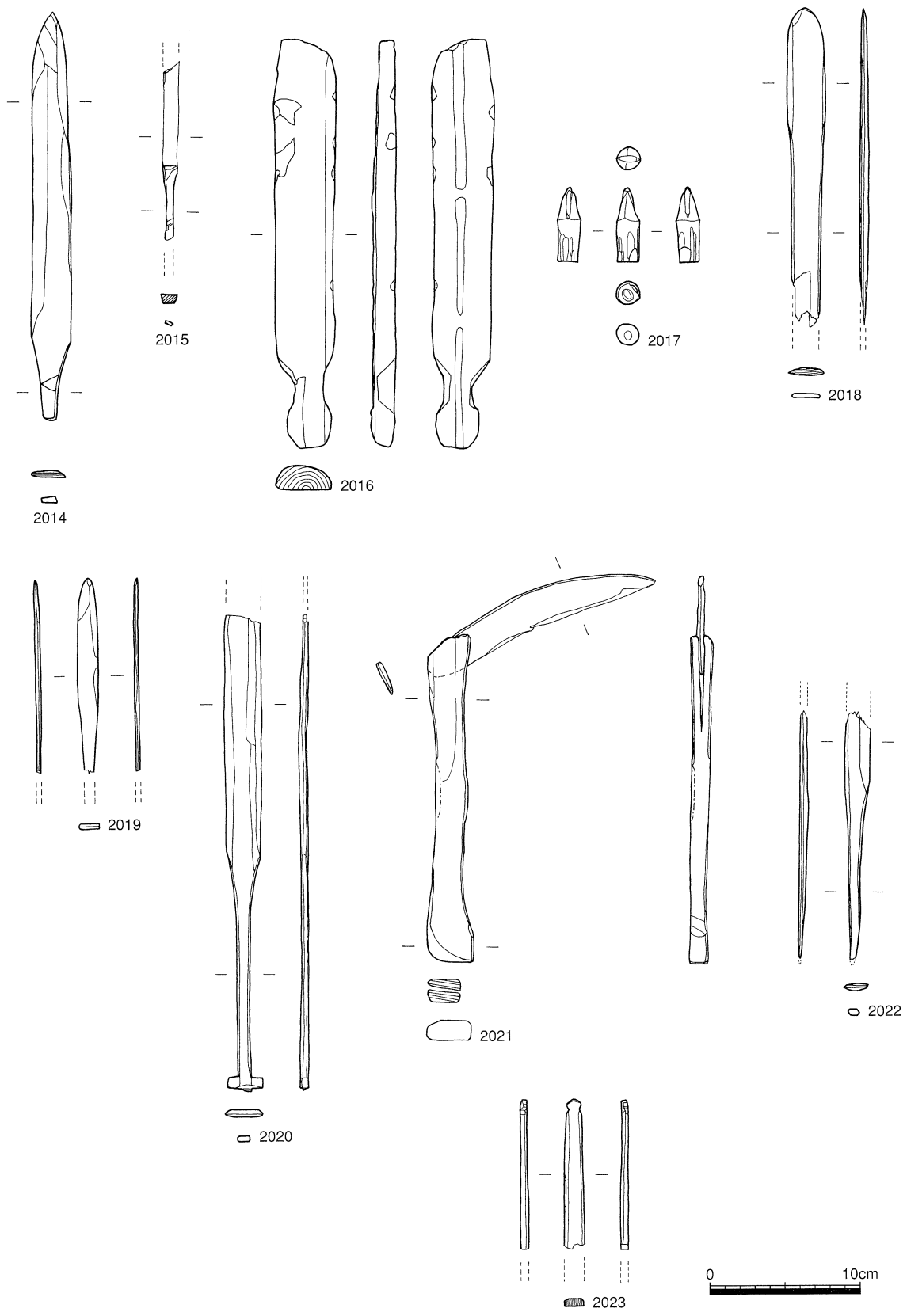
第401図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（容器）（3）



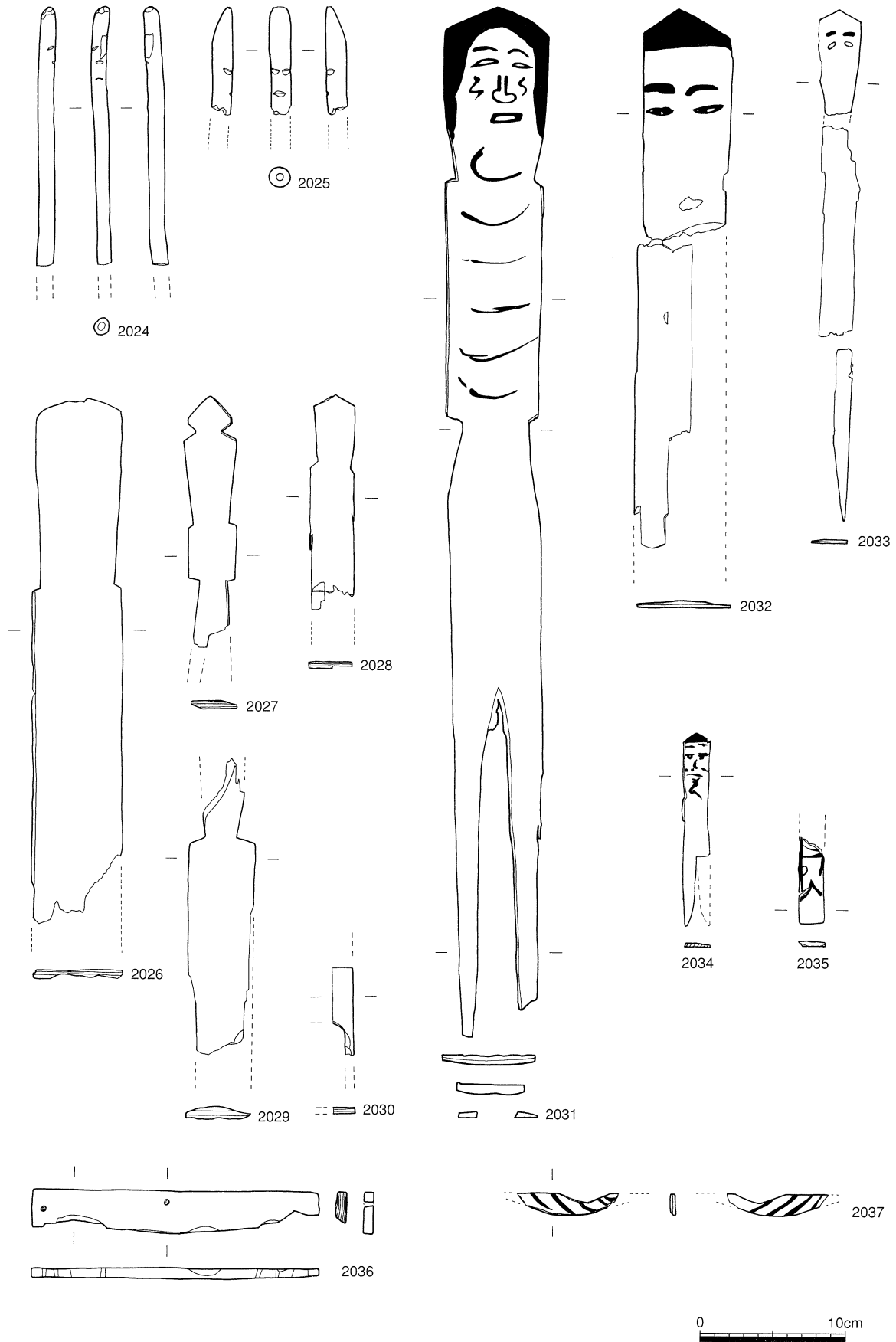
第402図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅳ層出土木製品（容器）（4）



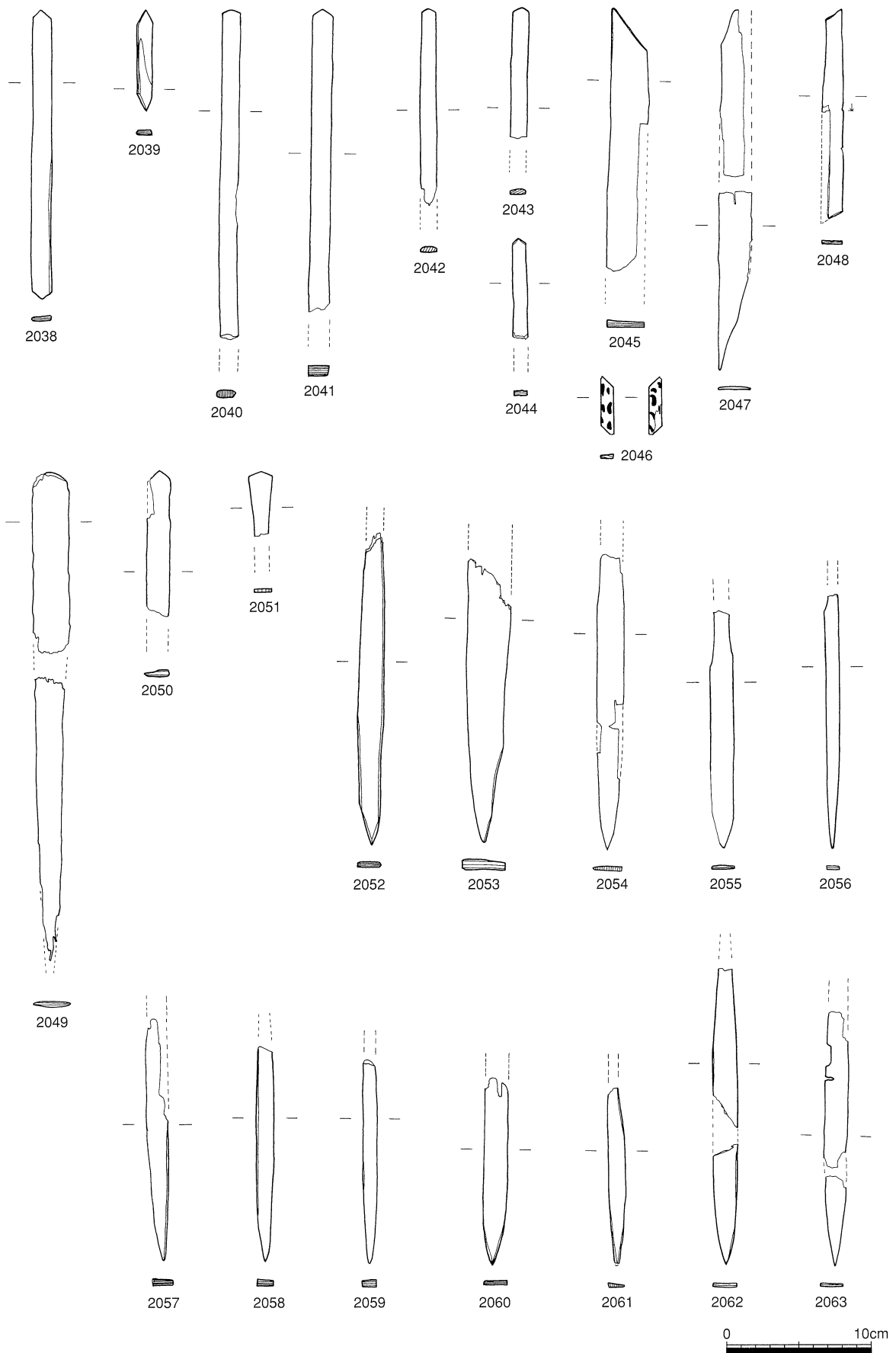
第403図 南区 (2004年度1区) SR3001IV層出土木製品 (食事具・文房具・遊戯具)



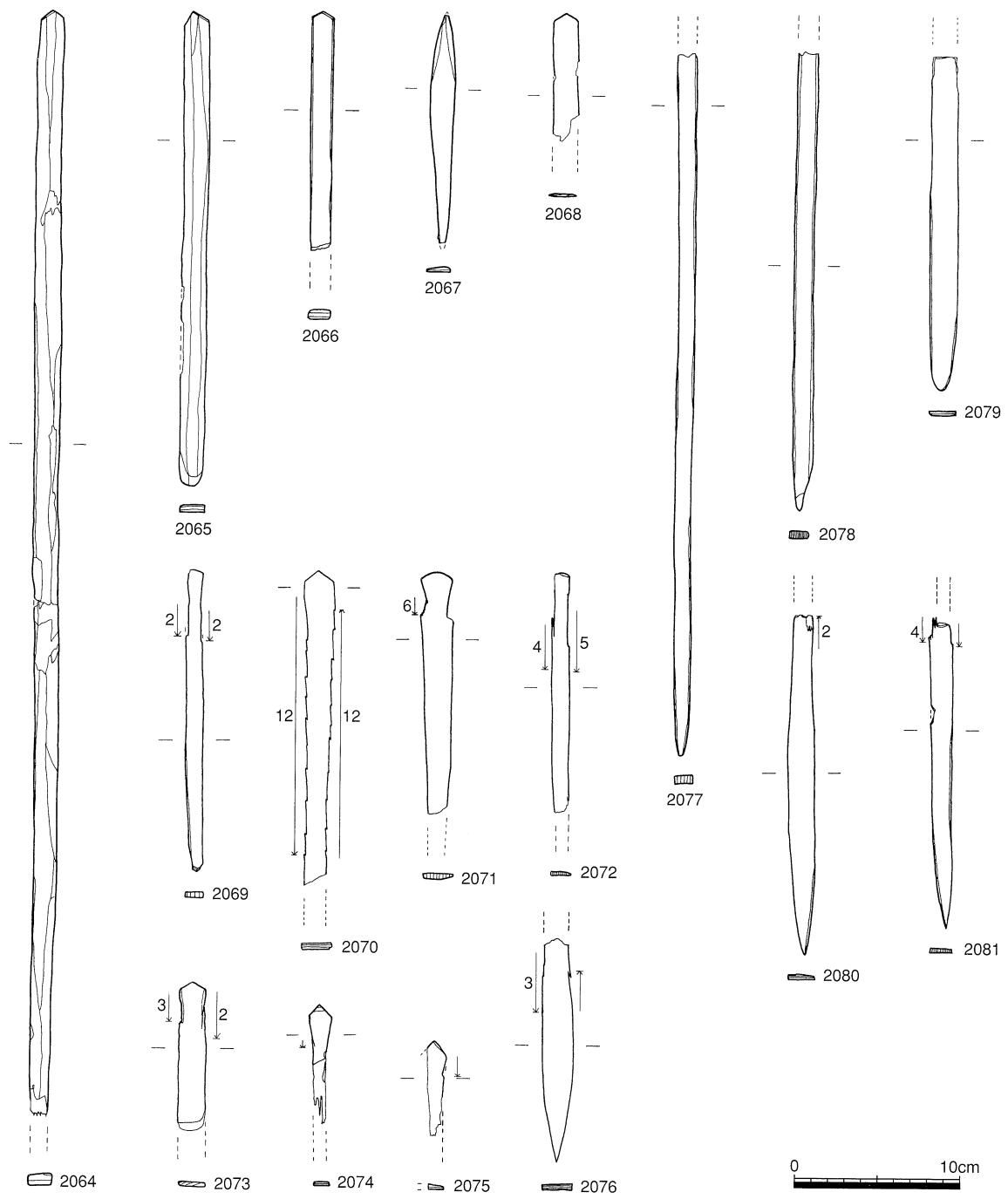
第404図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（1）



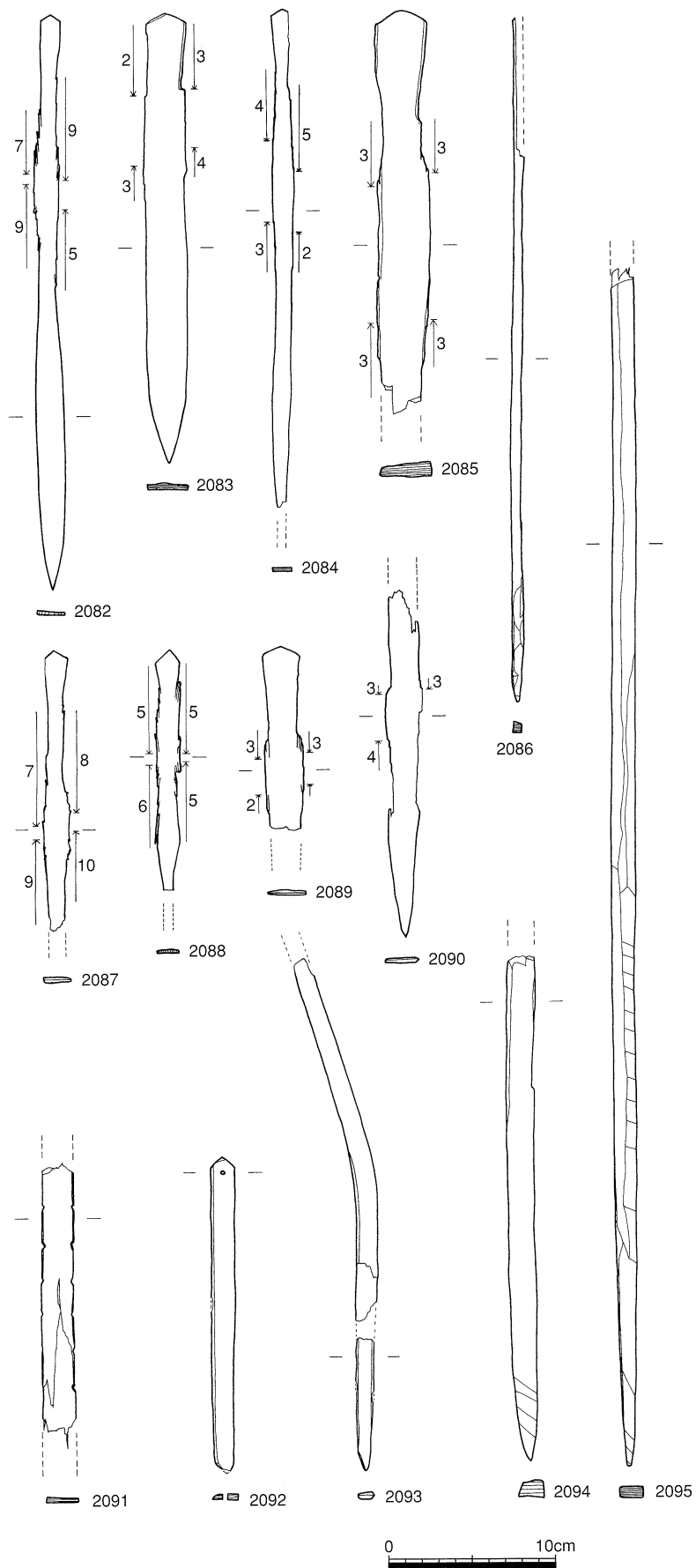
第405図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（2）



第406図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（3）



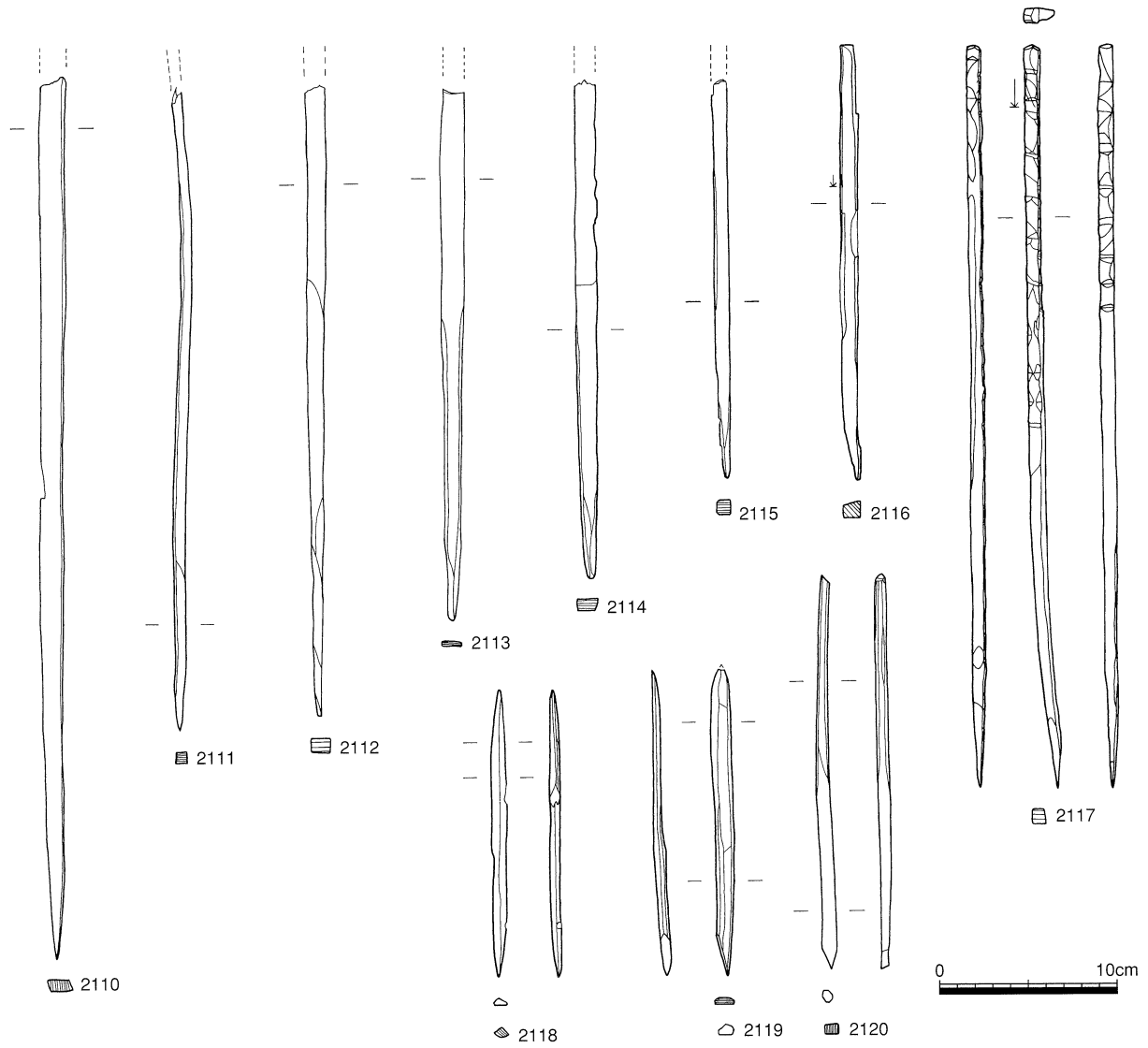
第407図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（4）



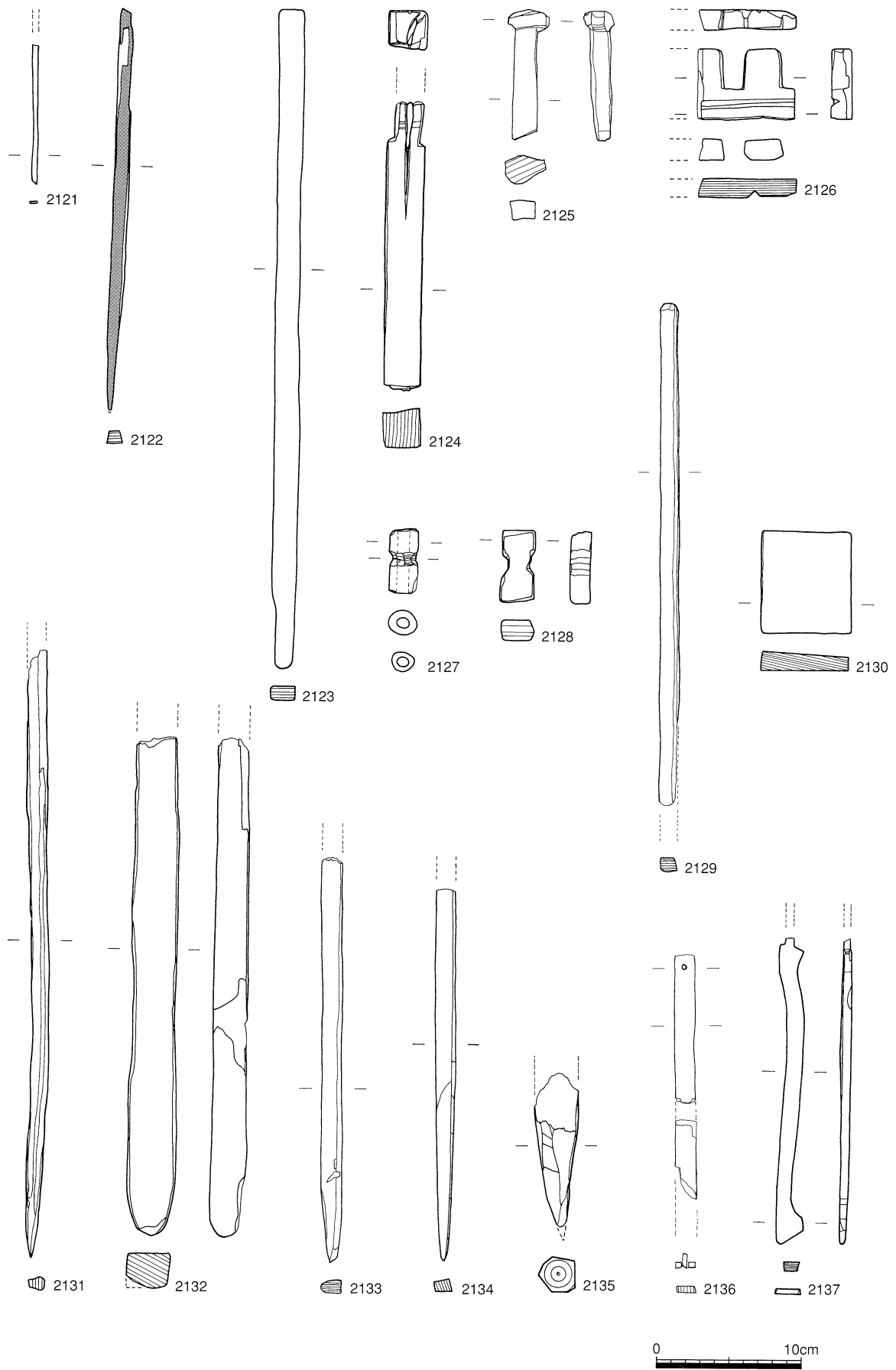
第408図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅳ層出土木製品（祭祀具）（5）



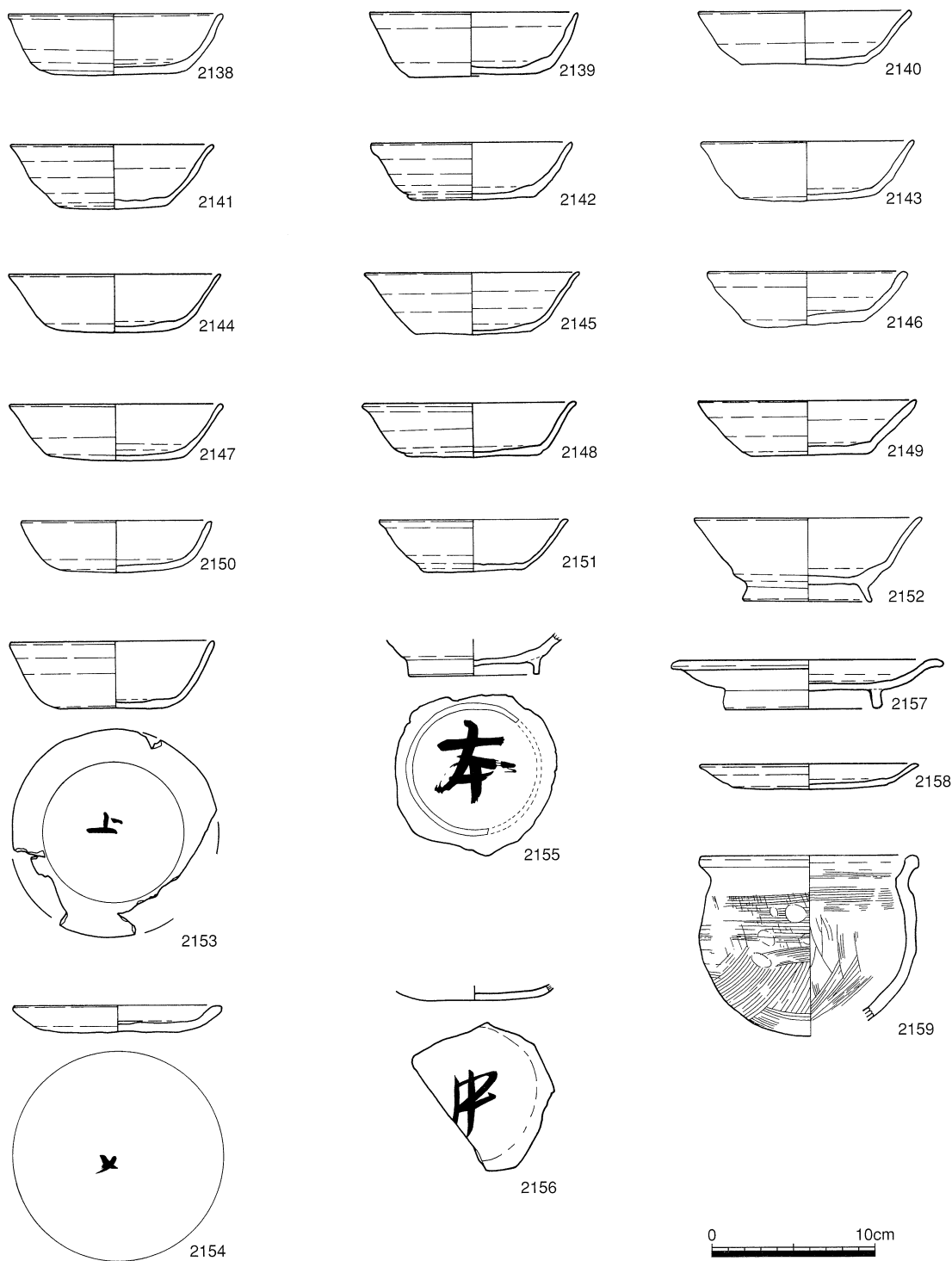
第409図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（6）



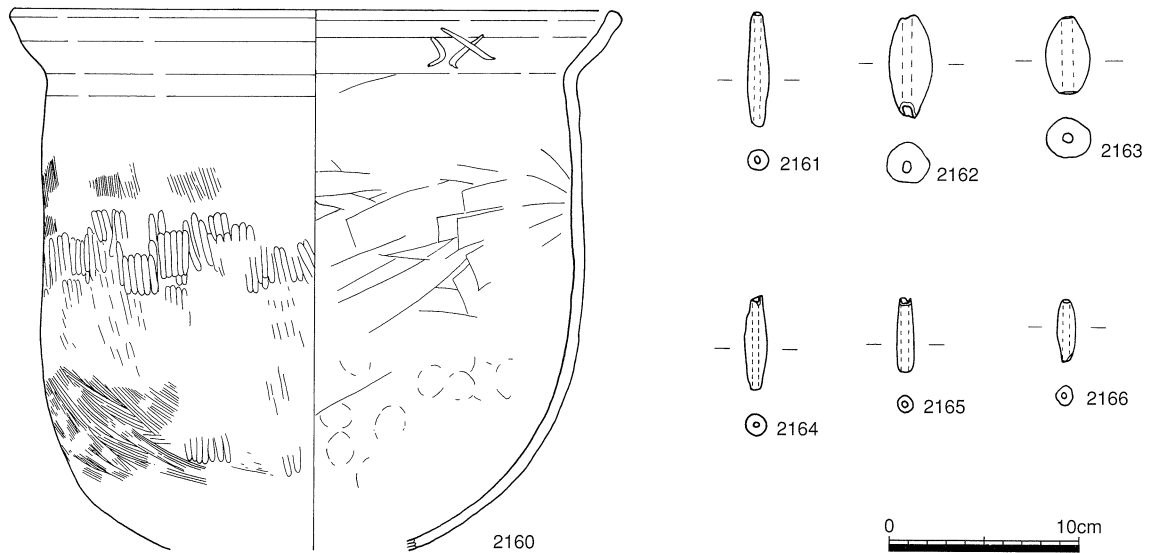
第410図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）（7）



第411図 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土木製品（雑具・部材・杭・用途不明）



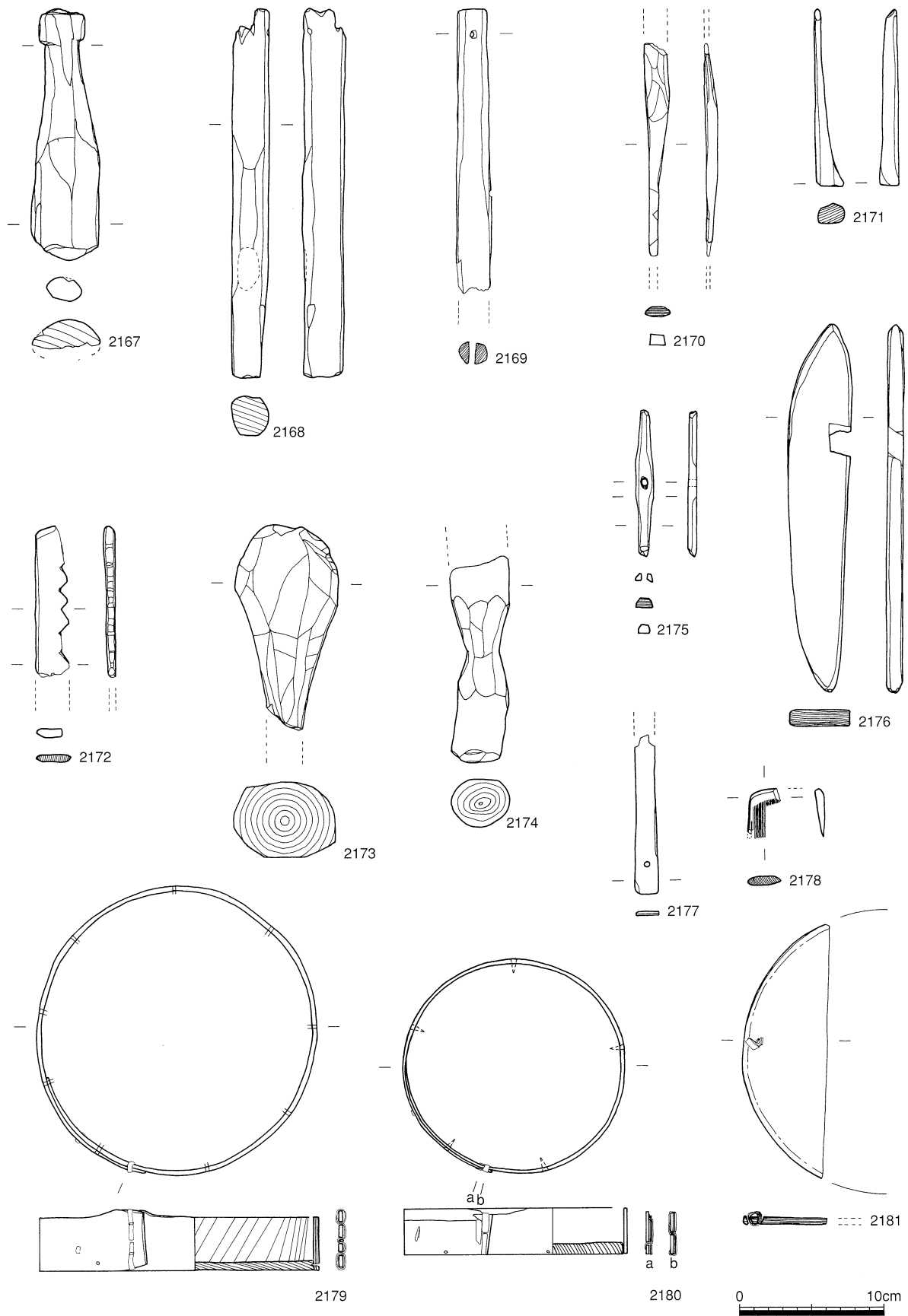
第412图 南区（2004年度1区）SR3001IV層出土遺物（1）



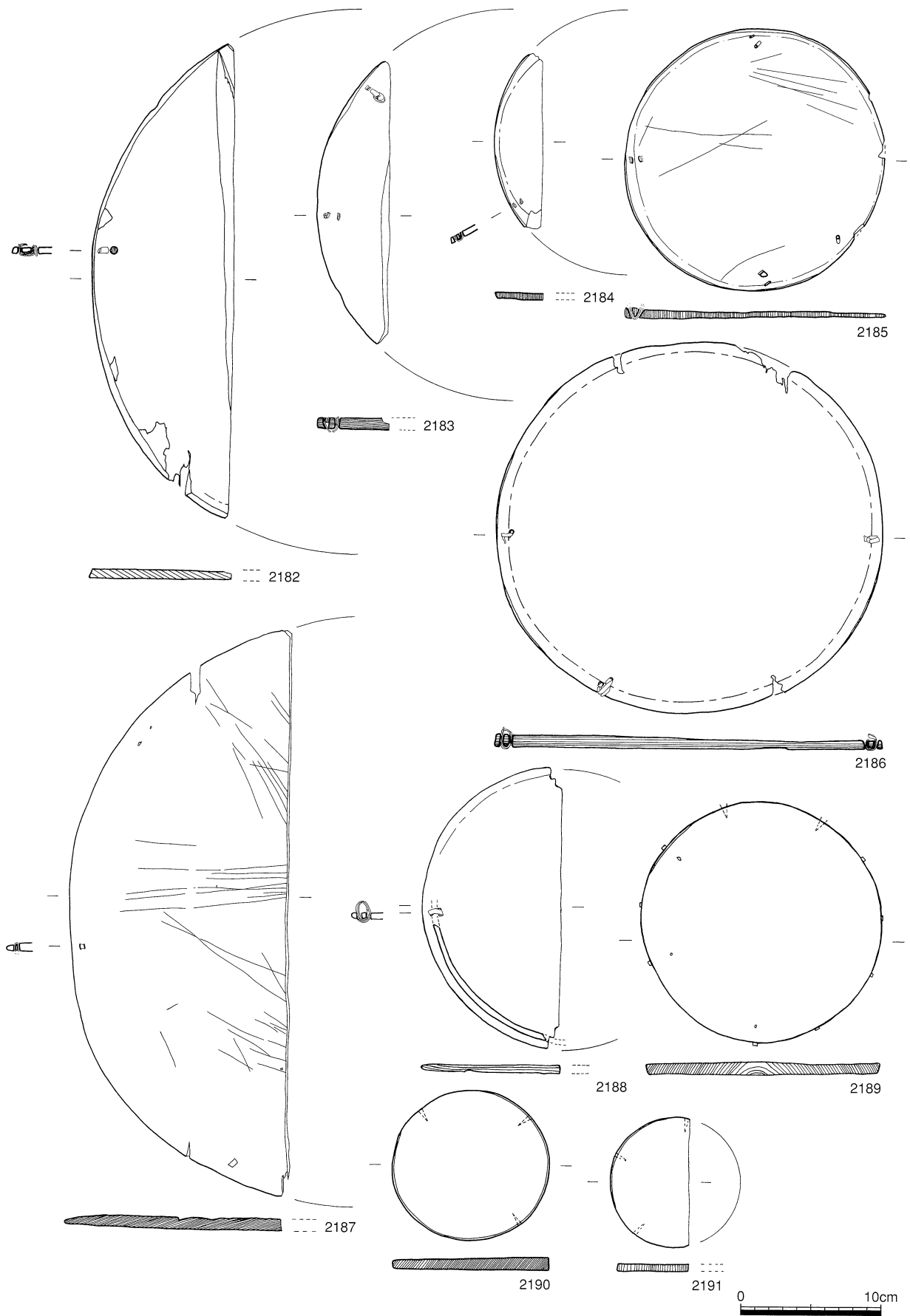
第413図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅳ層出土遺物（2）

自然流路（SR3001）Ⅳ層出土遺物（第396～413図）

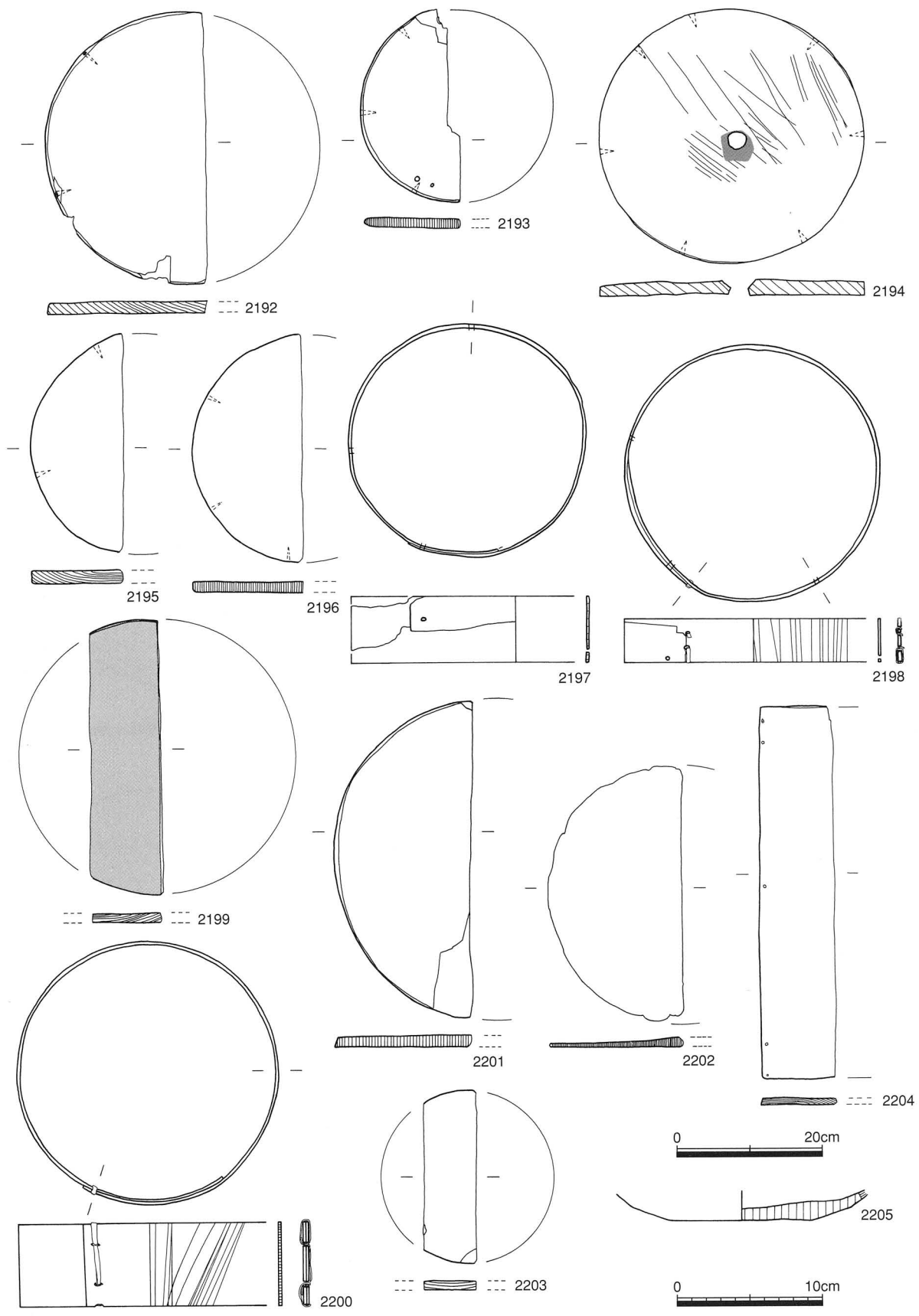
木製品は193点を図化した。1945、1946は柄である。1947は楔である。1948は編台である。1949、1950は編棒である。1952は紡織具の中筒である。1953は糸巻横木、1954は杵木である。1955～1959は檜扇である。1956は要が残存する。1960、1961は刻歯式横櫛である。1962、1963は連歯下駄である。1964、1965は円形曲物の底板と側板が結合したものである。1966～1989は円形曲物の底板である。1990、1993は円形曲物の側板である。1991、1992は円形曲物蓋板である。1991は把手を取り付けた痕がある。1994は楕円形曲物の側板である。1995、1996は挽物である。1995は挽物の椀である。外面は黒漆を、内面は赤漆が塗布されている。底部内面に焼き印がある。1997～2003は杓子である。2004は匙である。2005～2010は箸である。2011は題籤軸か。2013は遊戯具の毬の芯か。角を落とし丸く成形されている。2014、2019、2020は剣形である。2015、2022は刀子形である。2016、2018は矛形である。2017は根挟である。一端は断面が円形になるように削り、内部を空洞に成形している。もう一端は円錐状に成形し、中心にスリットを入れ別の木を挟んである。2021は鎌形である。刃の部分も木で作られており、実用性に乏しいことから祭祀具であると考えられる。2023は紡織具形である。2024、2025は円筒状人形である。2026～2035は正面全身人形である。2031は首と腰にくびれあり、顔と胴体を墨書で表現している。2036は馬形か。2037は鳥形である。墨痕で羽を表現している。2038～2120は斎申である。土器、土製品は29点を図化した。2138～2151は土師器の杯である。2512は土師器の椀である。2153～2156は墨書土器である。2153は土師器の杯の底部外面に「上」。2154は土師器の皿の底部外面に「十」。2155は土師器の杯の底部外面に「本」。2156は土師器の皿の底部外面に「中」と墨書する。2157、2158は土師器の皿である。2159、2160は土師器の甕である。2161～2166は土錘である。



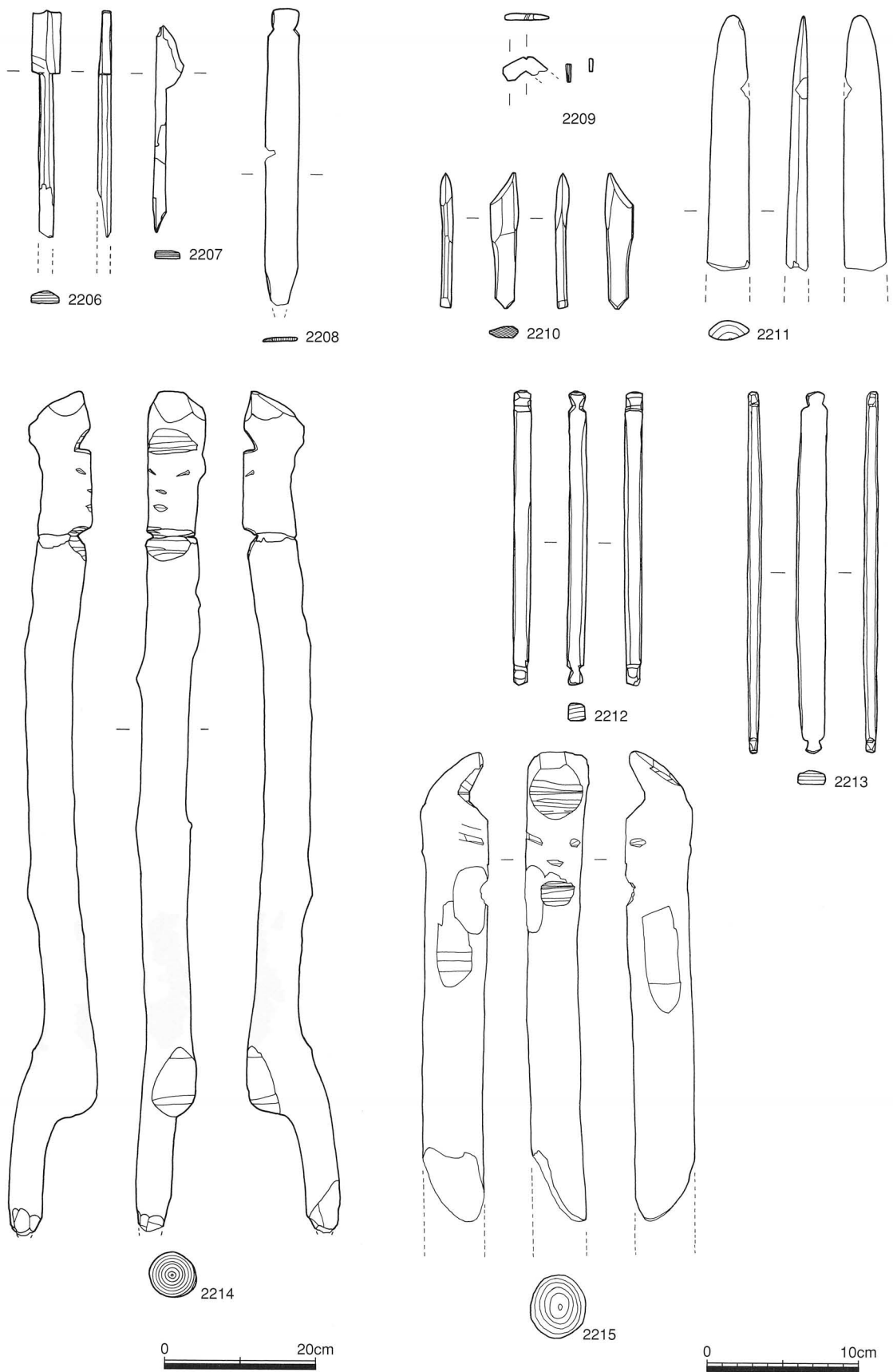
第414図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（工具・農具・紡織具・服飾具・容器・用途不明）



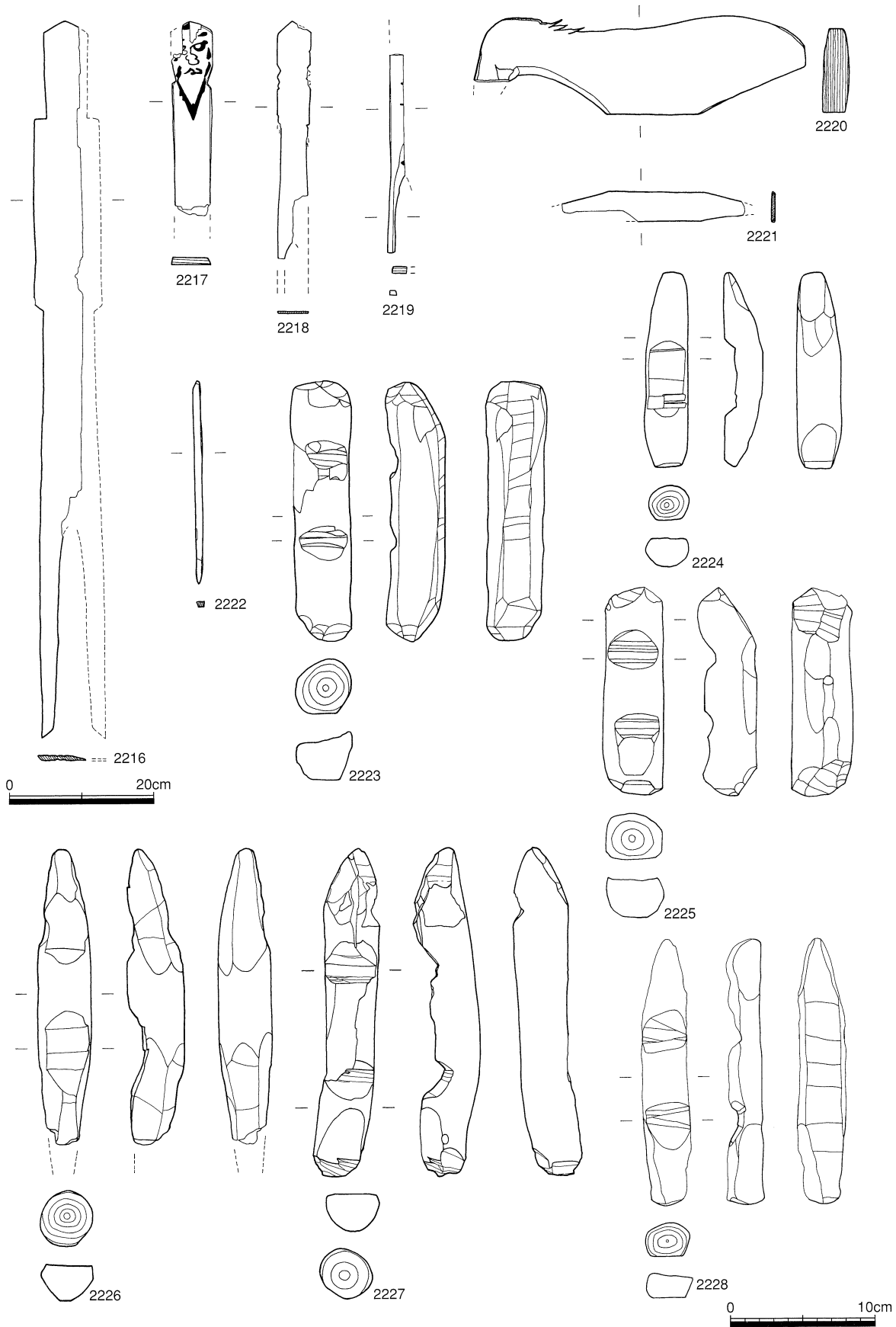
第415図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（容器）（1）



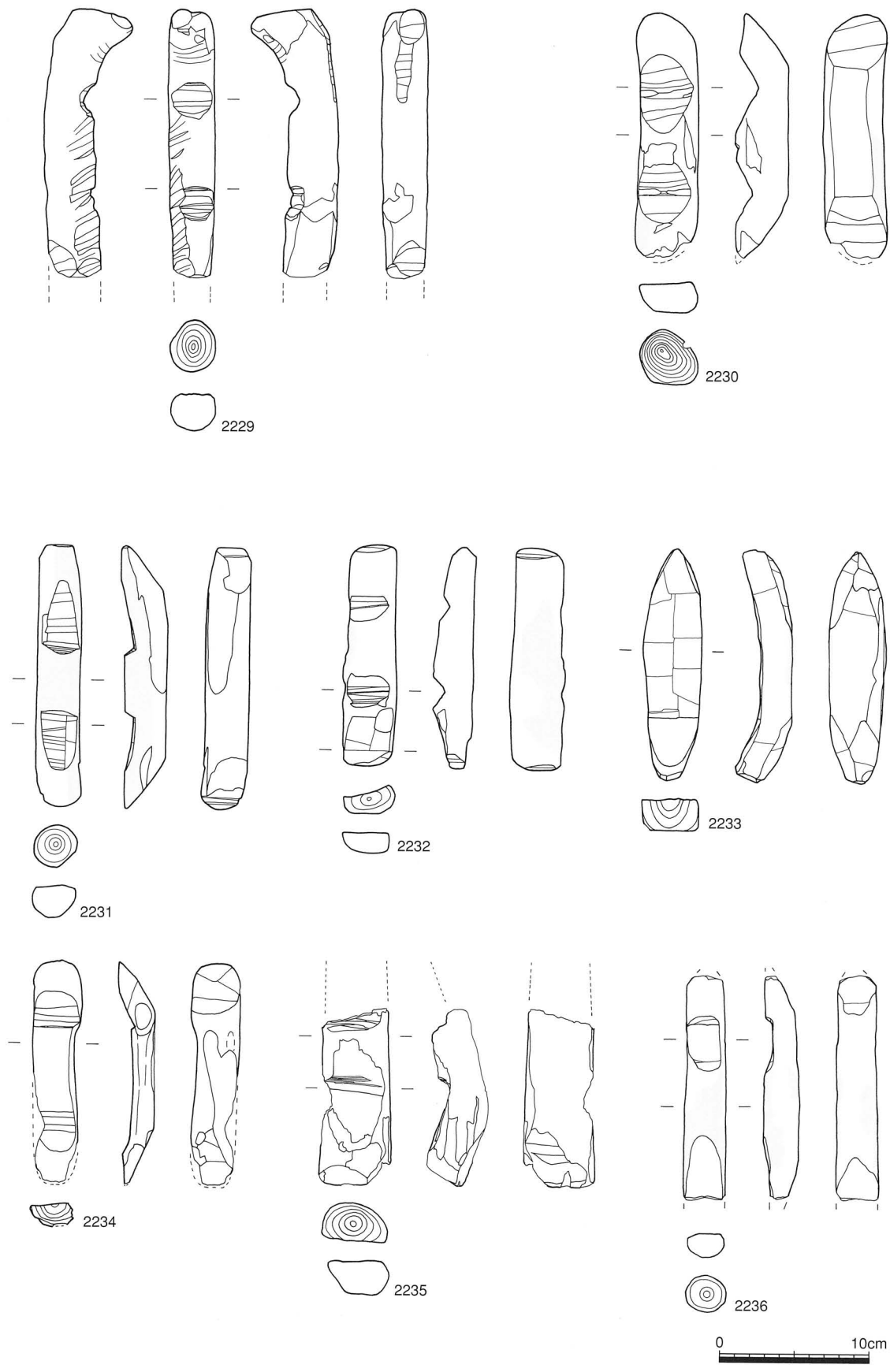
第416図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（容器）（2）



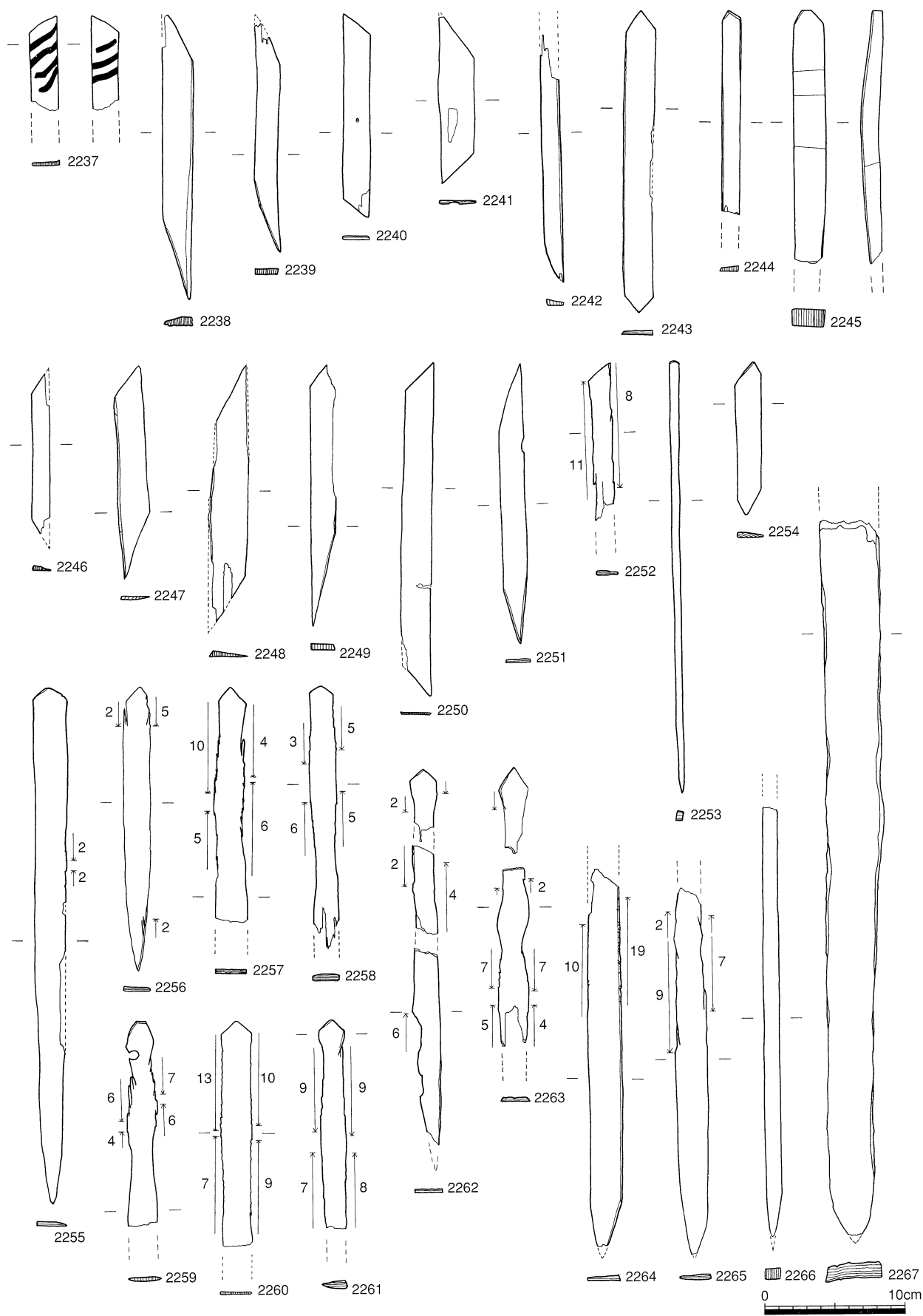
第417図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（文房具・遊戯具・祭祀具）



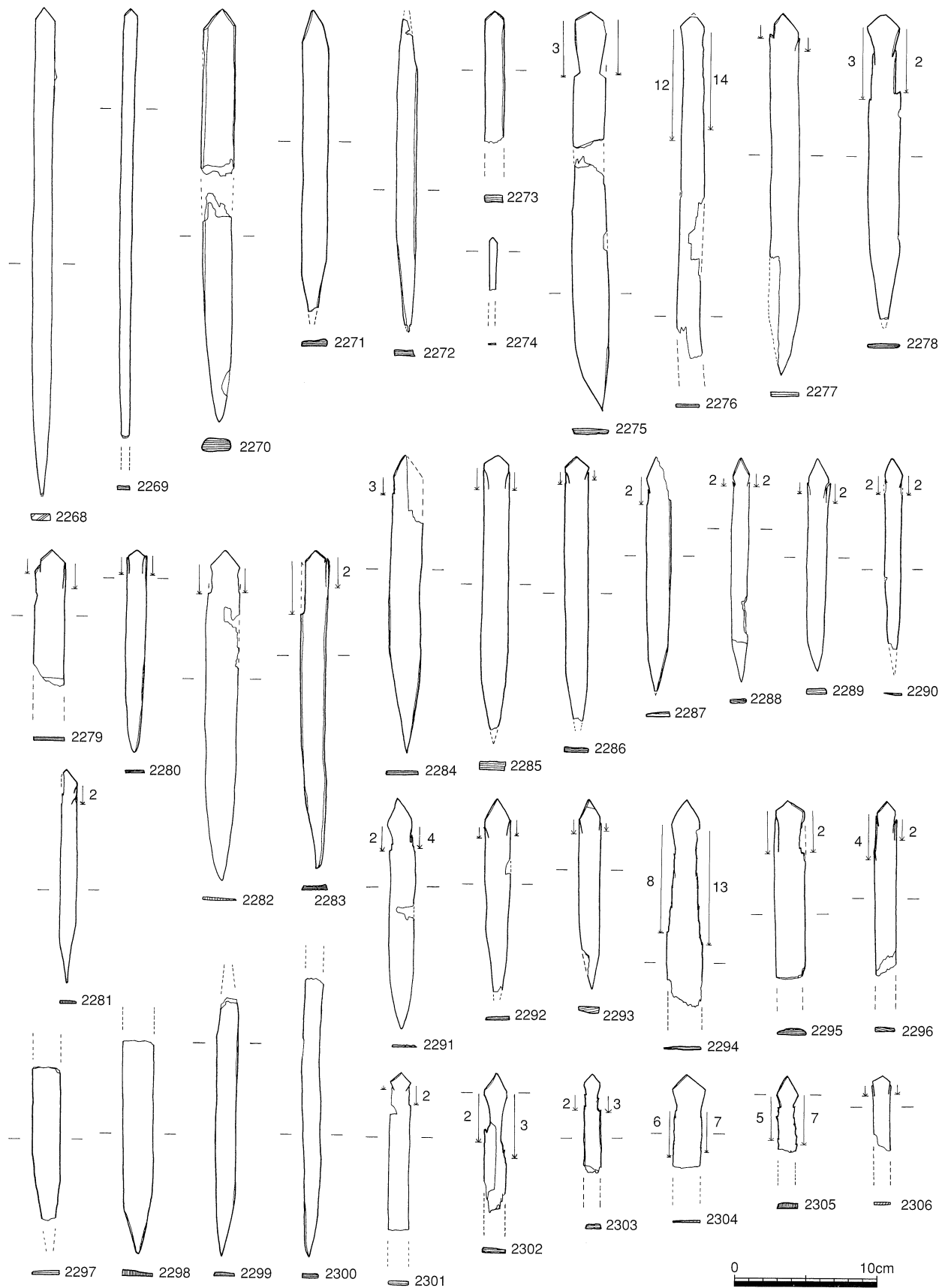
第418図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（1）



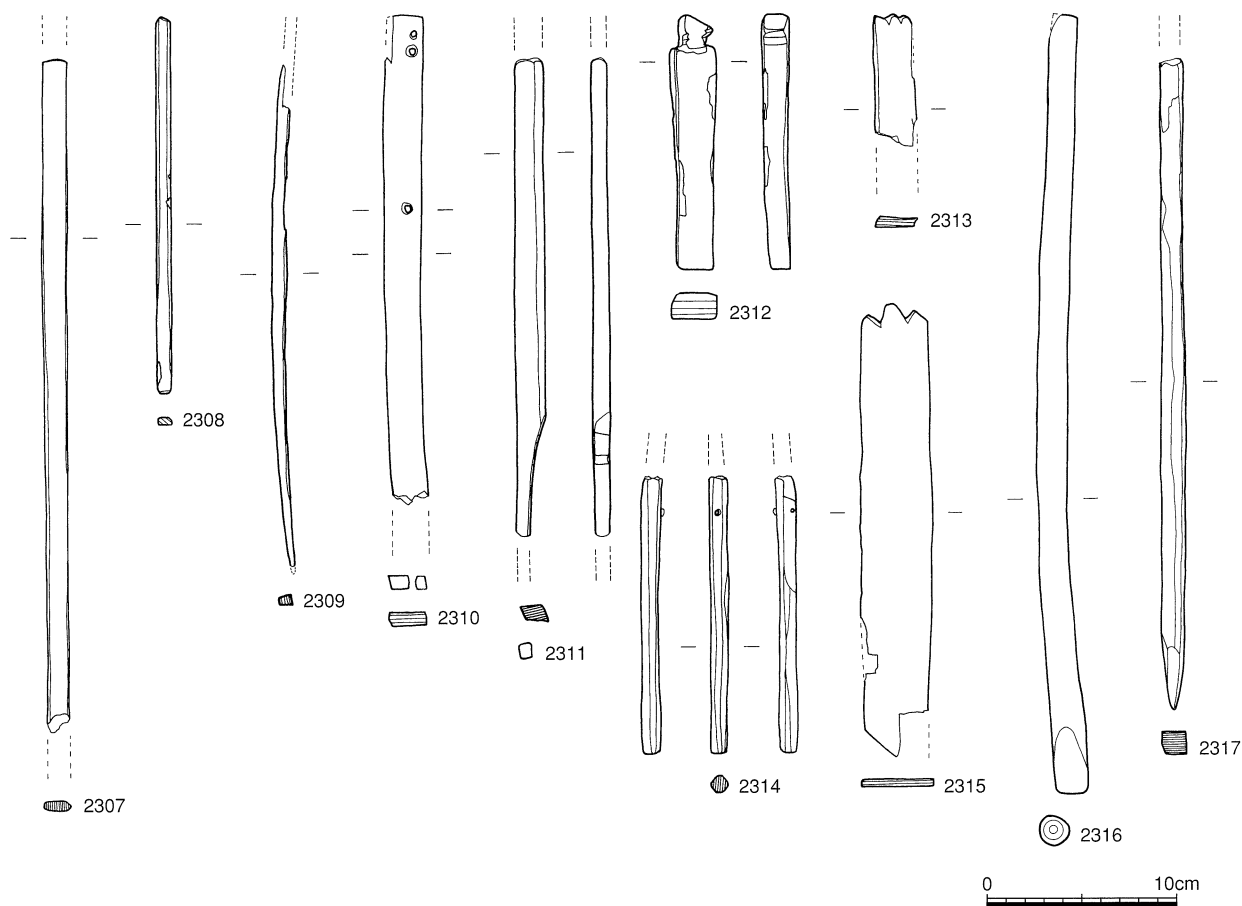
第419図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（2）



第420図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（祭祀具）（3）



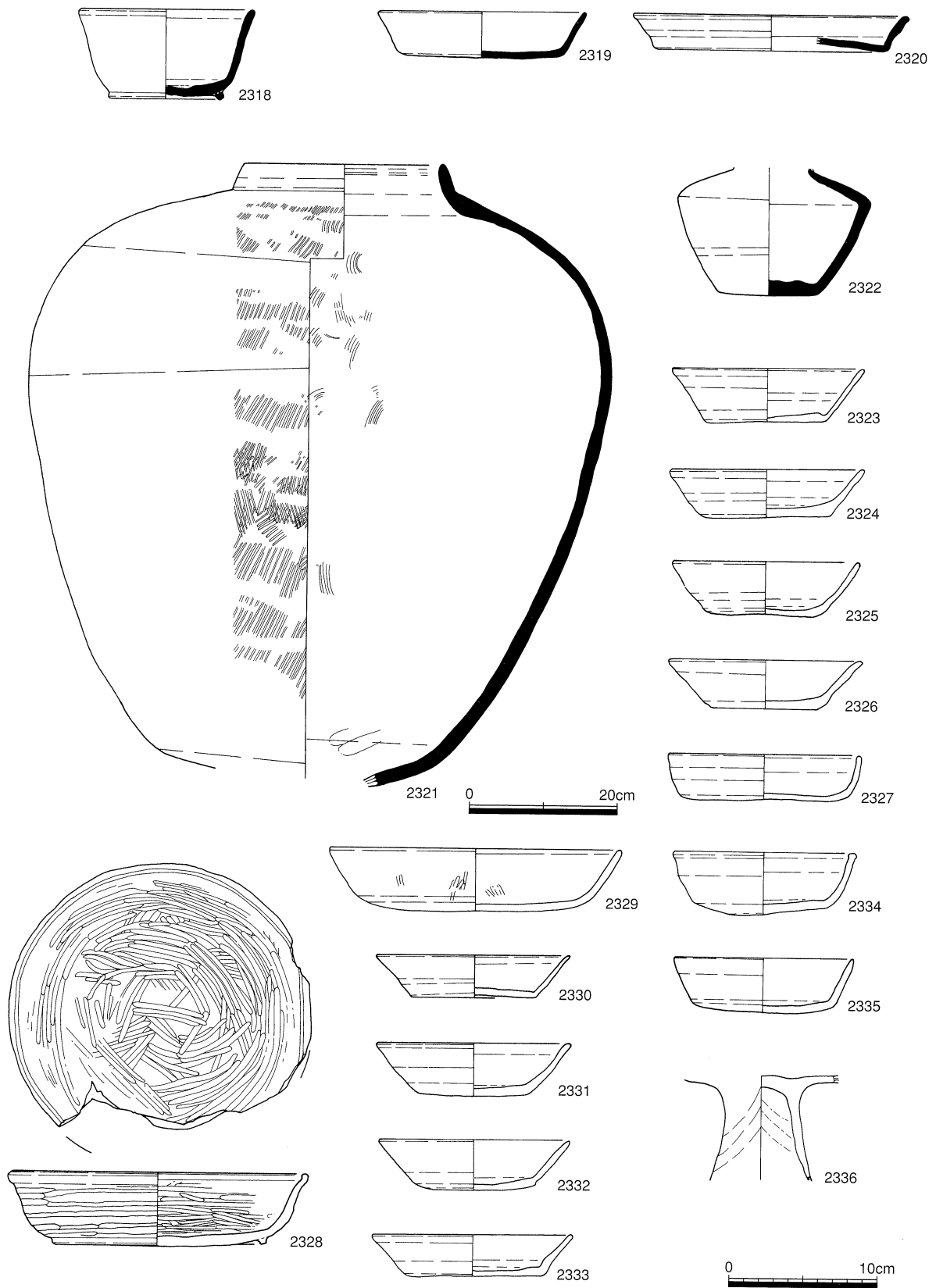
第421図 南区 (2004年度1区) SR3001V層出土木製品 (祭祀具) (4)



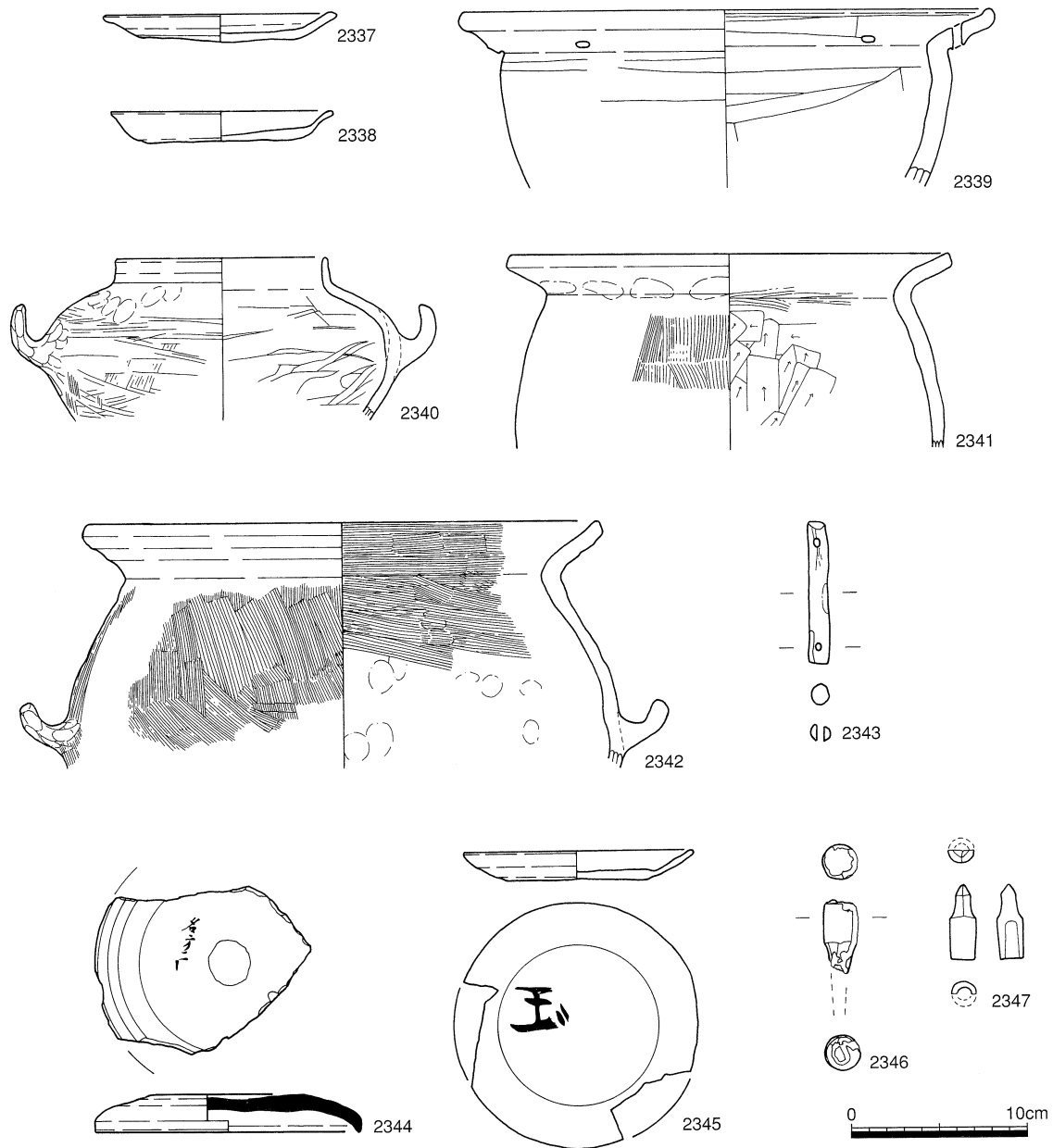
第422図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土木製品（雑具・部材・杭）

自然流路（SR3001）V層出土遺物（第396、414～424図）

木製品は151点を図化した。2167は横槌である。2168、2169は柄である。2172は編台かもしくは鋸齒付刀形の一部である。2173、2174は木錘である。2175は糸巻横木である。2176は紡織具である。2177は檜扇である。2178は刻歯式横櫛である。2179、2180は円形曲物の底板と側板が結合したものである。2181～2193、2195、2196、2199、2201～2203は円形曲物の底板である。2199は表面に漆が塗布されている。2194は円形曲物の蓋板である。2197、2198、2200は円形曲物の側板である。2204は方形曲物の底板である。2205は挽物である。2206は題籤軸である。軸を円筒状に削って成形している。2209は琴柱である。2210は刀子形、2211は刀形である。2212、2213は紡織具形である。2214、2215は円筒状人形である。2216～2219は正面全身人形である。2220は鳥形である。2221は馬形で、板の上辺に切り込みを入れて頭と尾を表現している。2222は棒状祭祀具である。2223～2236は舟形である。2237～2306は斎申である。2237は目盛りのような墨線が赤外線写真でのみ確認できる。2307は籌木である。土器、土製品は28点を図化した。2318、2319は須恵器の杯である。2320は須恵器の皿である。2321は須恵器の甕である。大型で外面にタタキ、内面に当て具痕が多数みられる。2322は須恵器の壺である。2323～2335は土師器の杯である。2328は内外面に赤色塗彩とヘラミガキが施される。また、内面の口縁部に煤が付着している。2336は土師器の高杯である。2337、2338は土師器の皿である。2339は土師器の鍋である。口縁部に4ヶ所孔がある。内外面に顔料が塗布されている。2340は土師器の把手付短頸壺である。2341は土師器の甕である。2342は土師器の甌である。2343は土錘である。2344、2345は墨書土器である。2344は須恵器の杯蓋

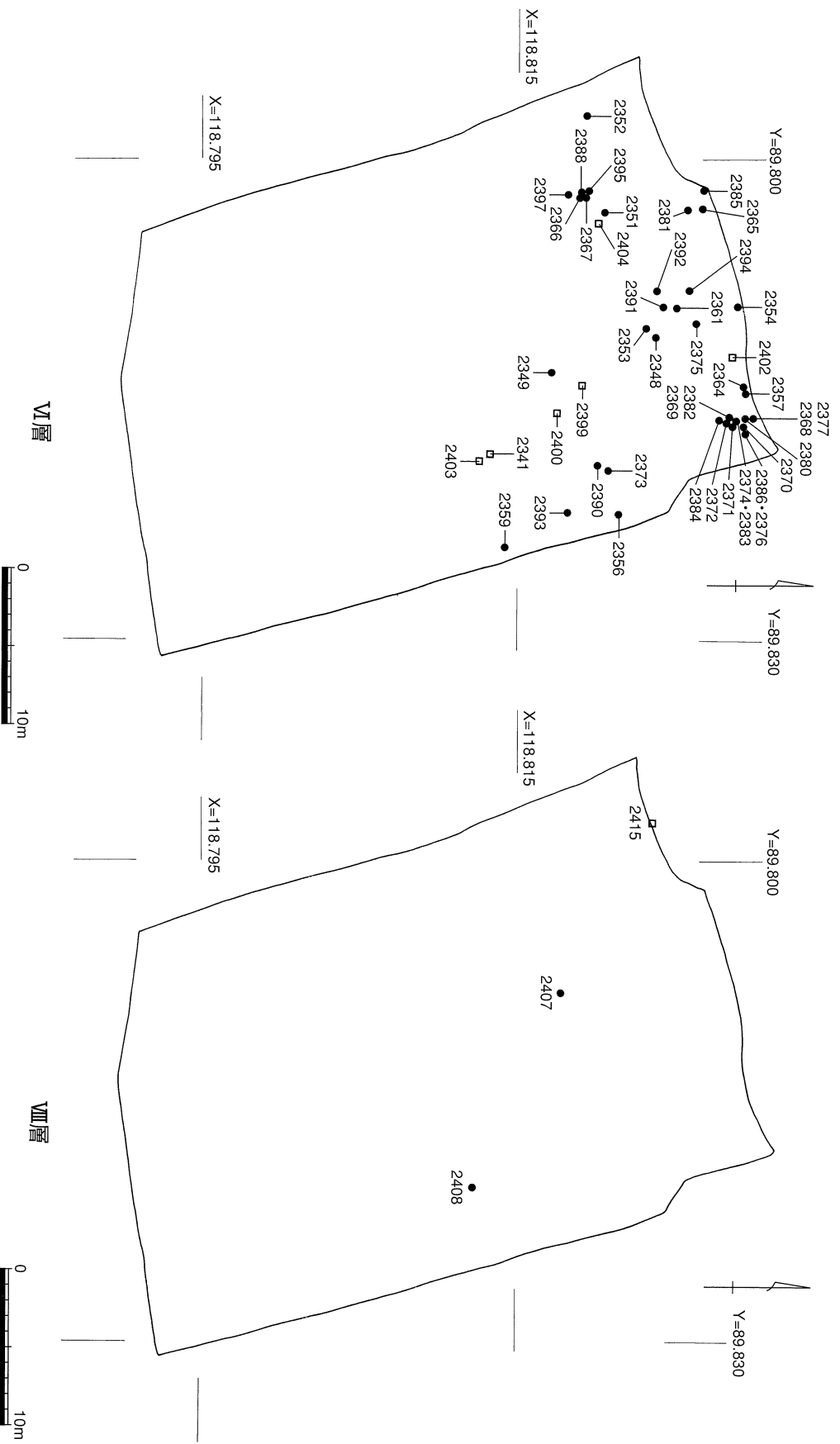


第423図 南区 (2004年度1区) SR3001V層出土遺物 (1)

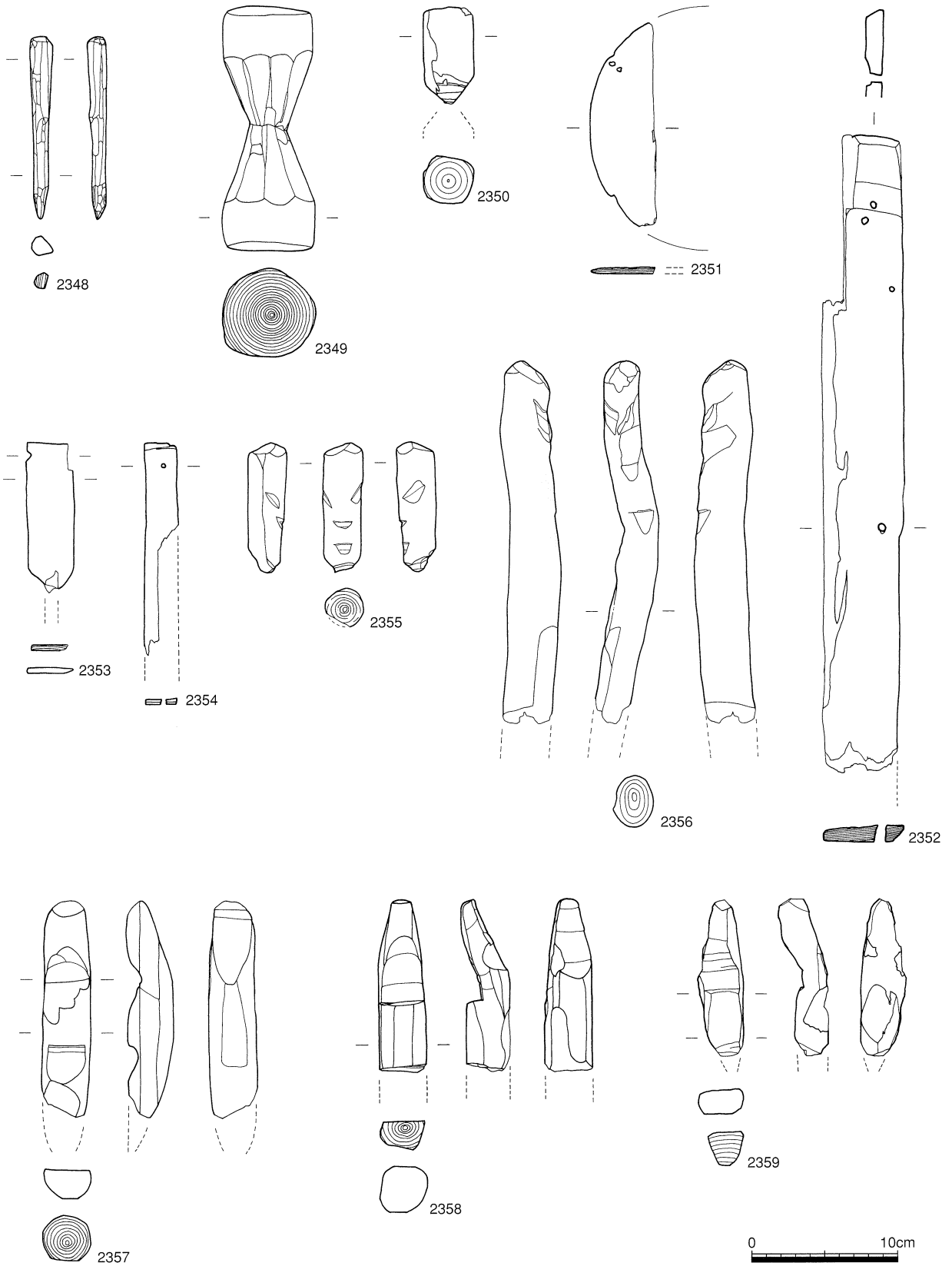


第424図 南区（2004年度1区）SR3001V層出土遺物（2）

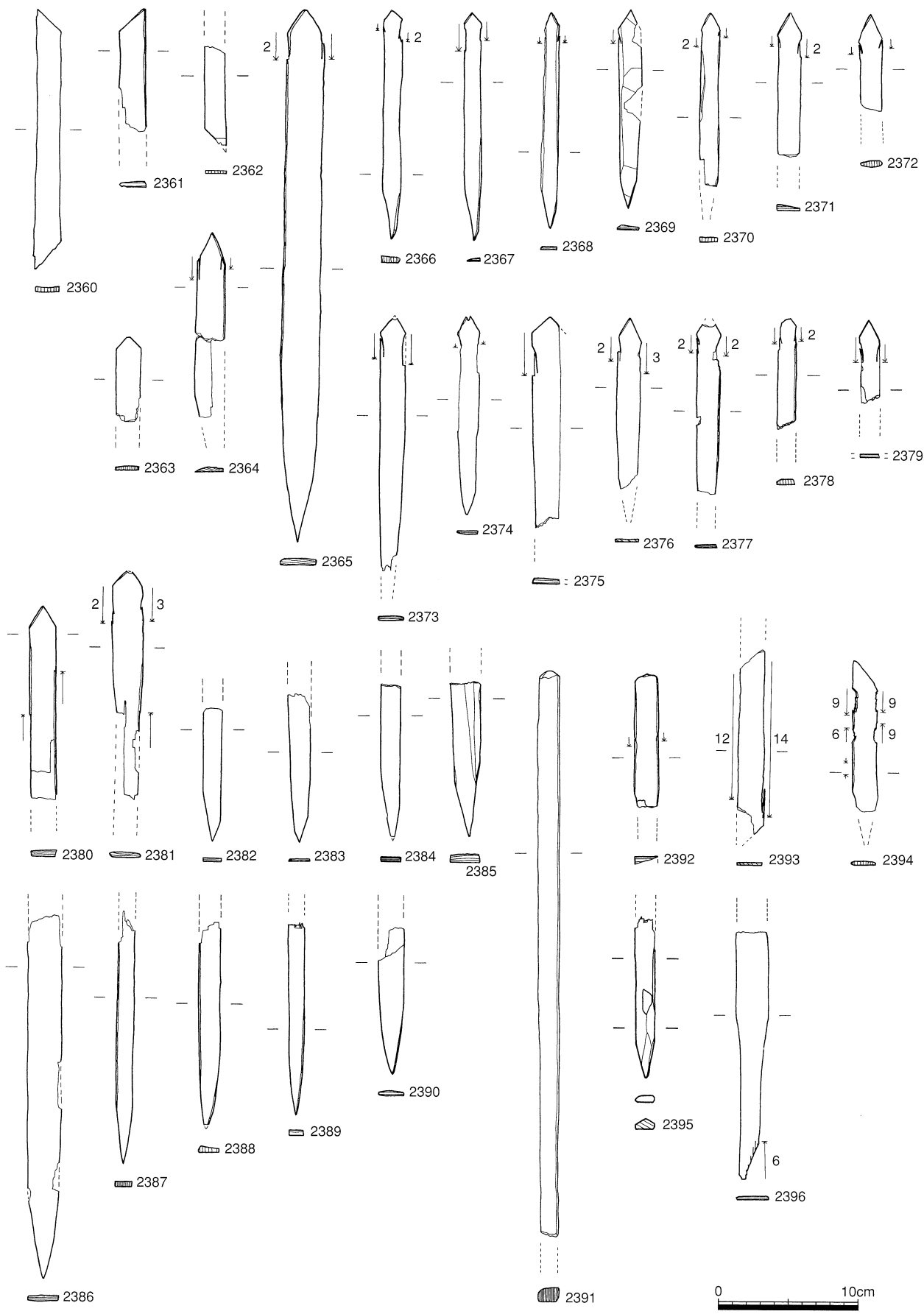
である。外面の摘みの左側に「名方□」と墨書する。2345は土師器の皿の底部外面に「玉」と墨書する。骨製品は2点を図化した。2346は鹿角製の楽器の弦巻である。2347も鹿角製の武器の鏃である。



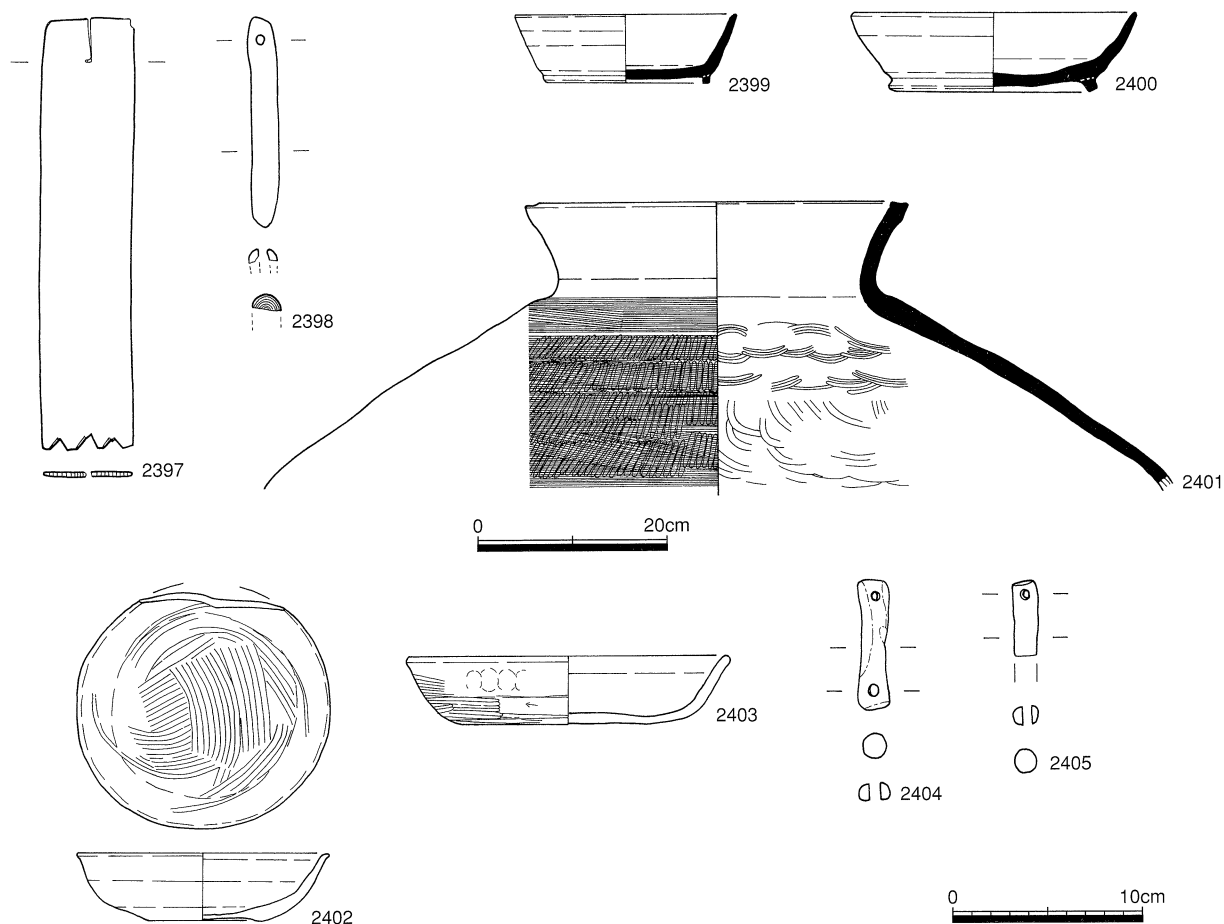
第425図 南区 (2004年度1区) SR3001 VI層・VII層遺物出土状況ドット図



第426図 南区（2004年度1区）SR3001VI層出土木製品（工具・農具・容器・文房具・祭祀具）



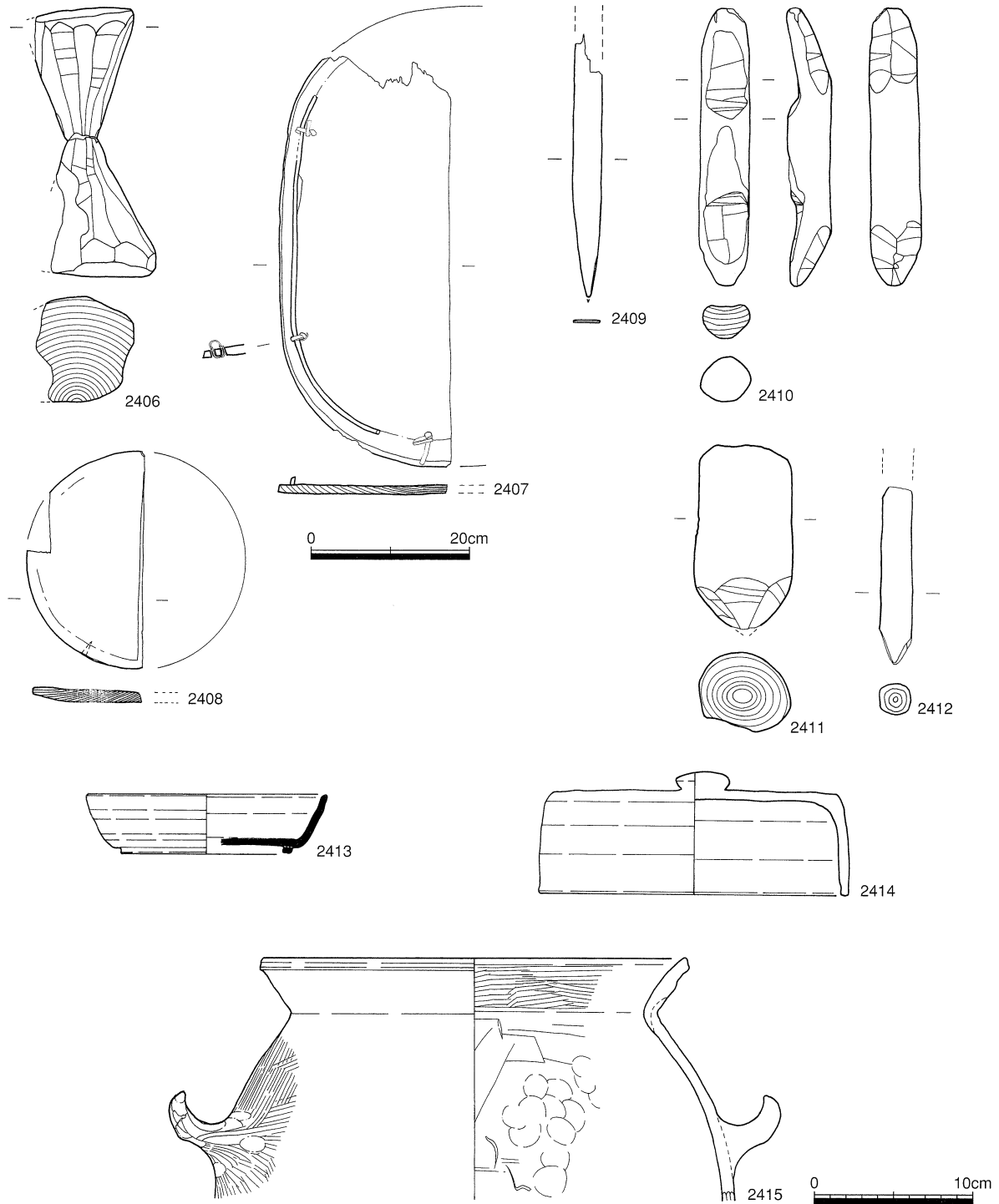
第427图 南区 (2004年度1区) SR3001 VI層出土木製品 (祭祀具)



第428図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅵ層出土遺物

自然流路（SR3001）Ⅵ層出土遺物（第425～428図）

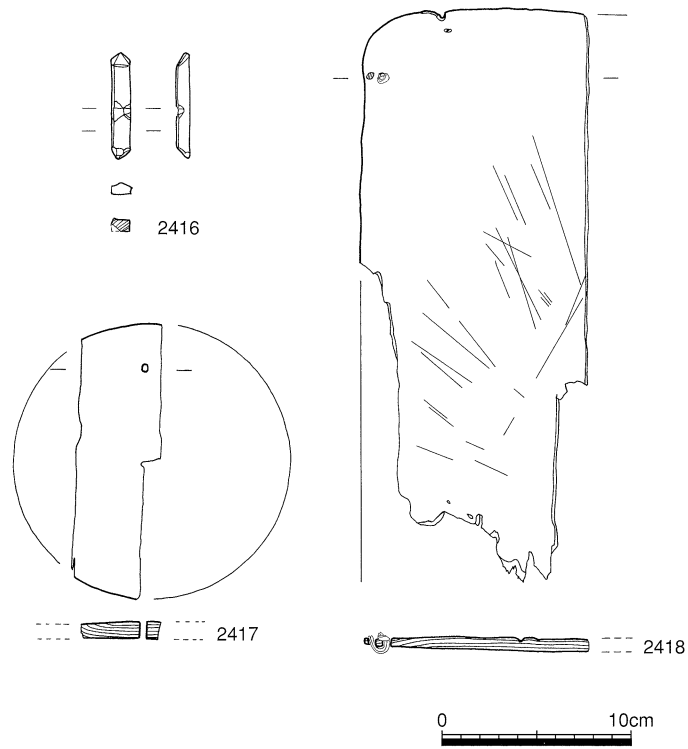
木製品は51点を図化した。2348は木釘である。2349、2350は木錘である。2351、2352は円形曲物の底板である。2353は木札である。付札木筒状の切り欠きがあるが、墨痕は見えない。2355、2356は円筒状人形である。2357～2359は舟形である。2360～2396は斎串である。2397は用途不明であるが、一端に琴に類似する切り込みが有る。土器、土製品は7点を図化した。2399、2400は須恵器の杯である。2401は須恵器の甕である。2402、2403は土師器の杯である。2404、2405は土錘である。



第429図 南区（2004年度1区）SR3001Ⅷ層出土遺物

自然流路（SR3001）Ⅷ層出土遺物（第425、429図）

木製品は7点を図化した。2406は木錘である。2407は楕円形曲物の底板である。2408は円形曲物の底板である。2409は斎串である。2410は舟形である。土器は3点を図化した。2413は須恵器の杯である。2414は土師器の壺蓋である。2415は土師器の甕である。



第430図 南区（2004年度1区）SR3001出土木製品（農具・容器）

自然流路（SR3001）出土遺物（第430図）

木製品は3点を図化した。2416は木錘か。2417は円形曲物の蓋板である。2418は方形曲物の底板である。

不明遺構（SX3001）（第431図）

位置

大グリッド Loc.F-1、中グリッド δ-Ⅲ、小グリッド A-1 に位置する。

規模と形状

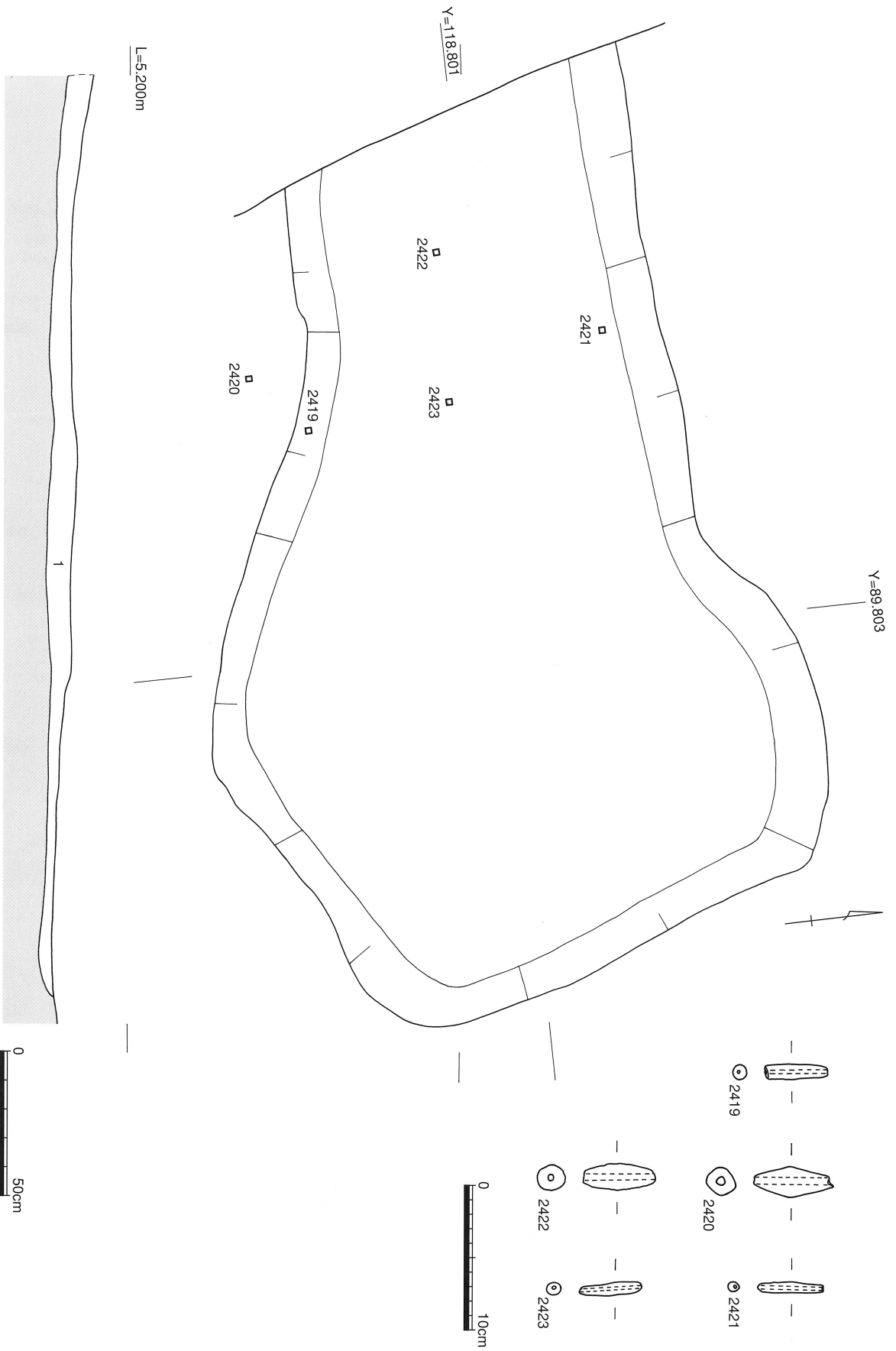
検出長3.20m、最大幅2.13m、最大深度0.09m の不定形である。

土層

遺構の堆積土は灰オリーブ色を呈する粘質シルトによる単一層である。

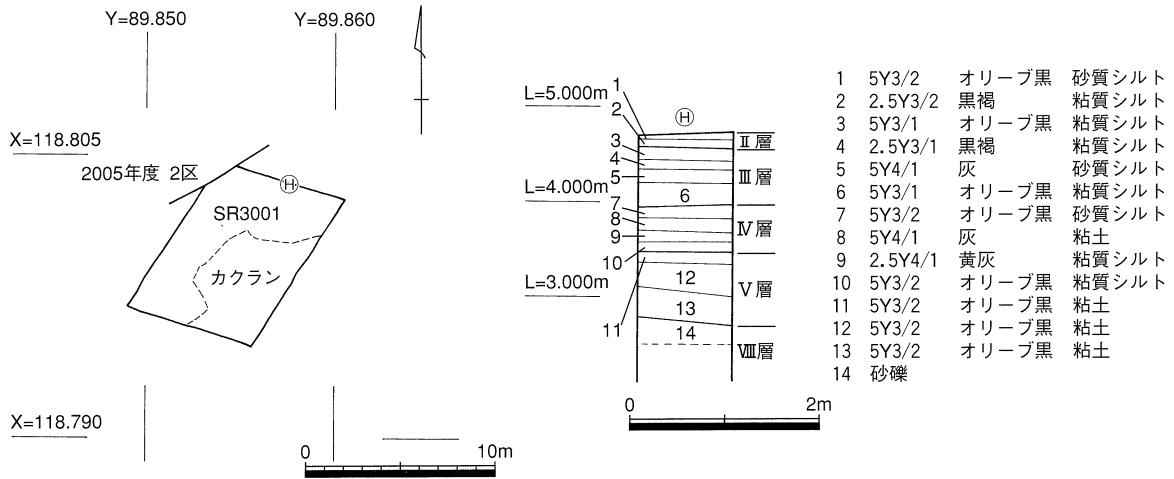
出土遺物

2419～2423は土錘である。

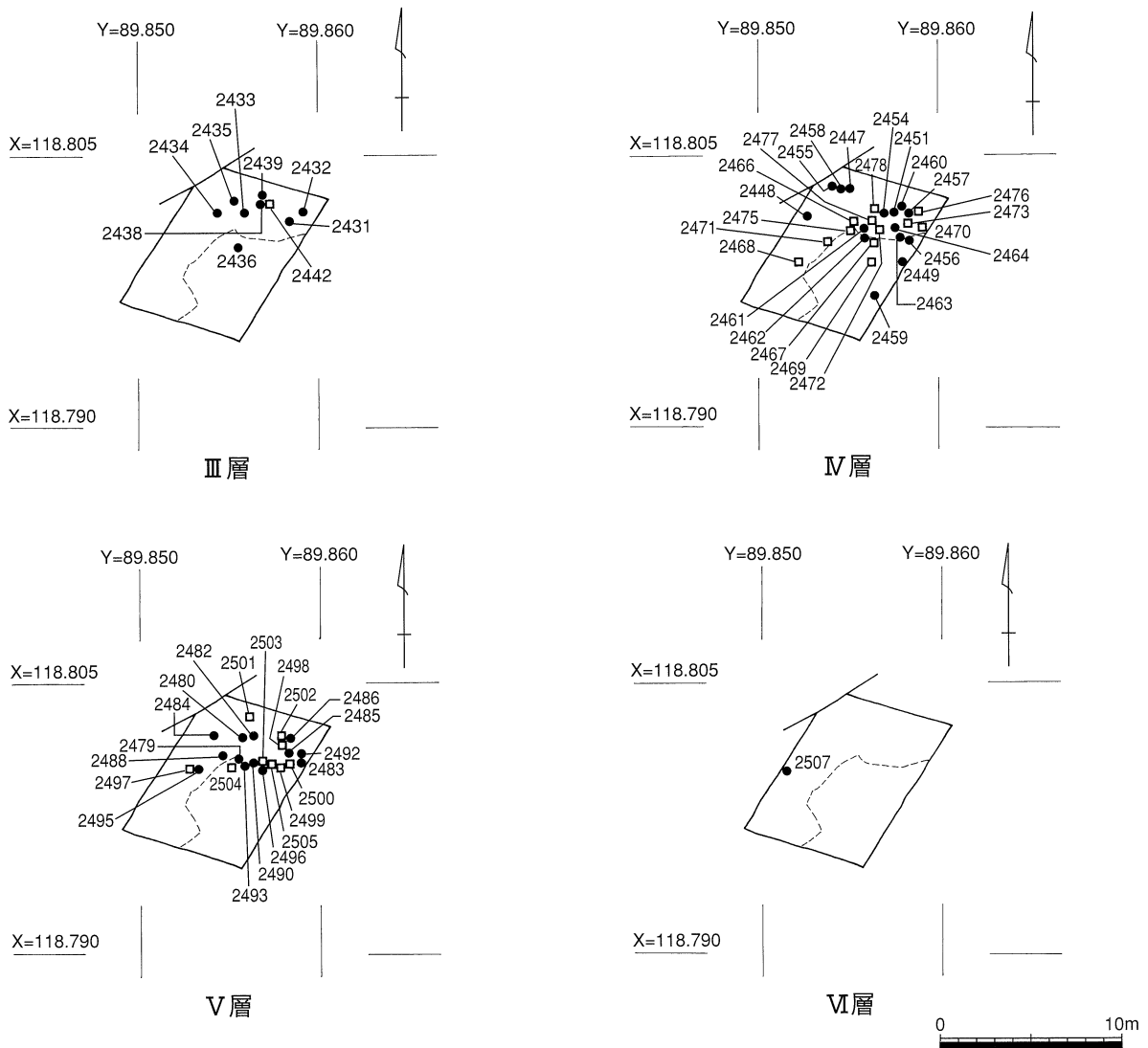


第431図 南区 (2004年度1区) SX3001平・断面図・遺物出土状況ポイント図・出土遺物

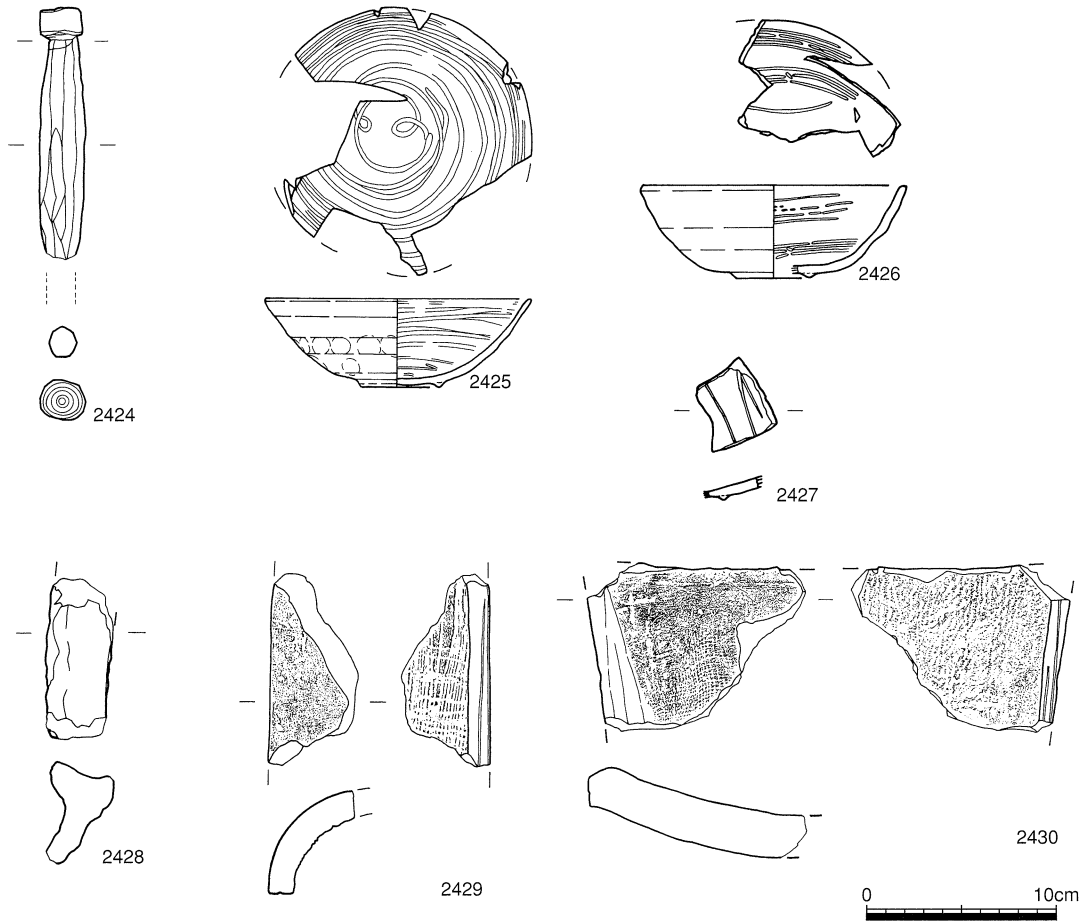
(28) 2007年度 1 区



第432図 南区（2007年度 1 区）第 3 遺構面 調査区遺構平面図・土層柱状図



第433図 南区（2007年度 1 区）SR3001 III層・IV層・V層・VI層遺物出土状況ドット図



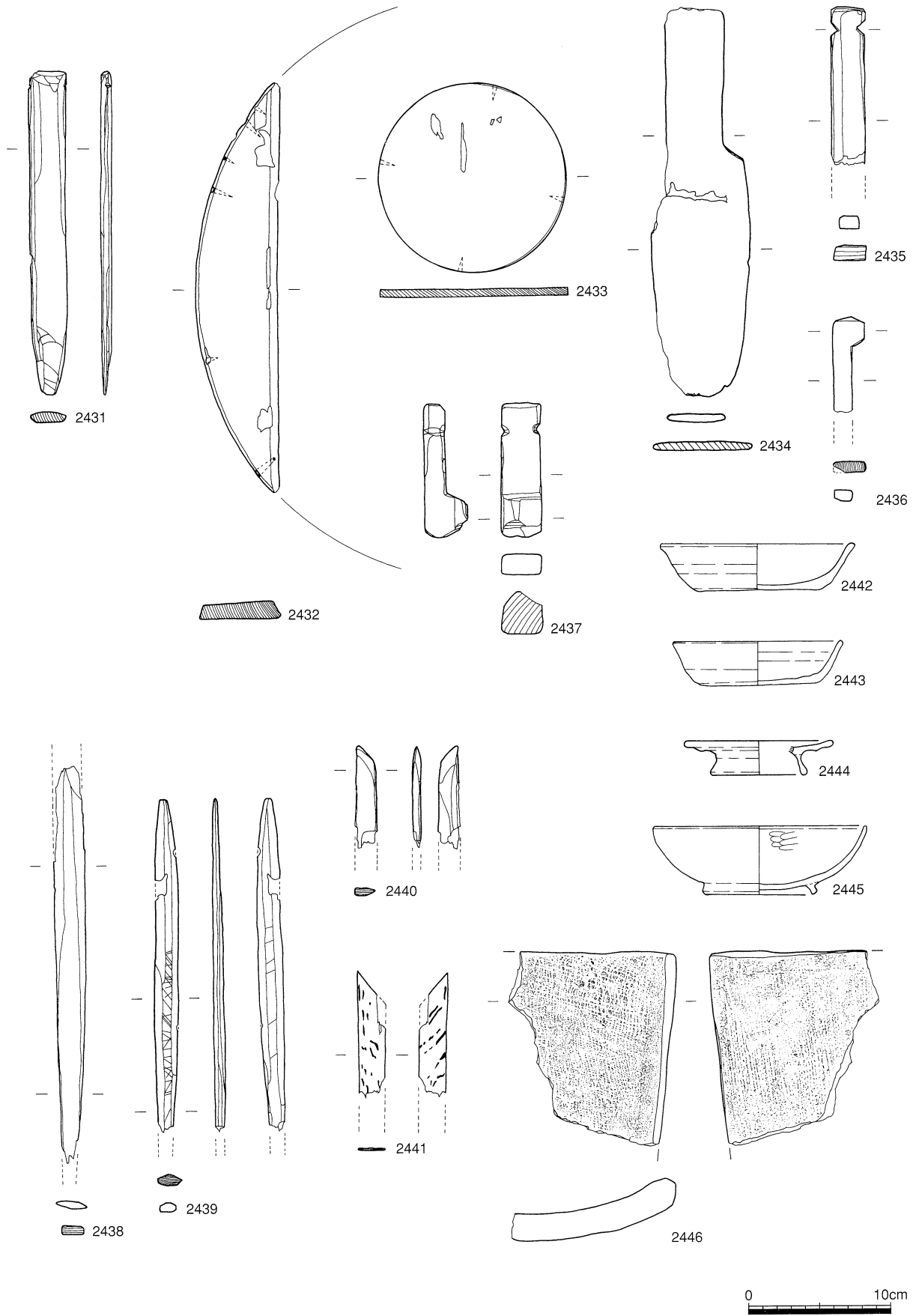
第434図 南区（2007年度1区）SR3001 II層出土遺物

自然流路（SR3001）II層出土遺物（第434図）

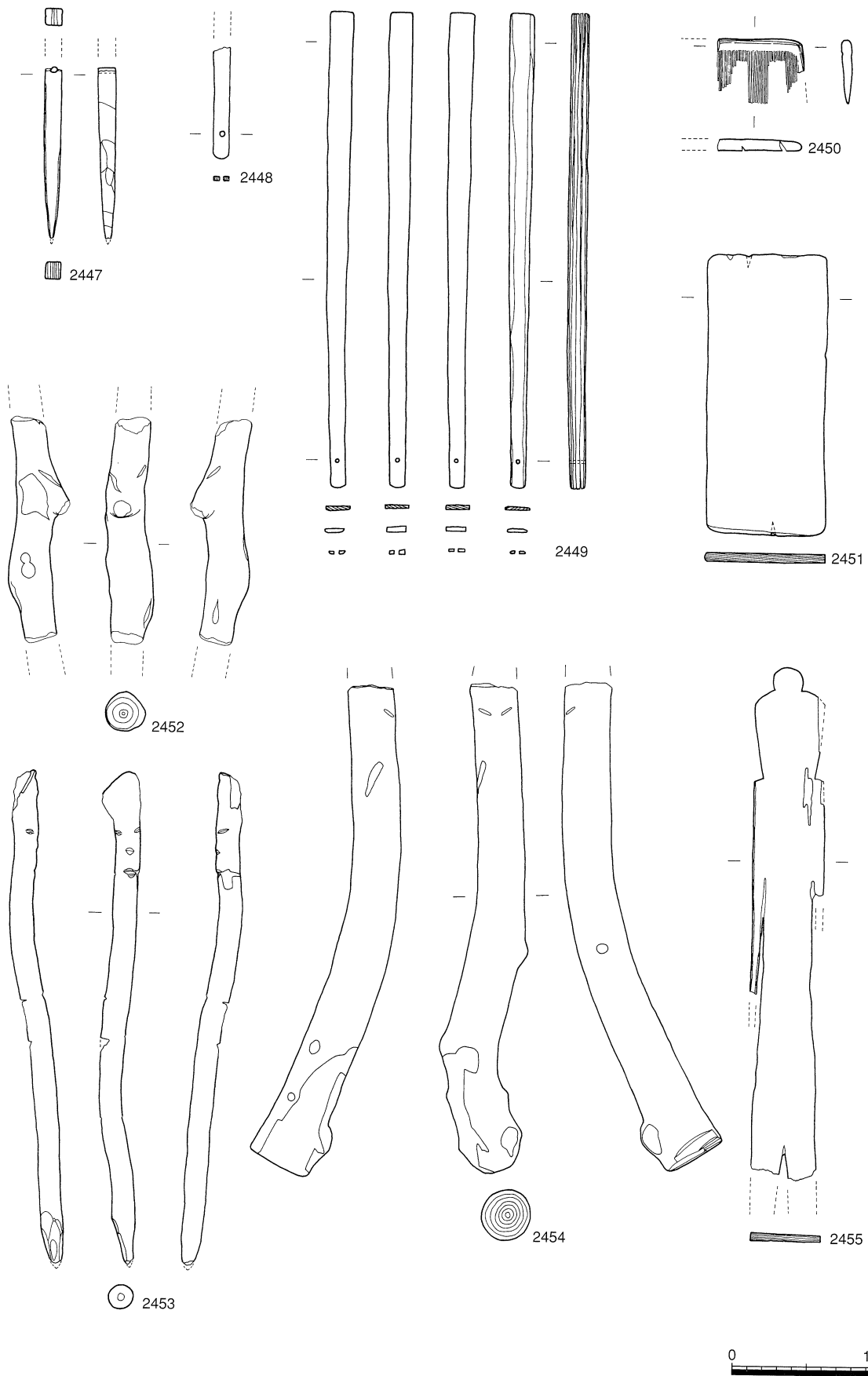
2424は工具か。頭部を削り出したものである。土器は6点を図化した。2425～2427は瓦器碗である。2428は籠の破片である。2429は丸瓦である。2430は平瓦である。

自然流路（SR3001）III層出土遺物（第433、435図）

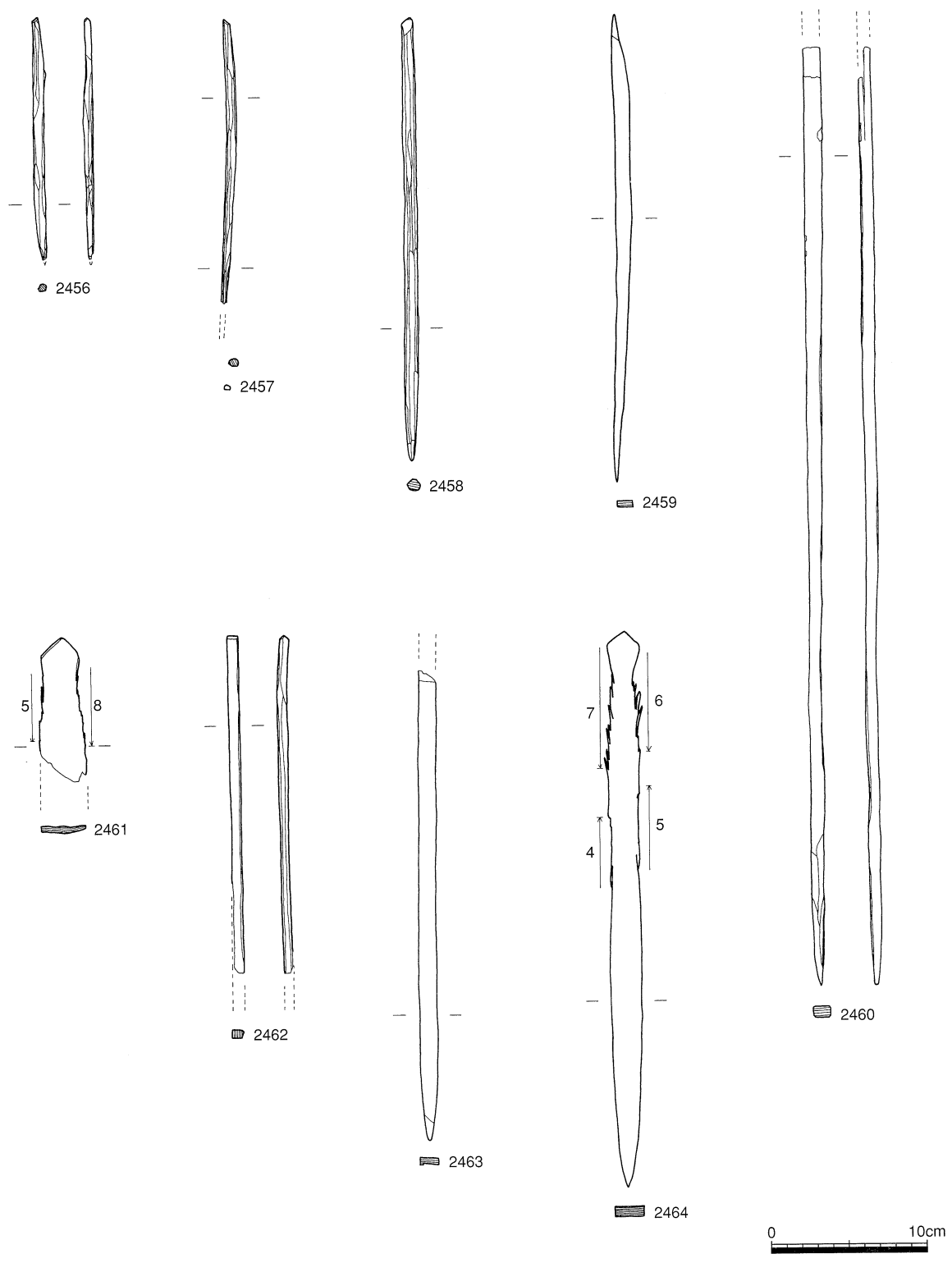
木製品は11点を図化した。2431は籠である。2432、2433は円形曲物の底板である。2434は杓子である。2435は木札である。上端に切り欠きがあり付札と考えられる。2438、2440は刀形である。2439は剣形である。2441は斎串である。土器・土製品は5点を図化した。2442、2443は土師器の杯である。2444は高台付きの土師器の皿である。2445は黒色土器B類の碗である。2446は平瓦である。



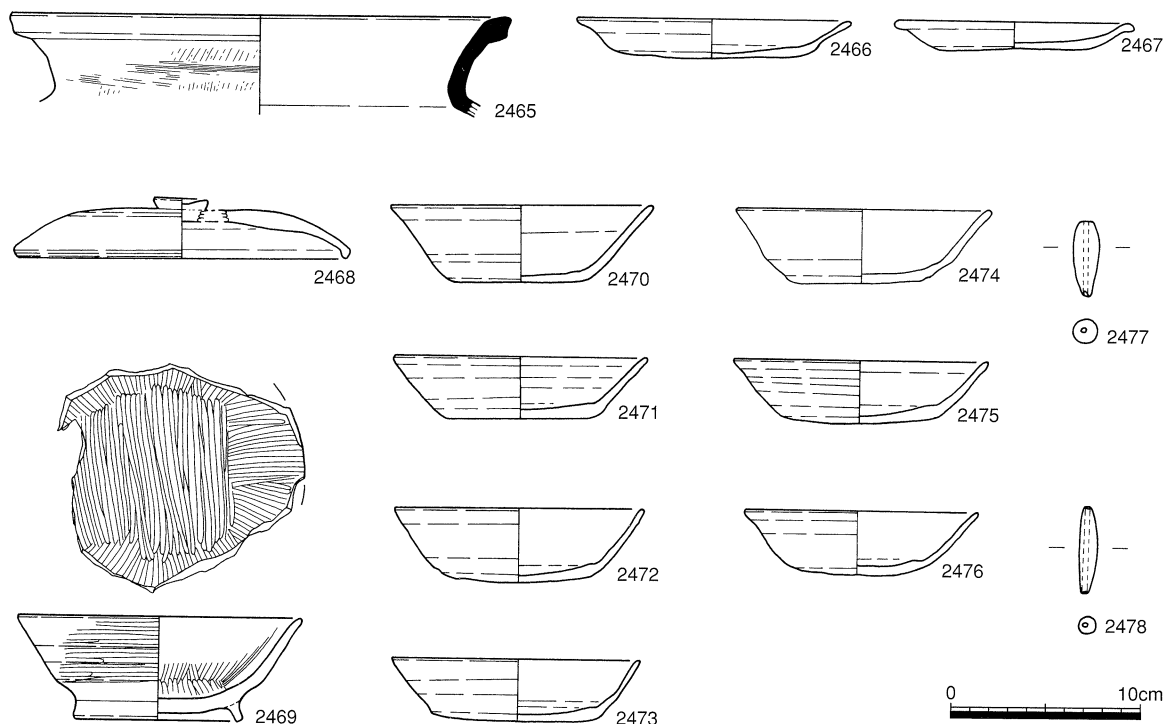
第435図 南区（2007年度1区）SR3001Ⅲ層出土遺物



第436図 南区（2007年度1区）SR3001IV層出土木製品（農具・服飾具・容器・祭祀具）



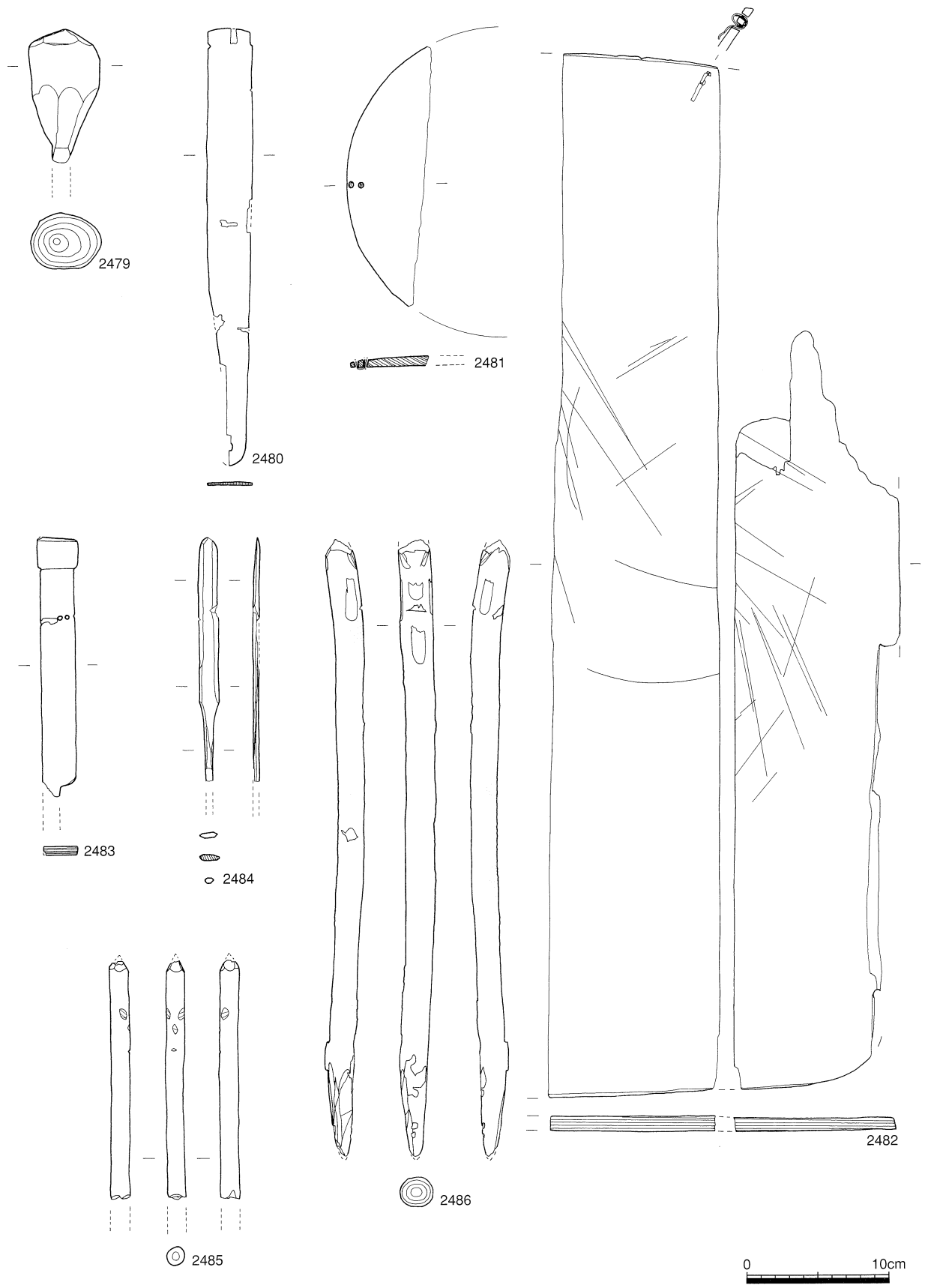
第437図 南区（2007年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具）



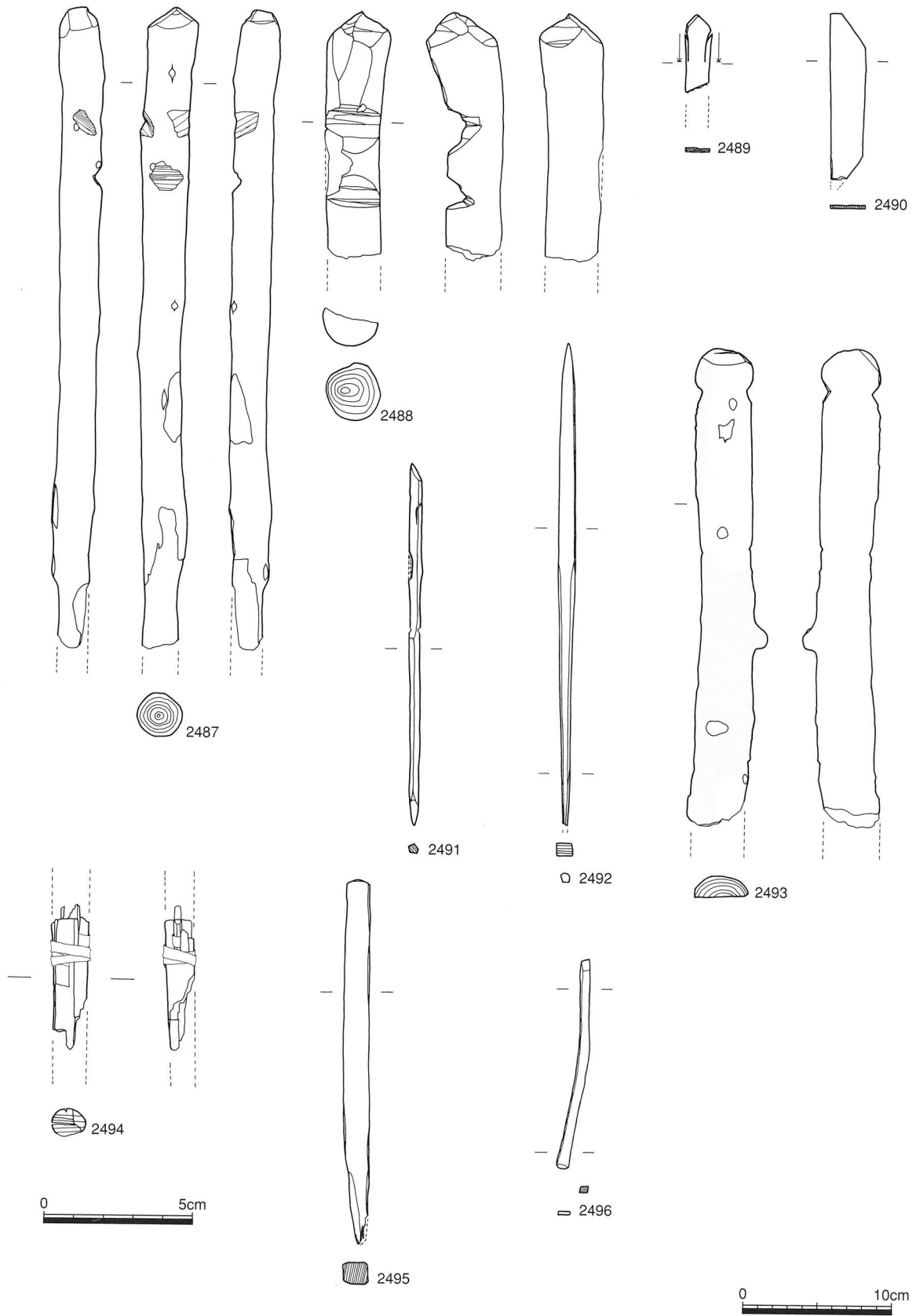
第438図 南区（2007年度1区）SR3001Ⅳ層出土遺物

自然流路（SR3001）Ⅳ層出土遺物（第433、436～438図）

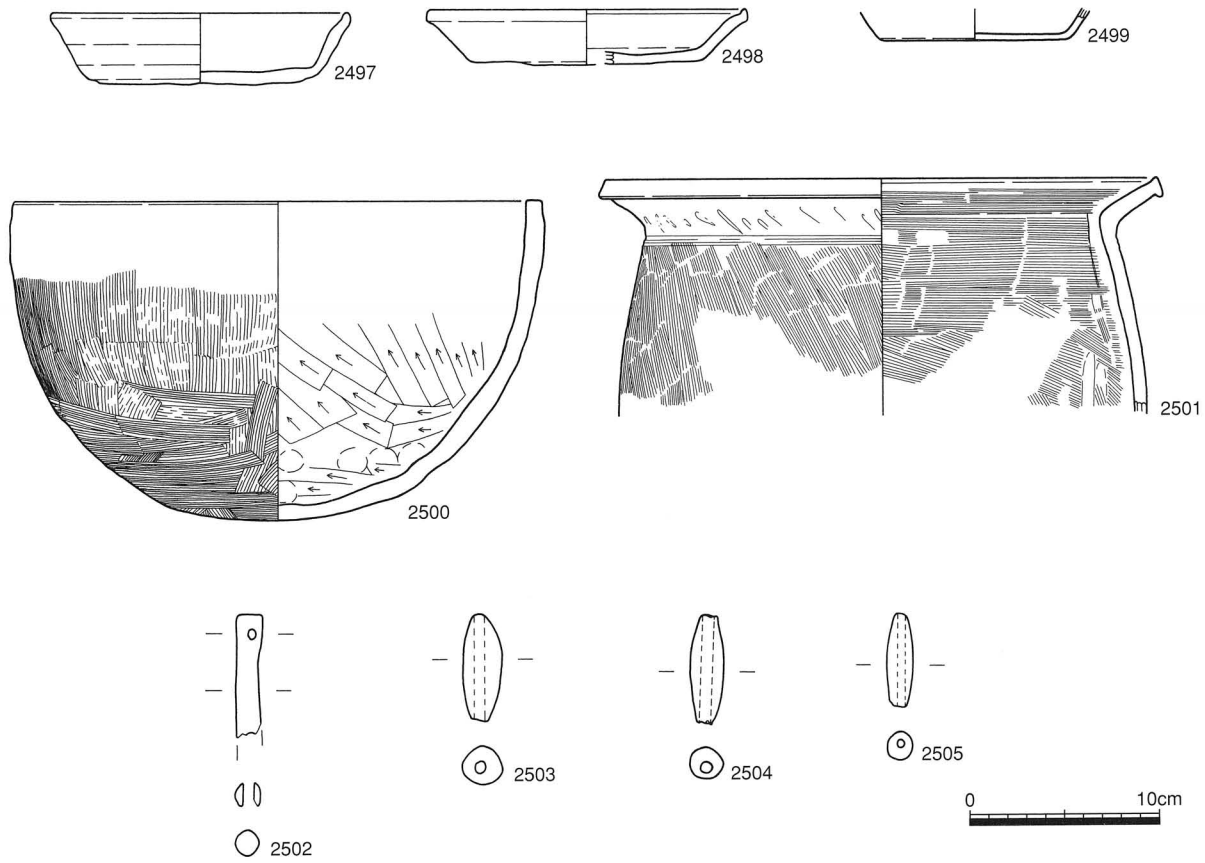
木製品は18点を図化した。2447は鋏先である。2448、2449は檜扇である。2450は刻歯式横櫛である。2451は方形曲物の底板である。2452～2454は円筒状人形である。2455は正面全身人形である。2456～2458は棒状祭祀具である。2459～2464は斎串である。土器は14点を図化した。2465は須恵器の甕である。2466、2467は土師器の皿である。2468は土師器の杯蓋である。2469は土師器の椀である。内外面に赤色塗彩が施される。2470～2476は土師器の杯である。2477、2478は土錘である。



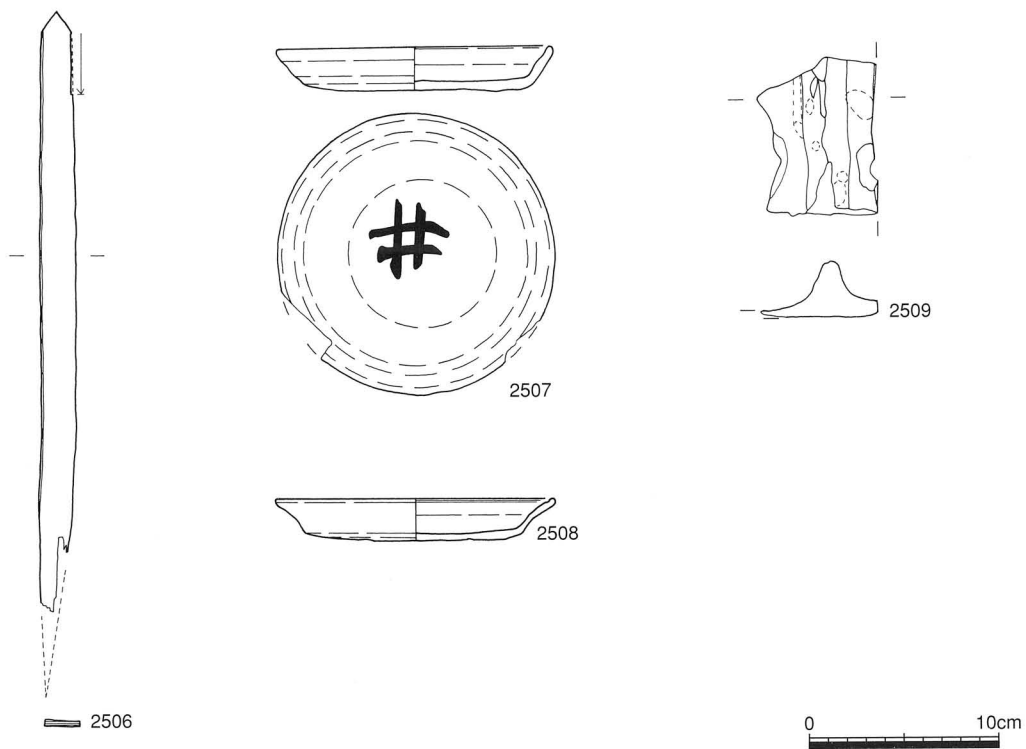
第439図 南区（2007年度1区）SR3001V層出土木製品（農具・服飾具・容器・文房具・祭祀具）



第440図 南区（2007年度1区）SR3001V層出土木製品（祭祀具・部材・用途不明）



第441図 南区（2007年度1区）SR3001V層出土遺物



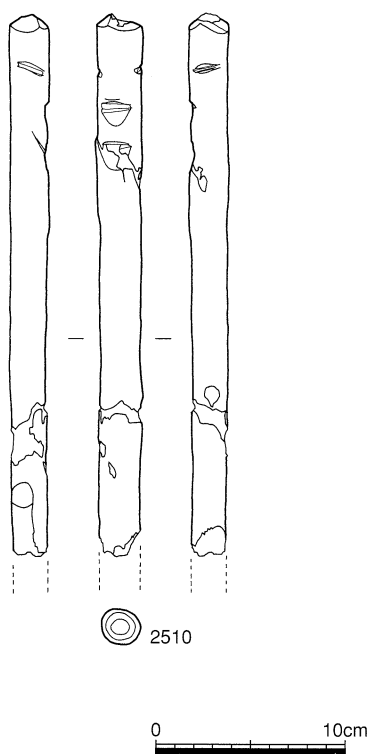
第442図 南区（2007年度1区）SR3001VI層出土遺物

自然流路 (SR3001) V層出土遺物 (第433、439~441図)

木製品は18点を図化した。2479は木錘である。2480は檜扇である。2481は円形曲物の底板、2482は方形曲物の底板である。2484は剣形である。2485~2487は円筒状人形である。2488は舟形である。2489~2492は斎串である。2493は立体人形である。2496は籌木である。土器・土製品は9点を図化した。2497~2499は土師器の杯である。2500は土師器の鉢である。2501は土師器の甕である。2502~2505は土錘である。2502は棒状、2503~2505は管状である。

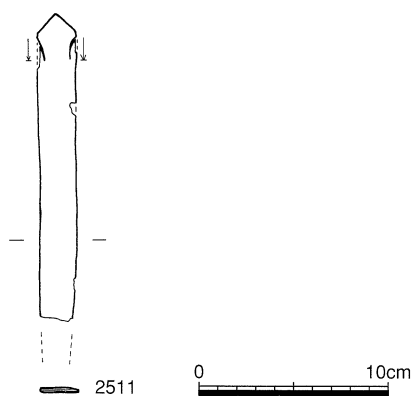
自然流路 (SR3001) VI層出土遺物 (第433、442図)

2506は斎串である。土器は3点を図化した。2507は墨書土器である。土師器の杯の底部外面に「井」と墨書する。九字を簡略化したものか。2508は土師器の皿である。2509は竈の一部である。



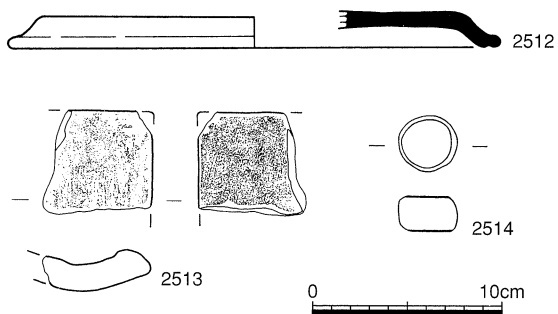
自然流路 (SR3001) VIII層出土遺物 (第443図)

2510は円筒状人形である。



第443図 南区 (2007年度1区)
SR3001VIII層出土木製品 (祭祀具)

第444図 南区 (2007年度1区)
SR3001出土木製品 (祭祀具)



自然流路 (SR3001) 出土遺物 (第444図)

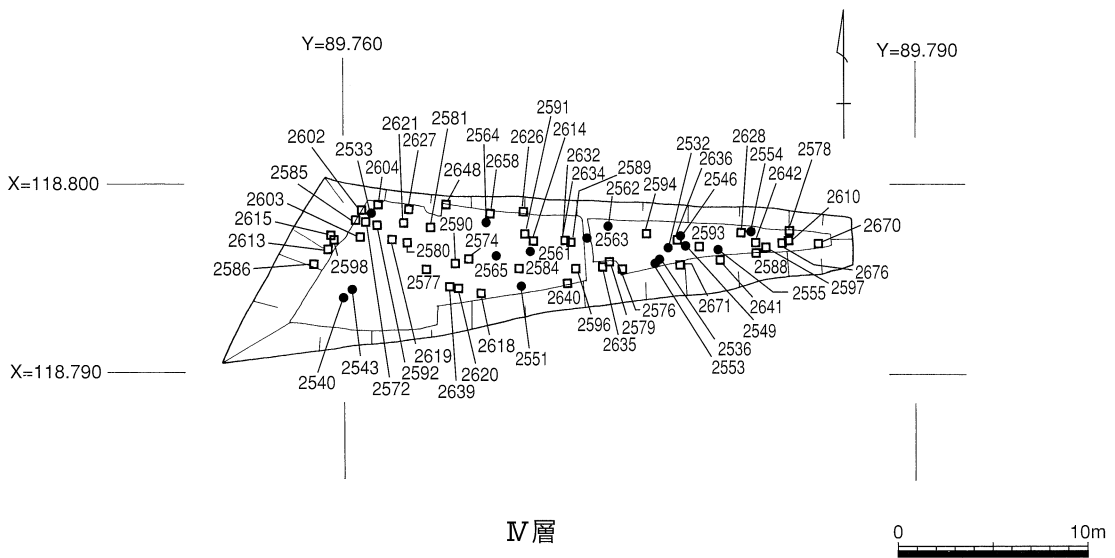
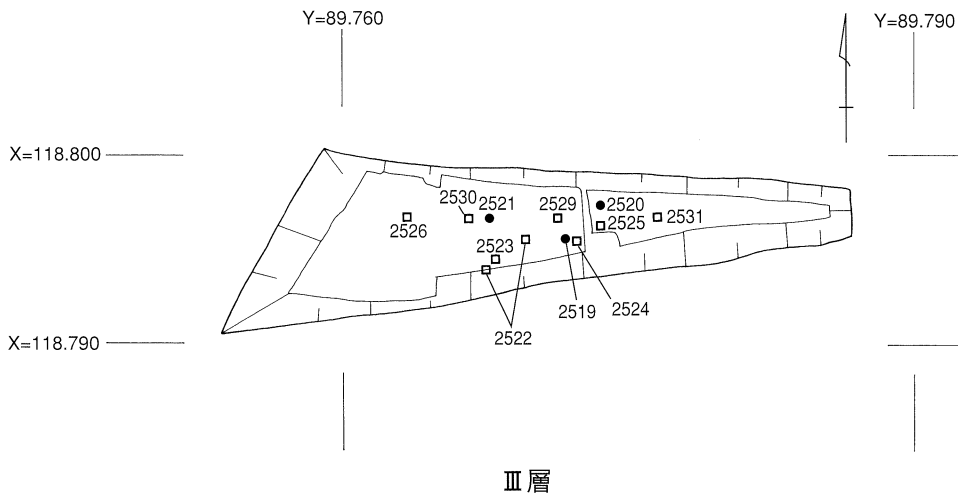
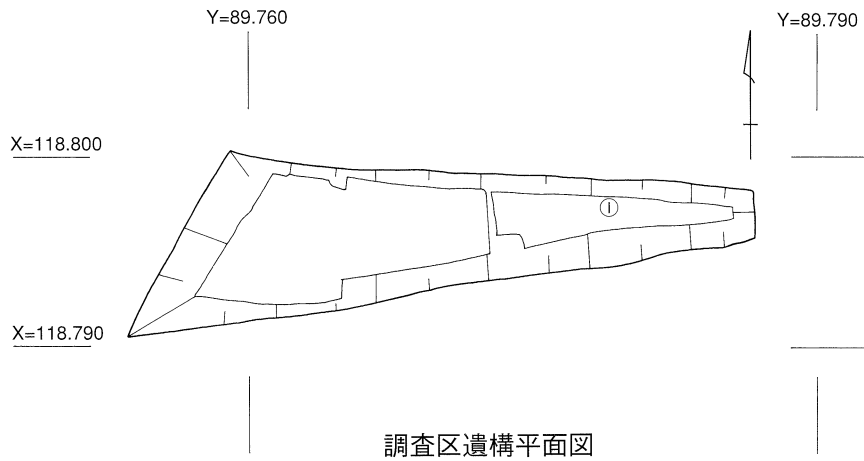
2511は斎串である。

包含層出土遺物 (第445図)

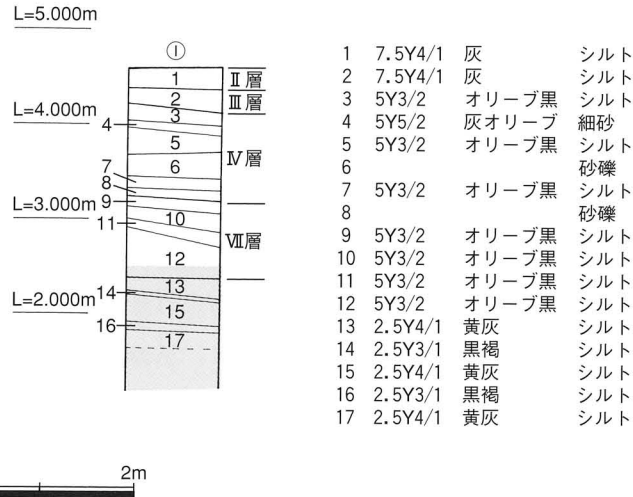
土器は3点を図化した。2512は須恵器の杯蓋である。2513は平瓦である。2514は土製品の円盤である。

第445図 南区 (2007年度1区)
包含層出土遺物

(29) 1998年度 1区



第446図 南区 (1998年度 1区) 調査区遺構平面図・SR3001 III層・IV層遺物出土状況ドット図



第447図 南区（1998年度1区）土層柱状図

自然流路（SR3001）Ⅱ層出土遺物（第448図）

土器は3点を図化した。2515、2516は土師器の杯である。2517は土錘である。

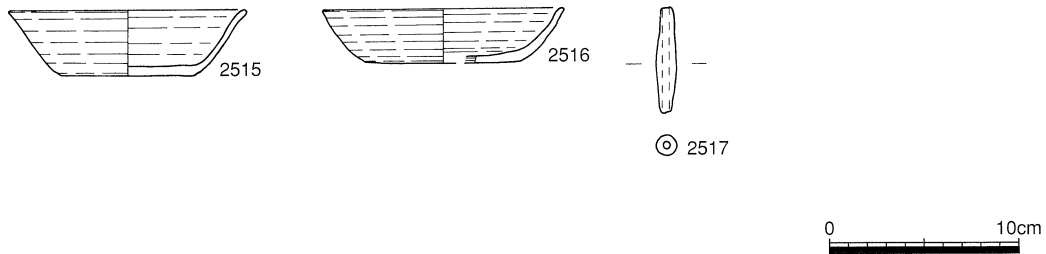
自然流路（SR3001）Ⅲ層出土遺物（第446、449図）

木製品は4点を図化した。2518は工具の柄である。2519は刻歯式横櫛である。2520は円形曲物の底板である。2521は陽物形である。土器は10点を図化した。2522、2523は土師器の杯である。2524は土師器の皿である。2525は土師器の椀である。2526、2527は黒色土器 A 類の椀である。2528は丸瓦である。2529、2530は平瓦である。2531は土錘である。

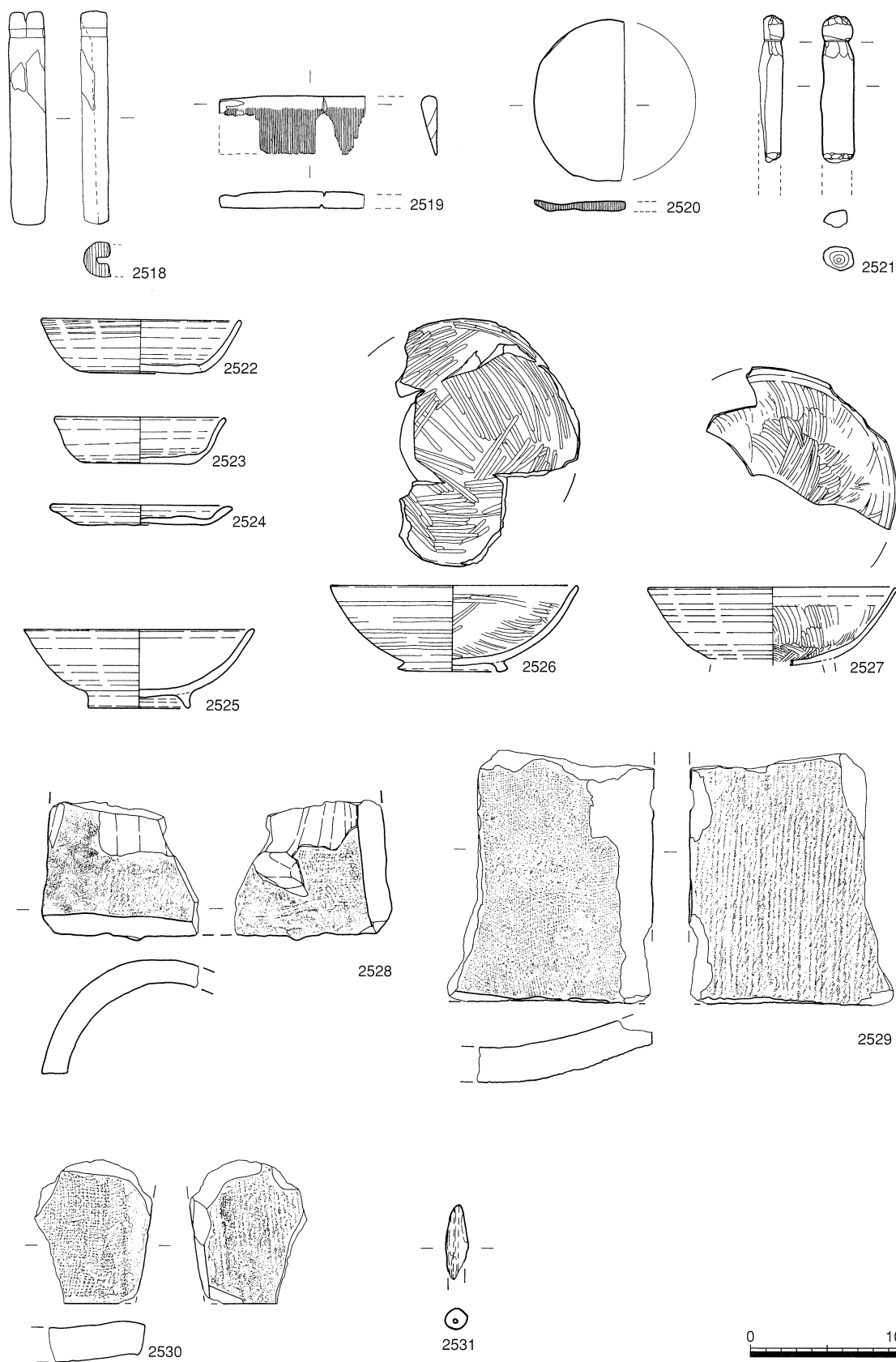
自然流路（SR3001）Ⅳ層出土遺物（第446、450～458図）

木製品は38点を図化した。2532は馬鋏である。2533は織機である。2534は刻歯式横櫛である。2535、2536は円形曲物の底板である。2537は鋸歯付剣形の断片か。側面を鋸歯状に刻んだものである。2538は馬形である。2539は鳥形である。2540、2541は円筒状人形である。2542は棒状祭祀具である。2543は齋串である。2544は部材を火付棒に転用したものである。2549は織機である。2550は陽物形か。2521と類似のものである。2551は刻歯式横櫛である。2552は箸である。2553、2554は円形曲物の底板である。2555は柄杓である。柄の一部と柄先を差し込んでいたと思われる孔が残存している。2556、2557は剣形である。2558～2560は円筒状人形である。2561は舟形である。2562～2564は齋串である。2566は紡輪である。中央に厚みをもたせ、端に向かって薄くなるように削っている。2567～2569は齋串である。2567は墨で描かれた数本の横線がある。土器、土製品は111点を図化した。2570は須恵器の杯蓋である。2571～2587、2589～2594は土師器の杯である。2588は土師器の壺の底部か。2595～2597は土師器の皿である。2597は底部中央に内面からの穿孔がある。2598、2599は黒色土器 A 類の椀である。2600～2603は墨書土器である。2600は土師器の杯の底部外面に「本」の墨書がある。2601は土師器の小破片に文字の一部がある。「樹」か。2602は黒色土器 A 類の椀の底部外面に墨書がある。2603は黒色土器 A 類の椀の底部外面に「十」の墨書がある。2604は平瓦である。2605は竈の破片である。2606～2609は土錘である。2610～2627、2630～2634は土師器の杯である。2632、2634は底部外面に刻書がある。2628、2629は土師器の皿である。

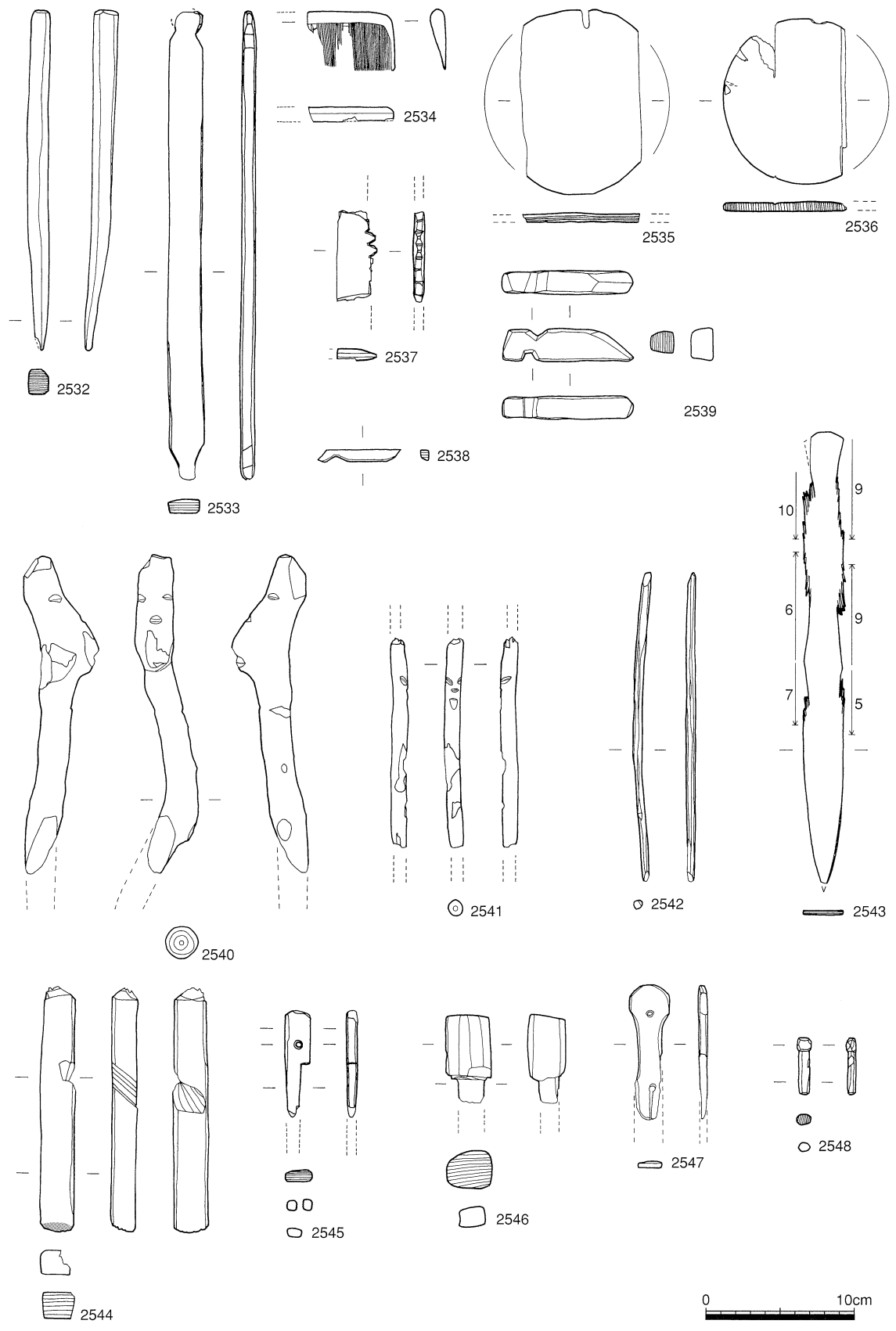
2635は土師器の高杯の脚部である。2636～2638は土師器の皿である。2639は緑釉陶器の皿である。2640は刻書土器である。内面に線状の刻書がある。2641は黒色土器B類の椀である。2642は黒色土器A類の椀である。2643は土師器の椀である。2644～2647は土錘である。2648、2649は墨書土器である。2648は土師器の杯の底部外面に「南」と墨書する。2649は黒色土器B類の椀の底部外面に「井」に似た墨書がある。記号か。2650～2652は須恵器の壺である。2650は須恵器の双耳壺である。2653は須恵器の甕である。2654、2655は土師器の杯である。2655は底部内面に螺旋状暗文、体部内面に放射状暗文が施される。内外面を赤色塗彩する。2656は墨書土器である。土師器の皿の底部外面に人物絵を描いている。2657、2659は刻書土器である。2657土師器の杯の底部外面に、2659は土師器の皿の底部内面に刻書がある。2658は土師器の高杯の脚部である。2660、2661は土師器の皿である。2660は赤色塗彩が施される。2662、2663は土師器の甕である。2664は人面墨書土器か。土師器の体部破片の外面に墨書で顔の一部が見える。2666は墨書土器である。土師器の杯蓋の内面に「冊」に似た墨書がある。2667は土師器の盤脚部である。2668、2669は土錘である。2670は須恵器の高杯の脚部である。2671は須恵器の壺である。2672～2677は土師器の杯である。2674は底部外面に刻書がある。2678は土師器の甕である。2679は平瓦である。2680、2681は土錘である。



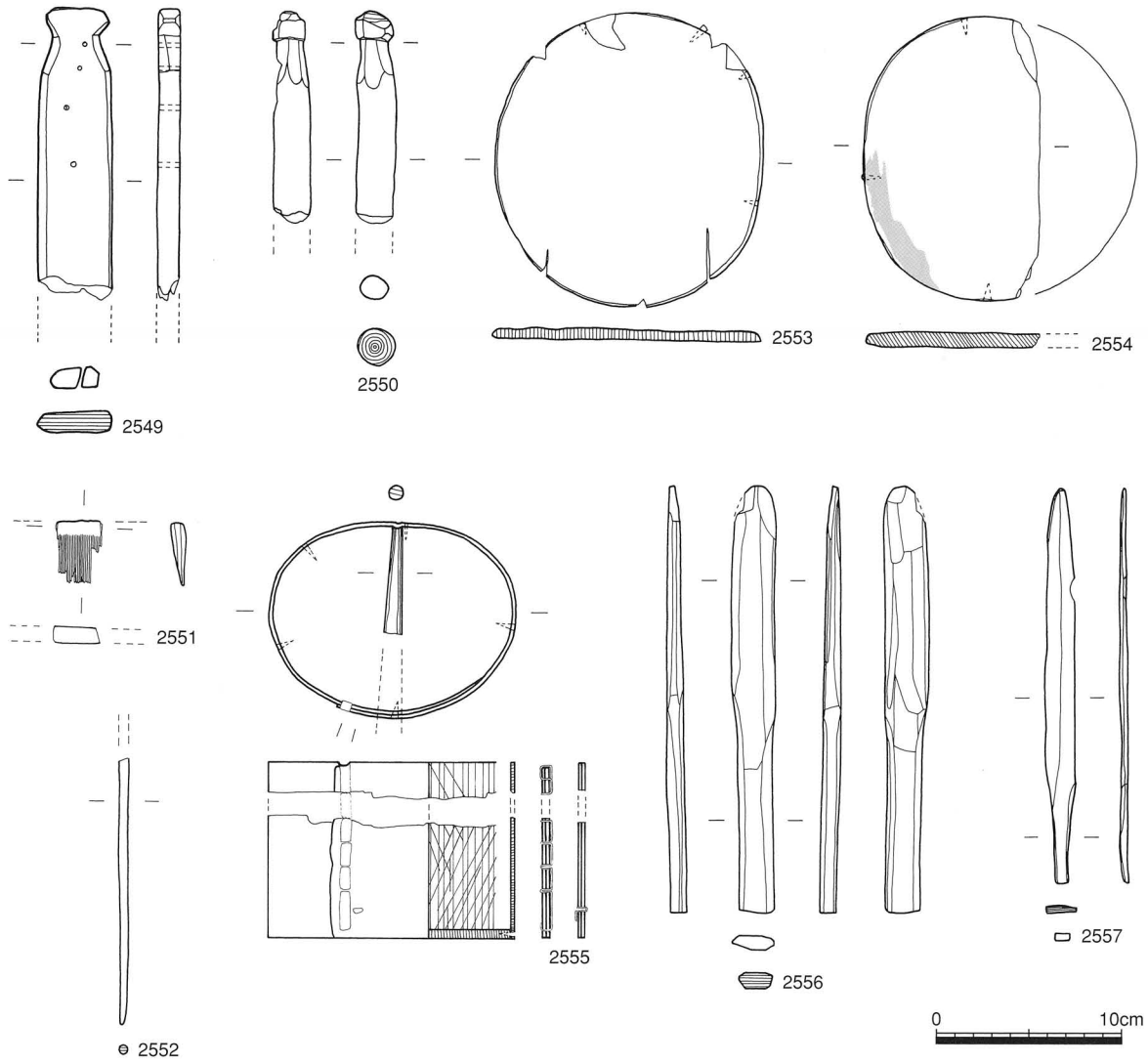
第448図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅱ層出土遺物



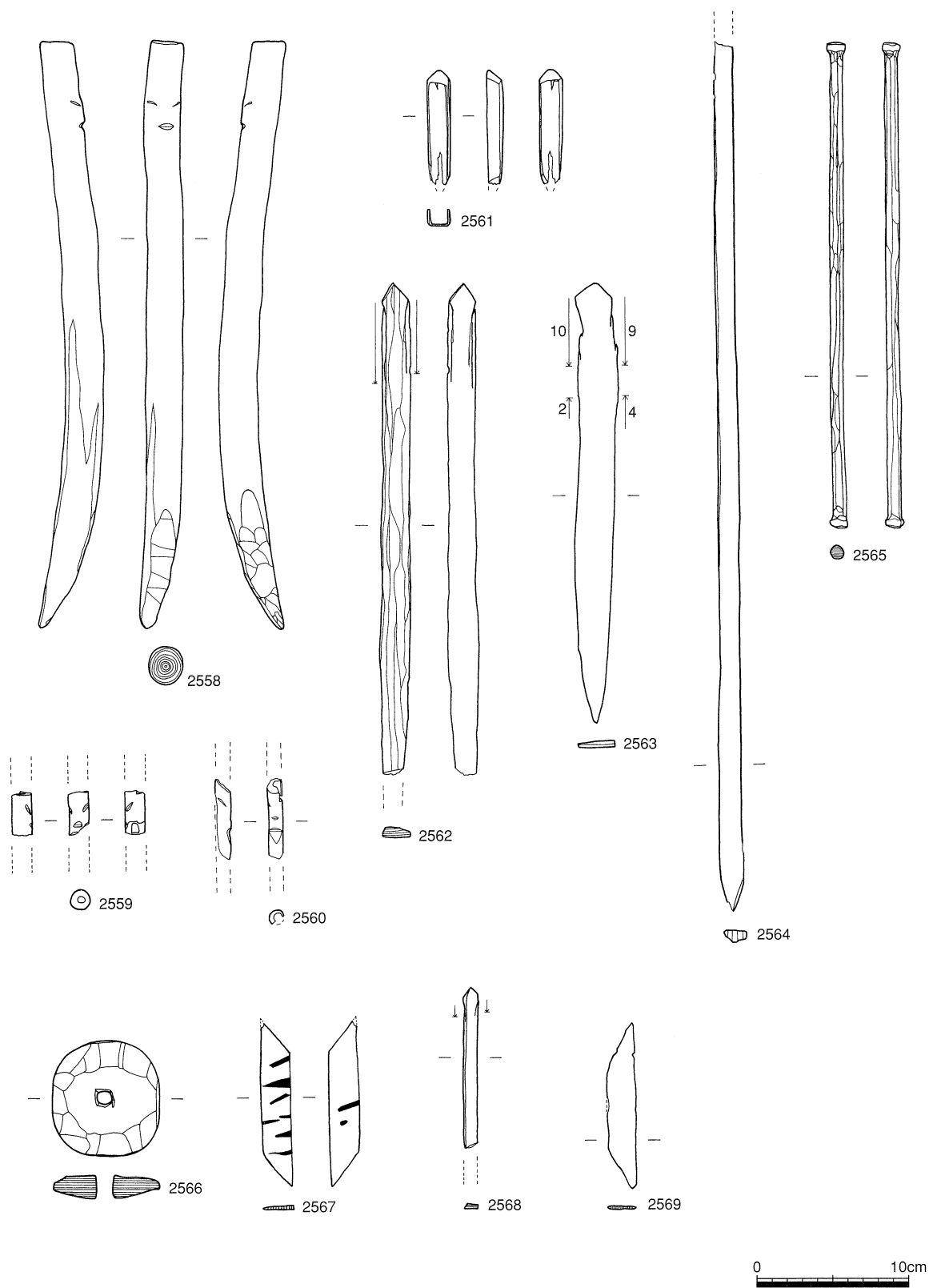
第449图 南区（1998年度1区）SR3001Ⅲ層出土遺物



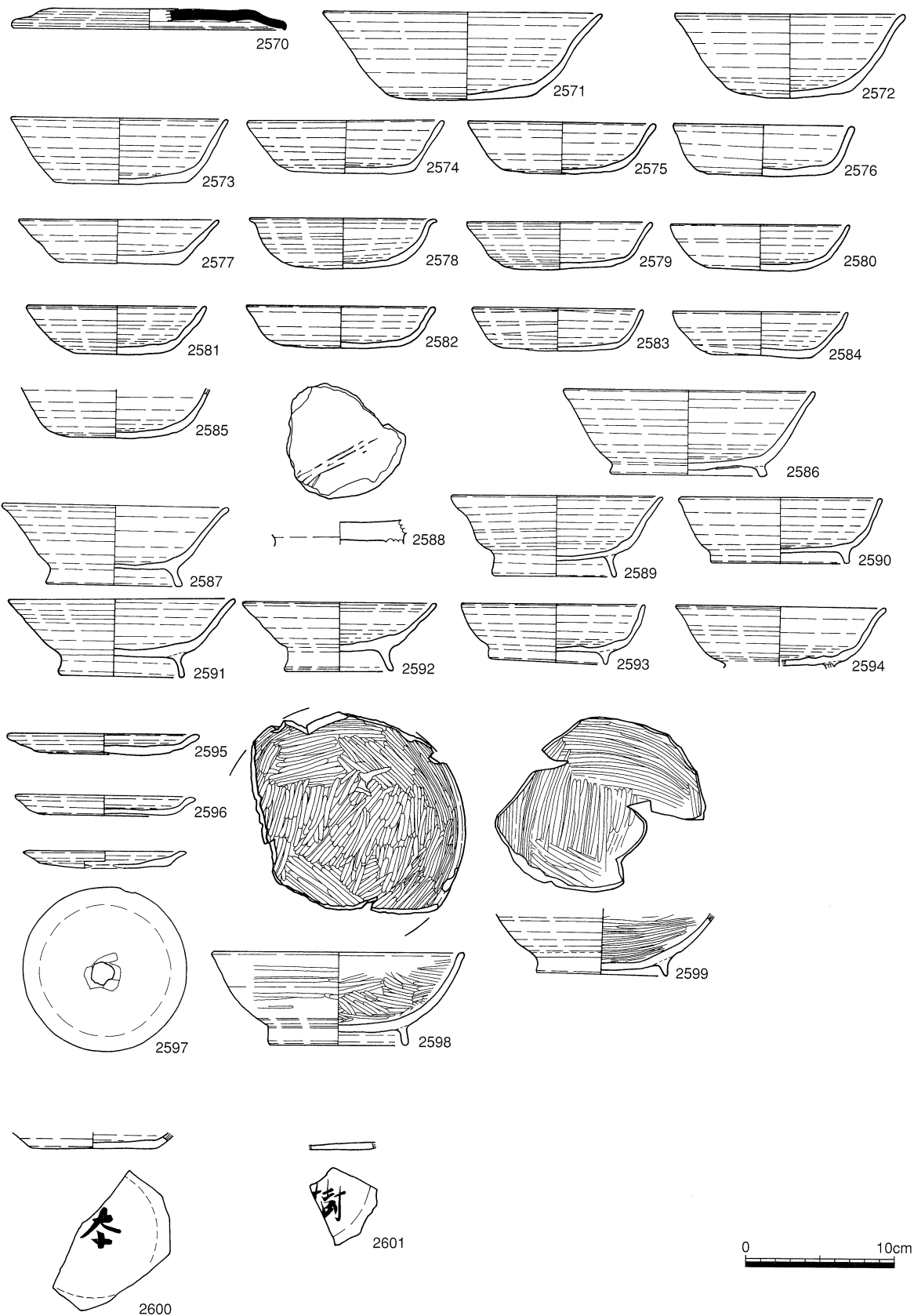
第450図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅳ層出土木製品
 （農具・紡織具・容器・祭祀具・雑具・部材・用途不明）



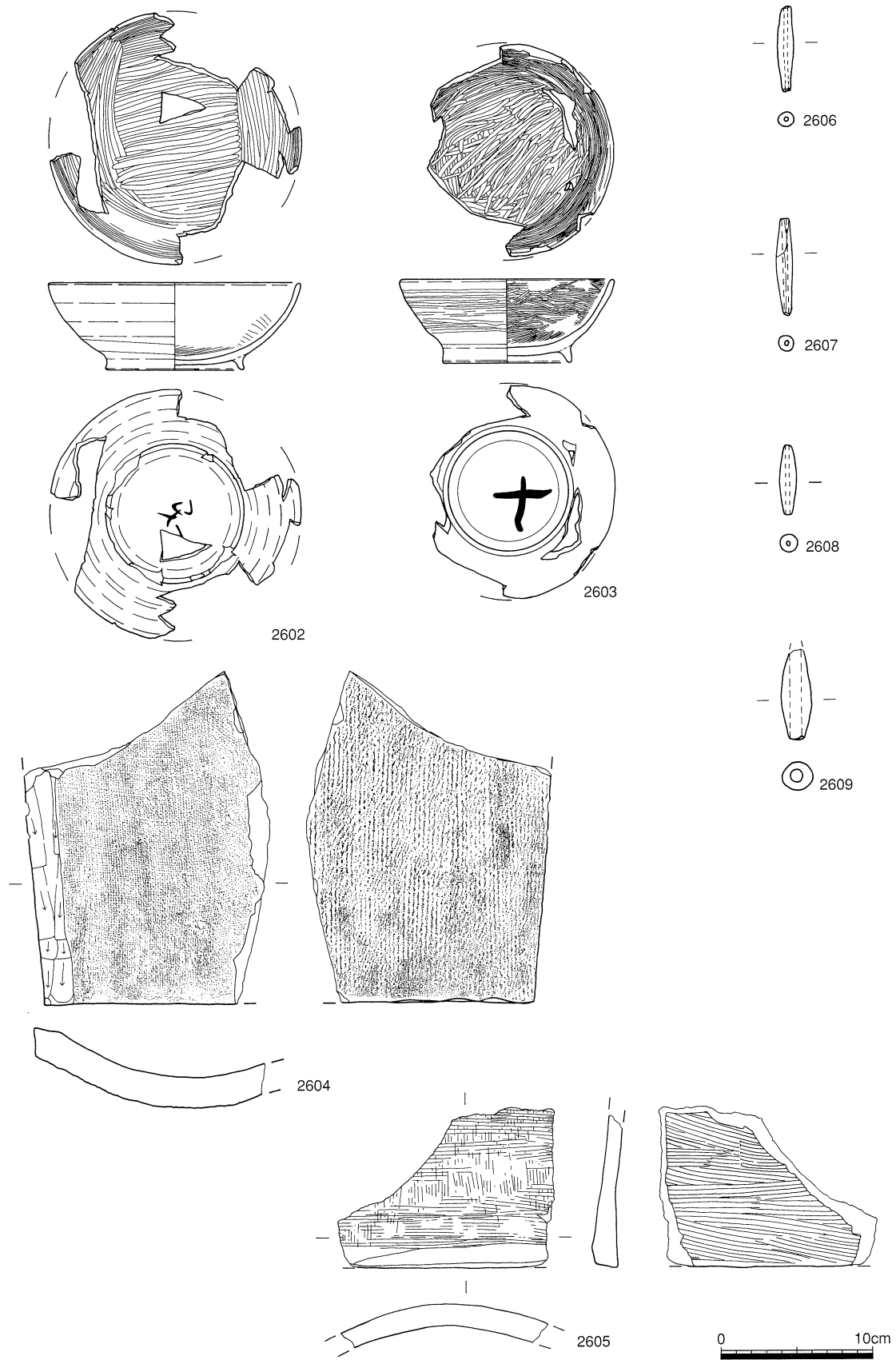
第451図 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土木製品（紡織具・服飾具・容器・食器具・祭祀具）



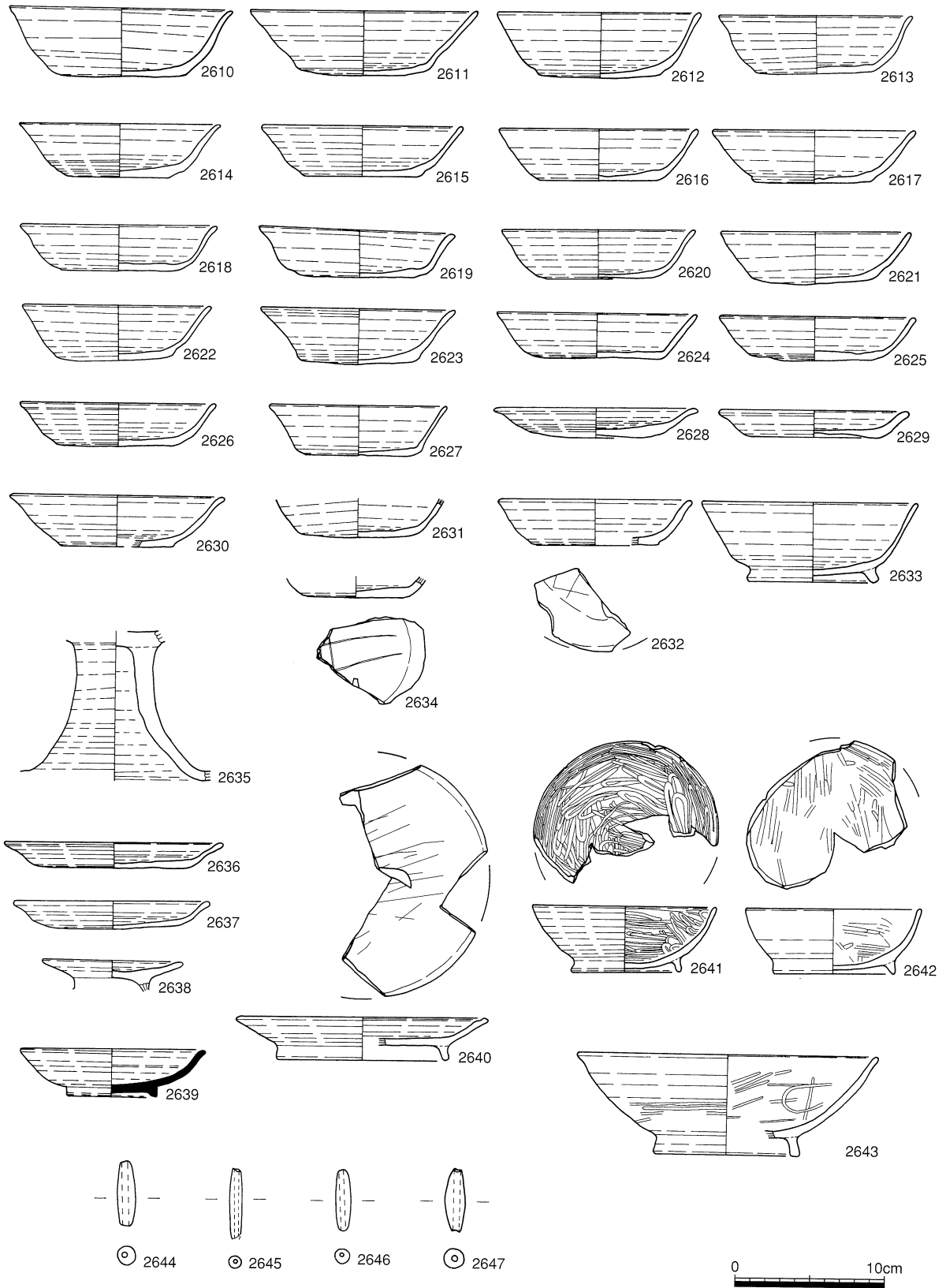
第452図 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土木製品（祭祀具・紡織具）



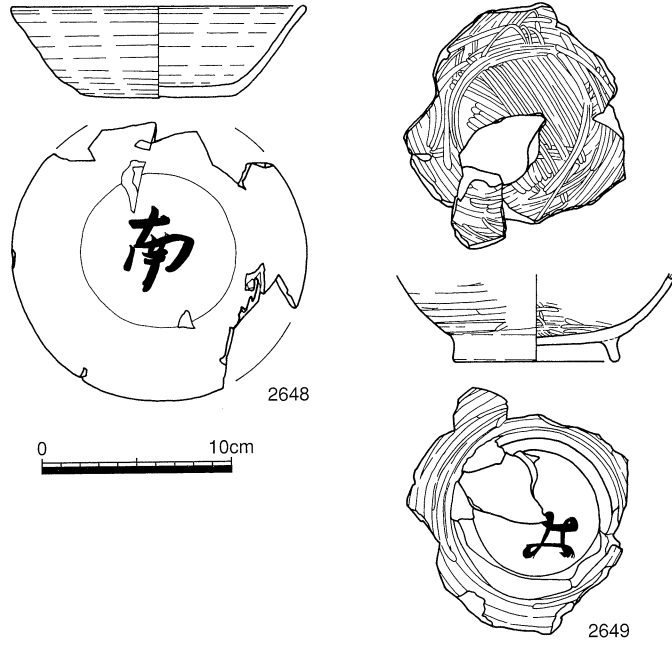
第453図 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（1）



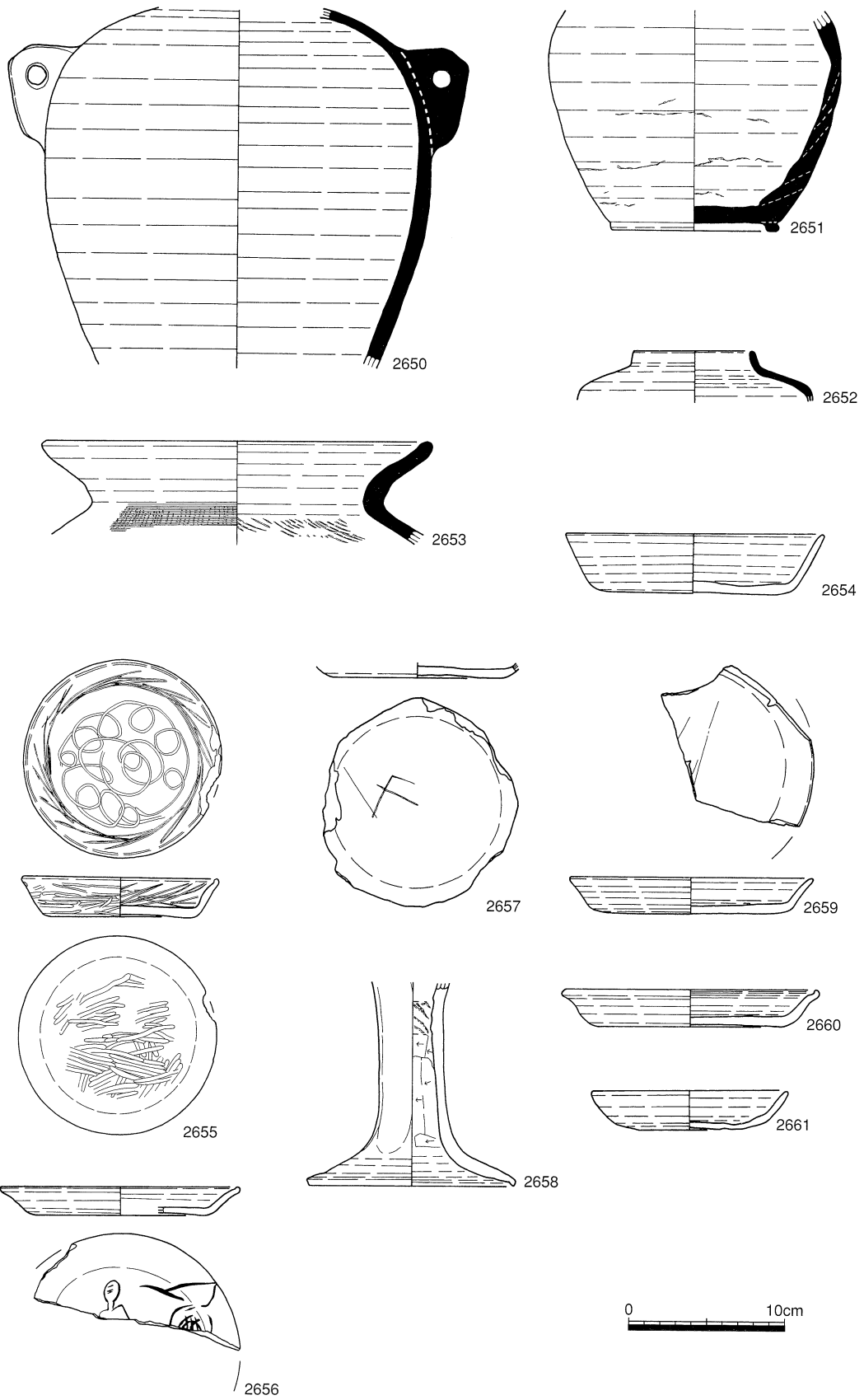
第454図 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（2）



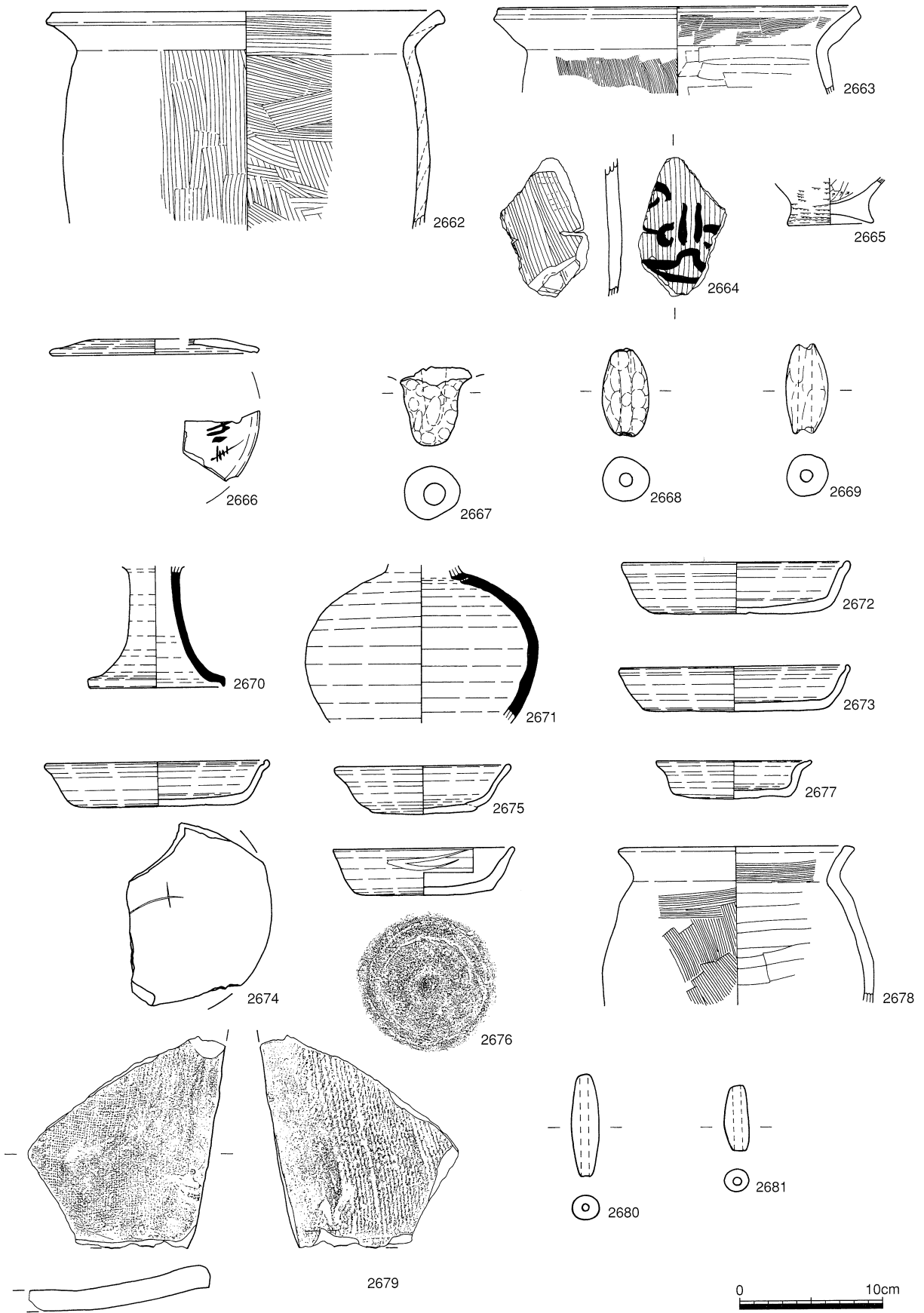
第455图 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（3）



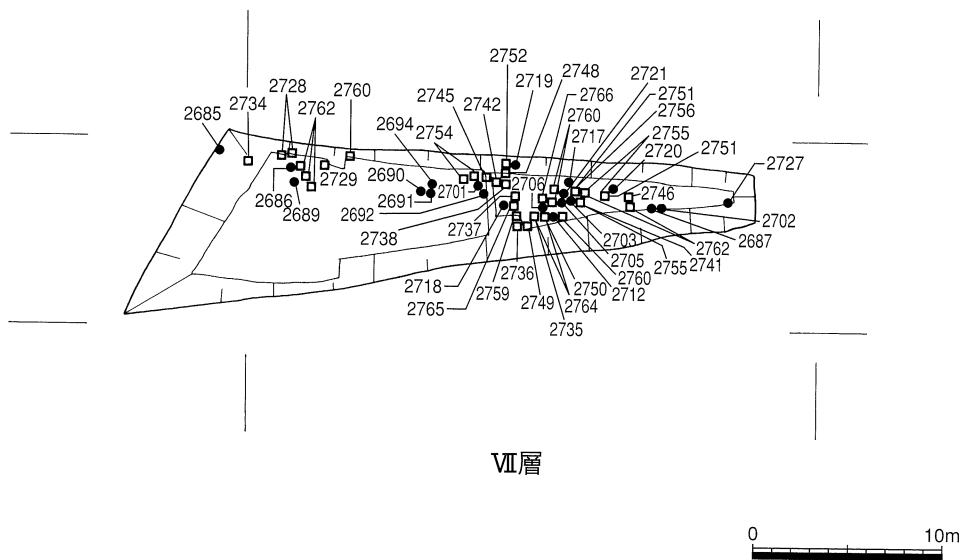
第456図 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（4）



第457图 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（5）



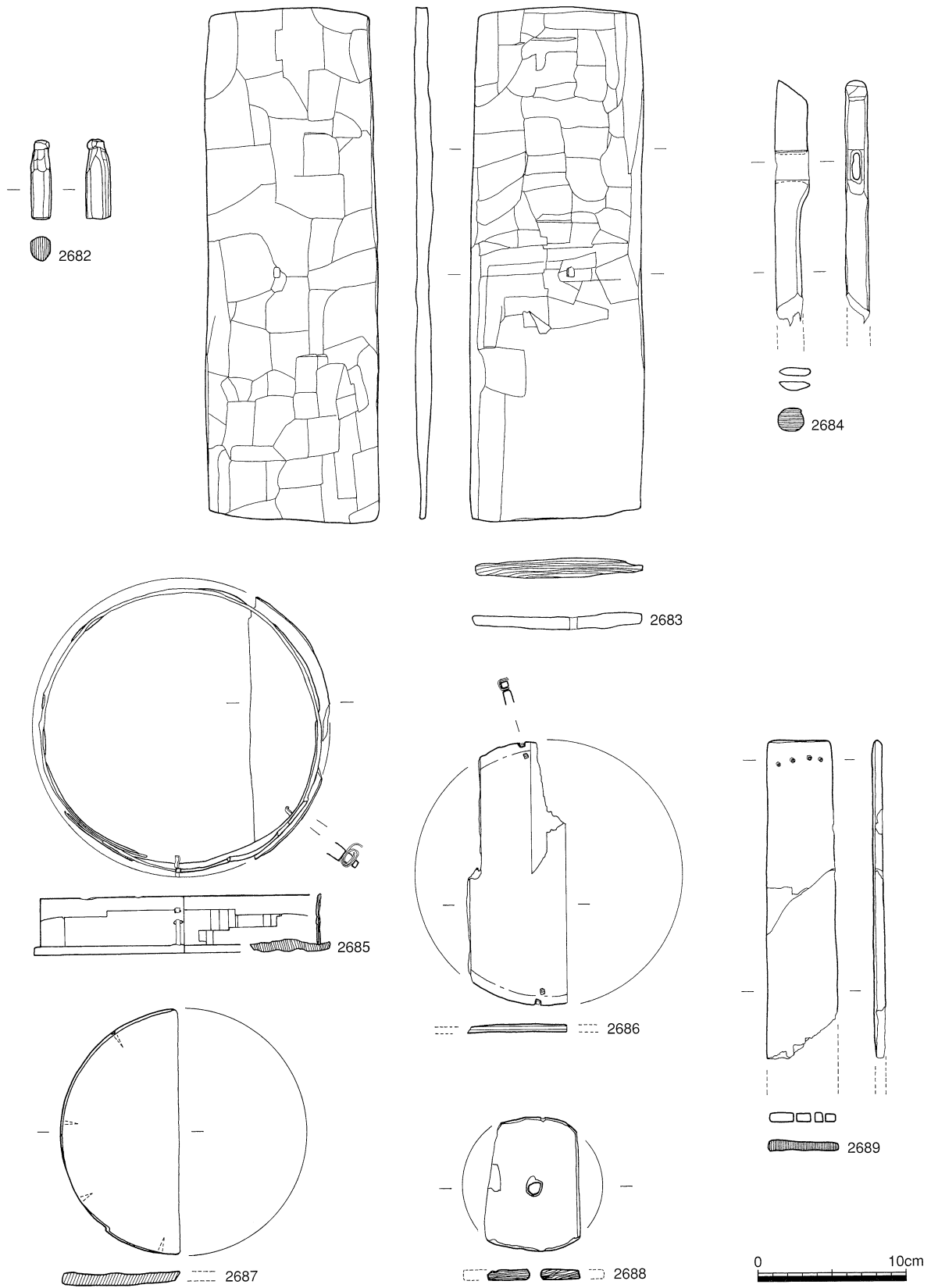
第458图 南区（1998年度1区）SR3001IV層出土遺物（6）



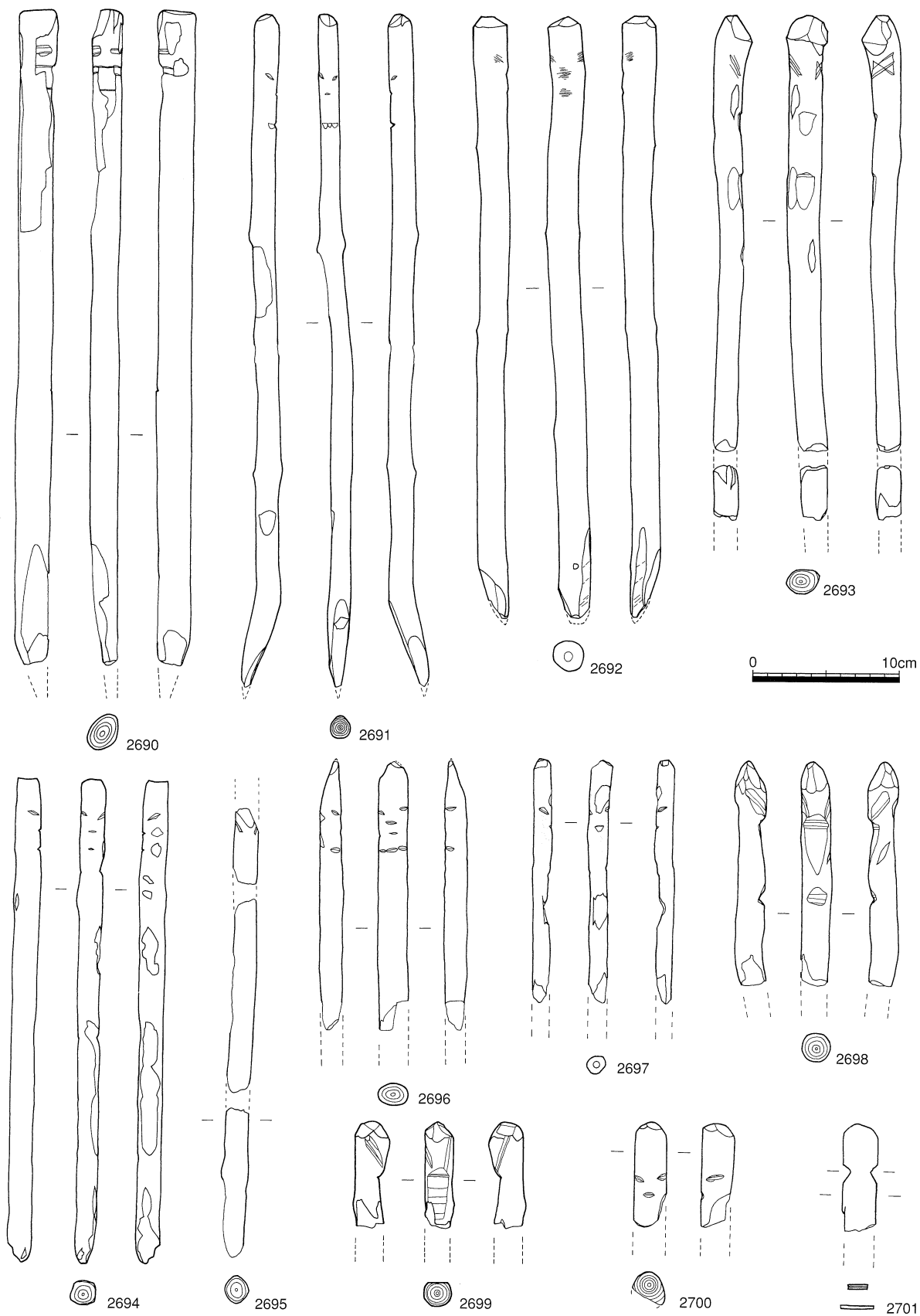
第459図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層遺物出土状況ドット図

自然流路（SR3001）Ⅶ層出土遺物（第459～470図）

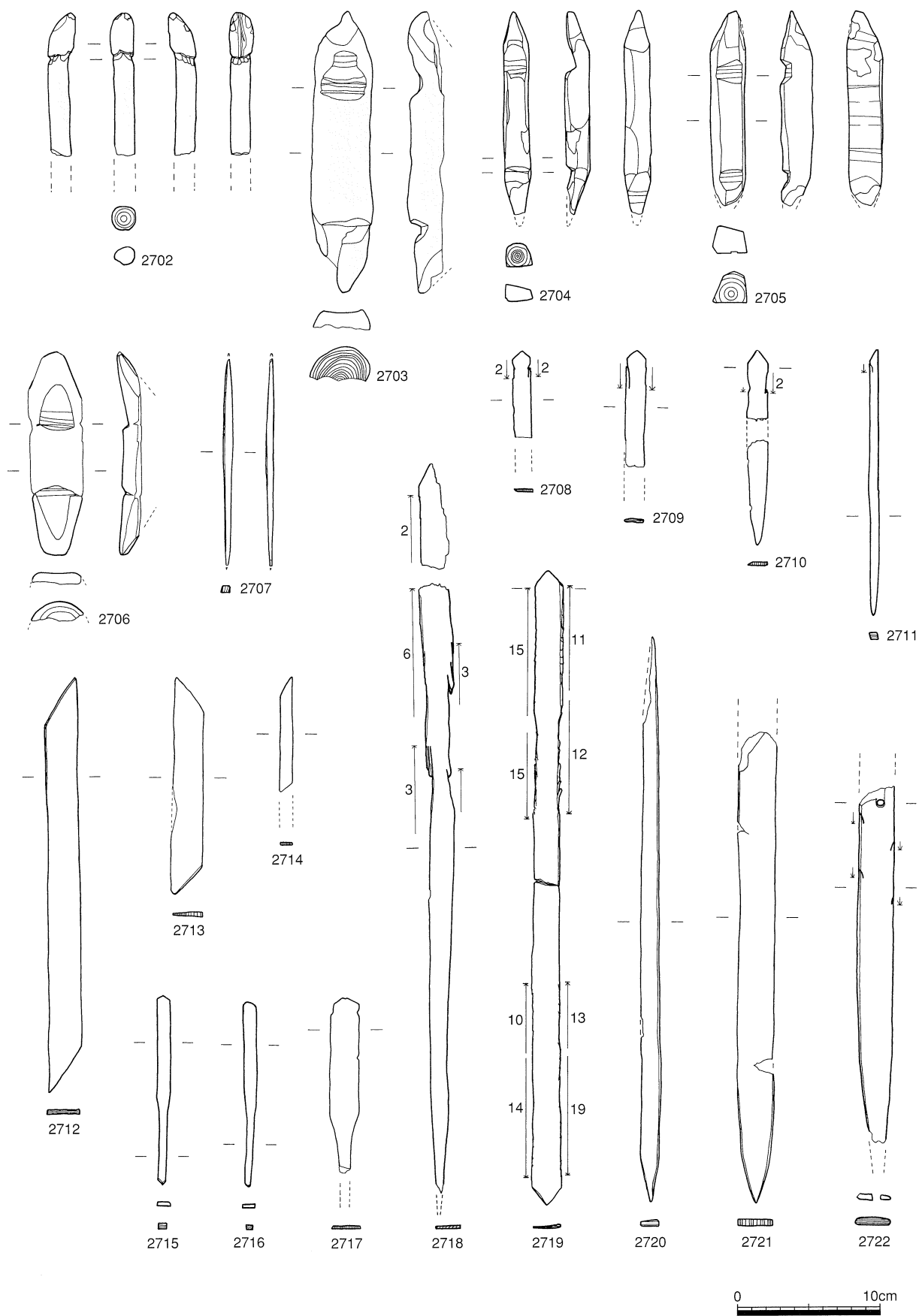
木製品は46点を図化した。2683は農具の泥除けである。表の中央部が窪んでおり、木釘が残存している。2684は農具の鎌柄である。上部に装着孔がある。2685は円形曲物の側板と底板が結合したものである。2686、2687は円形曲物の底板である。2688は円形曲物の蓋板である。中央部に穿孔がある。2689は遊戯具の琴である。一端に4孔の集弦孔がある。2690～2700は円筒状人形である。2701は正面全身人形である。2702は陽物形である。2703～2706は舟形である。2707は棒状祭祀具である。2708～2722は斎串である。2723は部材の台座である。側面中央に半円形に凹みを成形している。2725は火鑽板である。2727建築部材の筋交いである。土器は40点を図化した。2728は須恵器の甕である。2729～2731は須恵器の壺である。2729は内面の口縁部にヘラ記号がある。2731は外面の頸部に刻書がある。2732は土師器の杯蓋である。内外面ともに赤色塗彩され、つまみの周辺部は丁寧にヘラミガキが施されている。2733～2744は土師器の杯である。2738は底部内面にヘラ記号がある。2739～2743は、いずれも外面はヘラミガキ、内面には暗文が施されている。2744は内面にヘラ記号がある。2745、2746は土師器の高杯である。杯部内面の口縁部に放射状暗文、底部内面には螺旋状暗文が施されている。2747は土師器の高杯の脚部である。2748は土師器の皿である。2749、2750は土師器の杯である。2751は土師器の片口鉢である。2752は土師器の盤である。2753、2754、2756～2762は土師器の甕である。2755は土師器の鍋である。2763は土師器の盤である。内外面ともにヘラミガキが施されている。2764～2766は墨書土器である。2764は土師器の杯の底部外面に「寿」と墨書する。2765は土師器の杯蓋である。外面の摘みの左側に「佛殿」と墨書する。2766は土師器の杯の底部外面に「子口」と墨書する。2767は土師器の火舎である。高台付きで体部に4カ所すかし痕がある。



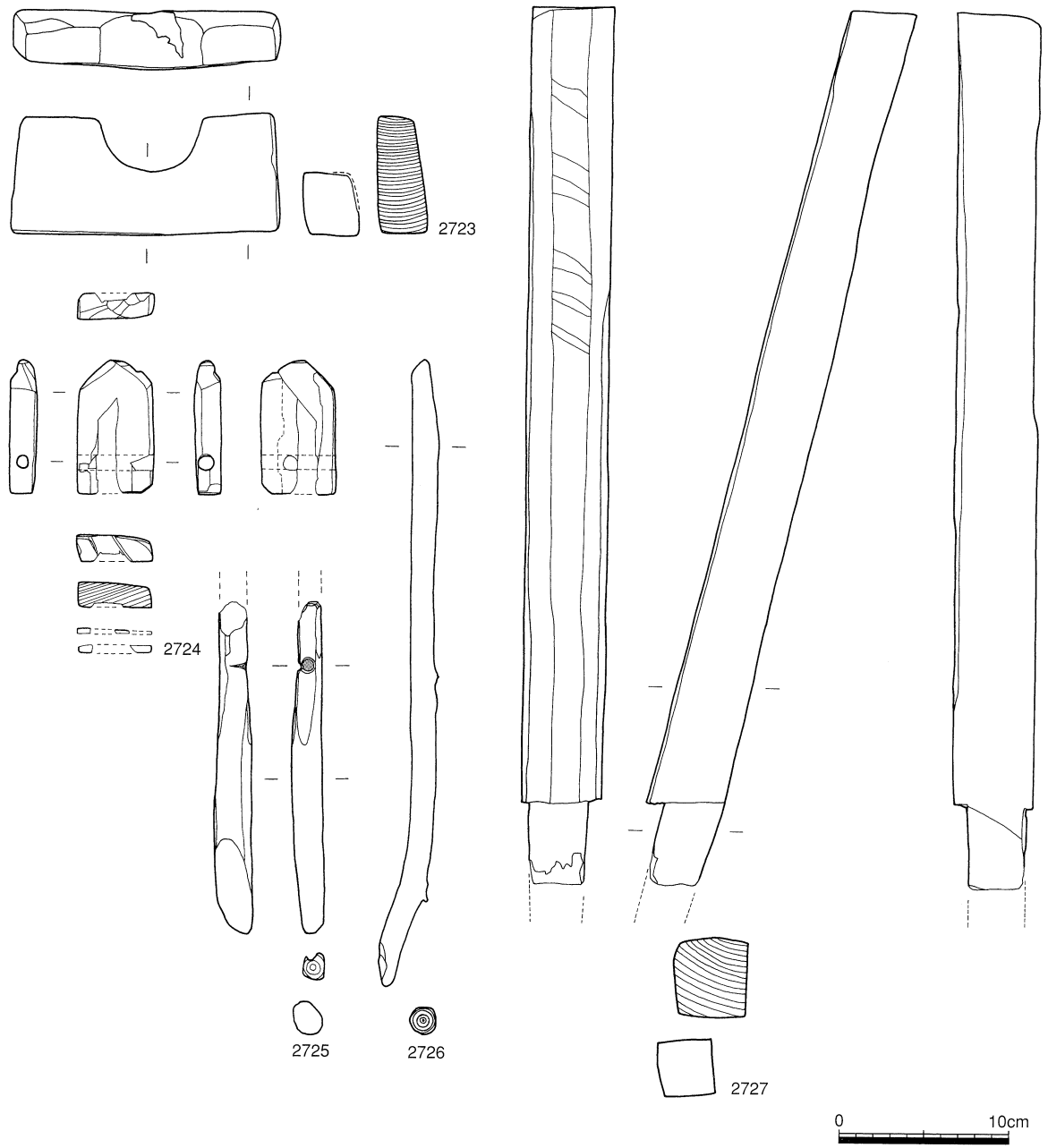
第460図 南区（1998年度1区）SR3001VII層出土木製品（工具・農具・紡織具・容器・遊戯具）



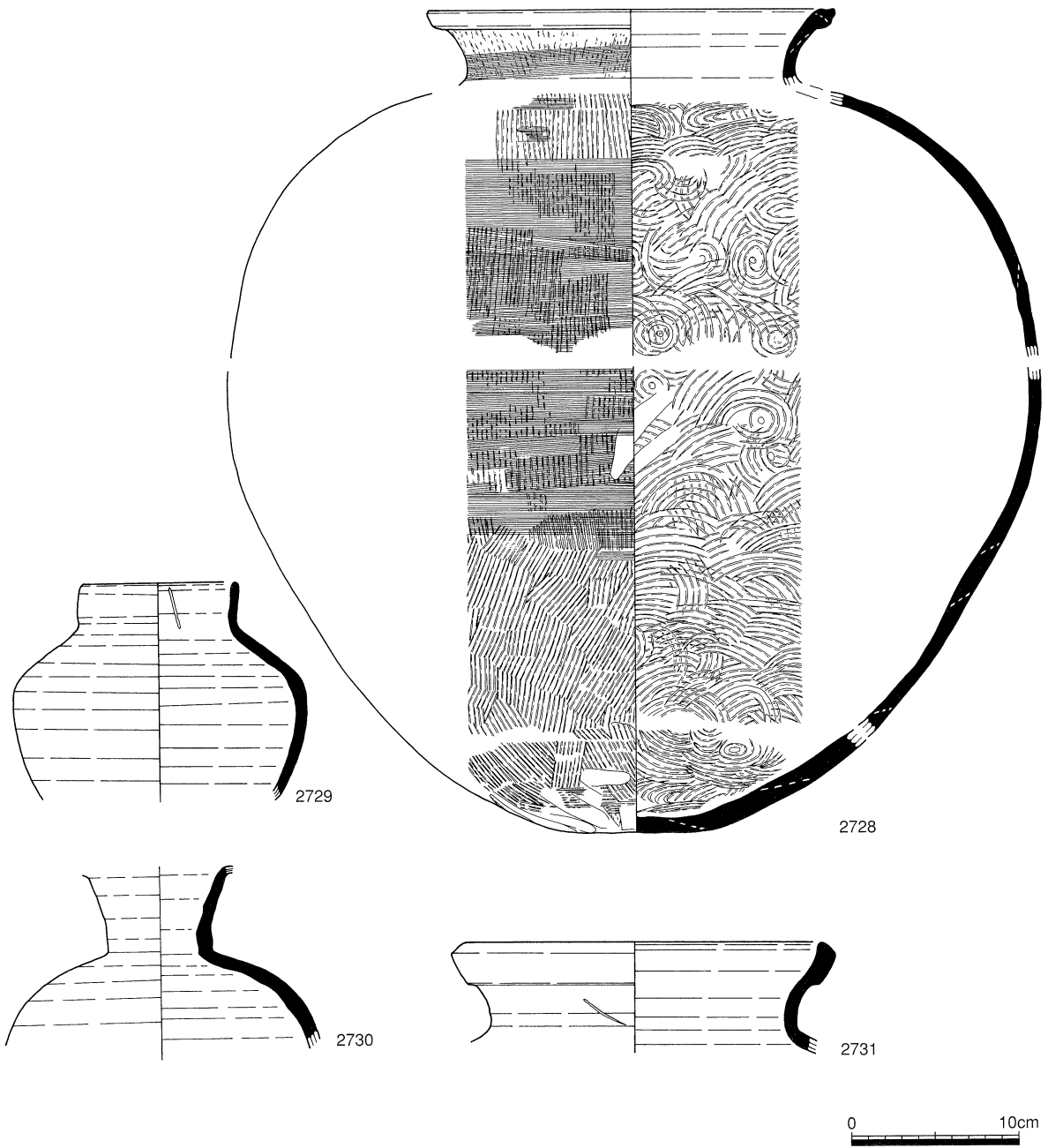
第461図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土木製品（祭祀具）（1）



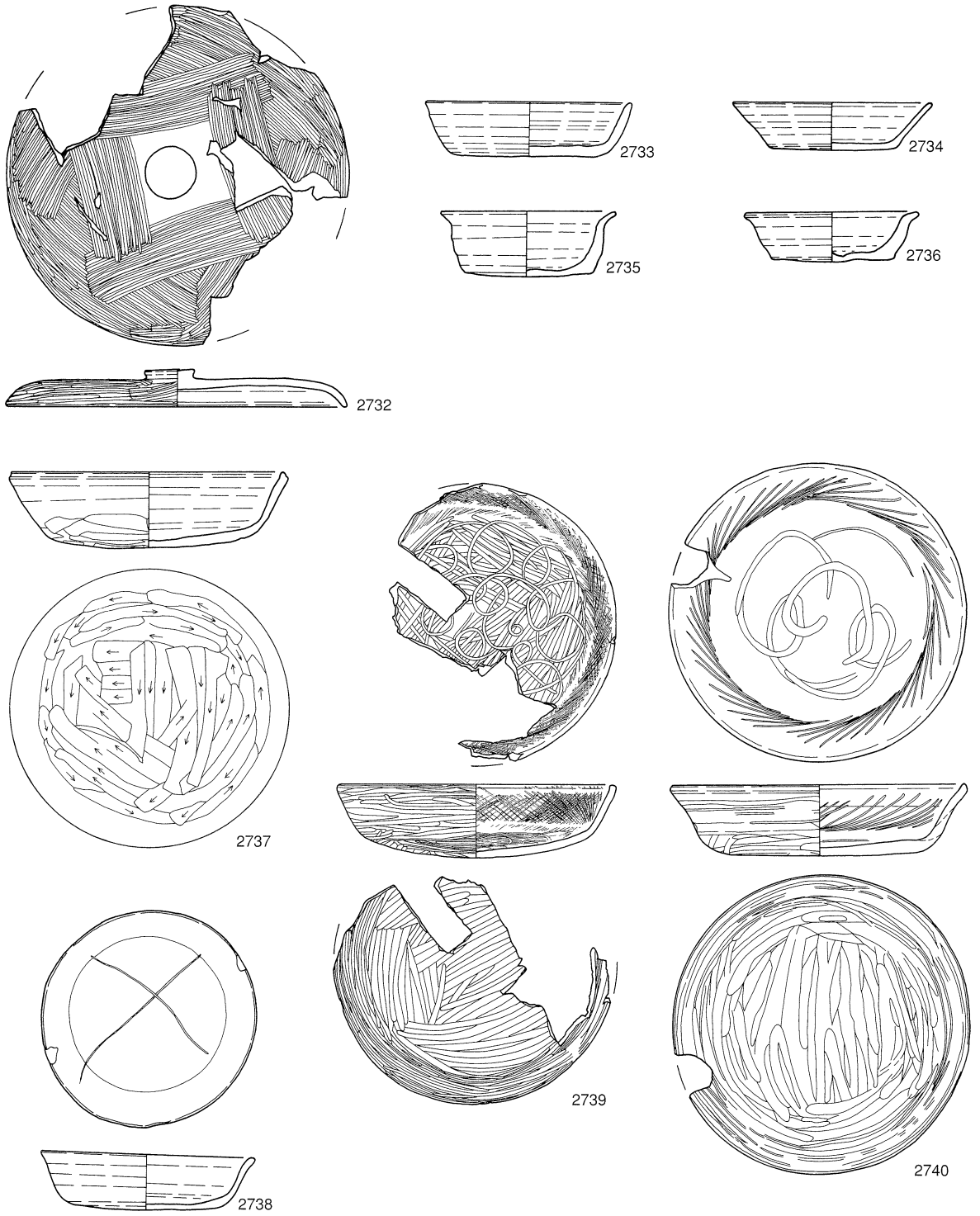
第462図 南区 (1998年度1区) SR3001Ⅶ層出土木製品 (祭祀具) (2)



第463図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土木製品（雑具・部材・建築部材・杭）

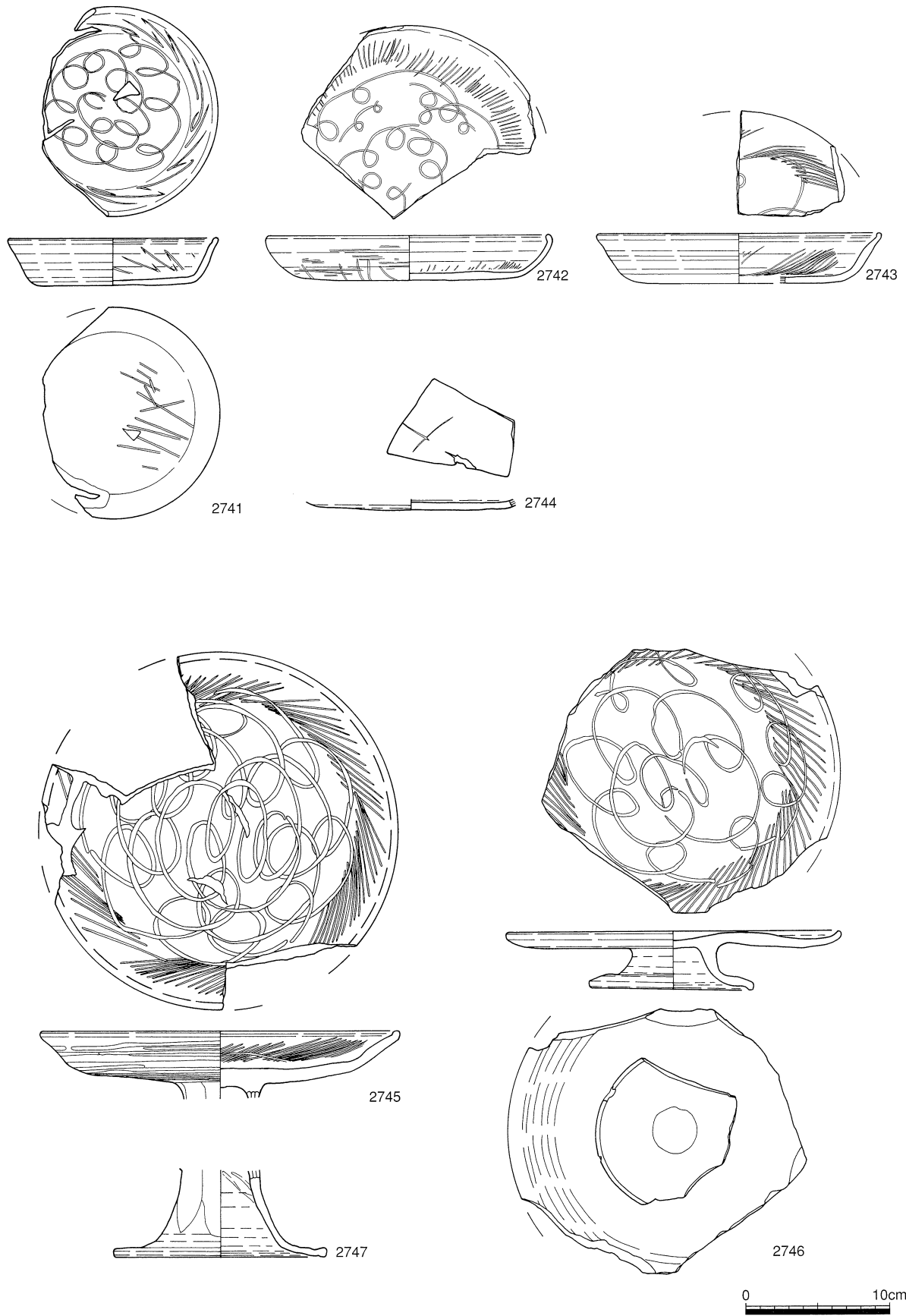


第464図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（1）



0 10cm

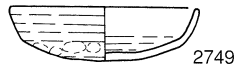
第465图 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（2）



第466图 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（3）



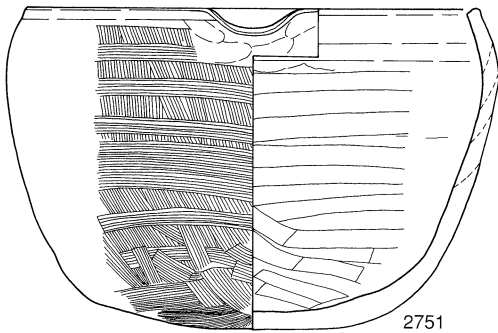
2748



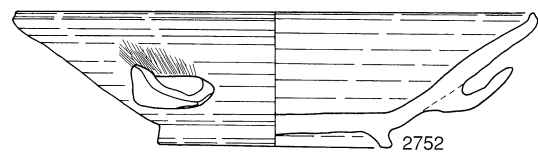
2749



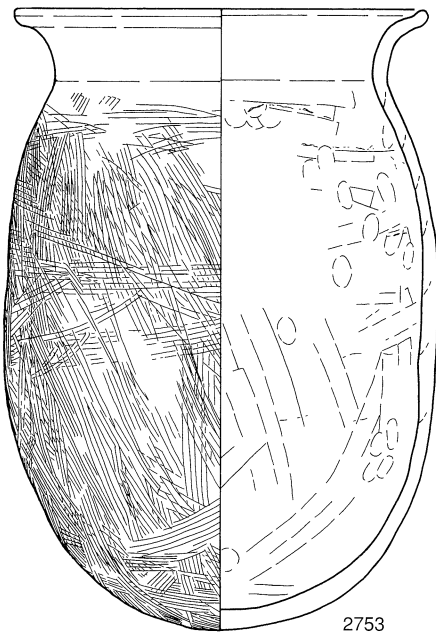
2750



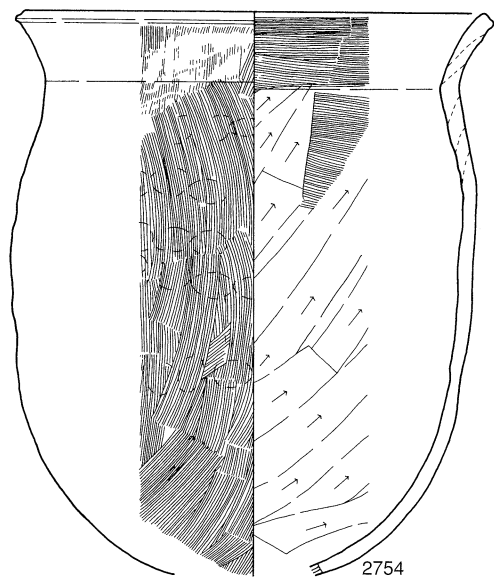
2751



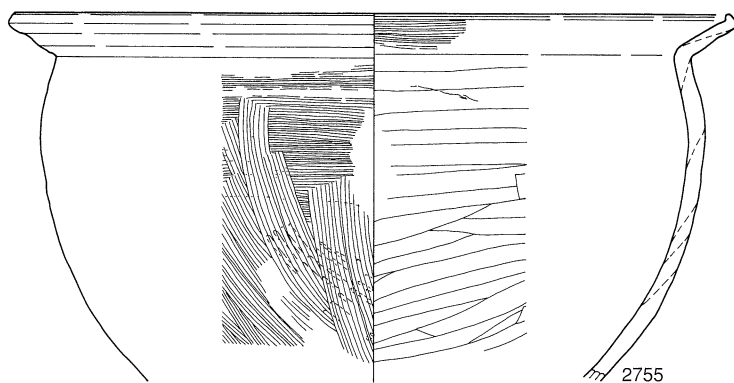
2752



2753



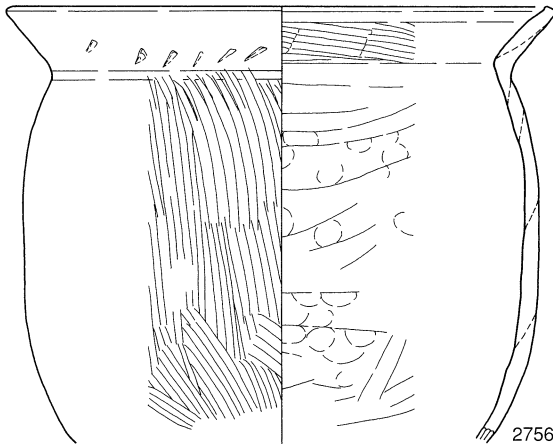
2754



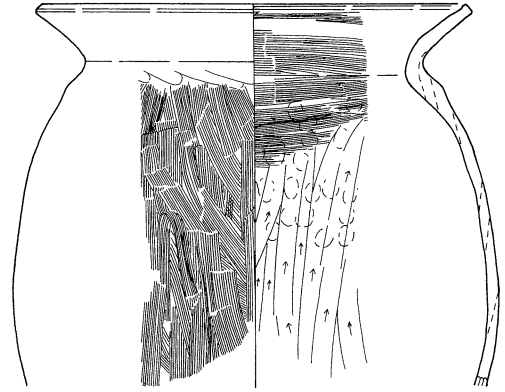
2755



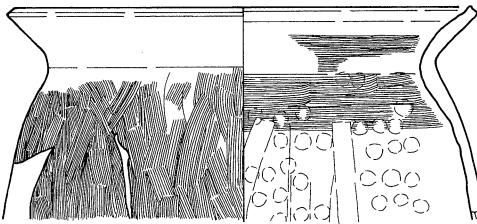
第467図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（4）



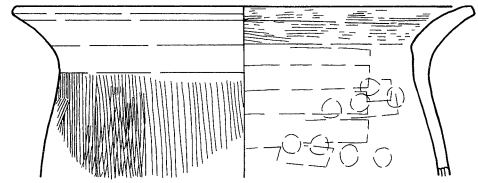
2756



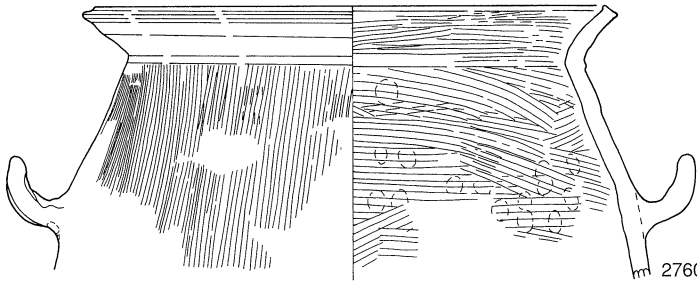
2757



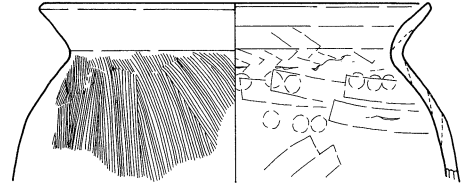
2758



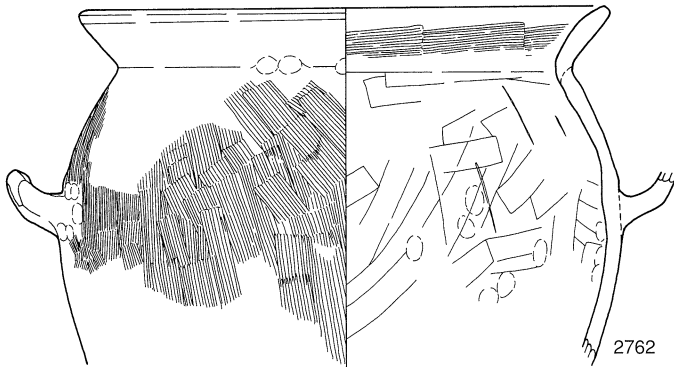
2759



2760



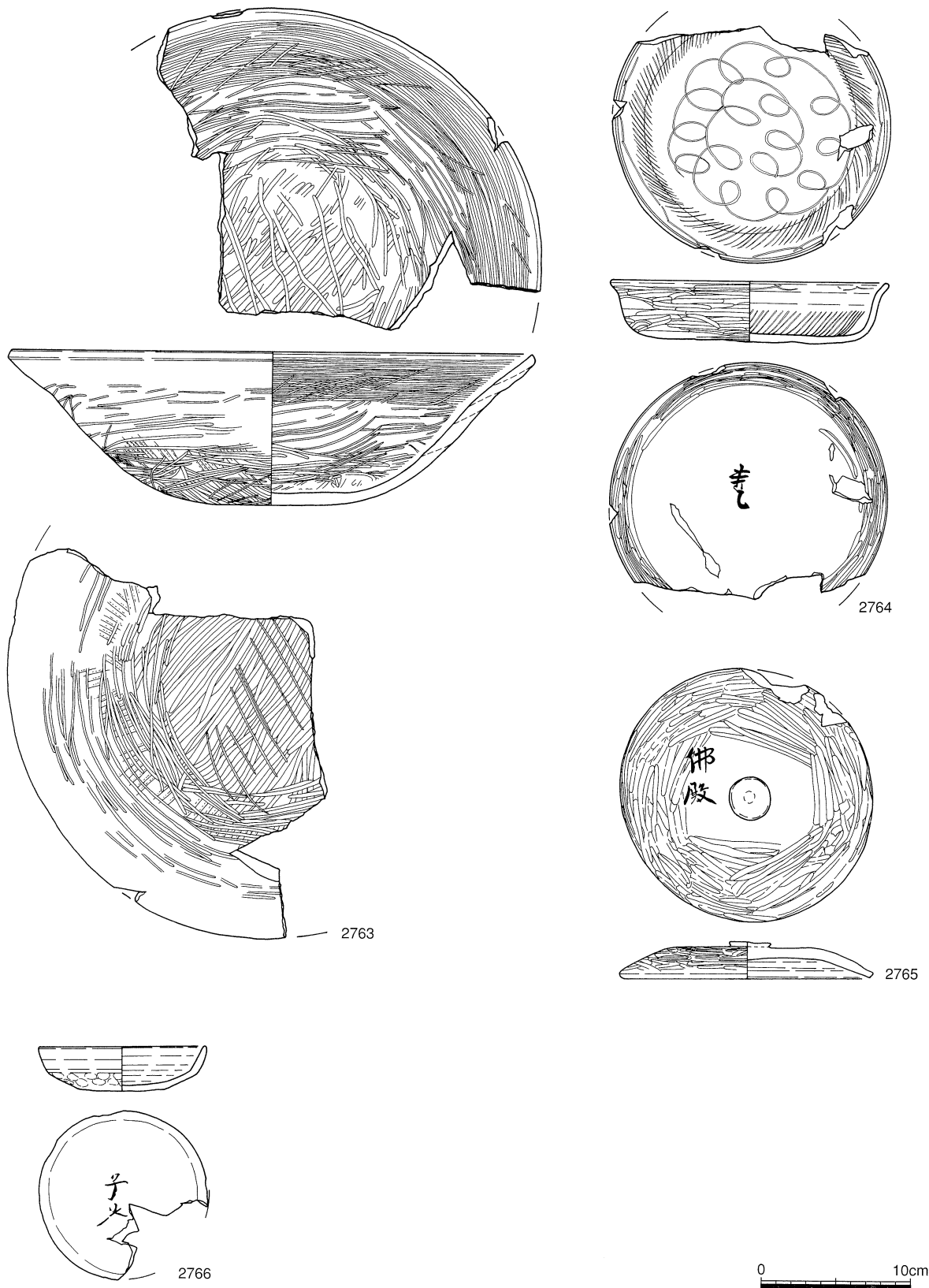
2761



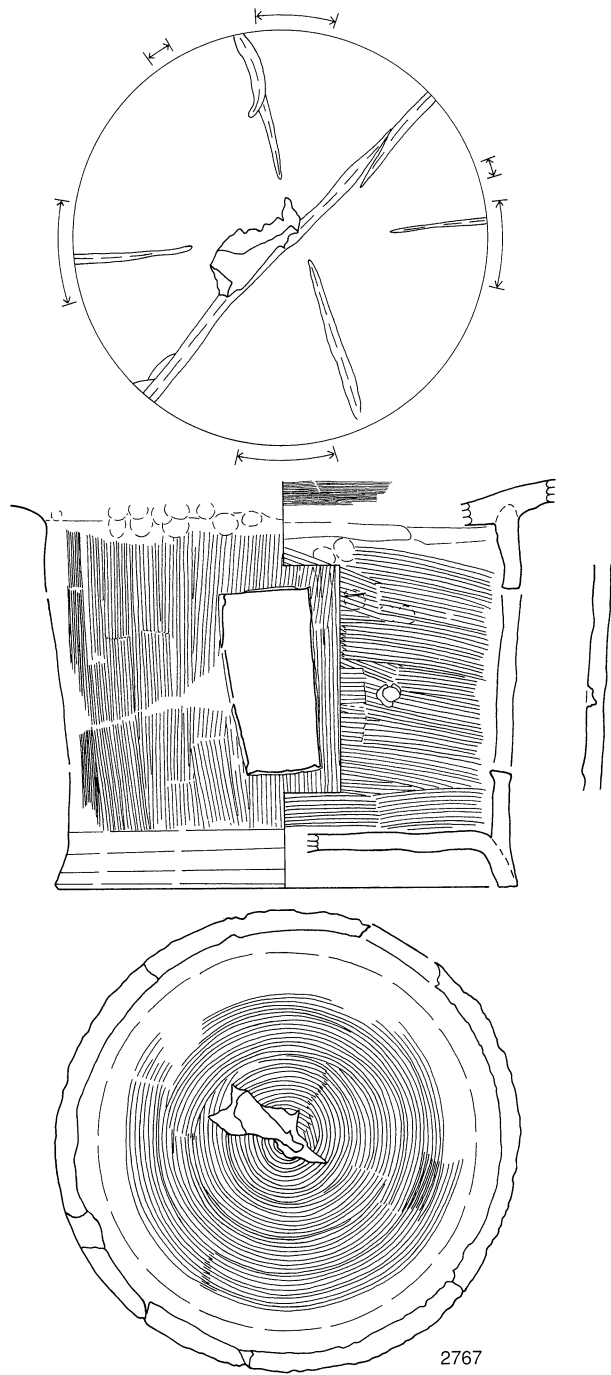
2762



第468图 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（5）

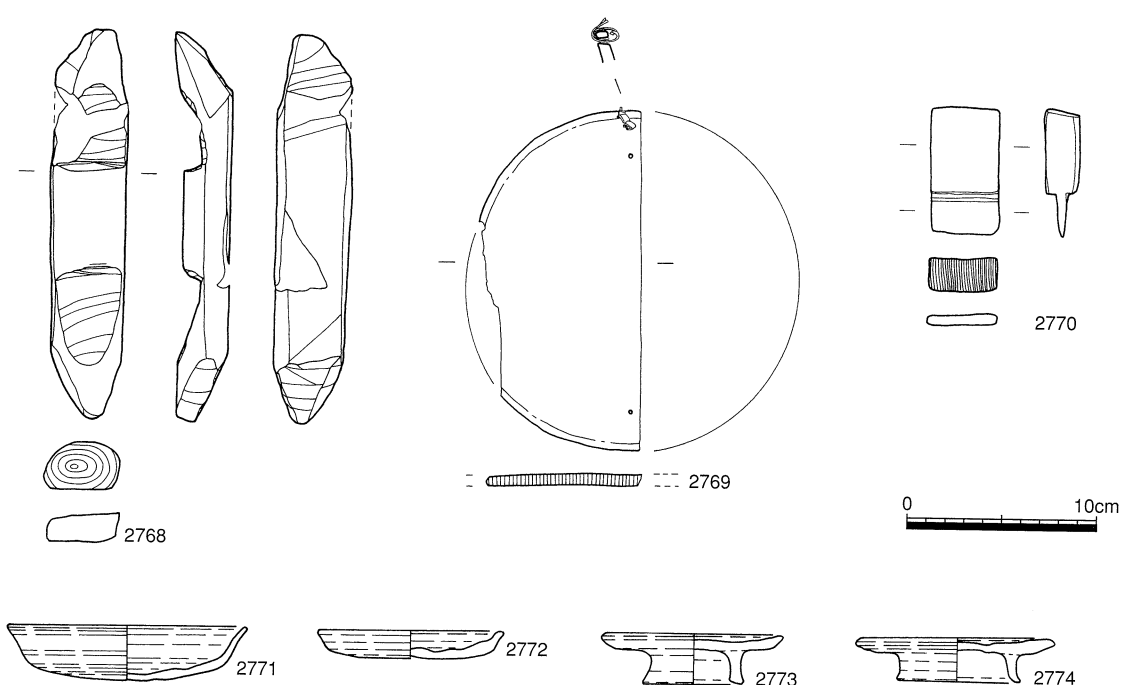


第469図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（6）



0 10cm

第470図 南区（1998年度1区）SR3001Ⅶ層出土遺物（7）



第471図 南区（1998年度1区）SR3001出土遺物

自然流路（SR3001）出土遺物（第471図）

木製品は3点を図化した。2768は舟形である。2769は円形曲物の底板である。土器は4点を図化した。2771は土師器の杯である。2772～2774は土師器の皿である。

(30) 出土金属製品（全調査区）（第472～477図）

南区のSR3001からは、比較的保存状態の良い金属製品が多く出土した。2775～2828である。

2775は銅印である。印面は重郭で、陽刻によって「生」の文字が掘られている。鈕は3枚に分かれた蒼鈕形で、印面から18mmの高さに縦4mm横3mmの紐孔がある。2005年度1区Ⅲ層から出土した。

2776は銅製の蛇尾である。長半円形の厚さ3mmの板に長さ5mm留め金が3本ついている。2005年度1区Ⅴ層から出土した。

2777～2795は鉄鏃である。2000年度1区Ⅳ層から雁股形の2778、Ⅴ層から方頭形の2777が出土した。2004年度1区Ⅳ層から方頭形の2780、2781、雁股形の2782、2784が出土した。Ⅴ層からは方頭形の2779と雁股形の2785が出土した。2005年度1区Ⅲ層からは雁股形の2785と茎部のみの2784が出土した。Ⅴ層からは方頭形の2786が出土した。2005年度2区Ⅲ層からは雁股形の2788と2793、圭頭形の2794が出土した。Ⅴ層からは方頭形の2789、2790、2791、2792が出土した。1998年度1区Ⅷ層からは長頸形の2795が出土した。出土した鉄鏃は雁股形、方頭形が多く、主に狩猟や祭祀に用いられたものと思われる。雁股形では刃の角度、長さの異なる様々な型式のものが出土している。関連して木製品の中にSR3001Ⅴ層から丸木弓が2点、Ⅲ層から鳴鏑が1点、Ⅳ層から根挾が1点出土している。

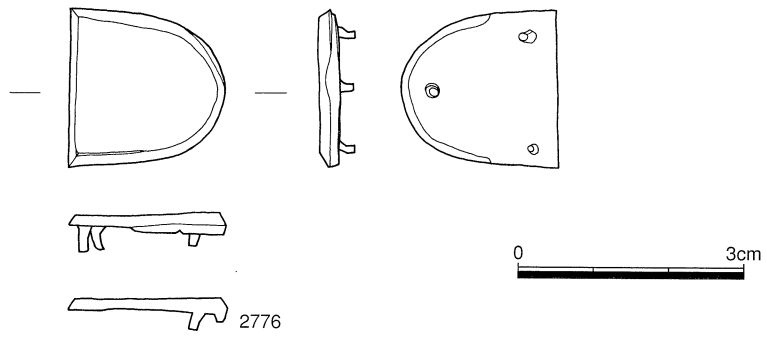
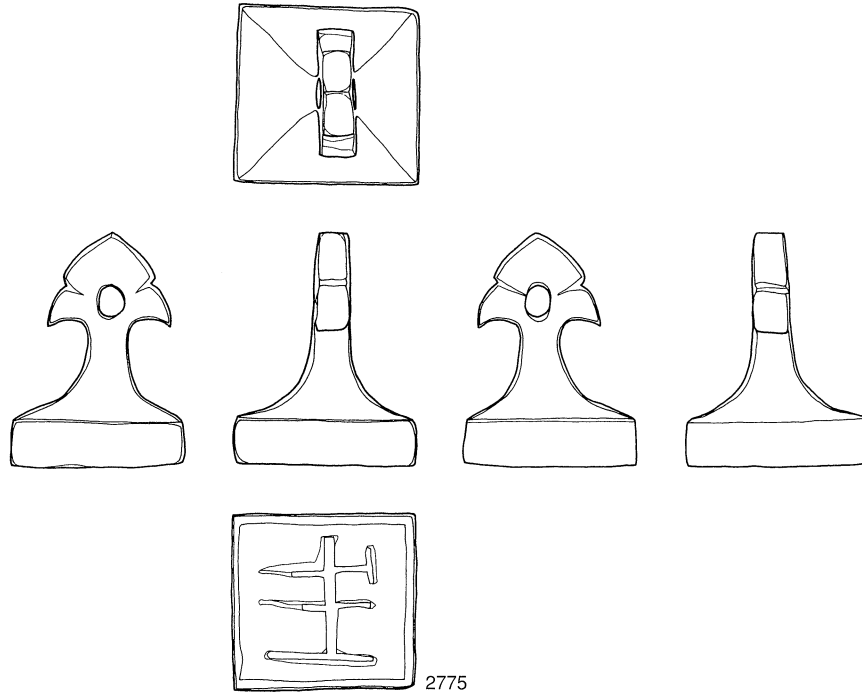
2796～2800は農具である。2796は2005年度2区Ⅲ層より出土した鉄鎌である。2005年度1区ではⅢ層から2797の鋤先が出土した。2798は層位不明であるが、これと類似した鋤先の破片である。Ⅳ層からは木の鋤の先につけるU字形の鋤先2799が、ほぼ完形で出土した。2004年度1区Ⅴ層からはU字型の鋤先2800が出土した。

2805は2003年度8区Ⅴ層出土の柄付きの錐である。鉄の刃と木製の柄の上半分が残っていた。2806は2005年度1区Ⅲ層出土の錐の刃である。

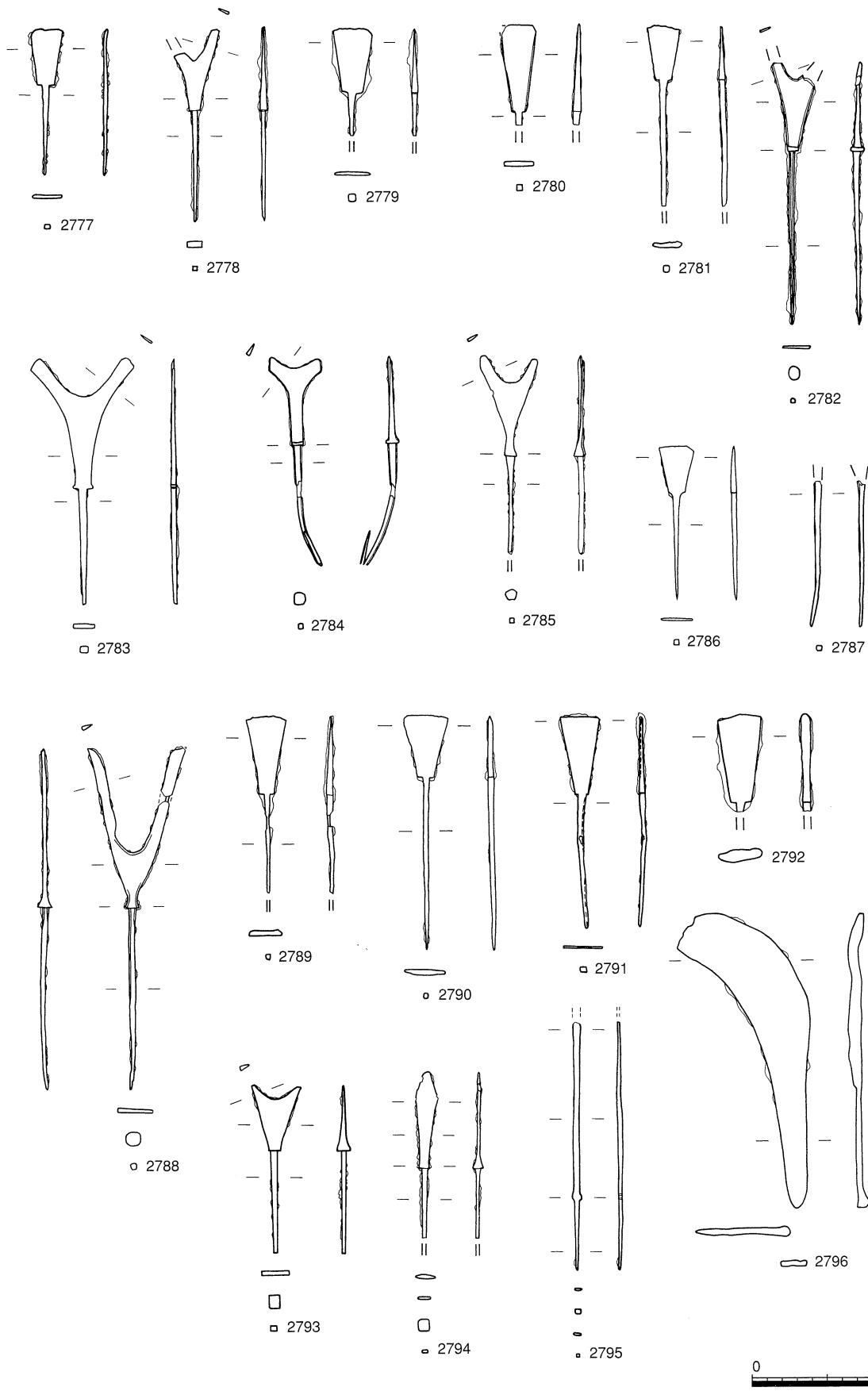
刀子は5点出土した。2809は2005年度1区Ⅲ層から、2810はⅣ層から、2807はⅤ層から、2808、2821は2000年度1区Ⅴ層からのものである。2807は木製の柄が完全に残り、他は刃のみである。

その他の金属製品は2005年度1区のⅢ層から釘2801、2803、2804の3点が、朱塗りの釘2822、朱塗りの針金2811が出土した。毛抜き2812、鏃2815、820、針金を曲げた用途不明の金具2816、2817。鎖の一部と考えられる鉄環2824、2825、鉤2823、用途不明の鉄板2813、2814など、様々な鉄製品が出土した。Ⅳ層からは鉄杭2818、Ⅴ層からは朱塗りの釘2802が出土している。2005年度2区のⅠ層からは2819の鉄杭、2826の把手、2828キセルの火口が。2007年度1区Ⅶ層からは把手2827が出土した。

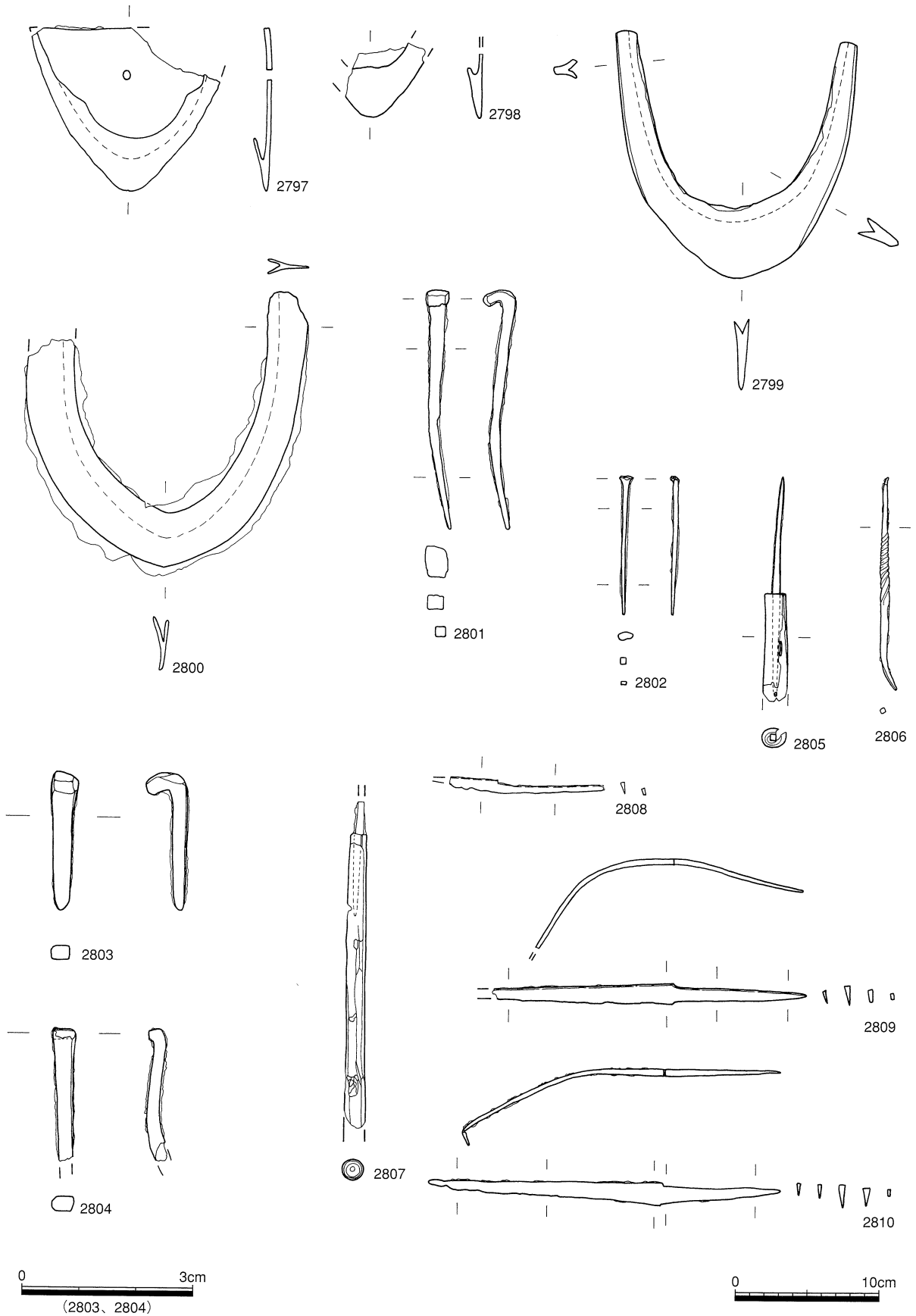
2829～2848は北区から出土した。SK1002から直刀2830、2841が、第1包含層から釘2836、2837、鉄片2844が出土した。SD3002から釘2839が出土した。第3包含層から釘2838、鉄片2842、2843が出土した。SK4003から鉄片2845、2846が出土した。SP4001から銅製の刀の柄2831が出土した。第4包含層からは刀子2832、2833が出土した。SR5001から長頸形鉄鏃2847、鉄鎌2848が出土した。第5包含層から鉄鏃2829、釘2835が出土した。その他、刀子2834、釘2840は出土層位不明である。



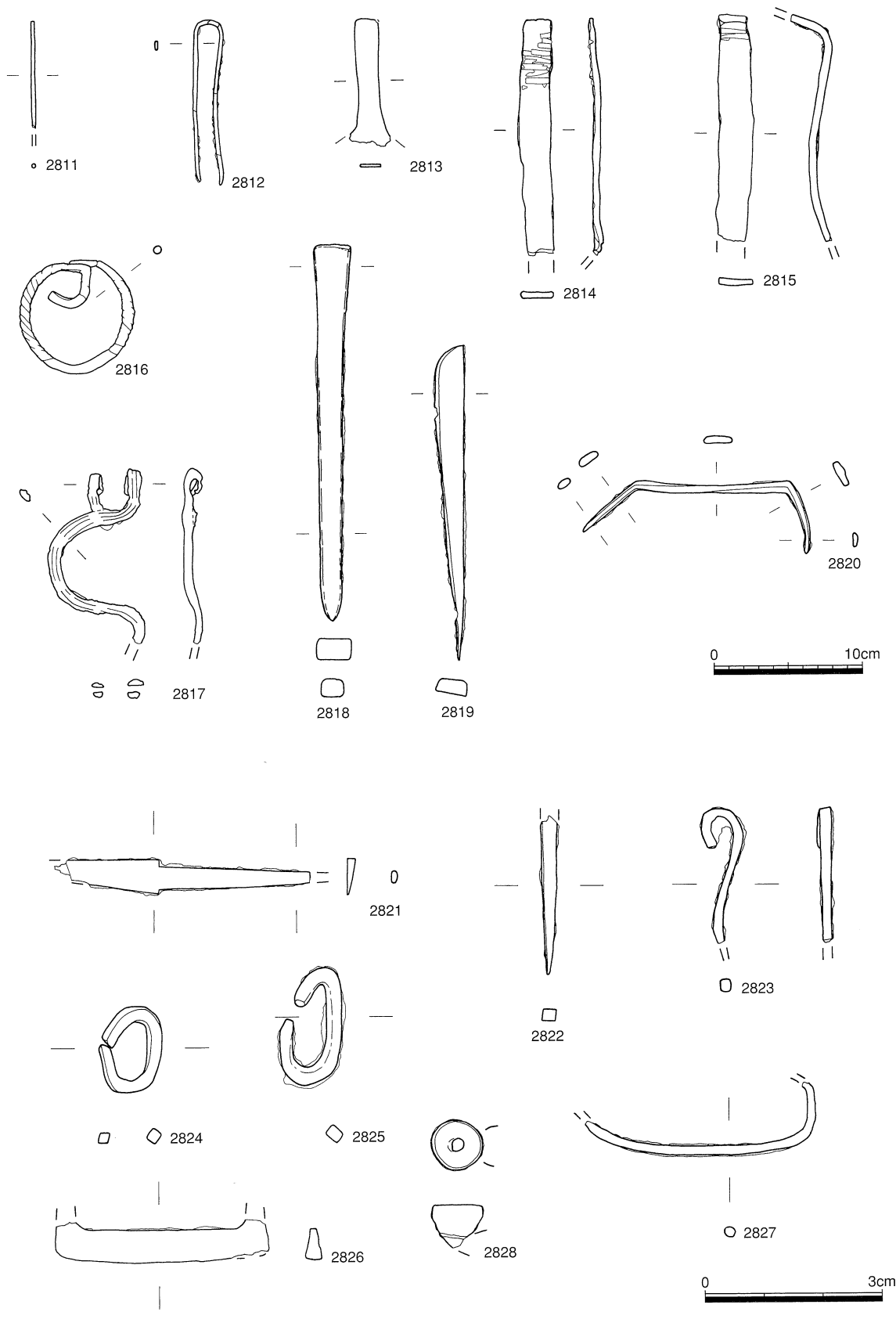
第472図 出土遺物（金属製品）（1）



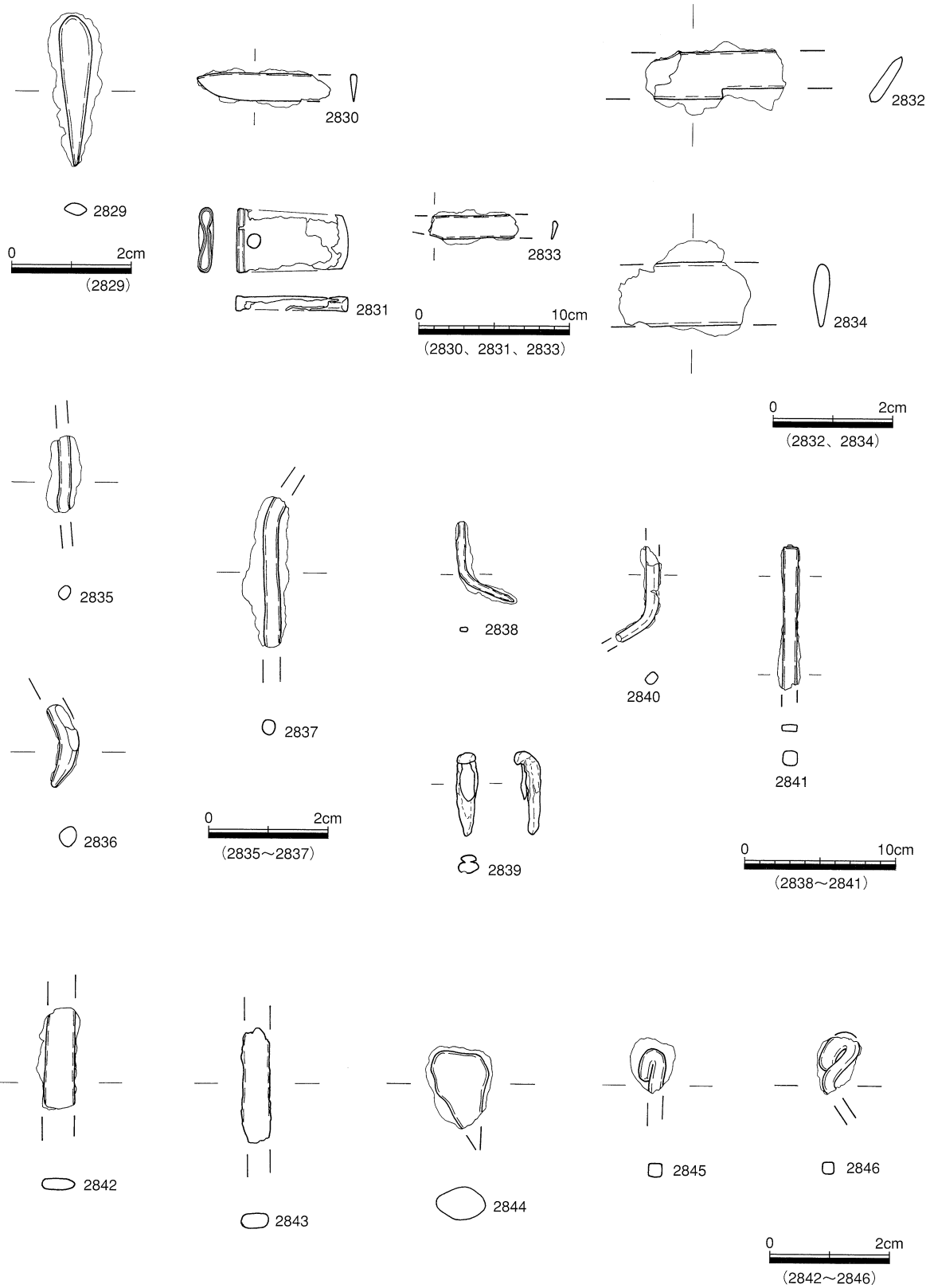
第473図 出土遺物（金属製品）（2）



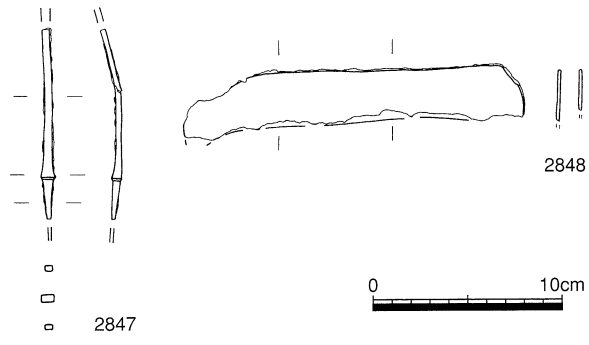
第474図 出土遺物（金属製品）（3）



第475図 出土遺物（金属製品）（4）

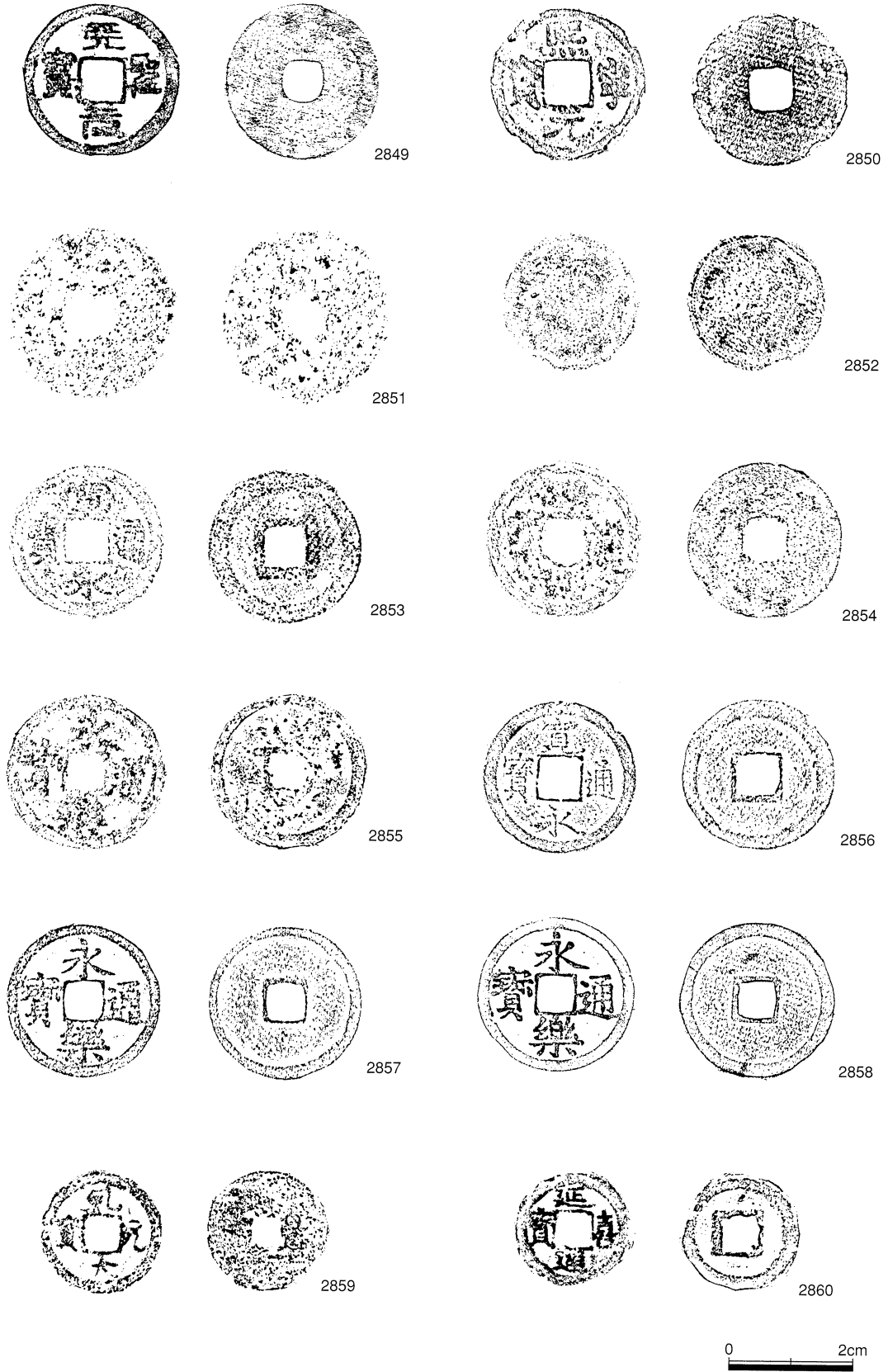


第476図 出土遺物（金属製品）（5）

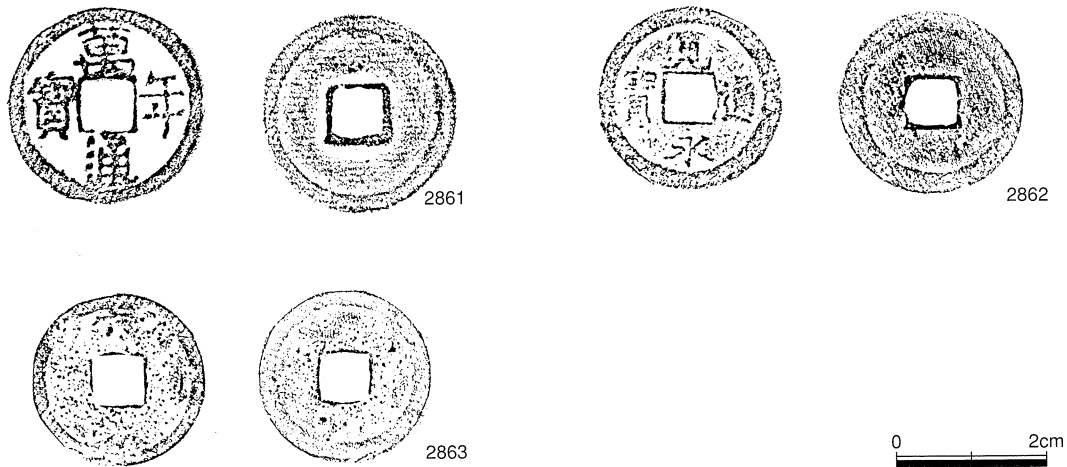


第477図 出土遺物（金属製品）（6）

(31) 出土錢貨 (全調査区) (第478、479図)



第478図 出土遺物 (錢貨) (1)



第479図 出土遺物（銭貨）（2）

2849～2852は北区から出土したものである。2849は天聖元寶、2850は熙寧元寶で、第1包含層からの出土である。2851は第5包含層から出土したが錆が多く肉眼、X線でも判別できない。2852は一銭硬貨と思われるが、表土下からの出土である。

2853～2863は南区から出土したものである。2853は2003年度8区の第2包含層出土の寛永通寶である。2854は判別できなかったが、2855永楽通寶と癒着して2004年度3区のカクランから出土した。

2856～2863はSR3001から出土したものである。2856は2004年度2区出土の寛永通寶であるが、出土層位は不明である。2857～2862は2005年度1区から出土したものである。SR3001 I層からは2857、2858の寛永通寶が、II層からは2859の軋元大寶、III層からは2860の延喜通寶、2861の萬年通寶が出土した。2862は寛永通寶で出土層位不明である。2863は2005年度2区I層で出土した。錆のため判別しにくいだが、寛永通寶であろう。2859～2861は皇朝十二銭で、萬年通寶は非常に質が良く完全な状態で残っている。延喜通寶、軋元大寶は鑄造時の品質が良くないためか、一部に欠けがある。（山上・澤井）

(32) 墨書・刻書土器について (表1、2)

観音寺遺跡において確認された墨書土器は63点である。その内の61点はSR3001から出土した。ほとんどが漢字一文字であるが、施設を表すものが見られる。52の「厨」は、南環状道路地点を合わせると観音寺遺跡では2例目である。2765は土師器の杯蓋に「仏殿」と書かれている。次に地名を表すものがある。521は「三条」、860の「松嶋」、2344の「名方□」である。このうち「松嶋」は『和名類聚抄』では板野郡松嶋郷が、「名方」は名方郡または名方郷と考えられる。その他、1521は土師器の杯の底部外面中央に「恵師殿」と書かれているが、その周囲には獣のような顔が描かれている。1522は同じような文字が、土師器の杯の口縁部外面に巡らされている。2664は土師器の甕の体部に顔を描いた人面墨書土器の破片である。2656にも人物を描いたと思われる墨書がある。SR3001出土のものを層位別に見るとⅡ層1点、Ⅲ層が18点、Ⅳ層が20点、Ⅴ層が17点、Ⅶ層が3点、不明2点である。刻書土器はヘラ記号を含めて22点である。その内18点がSR3001から出土した。層位別に見るとⅡ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅶ層が各1点であるのに対し、Ⅳ層では10点、Ⅶ層では4点が出土している。これらのことから墨書、刻書ともにⅣ層からの出土が多いことがわかる。(大橋)

表1 墨書土器

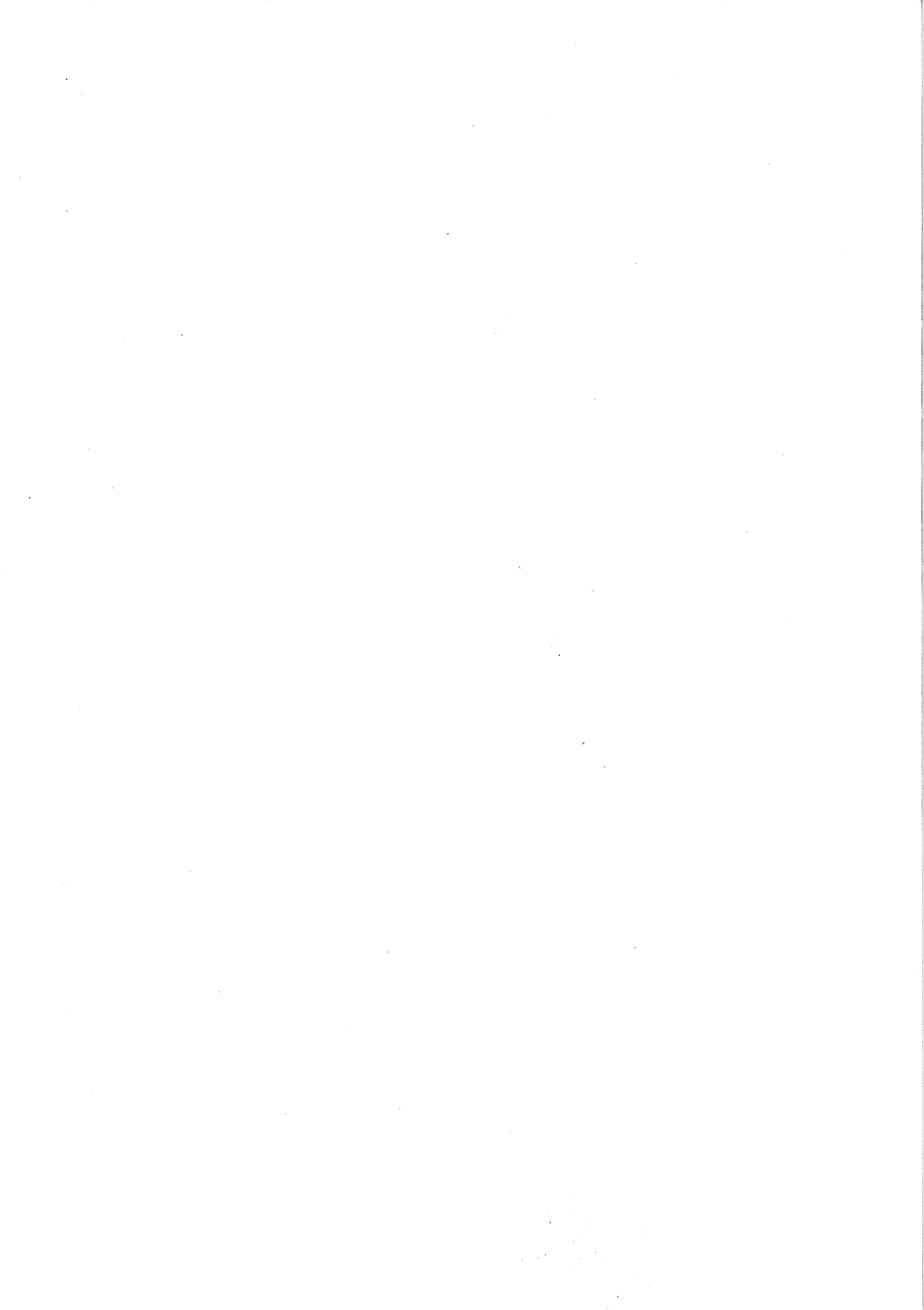
番号	掲載番号	分類・器種	出土遺構	調査区 (年度-区)	出土地点 (大グリッド) (中グリッド) (小グリッド)	層位	法量 (口径)	法量 (器高)	その他法量	墨書位置等	釈文
1	52	土師器 杯	第4包含層	北区 (99-1)	Loc.G-1α-ⅢA-19B-20		(19.2)	3.4	底径(15.5)残存率口縁部 1/10以下	底部外面に墨書。	「厨」
2	194	土師器 杯	SR3001	南区 (03-8)	Loc.F-1δ-ⅢR-19	V		残存高 (2.8)		外面に墨書。内外面に赤 色塗彩。	
3	211	土師器 杯	SX3001	南区 (03-8)	Loc.F-1		長さ (5.9)	残存高 (1.7)	残存幅(3.7)残存率底部 1/5	底部から体部にかけて墨 書。	
4	222	土師器 皿	SR3001	南区 (03-8-2)	Loc.F-1	V	13.5	1.7	底径8.5残存率1/1	底部外面に墨書。	「抱」
5	223	土師器 不明	SR3001	南区 (03-8-2)	Loc.F-1	V	長さ (5.0)	厚さ 1.2	幅(2.2)	底部外面に墨書。	
6	224	土師器 不明	SR3001	南区 (03-8-2)	Loc.F-1	V	長さ (4.5)	厚さ 0.7	幅(2.4)	底部内面に白色顔料によ る。	
7	225	土師器 不明	SR3001	南区 (03-8-2)	Loc.F-1	V	長さ (3.8)	厚さ 0.5	幅(2.3)	内面に墨書の一部残存。	
8	287	土師器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅣP-1	Ⅳ	(12.8)	3.5	底径(8.1)残存率1/2	底部外面に墨書。	
9	521	緑釉 皿	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅢO-18	V	(14.1)	2.8	底径6.9残存率3/5	底部外面高台内側に墨 書。	「三条」
10	524	土師器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅣO-1	V	(14.8)	3.0	底径7.3残存率口縁部1/4	底部外面に墨書。絵か。	
11	525	土師器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅢG-20	V	(15.6)	3.9	底径(10.8)残存率1/3	外面に墨で取り巻くよう に模様を書く。	
12	526	土師器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅣQ-2	V		残存高 (0.8)	底径(7.0)残存率1/4	底部外面に墨書。	
13	527	土師器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1δ-ⅢP-19	V		残存高 (1.2)	底径(6.4)残存率底部1/5	底部外面に墨書か。	
14	747	土師器 皿	SR3001	南区 (04-2)	Loc.F-1δ-ⅢR-15		長さ (5.6)	幅 (3.8)	厚さ(0.6)残存率底部外 面の1/6	内外面に墨書。内外面に 赤色塗彩。	
15	853	土師器 椀	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-11	Ⅲ		(1.7)	底径7.1残存率底部1/1	底部外面高台内側に墨 書。	「佐」
16	854	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅲ		(1.7)	底径8.0残存率1/2	底部内外面に墨書。	内「此不」:外「八七 六」
17	855	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅲ	(10.8)	(2.4)	残存率1/5	体部内外面に墨書。	
18	856	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅲ	(11.2)	(2.4)	残存率1/14	外面に墨書。内面にスス 付着。	
19	857	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-11	Ⅲ	(12.3)	(2.3)	残存率口縁部1/10	内外面に墨書による模様 有り。外面は螺旋状、内 面は松葉状のもの。	
20	858	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅲ		(1.5)		内外面に墨書。	
21	859	黒色土器 椀	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅲ		(2.9)	底径(10.0)残存率高台部 1/4	外面に墨書。	
22	860	土師器 椀	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-10	Ⅲ	15.2	5.5	底径8.4残存率1/1	底部外面高台内に墨書。 内外面に赤色塗彩。	「松島」
23	861	土師器 皿	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-11	Ⅲ			底径(8.0)残存率底部1/4	内外面に墨書。	内「衣」
24	909	土師器 皿	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	Ⅳ	(14.4)	3.3	底径8.0残存率口縁部1/6	底部外面に墨書。	則天文字「天」か
25	910	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-11	Ⅳ	長さ (5.3)	厚さ (0.7)	幅(3.0)	内外面に墨書	
26	1082	須恵器 蓋	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-11	V	(12.4)	1.5	残存率1/8	外面に墨書。	「少」
27	1083	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣC-9	V	(12.9)	3.1	底径(8.7)残存率1/3	底部外面に不鮮明な墨 書。	「安人」
28	1084	土師器 皿	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣB-10	V	(16.6)	1.6	底径(12.4)残存率口縁部 1/5	底部外面に墨書。内外面 に赤色塗彩。	「冊」
29	1201	須恵器 蓋	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣC-11	Ⅵ	(12.7)	4.8	残存率3/4口縁1/2	内面天井部に墨痕。	
30	1202	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣC-10	Ⅵ	15.9	3.8	底径11.4残存率3/4	底部外面に墨書。	「是『小』□」
31	1235	土師器 杯	SR3001	南区 (05-1)	Loc.F-1δ-ⅣA-10			(1.5)	底径(6.0)残存率1/3	底部外面に墨書。	「風」
32	1520	緑釉 椀	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-ⅣB-9	Ⅲ		(1.3)	底径6.2残存率	底部外面に墨書。内外面 に施釉。	「方」
33	1521	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-ⅣB-9	Ⅲ	12.2	3.4	底径8.1残存率9/10	底部外面・体部に墨書。 底部外面中央に「恵師 殿」。脇に「蓋」と獣の 顔か。体部外面に一文字 「斗」。	「恵師殿」「蓋」「斗」
34	1522	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-ⅣC-8	Ⅲ	12.8	4.5	底径9.5残存率3/4	底部外面「鳥凡□片坑」。 体部外面横向きに縦書き 「送」7回、並べて「奉 攸」「送送□」「遣鳥鳥 □」の墨書。	「鳥凡□片坑」「送」「奉 攸」「送送□」「遣鳥鳥 □」
35	1523	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-ⅣA-8	Ⅲ	(12.7)	3.3	底径8.0残存率1/2	底部外面に墨書。内外面 に赤色塗彩。	「□□」
36	1524	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-ⅣB-8	Ⅲ	(13.4)	2.8	底径(9.6)残存率1/5	内外面に墨書。	

番号	掲載 番号	分類・器種	出土遺構	調査区 (年度-区)	出土地点 (大グリッド) (中グリッド) (小グリッド)	層位	法 量 (口径)	法 量 (器高)	その他法量	墨書位置等	積 文
37	1525	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV B-8	Ⅲ	(13.0)	(2.3)	口縁一部残存	内外面に墨書で文様を描いたものか。	
38	1526	土師器 不明	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV C-8	Ⅲ		(1.0)	底径(8.6)残存率底部1/7	内外面に墨書。	
39	1527	土師器 不明	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV A-9	Ⅲ	長さ (4.7)	高さ (0.5)	幅(4.5)	底部外面に墨書。	
40	1528	土師器 甕	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV B-8	Ⅲ		(5.1)		外面に墨書。顔か。	
41	1583	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV A-8	Ⅳ	長さ (4.0)	高さ (0.5)	幅(3.4)	外面に墨書。内面に赤色塗彩。	「上□」
42	1860	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV D-6	Ⅴ	18.3	2.9	底径15.2残存率8/9	底部外面に墨書。内外面に赤色塗彩。底部外面にスス附着。	「方」
43	1861	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1δ-IV D-7	Ⅴ	12.5	3.3	底径8.7残存率5/6	底部内面に墨線(縦2本横3本)。九字を略したものか。	
44	1900	土師器 碗	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-IV F-5	Ⅱ	(13.8)	(3.4)	底径不明残存率1/8	内外面に墨線。	
45	2153	土師器 杯	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-IV C-4	Ⅳ	(12.4)	4.2	底径(8.0)残存率7/8	外底部外面に墨書。	「上」
46	2154	土師器 皿	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-III F-20	Ⅳ	12.8	1.7	底径6.8残存率1/1	底部外面に墨書。底部外面にスス附着。	「ナ」
47	2155	土師器 碗	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-III D-20	Ⅳ	(10.7)	(2.3)	底径8.1残存率1/3	底部外面に墨書。内外面に赤色塗彩。	「本」
48	2156	土師器 杯	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-IV B-2	Ⅳ	不明	(0.9)	底径(8.0)残存率不明	底部外面に墨書。	「中」
49	2344	須恵器 蓋	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-IV D-4	Ⅴ	(15.0)	(2.1)	残存率1/2	外面上部に墨書。	「名方□」
50	2345	土師器 皿	SR3001	南区 (04-1)	Loc.F-1δ-IV E-2	Ⅴ	13.2	1.7	底径8.0残存率3/4	底部外面に墨書。底部外面にスス附着。	「玉」
51	2507	土師器 杯	SR3001	南区 (07-1)	Loc.F-1γ-IV T-11	Ⅵ	14.4	2.3	底径12.2残存率9/10~口縁1/6欠損	底部外面に墨書。内外面に赤色塗彩。口縁外側の一部にスス附着。	「井」
52	2600	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-12	Ⅳ		(1.1)	底径(8.8)残存率底部1/5	底部外面に墨書。内外面赤色塗彩。	「本」
53	2601	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-17	Ⅳ			残存率不明	底部外面に墨書。内外面共に赤色塗彩。	「樹」
54	2602	黒色土器 碗	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-13	Ⅳ	(16.7)	5.7	高台径9.2残存率3/5	底部外面に墨書。	
55	2603	黒色土器 碗	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-13	Ⅳ	14.3	5.5	高台径8.8残存率全体3/5	底部外面に墨書。	「十」
56	2648	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-14	Ⅳ	15.6	4.9	底径8.8残存率7/10	底部外面に墨書。内外面にスス附着。	「南」
57	2649	黒色土器 碗	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-12	Ⅳ		(4.6)	高台径(8.8)残存率高台部1/3	底部外面高台内側に墨書。	「井」(記号か)
58	2656	土師器 皿	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-16	Ⅳ	(15.4)	1.7	底径(12.3)残存率1/3	底部外面に墨書人物絵。	
59	2664	土師器 甕	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-16	Ⅳ			不明	底部外面に墨書。人面墨書土器か。	
60	2666	土師器 蓋	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-16	Ⅳ	(14.3)	1.1	底径(8.5)残存率口縁部1/10	内面に墨書。	
61	2764	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-16	Ⅶ	18.6	4.1	底径15.4残存率4/5	底部外面に墨書。内外面に赤色塗彩。	「寿」
62	2765	土師器 蓋	SR3001	南区 (98-1)	—	Ⅶ	16.4	2.5	残存率口縁部9/10	外面に墨書。外面に赤色塗彩。	「仏殿」
63	2766	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1γ-IV T-16	Ⅶ	11.2	3.0	底径9.9残存率4/5	底部外面に墨書。内面にスス附着。	「子□」

表2 刻書土器

番号	掲載番号	分類・器種	出土遺構	調査区	出土地点 (大フリッド) (中フリッド) (小フリッド)	大別層位	法量 (口径)	法量 (器高)	その他法量	釈文・刻書位置等
1	29	土師器 皿	SI4002	北区 (99-1)	Loc.F-1				残存率不明	底部外面に刻書。
2	81	須恵器 杯	SR5001	北区 (01-2)	Loc.F-1 e-III K-15、16		12.7	3.6	残存率4/5	底部外面へラ記号。
3	99	須恵器 蓋	SX5001	北区 (99-2)	Loc.F-1			(4.0)	残存率体部1/3	底部外面へラ記号。
4	108	須恵器 杯	SX5003	北区 (99-2)	Loc.F-1		(13.0)	4.5	底径12.8残存率3/5	底部外面へラ記号。
5	520	須恵器 杯	SR3001	南区 (00-1)	Loc.F-1 δ-IV G-2	V	16.3	4.0	底径11.4残存率7/10	内外面に刻書。
6	1203	土師器 甕	SR3001	南区(05-1)	Loc.F-1 δ-IV C-10	VI	(12.0)	(11.3)	最大径13.2残存率口縁～体部にかけて2/5程度	体部外面に刻書。スイズカイ+勾玉文様。
7	1242	須恵器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1 γ-IV T-8	II	長さ (3.8)	厚さ (1.3)	幅(4.8)	底部外面にへラ記号か。
8	1488	黒色土器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1 δ-IV B-7	III	13.0	3.7	底径8.4残存率9/10	底部外面にへラ記号。底部内面にスス付着。
9	1582	土師器 杯	SR3001	南区 (05-2)	Loc.F-1 δ-IV D-6	IV	(14.0)	4.8	底径(7.5)残存率1/4	体部内面に刻書。九字か。
10	2582	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-16	IV	(12.8)	2.9	底径(9.6)残存率口縁部2/5	内面に刻書。
11	2588	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-17	IV			体部との境(8.6)残存率不明	内面に刻書。
12	2632	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-15	IV	(13.0)	3.0	底径(8.7)	底部外面に刻書。底部内面にスス付着。
13	2634	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-15	IV		(1.4)	底径(6.6)残存率底部1/3	底部外面に刻書。底部内面にスス付着。
14	2640	土師器 皿	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV S-15	IV	(17.0)	2.8	高台径(11.3)残存率口縁部1/3底部1/5	底部内面に刻書。内面にスス付着。外面に僅かにスス付着。
15	2657	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-16	IV		(1.0)	底径(11.0)残存率底部1/1	底部外面に刻書。内面にスス付着。内外面に赤色塗彩。
16	2659	土師器 皿	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-16・17	IV	(15.4)	2.3	底径(12.8)残存率1/3	底部内面に刻書。内外面に赤色塗彩。
17	2674	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-14	IV	(15.7)	3.1	底径(12.6)残存率2/5	底部外面にへラ記号。内外面に赤色塗彩。
18	2676	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-17	IV	12.8	3.3	底径10.0残存率9/10	底部外面に刻書。内外面赤色塗彩。内面にスス付着。
19	2729	須恵器 壺	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-13	VII	9.4	(13.1)	頸部径9.3残存率口縁部9/10体部2/5	口縁部内面にへラ記号。
20	2731	須恵器 壺	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-13	VII	(22.5)	(6.6)	頸部(27.3)残存率口縁部1/5	頸部外面に刻書。
21	2738	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-15	VII	13.6	3.5	底径10.4残存率1/1	底部内面にへラ記号。内外面に赤色塗彩。内外面にスス付着。底部内面に付着物有り。
22	2744	土師器 杯	SR3001	南区 (98-1)	Loc.F-1 γ-IV T-13	VII		0.8	底径(14.1)残存率底部1/5	底部内面にへラ記号。内面に赤色塗彩。

V ま と め



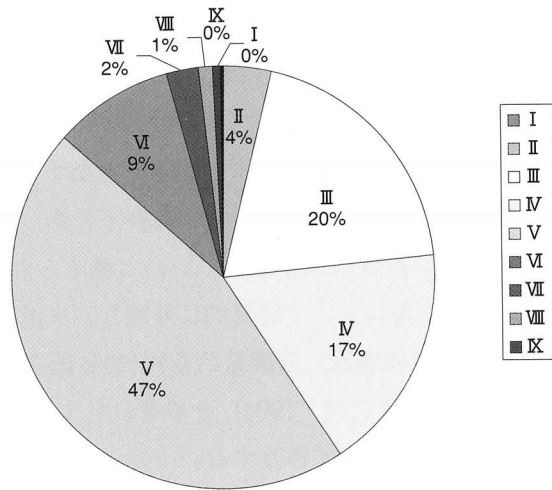
観音寺遺跡では、1996年以降の南環状道路地点の調査において、南から北へ蛇行して流れる自然流路（SR1001）内の堆積層から木簡や木製品を含む多量の遺物が出土していた。今回の出土遺物うち、木簡、木製品の大半は調査区南半の自然流路（SR3001）の堆積層から出土した。この両者が同一の流れであるか、別の流れが合流したものであるかは直接的には確認できなかった。ともに、豊富な地下水と上層が厚い粘質土層に被われた極めて有機物が遺存しやすい条件下にあったため、木簡をはじめ大量の祭祀具、容器、部材、農具、服飾具等が良好に保存されていたと考えられる。本稿ではSR3001出土木製品の内、出土数の多い木製祭祀具と容器について層位的に分類し、本遺跡の大まかな傾向についてまとめた。なお木製品の分類には『木器集成図録 近畿原始篇』（奈良国立文化財研究所 1993）、『木器集成図録 近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所 1994）を参考にしている。また、SR3001から出土した土器の様相から、自然流路の埋没時期について言及する。

1. 出土木製品について

南区の自然流路SR3001出土の木製品のうち、遺存状況の良好なものを層位別に集計したところ第480図のようになった。分析対象遺物の総数は1916点である。全層位から木製品は出土しているが、V層が最も多く882点で47パーセントを占めⅢ層、Ⅳ、Ⅵ層の順になる。この4層で全体の約93%の木製品が出土したことになる。種類別に数量を合計したところ、第481図のようになった。種類別に見ると、祭祀具が1084点で全体の約56%を占める。次いで容器が多く、15%の298点である。その他には部材、服飾具、農具、食事具などが含まれる。また、ここには分類されなかったが板を細く割った篝火の可能性があるものや、一端が炭化した火付棒も大量に出土している。出土数の多いⅢ～Ⅵ層を種類別に見ると、各層位において最も数量の多いものは祭祀具であることがわかる。各層での祭祀具の割合を見ると、Ⅲ層では144点で38%、Ⅳ層では169点で51%、Ⅴ層は566点で64%、Ⅵ層は124点で70%となり、下層へ行くに従って割合が増加する傾向にある。参考までにⅦ層は47点中34点で、72%を祭祀具が占めている。次に多い容器を見ると、Ⅲ層では74点で19%、Ⅳ層は61点で17%、Ⅴ層125点で13%、Ⅵ層16点で9%となり、下層へ行くに従って割合は低下する傾向にある。参考までにⅡ層は68点中14点で20%である。これと同じ傾向を示すものに服飾具、食事具が挙げられる（第482図）。先の表では「その他」に分類したものである。この中から食事具や服飾具を抽出すると、Ⅲ、Ⅳ層はともに20%前後の割合を示すのに対し、Ⅴ層では5%前後に低下している。Ⅵ層では食事具は見られなくなる。

以上の結果をまとめると、層位別に見た場合、祭祀具はⅤ層以下で出土数の割合が増加する傾向にあること。容器、食事具、服飾具はⅣ層以上で出土数の割合が多く、Ⅴ層以下では激減することも注目される。種類別の特徴からは、Ⅳ層以上とⅤ層以下で様相が異なり、大きく2分できる可能性が考えられる。

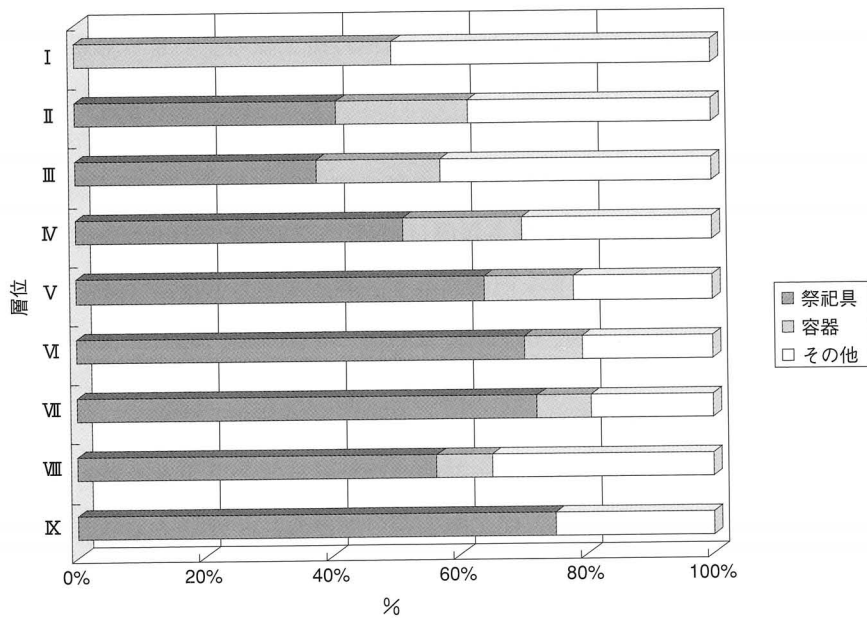
次に各層ごとに祭祀具を細分し、その特徴をまとめることとする。第483図は祭祀具の種類を層位ごとに集計したものである。まず祭祀具を斎串、人形、舟形、その他の形代（鳥、馬、刀、剣、鏃、陽物）に分類した。祭祀具総数1084点のうち65%の707点は斎串で、人形、舟形と続く。層位的に見るとⅢ～Ⅵ層に多く、特に、Ⅴ層に最も多く分布する。また層位別に祭祀具の種類を見ると、Ⅲ～Ⅵ層では圧倒的に斎串の割合が高いが、Ⅶ層では人形、Ⅷ、Ⅸ層では舟形割合が高くなる。舟形はⅤ層以下に見られ、その他の祭祀具はⅤ層以上に多く見られる特徴がある。



各層位の木製品出土数

層位	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	合計
遺物点数	4	68	380	328	882	176	47	23	8	1916

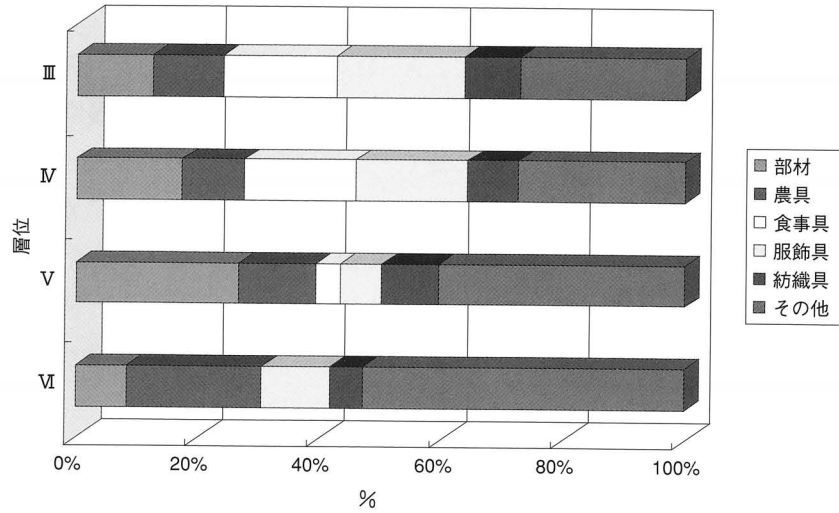
第480図 各層位の木製品出土割合



木製祭祀具・容器層位別出土数

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	合計
祭祀具	0	28	144	169	566	124	34	13	6	1084
容器	2	14	74	61	125	16	4	2	0	298
その他	2	26	162	98	191	36	9	8	2	534
合計	4	68	380	328	882	176	47	23	8	1916

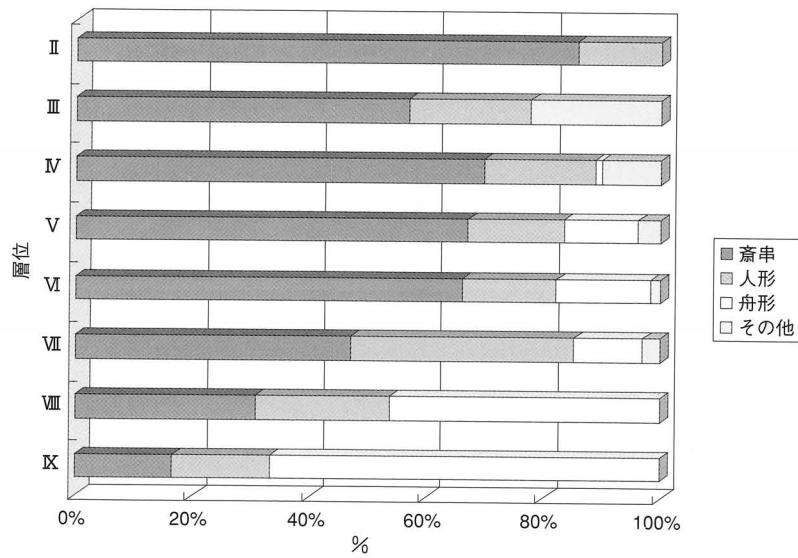
第481図 木製祭祀具・容器層位別出土割合



その他の木製品層位別出土数

	III	IV	V	VI
部材	20	17	51	3
農具	19	10	24	8
食事具	30	18	8	0
服飾具	34	18	13	4
紡織具	15	8	18	2
その他	44	27	77	19
合計	162	98	191	36

第482図 その他の木製品層位別出土割合



木製祭祀具層位別出土数

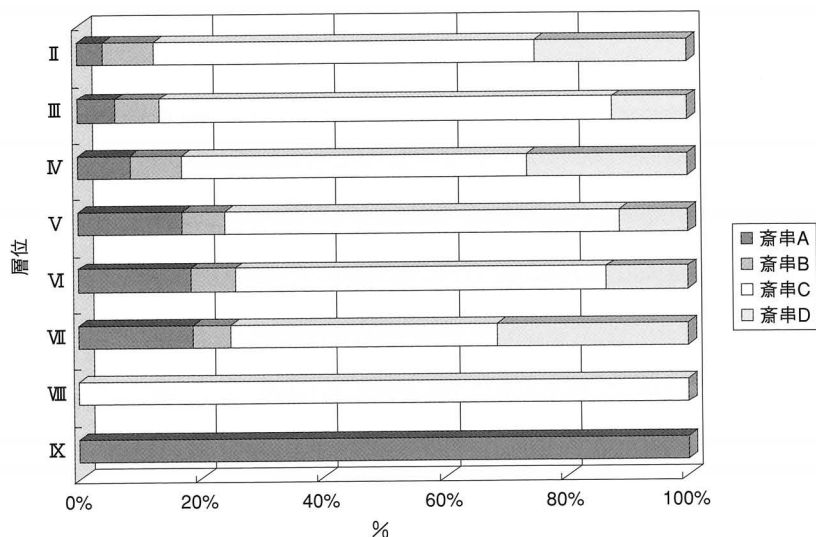
層位	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	合計
斎串	0	24	82	118	380	82	16	4	1	707
人形	0	4	30	32	93	20	13	3	1	196
舟形	0	0	0	2	72	20	4	6	4	108
その他	0	0	32	17	21	2	1	0	0	73
合計	0	28	144	169	566	124	34	13	6	1084

第483図 木製祭祀具層位別出土割合

齋 串

齋串は『木器集成図録 近畿古代篇』に従って、A～Dの4種類に分類した(第484図)。C型式が最も多く64%を占め、B型式が7%で最も少ない。C型式の齋串はIとⅨを除く層位に見られるが、V層に最も多く集中し、その前後のⅢ～Ⅵ層がこれに続く。これは齋串の全ての型式にあてはまる傾向である。各層ごとに見ると、最も多く出土したV層ではC型式が65%を占め、A型式が17%、D型式11%、B型式7%となっている。C型式が過半数に達しB型式がもっとも少ないことを示しているが、これはV～Ⅶ層に見られる傾向である。一方、Ⅱ～Ⅳ層ではB型式よりもA型式の割合が若干低下する傾向が見られた。これを積極的に評価すれば、V層以下とⅣ層以上では齋串の組合せに、変化が生じた可能性が指摘できるかもしれない。

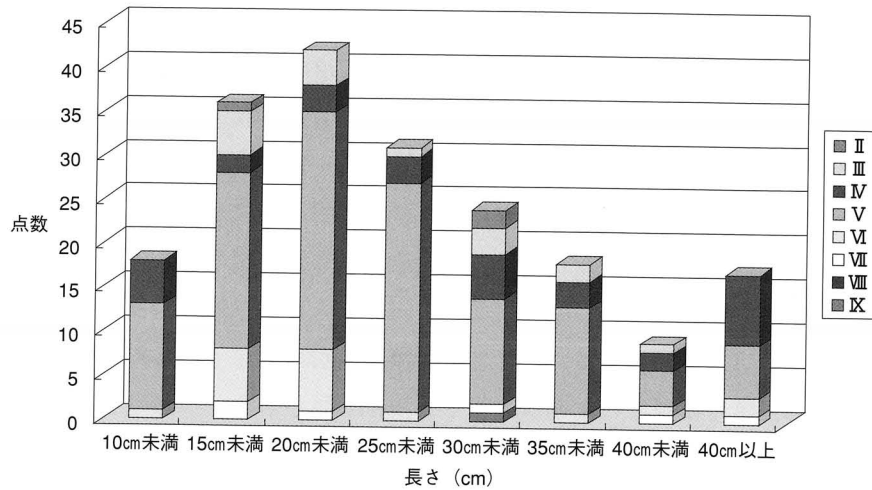
次に、齋串の長さや幅をヒストグラムに表した(第485図)。対象資料は完形の齋串195点である。全体としては、長さ15cm以上～20cm未満に分布の中心があり、最も多いV層のものは10cm以上25cm未満に61%が集中している。Ⅳ、V層のものは全範囲に分布しているが、Ⅲ層は10cm以上40cm未満に収まっている。一方Ⅵ層のものは25cm未満に大半が分布するが、30cm以上にも見られる。幅は680点を対象としてヒストグラムを作成したところ、1cm以上2cm未満に集中し、3cmを超えると激減することがわかる。全ての層位で同じような傾向がみられ、変化はない。また、図示していないが切り込みの型式別ではA、B、D型式は切り込みのないI式が多く、C型式は切り込みの回数が多いCⅢ、CⅤ型式が多い傾向がある。利用されている樹種はほとんどがヒノキである。



齋串層位別出土数

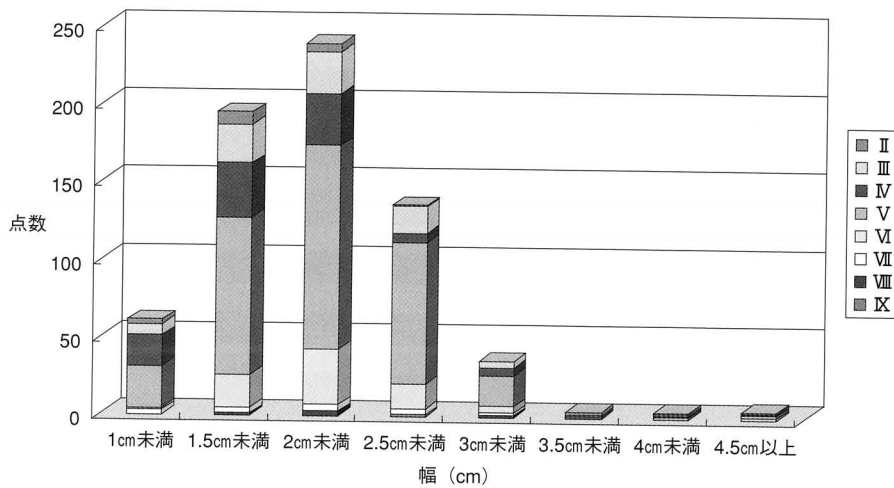
	齋串 A	齋串 B	齋串 C	齋串 D	合計
Ⅱ	1	2	15	6	24
Ⅲ	5	6	61	10	82
Ⅳ	10	10	67	31	118
V	65	26	247	42	380
Ⅵ	15	6	50	11	82
Ⅶ	3	1	7	5	16
Ⅷ	0	0	4	0	4
Ⅸ	1	0	0	0	1
合計	100	51	451	105	707

第484図 齋串層位別出土割合



齋串の長さ

	10cm未満	15cm未満	20cm未満	25cm未満	30cm未満	35cm未満	40cm未満	40cm以上	合計
II	0	1	0	0	2	0	0	0	3
III	0	5	4	1	3	2	1	0	16
IV	5	2	3	3	5	3	2	8	31
V	12	20	27	26	12	12	4	6	119
VI	1	6	7	1	0	1	1	2	19
VII	0	2	1	0	1	0	1	1	6
VIII	0	0	0	0	0	0	0	0	0
IX	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	18	36	42	31	24	18	9	17	195



齋串の幅

	1 cm未満	1.5cm未満	2 cm未満	2.5cm未満	3 cm未満	3.5cm未満	4 cm未満	4 cm以上	合計
II	3	8	5	1	0	2	1	1	21
III	7	25	27	17	4	1	1	0	82
IV	20	35	33	6	5	1	1	1	102
V	27	101	131	91	20	0	1	2	373
VI	1	21	36	16	4	0	0	1	79
VII	3	4	4	4	2	0	0	0	17
VIII	0	1	3		1	0	0	0	5
IX	0	0	0	1	0	0	0	0	1
合計	61	195	239	136	36	4	4	5	680

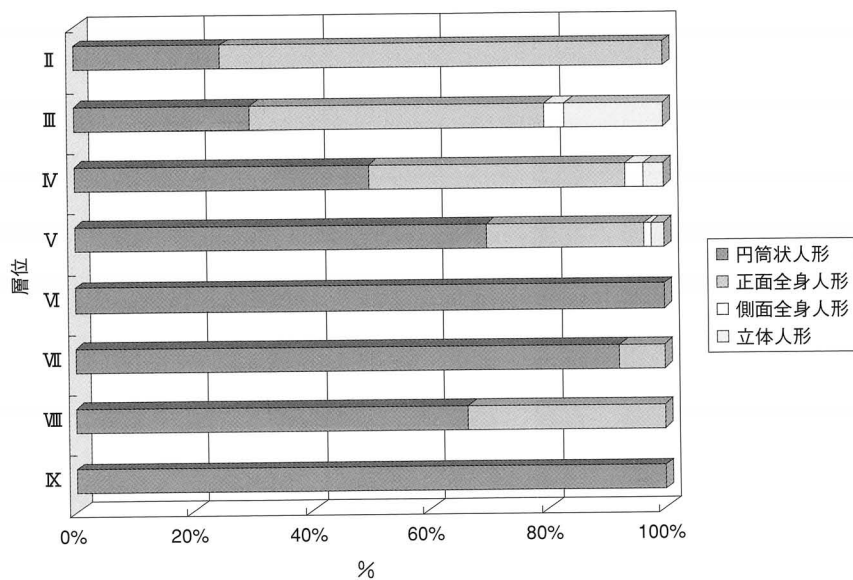
第485図 齋串の長さ と 幅

人形

人形は円筒状人形、正面全身人形、側面全身人形、立体人形の4種類に分類した(第486図)。対象となる196点中126点が円筒状人形で、64%を占める。次いで正面全身人形が59点で、30%となる。これらを層位的に見ると、Ⅲ～Ⅶ層に多いことがわかる。下層のⅥ～Ⅸ層では円筒状人形が圧倒的に多いが、Ⅴ層で正面全身人形が27%、Ⅳ層で44%と増加し始め、Ⅲ層で過半数を占めるに至っている。

都城をはじめとして全国的に出土する人形は、正面全身人形が主流であるのに対し、観音寺遺跡ではウツギの芯持ち材に刻みを入れることで顔を表現した円筒状人形が主流になっている。しかし層位別の出土傾向をまとめると、Ⅵ層段階までは、ほとんど円筒状人形のみだったものが、Ⅴ層段階から正面全身人形が加わり、Ⅲ層段階では両者の比率は逆転する現象が見られた。これは、大宝律令により定まった国家的な祭祀がⅤ層段階以降、徐々に地方に浸透してきた様子を示すものと考えられる。一方で円筒状人形による祭祀も共存していたことも注目される。

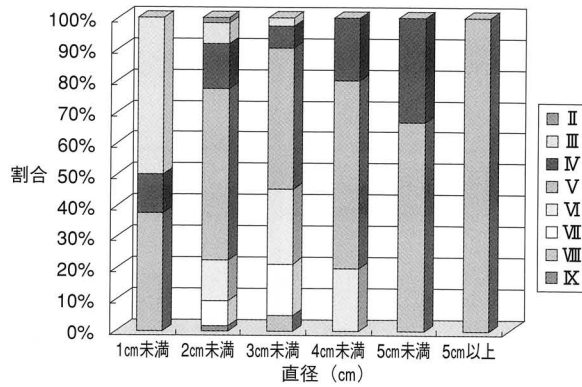
円筒状人形の直径を計測し、ヒストグラムを作成したところ第487図になった。対象となる資料数は126点である。直径1cm以上2cm未満のものが最も多くなっているが、これはⅤ層のものが34点で55%を占める。Ⅲ層のものは2cm未満に多く分布し、やや細い傾向が見られる。一方Ⅵ層、Ⅶ層のものは2cm以上3cm未満に多く、Ⅴ層のものよりも一回り大きい傾向がある。この結果、Ⅲ層のものは細くⅥ層以下の円筒状人形は太い木を素材にしていることを表している。



人形層位別出土数

	円筒状人形	正面全身人形	側面全身人形	立体人形	合計
II	1	3	0	0	4
III	9	15	1	5	30
IV	16	14	1	1	32
V	65	25	1	2	93
VI	20	0	0	0	20
VII	12	1	0	0	13
VIII	2	1	0	0	3
IX	1	0	0	0	1
合計	126	59	3	8	196

第486図 人形層位別出土割合



円筒状人形の直径

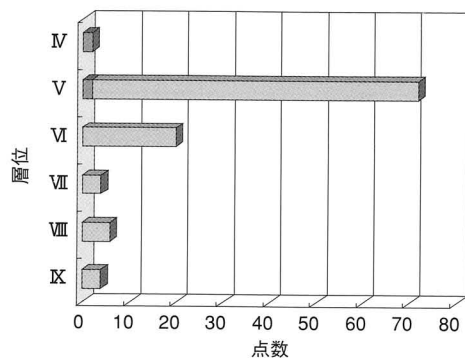
	1 cm未満	2 cm未満	3 cm未満	4 cm未満	5 cm未満	5 cm以上	合計
II	0	1	0	0	0	0	1
III	4	4	1	0	0	0	9
IV	1	9	3	2	1	0	16
V	3	34	19	6	2	1	65
VI	0	8	10	2	0	0	20
VII	0	5	7	0	0	0	12
VIII	0	0	2	0	0	0	2
IX	0	1	0	0	0	0	1
合計	8	62	42	10	3	1	126

第487図 円筒状人形の直径

舟形

舟形はIV層以下でのみ出土した。『木器集成図録 近畿原始篇』に基づいてA1類とA2類に分類したところ、108点中104点がA2類が占めた（第488図）。A1類はIV層とV層に2点ずつ出土したにすぎない。A2類はV層以下にのみ見られる。分布の中心は67%のV層にあり、VI層19%、VII層4%と減少を示す。このことから、舟形の形態はA2類が主流であったところに、V層段階でA1類が加わったことになる。舟形の長さを計測し、ヒストグラムに表したところ第489図の結果を得た。対象となる完形の舟形44点中、57%の25点が15cm以上20cm未満に分布する。また、舟形の直径を計測した結果、3.5cm以上4cm未満がもっとも多い。使用されている樹種はヒノキの芯持ち材が多い。IV層段階以降もSR3001は川としての機能を保ち続けていたことを考えると、舟形が激減することは、祭祀形態の変化を反映していると考えられる。

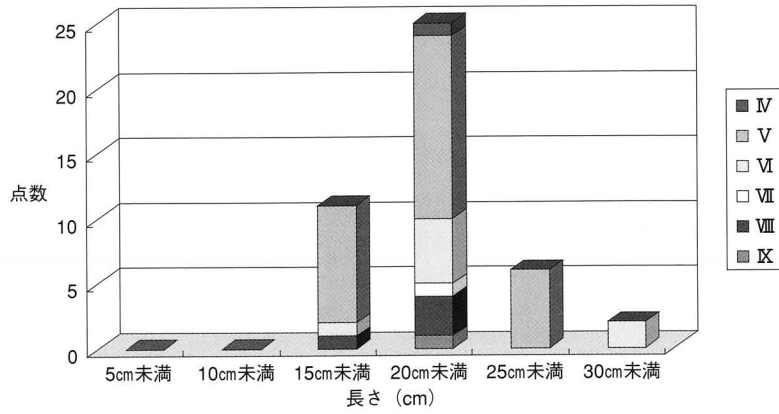
その他の形代



舟形層位別出土数

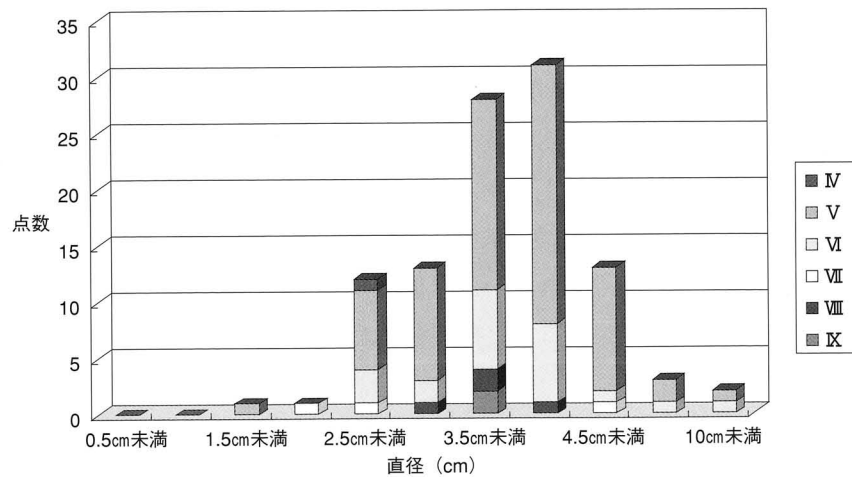
	舟形 A 1	舟形 A 2	合計
II	0	0	0
III	0	0	0
IV	2	0	2
V	2	70	72
VI	0	20	20
VII	0	4	4
VIII	0	6	6
IX	0	4	4
合計	4	104	108

第488図 舟形層位別出土数



舟形の長さ

	5cm未満	10cm未満	15cm未満	20cm未満	25cm未満	30cm未満	合計
IV	0	0	0	1	0	0	1
V	0	0	9	14	6	0	29
VI	0	0	1	5	0	2	8
VII	0	0	0	1	0	0	1
VIII	0	0	1	3	0	0	4
IX	0	0	0	1	0	0	1
合計	0	0	11	25	6	2	44

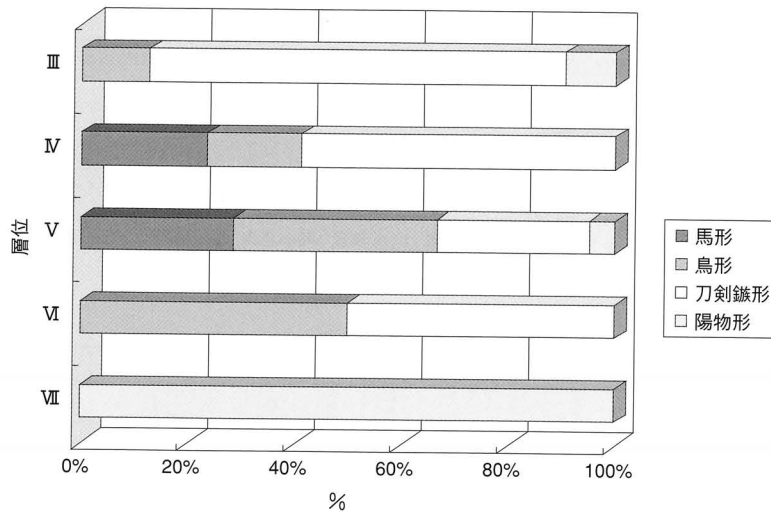


舟形の直径

	0.5cm未満	1cm未満	1.5cm未満	2cm未満	2.5cm未満	3cm未満	3.5cm未満	4cm未満	4.5cm未満	5cm未満	10cm未満	合計
IV	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
V	0	0	1	0	7	10	17	23	11	2	1	72
VI	0	0	0	0	3	2	7	7	1	1	1	22
VII	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	3
VIII	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	4
IX	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
合計	0	0	1	1	12	13	28	31	13	3	2	104

第489図 舟形の長さ と 直径

その他の形代として馬形10点、鳥形16点、武器形42点、陽物形5点を分類した（第490図）。馬形はIV層とV層のみに出土した。鳥形はⅢ～Ⅵ層に分布しているが、V層で最も多く50%の8点が出土している。一方で武器形もⅢ～Ⅵ層に分布しているが、Ⅲ層で最も多く60%の25点が出土し、IV層の10点が次ぐ。陽物形はⅢ層、V層、Ⅶ層で見えるが少数であるため傾向は見え、ややⅢ層に多い程度である。Ⅵ層以下ではほとんど見られなかったこれらの形代が、V層段階で出そろい、増加していく傾向が見られる。



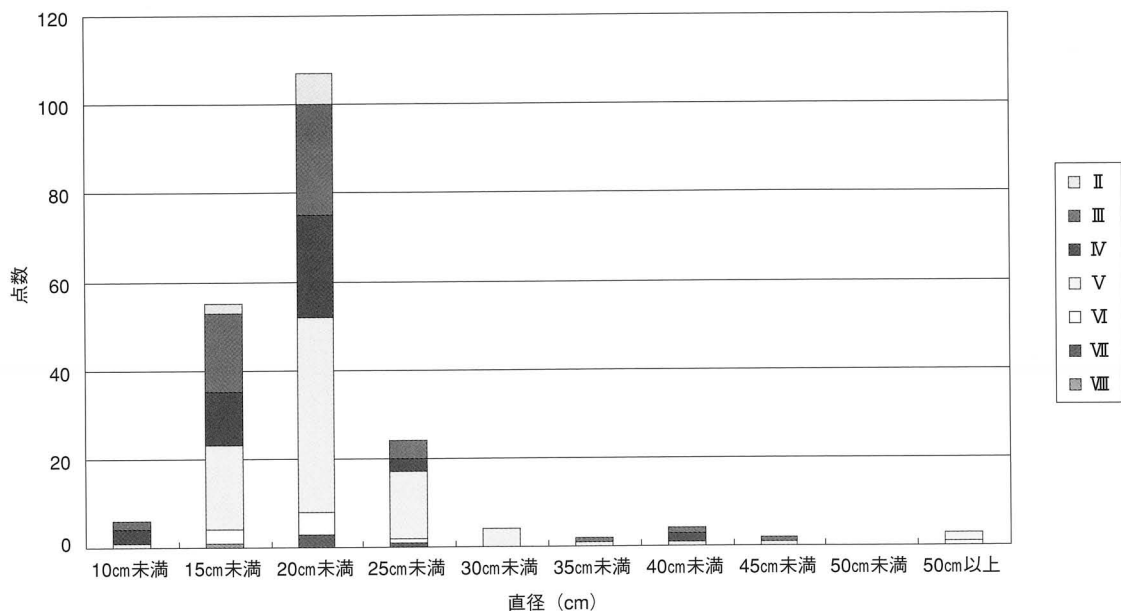
その他の木製祭祀具層位別出土数

	馬形	鳥形	刀剣鏃形	陽物形	合計
II	0	0	0	0	0
III	0	4	25	3	32
IV	4	3	10	0	17
V	6	8	6	1	21
VI	0	1	1	0	2
VII	0	0	0	1	1
VIII	0	0	0	0	0
IX	0	0	0	0	0
合計	10	16	42	5	73

第490図 その他の木製祭祀具層位別出土割合

曲物

祭祀具に次いで多い木製品に、容器の曲物の底板もしくは蓋板が挙げられる（第491図）。Ⅱ～Ⅷ層に分布しているが、最も多いのはV層で、直径が復元できる資料207点中、43%の88点が出土している。次いでⅢ層25%、IV層21%と続く。それぞれの層ごとに直径のヒストグラムを作成したところ、第491図の結果を得た。出土数の多いⅢ～V層では15cm以上20cm未満が最も多く、次いで10cm以上15cm未満となっている。資料数が少ないⅡ層とⅥ層についても同様の結果である。各層において、曲物の大きさには変化は見られなかった。また図示していないが、結合の種類別分類においても、樺皮結合曲物E形式と釘結合曲物F形式がほぼ同じ割合で出土しており、各層では差異がみられなかった。



曲物底板の直径

直径	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	合計
10cm未満	0	2	3	1	0	0	0	6
15cm未満	2	18	12	19	3	0	1	55
20cm未満	7	25	23	44	5	3	0	107
25cm未満	0	4	3	15	1	1	0	24
30cm未満	0	0	0	4	0	0	0	4
35cm未満	0	1	0	1	0	0	0	2
40cm未満	0	1	2	1	0	0	0	4
45cm未満	0	1	0	1	0	0	0	2
50cm未満	0	0	0	0	0	0	0	0
50cm以上	0	0	0	2	1	0	0	3
合計	9	52	43	88	10	4	1	207

第491図 曲物底板の直径

まとめ

以上の結果で明らかになった事象を列挙する。

- ①層位別に木製品の種類を集計した結果、V層以下では祭祀具の割合が多いのに対して、IV層以上では容器など、祭祀具以外の割合が増加し多様性に富む。特に食事具や服飾具の割合が多くなる傾向にある。
- ②祭祀具はI層以外の各層位において最も多く出土しているが、斎串が圧倒的に多く、人形、舟形の順になる。
- ③斎串はI層以外の全層位で出土する。各層位でC型式が最も多いが、III層以上ではA型式が最も少なく、V層以下ではB型式が減少する傾向がある。
- ④人形は円筒状人形が最も多く、次に正面全身人形が多い。層位ごとに見ると、VI層以下では円筒状人形が圧倒的に多く、V層段階で正面全身人形が加わり、III層段階で両者の割合が逆転していることが明らかとなった。
- ⑤舟形は圧倒的にA2類が多く、V層以下でのみ出土した。一方、A1類はIV層とV層に見られ、比較

的新しい段階で加わったものと考えられる。Ⅳ層以上では舟形は激減することから、Ⅳ層段階で祭祀具の組み合わせが変化した可能性が指摘できる。

⑥その他の形代では、馬形や鳥形、武器形がⅤ層段階で出揃い、徐々に増加していく様子が明らかとなった。

⑦曲物の底板の直径は、各層位において15cm以上20cm未満のものが最も多く見られる。(大橋)

参考文献

田川 憲「観音寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.12』2001

大橋育順「観音寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.12』2004～2006

金子裕之「古代の木製模造品」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報 第38冊 奈良国立文化財研究所 1980

金子裕之『律令祭祀遺物集成』1988

(財)徳島県埋蔵文化財センター 2002 『観音寺遺跡Ⅰ』

(財)徳島県埋蔵文化財センター 2006 『観音寺遺跡Ⅱ』

2. 自然流路 SR3001の各層位の年代について

自然流路 SR3001出土の遺物から、各層位の年代について言及する。SR3001は広範囲に広がる流域を持つため、調査は年度ごとに部分的に行われた。そこで本報告書では、SR3001の堆積層を特徴をもとに新しい順にⅠ～Ⅸ層に大別し、対応関係の把握を行った。ここでは、各層の出土遺物の特徴をもとに、その埋没年代について記述している。

Ⅸ層

Ⅸ層は2000年度1区のみで掘削を行った。あくまでも調査上での最下層であり、SR3001の最下層を確認したわけではない。実際には、さらに下層の堆積層が存在していたと考えられる。出土遺物が少ないが、8世紀前半の年代が推定される。同じ層位から出土した付札木簡は、「里」表記であることから、もう少し古い年代が与えられる可能性がある。

Ⅷ層

Ⅷ層は全調査区で見られた。層厚約1mの粗砂層で遺物量は少ない。土師器の杯(577、578、1218)、須恵器の杯(2413)高杯、甕、壺蓋が出土している。土器の縁辺には摩滅が認められ、水量が多い時期であったと考えられる。他時期の遺物が混在している状況が見える。層の厚さが1m近くに達する部分があるが、比較的短期間で堆積したと考えられる。

Ⅶ層

Ⅶ層は1998年度1区にのみ存在する。自然流路 SR3001の南岸に近い位置に部分的に残存した層であると考えられる。土師器の杯(2739、2740、2741、2742、2743、2764)はいずれも口縁部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文が施される。概ね平城宮Ⅲ段階に想定され、8世紀第2四半期から8世紀半ばと想定される。

VI層

VI層はⅧ層の上層に堆積したシルトと砂が互層に堆積したもので、遺物量は少ない。2000年度1区をはじめ、2002、2004、2005年度の各調査区で確認されている。V層段階の流路によって浸食され、中洲として残存した層である。土師器の杯、皿ではⅦ層出土のものと同様、内面に放射状暗文が施されたもの(568、1195、1199)が見られる。一方で杯(1192、1193)のように暗文が施されない、やや口径の小さなものが含まれる。概ね平城宮Ⅲ段階を含む、8世紀中頃を中心とした様相を示していると考えられる。

V層

V層は最も遺物が多く出土した層で、2000年度、2004年度、2005年度の調査区で確認されている。VI層による中洲の間を縫うように、小さな流れが離合集散していたと考えられ、層の厚さにばらつきが見られる。木簡を含む遺物の多くは中洲の周辺で出土した。土器はVI層までの暗文が見られなくなる。口縁部内側には溝は残るが、口径が10cm前後のものが多くなる。一方で、器壁の傾斜が緩やかで口縁部の溝が見られないものも増える傾向にある。8世紀後半を中心とし、9世紀前半を含むものと考えられる。この層からは「天平勝寶2年」、「天平寶字8年」、「延暦3年」の紀年銘をもつ木簡が出土している。2000年度1区で出土した土師器(544、545)や緑釉陶器(521)のように、幅広い時期のものが見られ、層の堆積は安定していない状況が見られる。

IV層

IV層は1998、2000、2004、2005年度の各調査区で確認されている。ここでは新たに黒色土器A類の椀(291、1581)、緑釉陶器の椀(664)などが見られる。土師器の椀も多く見られる。杯は口径が10cm以下で、器壁の傾斜が緩やかなものが大部分を占める。平安京Ⅰ～Ⅱ段階を中心とした9世紀後半から10世紀前半を含む年代が想定される。木簡では「名東郡」と書かれたものが出土している。名東郡は寛平8(896)年の「太政官符」により、名方郡を東西に分轄して設置されたことが知られている。

Ⅲ層

Ⅲ層は、SD3001の全範囲で確認されている。IV層で出土する杯に加えて、口径の小さな皿、高台付きの皿などが増加する。黒色土器B類の椀も見られる。主に平安京Ⅲ段階を中心とした10世紀前半から11世紀初頭の年代を想定する。

Ⅱ層、Ⅰ層

Ⅱ層とⅠ層については、ほとんどの部分で現代の攪乱を受けており、2004、2005年度の調査区で僅かに遺物が出土している。古墳時代から中世までの土器が混在している状況である。

以上の結果からSR3001の堆積の下限は不明であるが、8世紀半ば以降に急激に遺物量が増加し、11世紀初頭を境に減少することがわかる。(大橋)

報告書抄録

ふりがな	かんのんじいせきよん							
書名	観音寺遺跡(Ⅳ)							
副書名	道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	辻 佳伸、氏家敏之、大橋育順、和田 萃、西本豊弘、栄原永遠男、山上孝好、澤井康博、服部 靖							
編集機関	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番地2 TEL088-672-4545							
発行年月日	平成20(2008)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんのんじいせき 観音寺遺跡	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 こくふちょうかんのんじ 国府町観音寺	36201		34度 4分 6秒	134度 28分 22秒	平成10年度 1998年4月3日 ～1999年3月31日 平成11年度 1999年4月6日 ～2000年3月20日 平成12年度 2000年4月3日 ～2001年3月31日 平成13年度 2001年4月1日 ～2002年3月31日 平成14年度 2002年4月1日 ～2003年3月31日 平成15年度 2003年4月1日 ～2004年3月31日 平成16年度 2004年4月1日 ～2005年3月31日 平成17年度 2005年10月1日 ～2006年3月31日 平成19年度 2007年7月2日 ～2007年3月31日	350㎡ 2,777㎡ 4,003㎡ 11,320㎡ 218㎡ 212㎡ 2,589㎡ 1,220㎡ 60㎡	道路改築事業 (徳島環状線 国府工区)

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観音寺遺跡	官衙・ 田畑・ 集落・ 自然流 路	古墳時代後期 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中世	自然流路 掘立柱建物跡 土坑 溝 水田跡	木簡 木器（工具、農具、容器、服飾 具、部材、祭祀具など） 土器（須恵器、土師器、甕、瓦、 など） 土製品（土錘など） 石製品（敲石、砥石、温石など） 金属製品（銅印、鏃、刀子、銭 貨など） 動物遺体（牛、馬、犬、猫など）	古墳時代後期 ～中世にかけ ての遺構が確 認された。木 簡をはじめ容 器、祭祀具な どの木製品が 大量に出土し た。
要約	<p>鮎喰川が形成した扇状地の扇端部の低湿地に形成された遺跡である。古墳時代後期から中世にかけての遺物が出土しているが、中心となるのは奈良時代後半から平安時代である。おもに遺跡の南半分を占める自然流路から、大量の土器や木製品とともに木簡129点が出土した。8世紀の「勘籍木簡」や「御贄木簡」をはじめ、10世紀までの木簡が含まれていた。阿波国府内で廃棄されたものが、調査区周辺に堆積したものと考えられる。その他、多様な木製品や土器が出土したことで、阿波国府の実態を明らかにする資料となる。</p>				

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集

観音寺遺跡(Ⅳ)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書
《第1分冊 本文編》

発行日 平成20(2008)年3月25日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社教育出版センター